

来たる艱難期：黙示録の歴史  
第3部A：艱難期の始まり

黙示録8章1節～11章14節  
ロバート・D・ルギンビル博士著

<https://ichthys.com/Tribulation-Part3A.htm>

の和訳



## 来たる艱難期 黙示録の歴史

### 第3部 A: 艱難期の始まり

黙示録 8章 1節～11章 14節

ロバート・D・ルギンビル博士著

## 内容

<b>I. 第七の封印 黙示録 8章 1-5節</b> .....	1
1. 七人の大天使と七つのラッパ： .....	2
2. 聖徒の祈りのための香 .....	4
3. 香炉を持つ天使と黄金の祭壇 .....	5
4. 聖徒とその祈り .....	9
5. 雷のような声、稲妻、地震 .....	13
<b>II. 大背教</b> .....	19
<u>1.</u> 大背教の定義、語源、過程、預言 .....	19
2. 艱難期直前の教会と「見える教会」の状況： .....	45
3. 大背教の原因 .....	79
4. レムナントの精錬 .....	168

III. 裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節.....	181
1. 七つの裁きのラッパの目的.....	181
2. 七つのラッパの時系列.....	183
3. 七つのラッパの裁きの厳しさの増加.....	187
4. 七つの裁きのラッパが信者に及ぼす影響.....	190
1. 植生の荒廃 (黙示録 8 章 6-7 節).....	196
2. 海の災害： (黙示録 8 章 8-9 節).....	202
3. 淡水の被害 (黙示録 8 章 10-11 節).....	205
4. 天体の光が撃たれる： (黙示録 8 章 12 節).....	210
[4b. 三つの災い (黙示録 8 章 13 節)].....	214
5. 第一の災い： 悪霊の襲撃 (黙示録 9 章 1-12 節).....	218
6. 第二の災い： 悪霊による滅び： (9 章 13-19 節)....	231
7. 悔い改めない者の頑なさ (黙示録 9 章 20-21 節).....	241
IV. 天使と小さな巻物 (黙示録 10 章 1-11 節).....	243
V. 二人の証人と 144,000 人の働き： 11 章 1-14 節.....	253

## はじめに：

艱難期の前半の出来事(今回のテーマ)は、神による二つの動向と悪魔による二つの動向の四つの大きな流れにより、支配されています。この二つの組の中に、霊的な事柄に関係する動向と、前半の三年半を特徴づける現世の出来事に関する動向があります。この四つの動向とは、霊的な面では、一方は信者の真理からの大規模な離反(大背教：第Ⅱ部)、他方は144,000人による世界的な伝道の特別な働き(彼らを導く二人の証人に代表される：第Ⅴ部)、世界的な出来事では、一方は反キリストの権力台頭と軍事的拡大(第3部B)、他方は世界に対する神の警告の審判(第3部A.Ⅲ:ラッパの審判)です：

### <艱難期の動向>

	悪魔による		神による
霊的領域：	大いなる背教	<>	世界的福音伝道
この世の領域：	反キリストの台頭	<>	世界的な警告の裁き

(このシリーズの前回の第2部Bで詳しく説明したように)聖霊の抑制がなくなると、真理の拒絶によって、世の中の無法状態は、ますます顕著になります(背教する大勢の元信者の中でも見られます)。この拒絶は、モーセとエリヤの指揮の下、144,000人のユダヤ人による世界中のユダヤ人社会への比類なき伝道と相反するものとなるでしょう。これに類似した対照的な対立が反キリストが前代未聞の速さで完全に権力の座につき、それに応じて政治的、軍事的に大成功を収めることと、これらの危険を世界に警告するために神から発せられる、同じく驚異的な世界的裁きにおいて見られることでしょう。この二組の動向は完全に関連しています。警告の審判が悔い改めと神に立ち返ることを促すものでもあるように、その時、世界に行きわたる顕著な福音宣教を拒絶することは、神の審判を呼び起こすことにもなるからです。その時の信者および未信者の真理の全面的な拒絶によって、反キリストのカリスマ性と魅力に対して完全に無防備にさせてしまいます。つまり、世界的に真理に対する尊敬の念が希薄になってはじめて、反キリストの台頭が起こるのです。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

### I. 第七の封印 黙示録 8 章 1-5 節

ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節：

(1)小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。(2)それからわたしは、神のみまえに立っている七人の御使を見た。そして、七つのラツパが彼らに与えられた。(3)また、別の御使が出てきて、金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった。(4)香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちのぼった。(5)御使はその香炉をとり、これに祭壇の火を満たして、地に投げつけた。すると、多くの雷鳴と、もろもろの声<sup>1</sup>と、いなずまと、地震とが起った。

私たちの主が世界への啓示を定めた巻物の最後の封印を開くとき、主の栄光の再臨に先立つ恐ろしい出来事の詳細がその巻物で明らかにされ、天の神殿に畏怖の静けさが訪れ、そ

---

<sup>1</sup> 文字通りには「雷鳴と声」ですが、これらは同じものです(つまり、これはヘンジアデイス表現法-二詞一意です)。「声」は、世間一般には理解できない神の言葉であり、雷鳴に匹敵するものですが、雷鳴から聞き分けることができます([ヨハネ 12 章 28-30 節](#)参照)

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

の静けさは「半時」続くと言われています。聖書の用法によく見られるように、時間、日、週などは、しばしば人間的な用語でより大きな期間を表します(天の支配と時間に対する神の主権に比べ、この世の出来事が取るに足らないものであることを強調するための手法です:[民数記 14 章 34 節](#))<sup>2</sup>。ここでも間違いなくそうであり、この特別な「半時」を、艱難期の解き放たれるのが半年遅れること、つまり終末の時代の始まりを春(十字架につけられた時:前の脚注を参照)から秋に延期することで、艱難期の始まりと 7 年後の主の再臨による終わりの時期が、ユダヤ人の秋の祭り(ロシュ・ハシヤナ、ヨム・キプール、スコット[「仮庵の祭り」])の時期と重なり、これらの象徴的な祭りと対応することになります<sup>3</sup>。

### 1. 七人の大天使と七つのラッパ：

ここでは明示されていませんが、「神のみまえに立っている」(ギリシヤ語の完了形)この七人の天使は、実は大天使です([ルカ 1 章 19 節](#)の「私は神のみまえに立つガブリエル」参照)。だから、彼らは「その<”the”>」七人の天使であり、ここでは定冠詞が天使の階級と彼らを区別する役目を果たしています。大天

---

<sup>2</sup> 『悪魔の反乱』参照：第 5 部「裁き、回復、置き換え」、第 II.8『『再創造の 7 日間』の証拠』参照。

<sup>3</sup> 『悪魔の反乱』参照：第 5 部「裁き、回復、置き換え」、II.8.c「ユダヤ教の儀式暦」参照。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

使(王子[サリーム]、支配者[アーカイ]とも呼ばれる)は、主に武闘的な職務を担っていることは、天使の職務について前に述べたとおりです(彼らは「将軍」に相当すると考えることができます)。<sup>4</sup> 彼らの任務は悪魔の軍勢との戦闘だけでなく([ダニエル 10 章 13-14 節](#); [黙示録 12 章 7-8 節](#))、宣言をすること(すなわち、しばしばラッパが伴う「命令」を下すこと: [第一テサロニケ 4 章 16 節](#)参照)や、ここでの文脈でのように、地上に下される神の裁きの監督も含まれます。この箇所と[黙示録 15 章 7 節](#)からわかるように、彼らは七人(聖書ではガブリエルとミカエルの二人だけの名前が挙がっています)で構成され、天の御座の前に立って、神の命令を遂行する用意があるのです。彼らは地球で任務を遂行する天使の中で最高位です。ケルブは戦車の御座と共にあり、長老は第三の天で御座の前にいます([ダニエル 8 章 16 節](#), [9 章 21 節](#), [10 章 13 節](#), [10 章 20-21 節](#), [12 章 1 節](#); [ルカ 1 章 19 節](#), [1 章 26 節](#); [エペソ 1 章 21 節](#); [第一テサロニケ 4 章 16 節](#); [ユダ 9 節](#); [黙示録 7 章 2 節](#), [15 章 7 節](#))。大天使はその使命にふさわしい道具を持っています。例えば、宣言のためのラッパ(ここでは監視の役割)、特別な印のための神の印([黙示録 7 章 2 節](#))、裁きを注ぐための鉢([黙示録 15 章 7 節](#))などがあります。

---

<sup>4</sup>『悪魔の反乱』参照: 第 4 部「サタンの世界システム」III.3.b.3 節「大天使」を参照。



## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

### 2. 聖徒の祈りのための香

モーセの律法では、香の備えとその使用は非常に丁寧に指示されていました([出エジプト 30 章 34-38 節](#); [レビ 10 章 1-2 節](#); [民数記 3 章 4 節](#), [26 章 61 節](#); [歴代誌下 26 章 16-20 節](#)参照)-そしてそれには正当な理由があります。ユダヤ教の儀式は天国の現実を忠実に反映している([ヘブル 10 章 1 節](#)参照)のです。香を捧げることは仲介者を通して神に近づくことが許されていることを意味します([エゼキエル 20 章 41 節](#); [レビ 16 章 12-13 節](#)参照)。香は「塩で味つけ」され、純潔で、神聖なことを表しています([出エジプト 30 章 35 節](#); [レビ 2 章 13 節](#)参照; [マタイ 5 章 13 節](#); [マルコ 9 章 50 節](#); [ルカ 14 章 34-35 節](#))。十字架の激しい裁きにおけるキリストの御業は、象徴的にはこの香のようなものであり、燃えて御父の御前に「良い香り」を放つのです([第二コリント 2 章 16 節](#)参照)。それゆえ、地上の香が焚かれたときの芳しい香りは、十字架の火祭壇のいけにえの記念として第一に適用され、私たちに代わって私たちの主が死なれたことが御父の目に完全に受け入れられることを表現しているのです:

また愛のうちを歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。(エペソ 5 章 2 節)

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

この香のことからわかるように、私たちの主の身代わりの死は完全に父に受け入れられ、それは私たちのすべての罪の代償として父の正しい要求を満たす甘い香り(香はそれを再現する)なので、イエス・キリストへの信仰を通して神に立ち返るすべての人に恵みの門が開かれたのです。そのため、香のイメージはさらに応用され、主の名によってなされたすべてのことが正当化され、受け入れられるようになることを表現しています。これは明らかに、[黙示録 8 章 4 節](#)で使われている、**聖徒の祈りのために**、その甘い香りが立ち上るイメージの主旨です。<sup>5</sup>言い換えれば、これらの祈りはこの天の香を通して、香そのものではなく、香が象徴するイエス・キリストの十字架上の勝利の力強い甘い香りによって、完全に有効と見なされるのです。

### 3. 香炉を持つ天使と黄金の祭壇

この天使は階級が特定されていませんが、明らかに長老たち(香を受け取る)に従属し、ケルビムや大天使の一員ではありません。その職務の重要性を考えると、天使の第四の位階であ

---

<sup>5</sup>おそらく、香が祈りに力を与える(「祈りの益となる」)ことを理解できなかったために、ここでの与格(為格-ためかく)の用法は多くの注解者にとって不可解なものとなっています。ギリシヤ語の与格は、「～のために」という意味で頻繁に用いられます(しばしば「利点の与格」と呼ばれ、この意味では英語の前置詞「for」に本質的に相当します)。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

る「権威」に属すると考えられます<sup>6</sup>。この天使は香を捧げること  
を仲介しますが、聖徒の祈りは仲介しません。天使はしばしば  
神の民の祈りの応答を実行しますが(たとえば、[ダニエル 10 章  
12-14 節](#))、神と人との間の仲介者はイエス・キリストです([ガラ  
テヤ 3 章 19-20 節](#); [第一テモテ 2 章 5 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#), [9  
章 15 節](#), [12 章 24 節](#))、彼の御業である十字架の甘い香りによ  
って私たちの祈りは父に受け入れられる有効なものとなるので  
す。

ここで言及されている祭壇の地上の対応物は、十字架を意  
味する「青銅の祭壇」ではなく、聖なる場所にある香のための  
黄金の祭壇です(第 2 部 B 参照)。この第二の地上の祭壇は、  
聖所の内側のベールのそばにあり、私たちがここで見る天の祭  
壇を表現するために必要であり、ヘブル人への手紙でパウロが  
聖所の「中」と正確に表現できるほど聖所と密接に結びついて  
いました([ヘブル 9 章 4 節](#))。黄金の祭壇の象徴、すなわち栄  
光を受けたキリストが私たちに代わって御父の御前に入ってい  
く姿を考えると、それは全く適切なことです。

このシリーズの前回で指摘したように、天国にはいけにえの  
ための真鍮の祭壇の場所はないのです。罪深い人類を贖うた

---

<sup>6</sup>『悪魔の反乱』参照：第 4 部「サタンの世界システム」、第 III.3.b.4 節  
「権威」を参照。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

めに、キリストは全人類のために死ぬために、真の人間性を帯びて地上に出てこなければなりません。この勝利の後、キリストは天のベールを通過し、父の右の座につかれています。これが描かれていますが、これは私たち皆のために祝福された犠牲を果たされたことを示しています。このような理由から、御父の御前で真鍮製の祭壇は不適切ですが、この香の記念祭壇の存在は、キリストの犠牲の正当性を思い起こし、確認するためにふさわしいものです(その火の中にキリストの苦しみの強さを、その発する香りの中にその働きの受容性を思い起こさせます)。地上の祭壇も天上の祭壇も、それが主な役割であり、そこには動物の犠牲は置かれず、香の芳しい香りがこれらの素晴らしい真理を思い起こさせるだけなのです。天の金の祭壇は、復活し栄光を受けた勝利のメシアが私たちに代わって御父の前に現れることを象徴し(地上の金の祭壇と全く同じ象徴)、その香の甘い香りの中でキリストの業を思い起こさせ、その業が受け入れられることを証明し宣言するためのものです<sup>7</sup>。

したがって、黄金の祭壇には、私たちの大祭司としての主イエス・キリストが、重要な犠牲を成し遂げ、真の至聖所に入り、ご自身の血によって私たちのために贖罪を勝ち取った方として、はっきりと描かれています([ヘブル 7 章 11-28 節](#))。

---

<sup>7</sup> 『悪魔の反乱』参照：第 1 部「サタンの反乱と墮落」II.5.b 項「幕屋の図解」参照。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。(ヘブル8章1-2節)

レビ人の大祭司は毎年自分のために動物の犠牲を捧げ、その後、民のために犠牲を捧げましたが、キリストはご自分をすべての人のために一度捧げ(ヘブル 9 章 11-12 節, 9 章 24-28 節)、その無私の犠牲の結果、私たちは今まさにこの天国の御座の間に、彼の祭司的仲介によって近づけるようになったのです。その結果、私たちの祈りは十字架上の働きによって活気づけられ、香は神にその働きを思い起こさせるのです。父の右に座しておられる私たちの弁護者であるイエスは、私たちのために、私たちの祈りのために執り成し(ヘブル 7 章 25 節; [第一ヨハネ 2 章 1 節](#); [ヨハネ 14 章 13-14 節](#))そしてこの祝福された現実には、天国の香のイメージの中で象徴的に描かれています。香は、主の犠牲の死とそれを受け入れる御父の記念であり、ここでは、主が買い取られた人々の祈りと区別がつかないほど混ざり合い、御父の前に立ち上がるときに受け入れられ効力をもたらすのが見られます。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

### 4. 聖徒とその祈り

聖書の用語では、聖徒とはイエス・キリストを信じる者であり、その言葉自体が、神がその人を救いの信仰の結果として、恵みによって俗世から切り離されたという事実注目させるものです<sup>8</sup>。艱難初期の中の信者を表現するのにこれ以上に適切な言葉はありません。なぜなら、イエス・キリストを信じる者は、この恐ろしい時に、まだこの世にいるにもかかわらず、霊的にこの世から切り離されていることがはっきりと分かるからです。比較的良い時代には、信者はこの世の一部であるかのように見え、その一部として機能していましたが、これからの時代には、苦しみ、悪魔の攻撃、霊的二極化、棄教の圧力が非常に強くなり、この世と部分的に協調することは、自分の信仰を極度の危険に曝(さら)さずには、事実上不可能になります([ルカ 18 章 7-8 節](#), [21 章 36 節](#)を参照)。艱難期最中では、繰り返しますが、中立でいるのはあり得なくなります。そのため、信仰を堅く守る信者は、この世で完全ではありませんが、この世のものではない御国を持つ方に頼ることによって、明らかにこの世から離れた聖徒としてはっきり見えるようになります([ダニエル 11 章 32-35 節](#); [ダニエル 7 章 18-27 節](#)も参照)。

---

<sup>8</sup> 特にペテロ・シリーズ#8「選びの結果」と#13「聖化」をご覧ください。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

この箇所は、私たちの祈りが御子の犠牲を通して御父に受け入れられ、私たちの神の御前に喜ばれる香りとなるという原則を教えています。ここで問題とされている具体的な祈りは、悪に対する裁きと神の支配による正義が地上にもたらされることと関係があります。「主の祈り」で言えば、この祈りは後半(マタイ 6 章 11-13 節)ではなく、前半(マタイ 6 章 9-10 節)に対応する祈りです。なぜなら、主の模範的な祈りの後半は、私たちの個人的な状況における三つの本質的な霊的側面(すなわち、供給(「パン」)、赦し(「負債」)、保護(「私たちを解放する」))を扱っていますが、前半は、救い主の千年王国において悪が裁かれて正義が確立する神の地上支配を予期して嘆願することを扱っているのです。

天にいますわれらの父よ、  
御名があがめられますように。  
御国がきますように。  
みこころが天に行われるとおり、  
地にも行われますように。  
(マタイ 6 章 9-10 節)

神に対する世界的な恐れと畏敬の思い、御子の王国の地上での設立、そして神の「御心」である地上における支配の実現は、悪の支配下にあるこの世界のどこにでもある悪を考えると、

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

歴史のどの時代の信者にもふさわしい願いと切望です<sup>9</sup>。そして成長するすべての信者は、この悪い世界で悪とその手下の反撃を直接経験するので、私たちには、時としてこの種の祈りを行う理由があります(参照:詩篇 94 篇; [第二テサロニケ 1 章 4-10 節](#))。<sup>10</sup> しかし、艱難期には、全世界を正し、被造物に「神の恐れ」を持たせ、地上を直接支配し、全世界に神の正義を行うことを切望することは、神の聖なる名を呼び続ける人々の間で、特に切実で普遍的な願いになるでしょう。これらの祈りは、人間の世界が始まって以来捧げられてきたものですが、艱難期を通じてその数と強度が増していきます。神はいつもこれらの祈りに答えてこられました。今、艱難期の始まりとともに、これらの祈りに文字通り一語一句答えておられます。これまで何度も説明されたように、艱難期は、メシアの再臨とその支配の栄光の日を迎えるための「産みの苦しみ」の時なのです。祝福の前には裁きが先に行われなければならないのです。来たるべき王国の祝福に先立つ艱難期の神の裁きによって、これらの祈りはすべて最終的な成就を得るのです。

---

<sup>9</sup> 『悪魔の反乱』第 4 部「サタンの世界システム」参照。

<sup>10</sup> いわゆる「不敬の詩篇」と呼ばれるものはすべて、その根底にあるのは、全能の神に悪と悪人を裁いていただくという、まさにそのような呼びかけであり、(私たちが常にそうすべきであるように)信者自身の手を離れて神に委ねる、有効かつ適切な祈りなのです。



## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の靈魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。(黙示録 6 章 9-10 節)

主の再臨は、その前後に起こるすべての出来事を含めて、これらの祈りに完全に答えてくれるものとなることでしょう。この真実を予期することは、すべてを正してくださる方を待ち望みながら、最も困難な七年間を忍耐強く耐えなければならない私たちにとって、信仰の支えになり、慰めとなります。

「この[たとえ話の中の]不義な裁判官の言っていることを聞いたか。[裁判官が正しいことをするように強いられるのであれば]まして神は、日夜[執拗な祈りのうちに]叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言うておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」。(ルカ 18 章 6-8 節)

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

上記の主の極めて直接的なお言葉に照らせば、私たちは、何が起こるか分からない事態に備えて前もって自らを奮い立たせ、この邪悪な世界とその邪悪な管理者に対するすべての不満を神の御手に委ね、最終的には主ご自身の御手によってすべての問題が適時に解決されることを揺るぎない信仰をもって信頼すると自分自身に誓う必要があります。もちろん、これはどのような時にもクリスチャンにとって常に正しい態度であり、正しいアプローチです。艱難期の強い圧力と迫害を受ける者にとっては、なおさらそうでしょう！たとえそのような圧力がどれほど圧迫的で歯がゆいものであったとしても、救済と正義を求める私たちの祈りは、天の御座の前で燃える香の甘い香りのように立ち上り、イエスが私たちのためにしてくださったこと([詩篇 141 篇 2 節](#))によって有効で受け入れられるようになったことを、私たちは心に確信をもって知っているからです。

### 5. 雷のような声、稲妻、地震

これらのことをもたらす祭壇の火(神の裁きの明確な象徴)が天から投げ下ろされることは、艱難期が始まったことを示す最初の明確な証拠です。

また**大地震**があり、あちこちに疫病やききんが起り、いろいろ恐ろしいことや天からの**物すごい前兆**があるであろう。(ルカ21章11節)

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

艱難期の正確な始まりを示す他のすべての兆候は、私たちを警戒させるべき、傾向や起こり得る出来事に過ぎず、艱難期の開始時期に関する明確な情報を与えてはくれません。<sup>11</sup> これらの恐ろしい兆候は、差し迫った裁きの世界への最初の明白な警告となり、警告を受ける少数の人々には、悔い改めて神に立ち返るよにとの明確で間違いのない呼びかけとなるのです。なぜなら、来たるべき王国はもう間近に迫っており、その正しい審判者は扉の真ん前に立っているからです ([黙示録 3 章 20 節](#); [マタイ 24 章 33 節](#); [マルコ 13 章 29 節](#)を参照)。

しかし、艱難期が始まったことを示すこれらの天のしるしは、実際には具体的に何を意味しているのでしょうか？ 第一に、声、稲妻の閃光、地震はすべて、天の裁きの火を地上に投げつける天使の行動の結果として地上に起こります。第二に、それらは一緒になって警告のパノラマを形成しており、それは耳に聞こえ(声)、目に見え(稲妻の閃光)、体に感じることができます(地震)。第三に、これらの徴候は世界的に(つまり、地球全体を通して、つまり「地球」全体でということで、『ヨハネの黙示録』に出てくるギリシャ語 *ge[γ̄ ħ̄]* が意味する、他の 70 以上の場所でもという意味と同じです)認められます。第四に、「声、稲妻の閃光、地震」はすべて文字通りの意味です。艱難期が始まると

---

<sup>11</sup> 「来たる艱難期」パート 2B: 「艱難期への天の前奏曲」VII 「来るべき艱難の兆し」参照:

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

き、これらの前例のない世界的な現象は、艱難期が始まったことを地上のすべての人に示す紛れもない印となります(その事実を受け入れるかどうかは別として)。

「雷のような声」とは、雷鳴に似ていながら雷鳴とは異なる、轟くような大声のことであり、これは神の言葉そのものです(参照:神の御座から出る声:[黙示録 4 章 5 節](#))。しかし、地上のほとんどの人にとっては、理解できる言葉ではありません。(ヨハネ [12 章 28-30 節](#); [第二コリント 12 章 4 節](#); [黙示録 10 章 3-4 節](#), [11 章 15 節](#), [11 章 19 節](#), [14 章 2 節](#)参照)。<sup>12</sup> 稲妻の閃光もまた、世界中で同時に知覚されるもので人類が経験したことのないほど壮観なものになるでしょう。そして、この地震は、人類史上初の真に世界的な地震となりますが--しかし最終のものではありません。この三つの現象に含まれる他の二つの要素と同様

---

<sup>12</sup> 信者がこれらの「声<の言葉の意味>」を理解できるかどうかは、未解決の問題です。キリストは引用された例の中で、確かに御父の「声」を理解されましたが([ヨハネ 12 章 28-30 節](#); [マタイ 3 章 17 節](#); [黙示録 10 章 3-4 節](#)参照)、ヨハネや他の弟子たちが理解できたかどうかは不明です(彼らは、たとえ話と同じような方法で、後から主から教えを受けたのかもしれませんが)。パウロは[使徒行伝 9 章 3-7 節](#)で主の「声」を理解していますが(この「声」には閃光が伴っています)、彼の仲間は理解していません([使徒行伝 22 章 9 節](#))。私たちは、このような未来のメッセージに対する信者の認識について、ここで明確な示唆を与えられておらず、この質問は、その答えが明らかになる出来事を待たなければならないとしか言えません。

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

に、世界規模の地震は、また大艱難期の始まりのしるしとして艱難期の中間点と主の再臨に先立つハルマゲドンの直前にも起こります。この三重の警告の二度目と三度目は、大艱難期の警告に加え、世界的な雹の災い([黙示録 11 章 19 節](#): [8 章 7 節](#)も参照)、再臨の警告は地震([黙示録 16 章 18-20 節](#): [イザヤ 29 章 6 節](#); [エゼキエル 38 章 19 節](#); [ハガイ 2 章 6-7 節](#); [ゼカリヤ 14 章 3-5 節](#); [ヘブル 12 章 26 節](#); [黙示録 6 章 12-17 節](#))と雹の災い([黙示録 16 章 21 節](#))も同様に、さらに驚異的で破壊的なものです。

間違いなく、艱難期が始まる将来の時点で、不信心な世界は、これらの驚くべき出来事を気象学的、地質学的な特殊性の組み合わせとして説明しようとすることでしょう。しかし、これらの明確な警告の印は、神の御子の弟子である人々に、艱難期が決定的に始まったという事実を疑わせないという点で、神からの祝福と見ることができます。その後続く数日、数ヶ月の間に、この事実(すなわち、このシリーズの目的である、預言された他のすべての艱難期の出来事)の正当性を確証するような他の兆候があることは確かです。しかし、この最初の三重の奇跡的警告に耳を傾けることを拒否するほど心が硬化している人々にとっては、どれだけの証拠があれば十分なのかと問われても仕方がありません。全世界を照らす前代未聞の光(世のまことの光である私たちの主イエス・キリスト:[ヨハネ 1 章 4 節](#), [8 章 12 節](#), [9 章 5 節](#), [12 章 46 節](#)を参照)、世界中に響き渡る声(父なる神の言葉が全世界に発せられたこと: [詩篇 19 篇 1-6 節](#); [イ](#)

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

[ザヤ 55 章 10-11 節](#)を参照)、また、世界の至る所で同時に感じられるこのような独特な地震の意味を否定することができる人々にとっては(目に見えないけれども、普遍的に感じられる聖霊の力: [創世記 1 章 2 節](#); [ゼカリヤ 4 章 6 節](#); [ヨハネ 3 章 8 節](#)を参照)、どんなに否定できないように見える警告でも、十分ではないでしょう。しかし、私たちの神の言葉に耳を傾ける者たちにとって、この三重のしるしは、神の憐れみの間違った側に立つことが何を意味するのかについて、非常に明確なメッセージとなることでしょう。神を畏れ敬う私たちにとっては、この世から恐れるものは何もありませんが、これらの警告に耳を傾けないほど神を畏れ敬わない人々にとっては、恐れるに足る理由があるのです。「生ける神の手に落ちるのは恐ろしいことです」([ヘブル 10 章 31 節](#))。

あなたがたは、語っておられるかたを拒むことがないように、注意しなさい。もし地上で御旨を告げられた者(モーセ)を拒んだ人々が、罰をのがれることができなかつたなら、天から(警告を与えて)告げ示すかたを退けるわたしたちは、なおさらそうなるのではないか。あの時には、(シナイ山で)御声が地を震わせた。しかし今は、約束して言われた、「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」。この「もう一度」という言葉は、震われないものが残るために、震われるものが、(主によって)造られたものとして取り除かれることを示している。このように、わ

## I. 第七の封印 ヨハネの黙示録 8 章 1-5 節

たしたちは震われない国を受けているのだから、感謝をしようではないか。そして感謝しつつ、恐れかきこみ、神に喜ばれるように、仕えていこう。わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である。(へブル 12 章 25-29 節)

## II.大背教

# II. 大背教

## 1. 大背教の定義、語源、過程、預言

a. 定義: 大背教とは、艱難期の前半に始まり、艱難期の後半の大迫害の間に頂点に達すると預言されている、クリスチャンの三分の一が信仰から離れる大規模な背教のことです(黙示録 12 章 4 節; また、マタイ 25 章 1-13 節では、油が足りなくなった五人のおとめが、背教する三分の一を表し、油を備えていたおとめは主の再臨まで生きて忠実である信者を表しています:他のもう三分の一は殉教者であり、そのたとえの中では省略されています)。大背教は、主によっても使徒たちによっても預言されており、旧約聖書のある箇所にも見られます(下記参照)。大背教は(その集中的な最終段階を生み出す原因となっている)大迫害にしばしば組み込まれて記述されていますが、大背教はそれ自体が非常に重要な意味を持つ出来事です。このことは、パウロが艱難期の二つの最も明確な特徴の一つとして、この出来事を用いていることから明らかです。テサロニケ第二の手紙においてパウロは、(反キリストがまだ顕現していないという事実と共に)大背教がまだ起こっていないという事実から、復活がすでに起こったという誤った主張に対して反証しています(第二テサロニケ 2 章 3 節)。パウロは、復活は艱難期の終わりに主が再臨されることと同義であり、艱難期に起こるべき出来事に先行することは不可能であると主張しました。パウロの



## II.大背教

推論によれば、(やはり、世界の舞台に反キリストが紛れもなく現れるとともに)大背教は、その中を生きているなら、クリスチャンにとって、それが起こったかどうかについて疑いを持つことができないほど、衝撃的な大きな出来事となることは明らかです(主がマタイ [24章3-14節](#)で、またペテロが[第二ペテロ3章1-13節](#)で用いた同様の説明を参照)。

大背教は特定の日に起こる出来事というよりも、大迫害の期間にクライマックスを迎える過程であり、その迫害と表裏一体のものであります。迫害のプレッシャーの激化が背教の波を頂点にまで及ばせるからです。黙示録は何よりもまず「イエス・キリストの現れ」([黙示録1章1節](#))であり、その栄光の再臨は、迫害されている人々の救済と迫害している人々の裁きを主な直接的な結果の一つとしています([第二テサロニケ1章4-10節](#)参照)。黙示録でこの二重の現象を扱っている箇所のはほとんどが迫害の側面に集中しているのは、間違いなくこのためです(参照:[黙示録6章9-11節](#), [7章9-17節](#), [12章12-17節](#), [13章10節](#), [13章11-18節](#), [14章13節](#), [14章14-16節](#), [15章1-4節](#), [16章5-6節](#), [17章6節](#), [18章24節](#), [19章1-2節](#), [20章4節](#))。

[黙示録12章4節](#)は、無視できないもので、本シリーズの第4部で、改めて取り上げることにしますが、この信仰からの大いなる「墮落」についての私たちの議論の出発点を構成するのに適切なものです。

## II.大背教

[龍の] (すなわち、悪魔の)その尾は天の星の三分の一(すなわち、墮落した天使と墮落した信者の両方)を掃き寄せ、それらを地に投げ落した(すなわち、彼らの反逆または背教と、その結果としての、その墮落)。(黙示録 12 章 4 節前半)

[黙示録 12 章 4 節](#)にある、大いなる龍(悪魔)が天の星々の三分の一を一掃し、地上に投げ捨てたという描写には、二重の意味があります。「星」は、墮落した天使と背教した信者の両方を指しています(前者については、[士師記 5 章 20 節](#); [ヨブ 25 章 5 節](#), [38 章 7 節](#); [イザヤ 14 章 12-13 節](#), [40 章 26 節](#) [[ルカ 2 章 13 節](#)も参照]; [ルカ 10 章 18 節](#); [ユダ 1 章 13 節](#); [黙示録 1 章 16 節](#), [1 章 20 節](#), [2 章 1 節](#), [3 章 1 節](#), [8 章 10-11 節](#), [9 章 1 節](#), [12 章 1-4 節](#)。後者については、[ダニエル 8 章 10 節](#), [12 章 3 節](#); [第一コリント 15 章 40-42 節](#); [ピリピ 2 章 15 節](#); [ヘブル 11 章 12 節](#); [黙示録 12 章 1 節](#)参照)。人類の歴史が始まる前に、サタンが天使の三分の一をそそのかし、神への反逆に加担させ、彼らを「墮落」させたように、艱難期の坩堝の中で、サタンは信者の三分の一をそそのかし、キリストから離れさせ、同様に「地に掃き落とす」(すなわち、聖なる天の身分から墮落させる)のです。以前この箇所の子サタンの反乱に関する意味を説明しました<sup>13</sup>。しかし、[黙示録 12 章 4 節](#)が大背教に陥った信者に

---

<sup>13</sup> 『悪魔の反乱』第4部「サタンの世界システム」Ⅲ.3.b.3項「長老たち」参照。

## II.大背教

も適用されることは、ダニエル書での「小さな角」(すなわち、悪魔と地上におけるその代理人の型である反キリスト)が、このプロセスの主導的な役割を与えられていることから明らかです<sup>14</sup>。

[小さな角](すなわち、悪魔の予型であり代表者としての反キリスト)は、**天の衆群**(すなわち、神の家族である人間と天使の両方)に及ぶまでに大きくなり(すなわち、反キリストが信者らを惑わして背教させ)、**星の衆群のうちの数個を地に投げ下して**(サタンが天使たちを誘惑して反逆させ)、**これを踏みつけ**(つまり、悪と結びついた反抗や背教が、後の破滅につながる:[ダニエル7章7節](#), [7章19節](#); [黙示録11章2節](#))、(ダニエル8章10節)

(上記の提議のような)この墮落した「衆群」を背教者と墮落した天使の両方に小分類することによって、[ダニエル書 8 章 10 節](#)は、その並行箇所である[黙示録 12 章 4 節](#)の場合にも、同じような二重適用ができることが明らかです。[黙示録 12 章 4 節](#)と同じように、[ダニエル書 8 章 10 節](#)も(前史の天使の三分の一が

---

<sup>14</sup> ここに見られるサタンと反キリストの予型論的な融合は、聖書預言において他に例を見ません([イザヤ 14 章 3-23 節](#)の「バビロンの王」も同様に、悪魔と地上の偽メシアの両方の経歴を表しています)。聖書預言における予型論の適用については、「来たる艱難期」第1部「はじめに」、IV.1.d「[旧約聖書の預言における予型論と連続性](#)」をご覧ください。

## II.大背教

墮落と艱難期の信者の三分の一の墮落という)出来事の時期を一つに融合させているように見えますが、実は、[黙示録 12 章 4 節](#)に続く文脈が、サタンとその天使たちが天から地上に実際に文字通り投げ落とされることの預言の最終的な成就(参照：[黙示録 12 章 7-9 節](#))を明確にしています(7-9 節参照)。<サタンが投げ落とされるのは>大背教の絶頂期、すなわち、大艱難期の始まりと同時期であり、まさに、その3年半の期間を特徴づける大迫害の圧力が背教を激昂させる時なのです。ですから、艱難期に「墮落」する信者に適用される限り、[ダニエル書 8 章 10 節](#)と[黙示録 12 章 4 節](#)は、大背教の経過について特に重要な二つの詳細を私たちに提供しています：

- 1) 大背教は、反キリストによって操作され、信者に向けられた悪魔の活動の激化の直接の結果として起こる。
- 2) その時、地上の信者の3分の1が信仰から「離脱」する。

第一の点に関して、このような悪魔的活動の激化は、以前は非常に大きく抑制されていたことに注意すべきです(実際、反キリスト自身、サタンの「不法の者」は、その時前には現れないようにされていました：[第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#))、艱難期には、聖霊の世界的な抑制の働きが一時停止されるために可能になります([第二テサロニケ 2 章 6-7 節](#))<sup>15</sup>。第二に、「三分の一」

---

<sup>15</sup> 「来たる艱難期」2部B「天の前奏曲」セクションⅢ「聖霊の抑制の働き」参照。

## II.大背教

という数字も、注目すべきものです([ダニエル 11 章 33-35 節](#)と[ゼカリヤ 13 章 8-9 節](#)を参照してください)。これは実際のクリスチャンの数の三分の一を表しているのであって、その時点でクリスチャンであると自称している世界中の人口の三分の一を表しているのではないことを理解してください。この二つの数字(真のクリスチャンと表向きのクリスチャン)の差は計り知れないものでしょう。神以外に人の心を知ることはできませんが、もし過去の歴史や経験が何らかの指針になるのであれば、宗教について尋ねられたときにクリスチャンと自称する人のうち、本当に主イエス・キリストの信者であり弟子である人はごく一部である可能性が非常に高いのです。アブラハムは、ソドムの「義人」の数を意図的に最小限の「最悪のケース」で見積もりましたが、それでもその本当の数を過大評価しました([創世記 18 章 32 節](#))<sup>16</sup>。この「3 分の 1」という数は、将来の試練の時には、すぐにキリスト教の装いをすべて捨て去る大多数の(そして、獣の宗教運動に心から加わる)単なる名目上のクリスチャンのことではありません。ここで問題にされている背教者たちは、それどころか、主を信じる本物の信者たちであり、来たるべき恐ろしい圧力の

---

<sup>16</sup> アブラハムは少なくとも「十人の義人」がいてと考えていましたが、ソドムから救出されたのはロトとロトの妻、そして二人の娘たちだけでしたが、ロトの妻は「振り返って」塩の柱になってしまいました(創世記 19 章 26 節)。同じ章の後半に登場するロトの娘たちの行動を考えると、ロトの他に正しい者がいたかどうか疑うのは当然でしょう(第二ペテロ 2 章 6-9 節参照)。

## II.大背教

下で、その尊い信仰を無価値で一時的なこの世の関心事にすり替えてしまうのです([ダニエル 11 章 30-35 節](#)参照)。

人が主の御名を呼び求め始めて以来([創世記 4 章 26 節](#))、また教会時代の初期から([ピリピ 3 章 18 節](#); [第二テモテ 4 章 10 節](#))、最初はうまくいっても、何らかの理由で信仰につまずき、キリストから離れていく人々は常にいました([マタイ 13 章 20-21 節](#); [マルコ 4 章 17 節](#); [ルカ 8 章 13 節](#); 参照[ガラテヤ 5 章 4-7 節](#); [第一テモテ 4 章 1 節](#))。しかし、真の教会の三分の一がイエス・キリストから離れるということは、恐ろしいことであり、また、私たちの目の前に起こる大変動のために霊的に準備するように命じられている私たちに、その重要性を疑わせるものではありません([マタイ 24 章 13 節](#); [ルカ 18 章 8 節](#), [21 章 36 節](#))。主から離れて背教する「三分の一」のメッセージの重要性は明らかです。信仰が岩の上に堅固に根ざしていないすべての人々にとって、艱難期にはとてつもない霊的危機が訪れるのです([マタイ 7 章 24-27 節](#); [ルカ 6 章 46-49 節](#))。ここでは、(信者の背教の可能性さえ否定している)「永遠の安全保障」という誤った教義に対する反論を再び行うには時間と余裕がありませんが、これ<永遠の安全保障に>に反する新約聖書の数多くの箇所を客観的に読めば、私たちの救いは、最後までイエス・キリストへの信仰を忠実に堅く保つことを要求しているという原則を明らかにするのに十分なはず(例えば、[マタイ 7 章 24-27 節](#), [10 章 33 節](#); [ルカ 6 章 46-49 節](#), [14 章 34-35 節](#); [ヨハネ 15 章 5-6 節](#); [ローマ 11 章 17-23 節](#); [第一コリント 6 章 9-11 節](#), [10](#)

## II.大背教

[章 6-12 節](#), [15 章 2 節](#), [第二コリント 13 章 5 節](#); [ガラテヤ 5 章 19-21 節](#); [エペソ 5 章 3-7 節](#); [コロサイ 1 章 21-23 節](#); [第一テモテ 6 章 9 節](#), [6 章 20-21 節](#); [第二テモテ 2 章 12-13 節](#); [ヘブル 2 章 1-3 節](#), [3 章 6-19 節](#), [10 章 35-39 節](#); [第二ヨハネ 1 章 8-9 節](#)<sup>17</sup>。救われるのは、最後まで信仰をもって耐え忍ぶ者だけであり([マタイ 24 章 13 節](#))、艱難期は、忠実であり続けることと、忠実な弟子であり続けることに対して、人類の記憶にあるどの時代よりも大きな試練を与えることになるでしょう。

b. 背教の語源: 英語の「アポスタシー apostasy」はギリシャ語のアポシタシア apostasia (Ἀποστασία; [第二テサロニケ 2 章 3 節](#)参照)の音訳で、語源的には「離れて立つ」(apo = “away(離れる)” ; stasia = “standing(立つ)”), または何かから「離れる」ことを意味します。誰かや何かから故意に背を向ける、見捨てる、「反抗する」という行為は、古代ギリシャ語全体を通して、この語の最も一般的な用法です(参照:[使徒行伝 21 章 21 節](#):KJV と NASB では “forsake(捨てる)”, NIV では “turn away(背を向ける)” と訳されています<日本語の口語訳では「そむく」>)。旧約聖書と類似している点では、アポスタシア<名詞>は同族の動詞アフィステミ *aphistemi* ([使徒行伝 5 章 37 節](#)参照)と共に、神から離れるという同じ概念を表しますが、これに類似した、多くの旧約聖書のヘブル語の表現があります。例えば、ヘブル語では、名詞メシュバ(משבה;「後戻り」また

---

<sup>17</sup> ペテロの手紙シリーズ#26「個人的な苦難への反応」と#27「信仰を脅かす三つの偽教理」を参照。

## II.大背教

は背教)と同族の動詞シュブ(שוב;「後戻りする」または背教する)がよく使われる名詞と動詞の一組です。どちらの言語でも、この概念を表す用語は数多くありますが、ギリシャ語とヘブル語の対応している語彙からわかる主要なことは、「アポスタシー」とは、紛れもなく、神から離れること、神を見捨てること、神に反逆すること、つまり、信仰者が神の権威を完全に拒絶すること、神に対して「背を向け」、代わりにこの世に「戻っていく」ことにほかなりません(参照:[ヨハネ 15 章 1-7 節](#); [ローマ 11 章 17-23 節](#))<sup>18</sup>。

石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう(スカンダリゼタイ;すなわち、背教するのです)。(マタイ13章20-21節)

同じように、石地にまかれたものとは、こういう人

---

<sup>18</sup> この他にも、ヘブル語旧約聖書とギリシャ語新約聖書には、背教の概念を表す言葉がたくさんあります。例えば、アナカンプト(ἀνακάμπτω「引き返す」;[第二ペテロ 2 章 21 節](#)参照)、スカンダリブ(σκανδαλίζω「つまずかせる」;[マタイ 24 章 10 節](#))、ペシヤ(פּשע「反逆」;[ダニエル 9 章 24 節](#)参照)、シュール(סור「背教」;[イザヤ 1 章 5 節](#)参照)、マラド(מרד「そむく」;[民数記 14 章 9 節](#)参照)、およびこれらの同族の言葉を挙げるときがありません。



## II.大背教

たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、自分の中に[信仰の]根がないので、しばらく続くだけ[の信者]である。そののち、御言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう(スカンダリズンタイ:棄教する)。(マルコ 4章16-17節)

[信仰の種が]岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、[信仰の]根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時が来ると、**信仰を捨てる**(アフスタンタイ:止める、棄てる)人たちのことである。(ルカ8章13節)

アポスタシー(背教)の根底にあるのは信仰の死であり、一度は信じた者が救い主である私たちの主イエス・キリストを拒絶することです。上記の福音の種まきのたとえの箇所から明らかなように、多くの場合、「艱難」と「迫害」、つまり弟子となるための代価が、その時点で楽だと思われる道を選んで、かつての信仰者に信仰を捨てさせる決定的な要因となります(参照:「艱難」と「迫害」は、それぞれ大背教と大迫害における艱難期前半と艱難期後半に特徴的なものです)。

彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることにより、この世の汚れからのがれた後、またそれに巻き込まれて(靈的に)征服されるならば、彼らの

## II.大背教

後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒め(キリストを信じること)にそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよい。ことわざに、「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にころがって行く」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ2章20-22節)

c. 背教のプロセス: 上記の議論から、背教の本質的な仕組みは十分に明らかですが、人がどのようにイエス・キリストへの信仰を失うのかをここで明確にすることが重要です。神から離れ、御子という存在から離れることは、一般に他人から見ですぐにわかることではなく、むしろ、信者が次第に良心をくじき、罪に身を任せるようになる過程で、最終的には一方では神と悔い改め、他方では罪と咎めの間で最後の選択を迫られることが多いのです。なぜなら、ある時点で十分に長く、十分に故意に間違った道を歩み続けると、最終的に、また必然的に、良心が完全に崩壊し信仰の「難破」につながるからです。

わたしの子テモテよ。以前あなたに対してなされた数々の預言の言葉に従って、この命令を与える。あなたは、これらの言葉に励まされて、信仰と正しい良心とを保ちながら、りっぱに戦いぬきなさい([第一テモテ1章5-6節](#)参照)。ある人々は、正しい良心を捨てたため、**信仰の破船**に会った。(第一テモテ

## II.大背教

### 1章18-19節)

この聖句が教えるように、御霊の良心との対話を無視し続けながら、信仰を損なわずに済むことはできません(第一テモテ 4章 1-2 節; テトス 1 章 15 節; エペソ 4 章 30 節; 第一テサロニケ 5 章 19 節; ヘブル 10 章 29 節 を参照)。神と神の御心に反対し続けながら、自分の信仰を害さないでいるということは不可能です(第一ペテロ 2 章 11 節)。そして、神様にとって不愉快なことを選び続けるなら、神様の顔を見るのがますます億劫になることでしょう(ヨハネ 3 章 20 節; エペソ 5 章 11-14 節)。神を無視し、神の意志を拒否する道は、必然的に良心を傷つけ、萎縮させ、鈍感にさせるので、(悔い改めがない場合)最終的に信仰を抹殺することにつながります。そして、信仰者が完全に信じることをやめたとき、その人はもはや信仰者ではなくなります(マタイ 24 章 10-13 節)。聖書に記述されているこのプロセスは「心が頑なになること」です。つまり信者の場合、自分の良心、神の御心、そして真の忠実な弟子としてイエス・キリストに従うという決意に対する感覚と感受性が徐々に失われていくのです(これらはすべて同じものです)<sup>19</sup>。

兄弟たちよ。気をつけなさい。あなたがたの中に

---

<sup>19</sup> 『ペテロの手紙』シリーズ#21、#26、#27、および「出エジプト記 14 章：パロの心を頑なにする」を参照。

## Ⅱ.大背教

は、あるいは、**不信仰な悪い心**(すなわち、信仰の欠如)をいだいて、生ける神から離れ去る(すなわち、背教)者があるかも知れない。あなたがたの中に、**罪の惑わしに陥って、心をかたくなにする者が**ないように、「きょう」といううちに(すなわち、まだこの世にいるうちに)、日々、互に励まし合いなさい。もし最初の確信を、最後まで**しっかりと持ち続けるならば**、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。それについて、こう言われている、

「きょう、み声を聞いたなら、神にそむいた時(メリバ)のように、**あなたがたの心を、かたくなにはいけない**」。

すると、聞いたのにそむいたのは、だれであったのか。モーセに率いられて、エジプトから出て行ったすべての人々ではなかったか。また、四十年の間、神がいきどおられたのはだれに対してであったか。罪を犯して、その死かばねを荒野にさらした者たちに対してではなかったか。また、神が、[かつて約束された]わたしの安息[の地]に、はいらせることはしない、と誓われたのは、だれに向かってであったか。不従順な者に向かってではなかったか。こうして、彼らが[安息の地に]はいることのできなかつたのは、**不信仰(=信仰の喪失)のゆえ**であることがわかる。

## II.大背教

(ヘブル 3 章 12-19 節)

この聖句は、背教の過程に関するまさに入門書です。ここでは、「不信仰の邪悪な(すなわち、頑なになった)心」を持つことは、背教に入ることと本質的に同義であることがわかります(これまで見てきたように、語源的には「神から離れること」)。この二つの現象は密接に関連しており、どちらも同じ原因、すなわち、本人の誤った選択から生じています。上記の出エジプトの世代の場合のように、私たちが心を頑なにするのは自分の意志によるものであり、神に背を向けるのも自分の意志によるものだからです。神に向かうこと、神に従うこと、正しい道を進むこと、これらはすべて、私たちが主に近づける、善良で適切な決断です。神に背を向けること、自分の欲望に従うこと、正しい道から離れること、これらはすべて、私たちが主から遠ざける誤った危険な決断です。この地上における私たちの本質的な目的は、神の御子、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストというお方を通して神に従うか、神に背くかを選択することであると以前述べました<sup>20</sup>：弟子とは、イエス・キリストを信じる者であり、イエス・キリストを喜ばせるために生きる忠実な従者であることであり、それは日々、自分の十字架を担うことです(そして、毎日が新しいチャレンジとなります：[ルカ 9 章 23 節](#)：[マタイ 6 章 34](#)

---

<sup>20</sup> 『悪魔の反乱』第3部「人間の目的、創造、墮落」、第1節「人間の目的」参照。

## II.大背教

[節](#); [エペソ 5 章 16 節](#); [コロサイ 4 章 5 節](#)も参照)。イエスは私たちに、イエスに従うことを決意する前に、弟子としての「代価を数えなさい」と言われました([ルカ 14 章 26-34 節](#))。イエス・キリストにある真の弟子としての生活は、間違いなく犠牲を伴わないものではありません。そして、主に従い始めて後で背を向けるよりは、そのような道に踏み出さなかった方がましなのです([第二ペテロ 2 章 20-22 節](#))。上で引用した箇所からも明らかのように、イエスが私たちにさせようとされることに対して私たちの心は無感覚にさせるのは、「罪の惑わし」なのです。

これは、すべての背教者が明白であからさまな罪のパターン(例えば、法外な性行為や犯罪行為)に従事しているという意味ではありません。罪にはいろいろな形がありますが、著者の観察によれば、背教者と関連することの多い罪の種類は、嫉妬、ねたみ、恨み、怒りなどの心の罪が多く、(前節で引用した種まきのたとえの箇所でイエスが語っているように: [マタイ 13 章 20-21 節](#); [マルコ 4 章 16-17 節](#); [ルカ 8 章 13 節](#))、人が個人的な苦難や災難を神のせいにするときに心を支配しがちな態度です。しかし、信者が心から忠誠を誓う罪がどのようなものであれ(後で悔い改めて告白する一時的な失敗とは違います)、神に背き、神の不興を買うものを選ぶというこの持続的で決定的なパターンこそが、心を頑なにし、良心を麻痺させ、私たちを神から遠ざけ、ついには信仰を死に追いやるのです。私達はキリストと罪とに同時に仕えることはできないからです。

## II.大背教

あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、だれかの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、(信仰の)死に至る罪の僕ともなり、あるいは、義にいたる従順の僕ともなるのである。(ローマ6章16節) (ヨハネ8章31-38節を参照)

私たちは皆、罪を犯しますが([列王記上 8 章 46 節](#); [詩篇 130 篇 3-4 節](#); [箴言 20 章 9 節](#); [伝道の書 7 章 20 節](#); [ローマ 3 章 23 節](#))、継続した主との信仰関係において、罪を告白するなら、赦しが約束されています([第一ヨハネ 1 章 9 節](#); [詩篇 32 篇](#); [51 篇](#)参照)。使徒ヨハネは私たちに罪の赦しについて慰めを与えるだけでなく、その最初の手紙の中で、私たちは皆罪人であり、罪を犯すたびに告白する必要があることをはっきりと語っています([第一ヨハネ 1 章 5-10 節](#))。しかし、ヨハネは「あなたがたが罪を犯さないようにするため」([第一ヨハネ 2 章 1 節](#))と言い、さらに手紙の中で、信者は罪を犯すことができないとさえ思われる人であると述べています([第一ヨハネ 3 章 6 節](#), [3 章 9-10 節](#), [5 章 18 節](#)を参照のこと)。これは矛盾ではありません。むしろ、クリスチャンの生き方がイエス・キリストに従順に従うものであり(そうしている場合、罪を犯すことは稀です)、深刻な、そして永遠の結果なしに、すべてのことにおいて自分の道を選ぶことができる生き方ではないことを確認するものです。私たちは自分の過ちを認めなければなりません。また、たとえ赦されても、罪は当然な、神よりの結果をもたらすことを理解しなければなりま

## II.大背教

せん。例えば、私たちの罪深い行動が誰かを傷つけ、その人との関係を損ね、同時に主からの懲らしめを受けるかもしれません(ヘブル 12 章 4-13 節)。しかし、真のクリスチャンにとって罪とは、イエス・キリストに仕える巡礼の旅から外れることです。悔い改めと告白を通して、私たちはそのまっすぐで狭い道に戻り、そうすることによって、私たちが本当にイエス・キリストへの信仰に献身していること、自分が真の目的ではない別のものに向かって一瞬の離脱をしてしまった過ちを、自分自身と私たちを見ているすべての天使と人間に明らかにします。<sup>21</sup> しかしその「一時の離脱」が頑なに異なる方向へと進み続けているなら、良心を傷つけ神に対して心を頑なにしていまいかねないので、信仰も危うくなってしまうのです。

人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで(つまり、人がそれに屈すれば)罪を生み、罪が熟して(すなわち、その人が罪の生活に屈服するなら)死(すなわち、信仰の死)を生み出す。(ヤコブ 1 章 14-15 節)

もしだれかが死に至ることのない罪を犯している(つまり、完全に背を向けるのではなく、道から外れて

---

<sup>21</sup> 「来たる艱難期」パート 2A:「七つの教会」のエペソとペルガモについて参照。



## II.大背教

いる)兄弟を見たら、神に[兄弟のために赦しを]願い求めなさい。そうすれば神は、死に至ることのない罪を犯している人々には、いのちを賜わるのであろう[すなわち、赦しと救出がもたらされます]。死に至る罪がある。これについては、願い求めよ、とは言わない。不義はすべて、罪である。しかし、死に至ることのない罪(つまり、一時的に道から逸れても、告白と悔い改めによって死に至ることがないもの)もある。(第一ヨハネ 5 章 16-17 節)

また、ある者たち(すなわち、出エジプト世代)がしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、(同じような背教に陥ることがないように)他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終り(すなわち、艱難期の入り口)に臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、(信仰から離れて:ローマ 11 章 22 節)倒れないように気をつけるがよい。(第一コリント 10 章 9-12 節)

背教を避ける最良の方法、本当に唯一の確実な方法は、永遠の命への**唯一の**道である私たちの主イエス・キリストに忠実

## II.大背教

に従いながら、シオンへの道を前進する仕事に身を捧げることです([ヨハネ 14 章 6 節](#))。

### d. 大背教の預言:

1) [第一テモテ 4 章 1 節](#)では、使徒パウロは大背教<が起こること>は、明らかに御霊が教えておられることであると言っています。つまり、艱難期にキリスト教の信仰を捨てる人々は、単に中立的な不信仰者になるのではなく、イエス・キリストへの信仰に代わる敵対的なものとして、悪魔とその反キリストによって提供される新しい悪魔的なシステム(宗教、政治、社会など)に喜んで積極的に参加するようになるということです。このシステムは、真の信仰を地上から根絶することを主要な目的の一つとしているので、このような個人の場合、積極的に「キリストの十字架の敵」となるパターンが完全に成就することがわかります([ピリピ 3 章 18 節](#))。

しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時(すなわち、大艱難期)になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。(第一テモテ 4 章 1 節)

2) 冒頭で述べたように、パウロは[第2テサロニケ 2 章 1-4 節](#)で、大背教を反キリストの出現に並ぶほど重要な出来事としてとらえています。使徒は、復活がまだ起こっていないことを証明す

## II.大背教

るために、テサロニケの信徒たちに、復活の前に起こるべき、間違うことのできない二つの明白な出来事に焦点を合わせています。反キリストの現れと同時に、大背教が起こるのです。テサロニケの人々は、自分たちの仲間を見れば、背教には何も大きな離反はなく、特にかつての仲間の多くがサタンの大義の推進と教会の排除に完全に忠誠を誓うような事態にはなっていないことは明白でした。上記の箇所と同様に、これらの節では、キリストに背を向ける人々と反キリストとその体制の台頭との間に明確な関係が示されており、墮落した元信者たちが獣の前進に決定的な役割を果たす可能性が高いのです。

さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることについて、あなたがたにお願いすることがある。霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたと[新しい情報をもって]ふれまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず[大]背教のことが起り、不法の者[反キリスト]、すなわち、滅びの子([ヨハネ 17 章 12 節](#)のユダを参照)が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。(第二テサロニケ 2 章 1-4 節)

## II.大背教

3) [マタイ 24 章 3-13 節](#)で、イエスはこれらの終末論的出来事の時期に関する弟子たちの質問に答えています。この点で、主の応答は、上記の箇所と同様に、大背教(および他の出来事)を用いています。つまり、弟子たちは主がいつ再臨されるのかを知りたがっていたのですが、イエスは、主が再臨される前に、(大背教を含む)艱難期のすべての「産みの苦しみ」が先行しなければならないと教えておられるのです。4 節から 6 節にかけて、イエスは弟子たちに、御自分の再臨に先立つ期間を通して起こる傾向について話しておられます。そして、実際、教会時代を通して、イエスのように見せかける欺瞞者が存在し([第一ヨハネ 2 章 18 節](#)参照)、また、終末的な意味を持つほど重大であると思われる(その時点では)紛争や紛争の脅威が存在し続けました。この箇所の冒頭にある主のメッセージは三重のもので、第一に、私たちは偽キリストに惑わされたり、世界の出来事を恐れて正しいクリスチャンの歩みから外れてしまったりしてはならないと告げています。第二に、このような欺く者や欺かれる可能性のある状況は、来たるべき日(すなわち、教会時代全体)の特徴であると言われてしています。すなわち、実際の艱難期は、反キリストという特定の偽キリストによって明白に特徴づけられ、その出来事は、主の再臨に先立ち予測される一連の世界紛争によって明らかに支配されるため、聖句に正しい注意を払う者であれば、これらのことが何であるかを認識できないことはない、ということです。というのも、この二つの教会時代的な流れは、艱難期の中に、それぞれ、強大な反キリストの人物と、その世界支配の作戦の実行において、その行動と究極的な成就を見

## II.大背教

出すからです。

＜マタイ 24 章の＞[7 節](#)で、主は艱難期の前半を総括され、[8 節](#)で「産みの苦しみ」の始まり、すなわち、主の再臨に直接先立つ 7 年間の前半であると説明されます。これらの出来事の概要の中で、世界が二つの勢力ブロックに分裂し、「世界戦争」が起こること(最終的に反キリストが地球の大部分を支配するようになること)は、艱難期前半の紛れもない特徴的な兆候であると説明されています。(黙示録 [6 章 1-17 節](#)の七つの封印にある詳しく述べられ指摘されているような)凶悪化によって引き起こされた人為的な大災害と、この激化した悪に対する前例のない神の裁き(七つのラッパ: [黙示録 8 章 6 節-11 章 19 節](#))の両方が、この期間を特徴づけることとなります。大艱難期についてである [9 節から 13 節](#)において、主は、大迫害と大背教の絶頂期を一つの複合現象として描写しています。(大艱難期が始まるまでに背教者となった)信者は他の信者を裏切り、その結果、艱難、すなわち、投獄、処刑、イエス・キリストに従うすべての真の信者に対する全世界的な反感を含むあらゆる迫害が起こります(9 節)。この激しい迫害によって、さらに多くの人々が「離反」し、さらに裏切りが繰り返され、新しい背教者たちによるかつての兄弟たちへの敵意が高まります(10 節)。このような圧力と迫害がますます強まる環境の中で、サタンは、まだキリストに忠実な人々に向けられた欺瞞的な攻撃を開始します(11 節: [23-24 節](#)では、サタンに力を与えられた「しるし」の助けを借りて、キリストはすでに再臨したと偽って宣べ伝える偽預言者の新た

## II.大背教

な群れとして説明されています)。これらの恐ろしい出来事が重なって、ついに、ここまで耐え忍んできた人々の愛さえも冷えてしまい(12 節。後述の「大背教の原因」を参照)、救われるのは、主が再臨される最後のラッパまで耐え忍ぶ人々だけです(13 節)。このように、背教は、艱難期の後半に大迫害によってもたらされる圧力の下で頂点に達します。しかし、反キリストの台頭と同じように、大背教は艱難期が始まった瞬間から始まり、大きくなっていきます。

(3)またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたはまだおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。(4)そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけなさい。(5)多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。(6)また、[実際の]戦争と戦争のうわさを聞くであろう。注意していなさい、(そのようなことに)あわててはいけない。それ[そのような事柄]は起らねばならないが、まだ[艱難期の]終りではない。(7)[その終わりの前には]民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう([ダニエル11章25-30節](#), [11章40節](#))。またあちこちに、ききん(すなわち、人為的災害)が起り、また地震(すなわち、神の裁き)があるであろう。(8)しかし、すべて

## II.大背教

これらは[まだ]産みの苦しみの初め(すなわち、艱難期の前半期)である。(9)そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。(10)そのとき、**多くの人がつまずき**(すなわち、背教し)、また互に裏切り、憎み合うであろう。(11)また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。(12)また[その時]不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう。(13)しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ24章3-13節)

4) また、ダニエル書には、大背教の大洪水と患難の中間点を結びつける一連の箇所があります<sup>22</sup>。予想されるように、これらの箇所はすべてイスラエルの地に焦点を当てていますが、背教、裏切り、迫害という点で、ここで説明されている出来事は全世界に適用可能です。[ダニエル書 8 章 10-12 節](#)は、背教の信者と獣による忠実な人々への大迫害との関連を示しています。[ダニエル 8 章 23 節](#)は、大背教が満ちる時期が反キリストの登場と同時期であることを示しています(すなわち、大艱難期で

---

<sup>22</sup> ダニエル書 8 章の情報が終末の時代に適用されることは、ダニエル 8 章 19 節で明らかにされています:「見よ、私は、[神の]憤りの終わりの時(すなわち艱難期)に起こるべきことを、あなたに知らせよう。それは(すべて)定められた終わりの時にかかわるもの[起こること]であるから」。

## II.大背教

す。) [ダニエル 11 章 30-35 節](#)は、大迫害とそのイスラエルにおける具体的な経過を主に扱っていますが、ここでも、一方では背教者と不信仰者が積極的に悪魔の陣営に入り、他方では、主に完全に献身し続ける者たちが彼らと真っ向から対立するという二極化が進むパターンが見られます。

それ[小さな角](すなわち、悪魔の予型であり、その現れである反キリスト)は大きくなって天の軍勢(すなわち、神の家族である人間と天使の両方)に達し、天の軍勢(すなわち、反キリストによって背教するように惑わされた信者たち)と星のいくつか(サタンによって反逆するように誘惑された天使たち)を地に落として、これを踏みつけ(つまり、悪と結びついた彼らの反逆や背教が、その後滅亡につながる:ダニエル 7 章 7 節, 7 章 19 節; 黙示録 11 章 2 節参照)、軍の長(すなわち、キリスト)に逆らうほどに自らを高くし、彼から常供のささげ物を取り上げた。こうして、その聖所(すなわち、内庭)の基はくつがえされた。

背きの行いにより、軍勢(信者たち)は常供のささげ物とともにその角に引き渡された(=背教者らによって迫害へと進んでいく大背教; 13 節参照)。その角は真理を地に投げ捨て、事を行って成功した。(新改訳IVダニエル 8 章 10-12 節)

彼らの治世の終わり(すなわち、艱難期)に、その



## II.大背教

背く者たちが(背教の) **行き着くところに至ったとき**、横柄で策にたけた一人の王(すなわち、反キリスト)が立つ。(ダニエル 8 章 23 節)

(25) そのとき、彼(すなわち、北の王、反キリスト)は、その力を奮い立たせ、大軍を率いて南の王に対抗しようとしませんが、南の王もまた、同じく大軍を率いて戦いに出動します。それにもかかわらず、彼(すなわち南の王)は北の王に立ち向かうことができないでしょう。(26)彼の選り抜きの食物を食べる者(すなわち、彼の内輪の者)が彼を打ち破り、その勢力があふれ出て、多くの者が殺されて倒れるからです。(27)このふたりの王が悪に心を定め、同じ食卓(= 和平会議)でうそを語っても、それは栄えません。(28) さて、彼(= 反キリスト)が大きな戦利品を携えて自分の土地に帰るとき、彼の心は聖なる契約に敵対し、聖なる契約に対して行動を起こし、そして自分の土地に帰るでしょう。(29)この期間中に、彼は帰って来て、南を[再び]攻撃しますが、この作戦の状況は最初の作戦のようではありません。(30)キティム(すなわち、西の「バビロン」)の船が彼と一緒に攻撃するからです。そのとき、彼は[死んだように]打ちのめされますが、復活します。そして、彼は聖なる契約に激怒し、[はるか南方からイスラエルに]帰って来るとき、[それに対して]行動を起こすでしょう(すなわち、いけにえ

## II.大背教

を終わらせ、憎むべきものを設置し、神殿に自分の座を設けます)。聖なる契約を捨てる者を支持し、(31) 聖所を汚し(すなわち、モーセとエリヤの務を終わらせ)、日ごとのいけにえを取り除き、荒廃の忌むべきものを据える軍勢が、彼から出るからです。(32)また、誘惑を用いて[人々を]そそのかし、[聖なる]契約に違反させようとはしますが、自分たちの神を知っている民は、それを堅く守り続けます。(33)民の中で見識のある者は、しばらくの間、剣(=殉教)、炎(=拷問)、捕囚(=投獄)、略奪(=財産の没収)によって苦しめられている民を教えるでしょう。(34)また、迫害されても、少しは助けを受けるでしょうが、偽って彼らに味方する者も多いでしょう。(35)見識のある者たちの中からも、迫害される者が出るでしょう。(それは)まだ、定められた時に来るからです」。(英直訳版ダニエル 11 章 25-35 節)

### 2. 艱難期直前の教会と「見える教会」の状況：

大背教の現象を完全に理解するためには、目に見える教会とイエス・キリストの真の教会との違いを理解する必要があります。簡単に言えば、「すべてのイスラエルがイスラエルであるわけではない」([ローマ 9 章 6 節](#))ように、クリスチャンであると自称するすべての人が、本当に私たちの主イエス・キリストを信じ、従っているわけではないということです。そして、多くのクリスチ

## II.大背教

ヤンが特に神のことばに関心がないとか、多くのクリスチャンが特に聖別された方法でクリスチャン生活を送っていないという事実についてここで話しているのではありません(悲しいことに、多くのクリスチャンはそうではありません)。極端な言い方をすれば危険なことです、「生ぬるい」クリスチャンであっても、キリストの群れの一員であることは可能です。明らかに、このカテゴリーに属する人々(そして、この最も自己満足的な教会の時代であるラオデキヤ<sup>23</sup>では、その割合は驚くほど高いのです)は、艱難期の霊的な圧力の下で、信仰と救いを失うという最も深刻な危険にさらされます。しかし、たとえそうであっても、イエス・キリストへの信仰を維持している限り(たとえその信仰が「生命維持装置」に依存しているとしても)、彼らはクリスチャンなのです。

ここで私たちが区別しているのは、(どのような種類のクリスチャンであれ)真のクリスチャンと、実際にはクリスチャンではないにもかかわらず、イエス・キリストを信じる者として自らを偽っている人々です。私たちの主を純粹に信じ、従っている人はクリスチャンです。そうでない人たちは、たとえ自分たちがクリスチャンだと名乗り、「キリスト教」団体に属していたとしても、クリスチャンではありません。著者の推定では、この「目に見える教会」の規模は、真の戦う教会(すなわち、現在地上に生きている真の信者)の規模を大きく上回っており、この不利な比率は、艱

---

<sup>23</sup> 七つの教会の時代とその預言的意味については、「来たる艱難期」パート2A:「7つの教会」をご覧ください。

## II.大背教

難期に近づくにつれて増加し、艱難期が始まるとさらに上昇し、勢いを増すと思われます。自己満足と偽キリスト教という二つの危険は、艱難期が訪れたときに、真の教会を特に脆弱にすることに少なからず貢献するでしょう。特に、預言は、艱難期が始まる直前の例外的な平穏と繁栄の期間を示唆しています<sup>24</sup>。

兄弟たちよ。その時期と場合(すなわち、将来の預言のタイムラインとその具体的な出来事)とについては、書きおくる必要はない。あなたがた自身がよく知っているとおりに、主の日(すなわち、艱難期に始まる神の終末論的な裁きの時)は盗人が夜くるように来る。人々が平和だ無事だと言っているその矢先に(すなわち、艱難期の直前)、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る(ハルマゲドンに至る艱難期の裁きが始まるのです)。(第一テサロニケ 5章1-3節)

私たちの最後の時代であるラオデキヤの教会内の自己満足と、目に見える教会内の未信者の割合が増え続けるというこの二重の現象は、私たちの時代に霊的成長の深刻な妨げを生み出しており、その将来の時代には、すべてのクリスチャンにと

---

<sup>24</sup> ヨセフが見た、エジプトでの7年間の飢饉の前の7年間の繁栄の夢(艱難の預言:創世記 41:1-40)と比較し、「来たる艱難期」も参照してください: 第1部「はじめに」、IV.1.b.節「主の日」のパラダイムも参照。

## II.大背教

って霊的危険が増す原因となるでしょう。娯楽と社交が優先され、真理の探究と真理の教えが抑圧されている環境の今日におけるマイナス面を考えてみてください。このような状況にある「クリスチャン」教会では(現在、例外というよりもむしろ一般的ですが)、霊的な成長、キリストに近づき、キリストによりよく仕える方法を学ぶことは、ほとんど不可能なことです。艱難期の間、未信者の割合が増え、偽りの教えが広まるとき、真理に対する熱意が、現在でさえわずかなクリスチャン・グループにおいて、どのように消沈するか考えてみてください！実際、艱難期には、主要なクリスチャン・グループや組織の大多数が、真のクリスチャンではなくなるか、またはまもなくそうなると予想されます。というのも、ほとんどすべての識別可能な「キリスト教」教会と組織が、(今日の場合のように)単に未信者を取り込むことに満足し、偽りの教義に寛容であるというだけでなく、実際には、キリストに真に献身し、真理を正しく理解しようとするいかなる態度に対しても、積極的に敵対するという一つのマトリックスに溶け込んだとき、すべての真の信者やイエスの真の信者は、かつてないほど不適合者として目立つことになるからです。これは歴史上類を見ない信仰の試練となり、驚くべきことに、多くの人がこの試練に失敗し、大背教の仲間入りをするようになるでしょう。

a. 不信仰な偽キリスト教の硬さ(七つの災い)： 主の時代の組織的ユダヤ教は、上記のような状況に近いものがあります。律法学者やパリサイ人によって支配されていた当時の宗教団体は、艱難期に組織された「キリスト教」がそうであるように、神の

## II.大背教

真の恵みと力から切り離されていきました([マタイ 23 章 5 節](#)を参照)。イエスの時代の霊的に死んだ「見える教会」の特徴は、未来の「見える教会」が同様に真理から完全に離れると、真の信仰者が直面することを明確に示しています。

### 1) 偽キリスト教組織は、そのメンバーの救いを妨げる:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらぬし、はいうとする人をはいらせもしない。(マタイ23章13節)

イエス・キリストを信じるという唯一の救いの道を拒んだ者たちが、仲間の救いを妨げようとして「天国を閉ざす」のは、残念ではありますが理解できます。なぜなら、自分たちの中にいる他の人々の真の弟子としての生き方を認めることは、ある意味、自分たちの立場をすべて否定することになるからです。だから、今日でも、真の救いの道を歩まない者は、それを否定することに全力を尽くすのです(キリストのみへの信仰を否定し、行いによる救いを教えるいわゆる「キリスト教」団体を見れば明らかです)。このような人々にとって、イエス・キリストとその福音は恥ずべきものです([ルカ 12 章 9 節](#)を参照)。彼らの仲間内で本当の真実やキリストを信じることはトラブルの元であり、ややこしく、はっきり言えば、ただ「不快」なのです。偽りの父である者の子として、彼らは当然、真実に敵対するのです([ヨハネ 8 章 44 節](#))。

## II.大背教

2) 偽キリスト教組織は、神を求める人々の救いを妨げようと手を伸ばす:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つかったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。(マタイ23章15節)

彼らの偽りの教えを広めることは、一方で信奉者と力を得るための最善の方法であると同時に、真に神を求める人々の仲間をできる限り減らすことでもあります。神を探している人たちを取り込み、真の救いから遠ざけることで、彼らは潜在的な敵対者を避け、不幸な改宗者の熱意を自分たちの目的のために利用するのです。さらに、このような改宗者は、自分たちのねじ曲がったアプローチが正しいものであると自信を持ちます(この点は、今日のすべてのカルトに顕著です)。

3) 偽キリスト教組織は、真理を曖昧にする形式と儀式を加える:

盲目的案内者たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままよいが、神殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』と。愚かな盲目的人たちよ。黄金と、黄金を神聖にする神殿と、どちらが大事なのか。

## II.大背教

また、あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでもいいが、その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。盲目な人たちよ。供え物と供え物を神聖にする祭壇とどちらが大事なのか。祭壇をさして誓う者は、祭壇と、その上にあるすべての物とをさして誓うのである。神殿をさして誓う者は、神殿とその中に住んでおられるかたとをさして誓うのである。また、天をさして誓う者は、神の御座とその上にすわっておられるかたとをさして誓うのである。(マタイ 23 章 16-22 節)

これは、根底にある霊的な現実(すなわち、霊的な意味を与える神殿や祭壇の代わりに金やいけにえを信奉すること)よりも、地上の欲に訴える物質的なものに感銘を受けること以上のことです。ここに述べた正当な儀式の根底にある霊的真理を理解できないばかりか、偽キリスト教体制は、実際には真理に自分たちの誤った厳格さを加え、それによって真理を見えにくくしているのです。本物の神の言葉よりも偽りの戒律を作り出し、強調するこの傾向は、(福音派の世界でさえ、現代においてますます顕著になってきているように) 艱難期の世俗化された偽キリスト教の縦糸と横糸の全体を支配することになるでしょう。

4) 偽キリスト教組織は、主要な真理を曖昧にするために、小さな、部分的な従順を用いる:



## II.大背教

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。はっか、いのんど、クミンなどの薬味の十分の一を宮に納めておりながら、律法の中でもっと重要な、公平とあわれみと忠実とを見のがしている。それもしなければならぬが、これも見のがしてはならない。盲目的案内者たちよ。あなたがたは、ぶよはこしているが、らくだはのみこんでいる。(マタイ23章23-24節)

神のみことばの真理と同じように相容れないのは、上記のように、真理の些細な適用を文脈にそぐわない形で(そうでなければ正しいものであっても)過度に強調する一方で、それらに意味を与えている聖書の実際の教えを無視する傾向です。盗んだ食事を「恵み」と言うように、正当なキリスト教の実践でさえ、その真の霊性から切り離すことは、神への偽りの献身の無意味な実践をもたらすだけでなく、さらに悪いことに、そのようなすべての応用が本来基づいていた重要な根本的真理をあいまいにする効果もあります。第三の「災い」とともに、この習慣は、組織化された偽キリスト教からイエス・キリストとの真の関係を奪うことにつながります(現代においても、「人の教え」があたかも神の言葉であるかのように語られるところはどこでも、この傾向が強まっています): [イザヤ 29 章 13 節](#); [マタイ 15 章 9 節](#); [マルコ 7 章 7 節](#); [コロサイ 2 章 22 節後半](#))。

## II.大背教

5) 偽キリスト教体制は、聖なるもののように見えるが、聖なるものではない:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。杯と皿との外側はきよめるが、内側は貪欲と放縱とで満ちている。盲目的なパリサイ人よ。まず、杯の内側をきよめるがよい。そうすれば、外側も[本当に]清くなるであろう。(マタイ 23 章 25-26 節)

食器に「洗礼を授ける」という古くからの習慣は(他にもいろいろありますが)、聖書からのものではない他の伝統として定着していたものであり、その真の重要性を超えた力(上記の第四の「災い」の場合のように、真の霊的な意味から切り離された適用)を持つようになり、主によって以前から批判されていたものであったことは事実です([マタイ 15 章 1-11 節](#)参照)。しかし、比較を終えて初めて明らかになるように(つまり、より強く心に突き刺さるように)、「杯と皿」は律法学者とパリサイ人そのものを指しています。彼らは外面だけはきれいですが、内面では貪欲で放縱な本性が見える器なのです。このように、外見は「聖なる」者であり、容易に観察されるすべての行動という点では聖い外観を呈しておきながら、内面では罪と悪に傾倒していることも艱難期の組織化された偽キリスト教の特徴です。従って、その未来の日に見える教会の指導者たちや一般の人々が示す「表面的なもの」は、真の霊性の深さを問わないだけでなく、実際

## II.大背教

には、表面的に見えるものの裏返しであり、その下には悪が潜んでいるのです([第二テモテ 3 章 5 節](#)参照)。

6) 偽キリスト教体制は、霊的に生きているように見えるが、死んでいる:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。このようにあなたがたも、外側は人に正しく見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。(マタイ 23 章 27-28 節)

艱難期の偽キリスト教は、聖なるように見えながら、実際には不敬虔であることに加えて、霊的に生きているように見えますが、実際には神に対して完全に死んでいます。印象的な建物、魅力的な儀式、美しい音楽、衝撃的な説教などを持っているかもしれませんが、これらの魅力的な墓の中には霊的な死しかないので。

7) 偽キリスト教組織は、神のためにあるように見えるが、本当は神と神に属する者に敵対している:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがた

## II.大背教

は、わざわざである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかっただろう』と。このようにして、あなたがたは預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。(マタイ23章29-31節)

最後に、これらのことの入り口に立っている私たちにとって極めて重要なことですが、艱難期の偽キリスト教は、神の味方であるかのように見せかけながら、実際には神の敵であり、神の御子を本当に信じて従うすべての人々を熱心に滅ぼす者です。この最後の場合、<上記の聖句にある>私たちの主の対話者たち<偽善な律法学者、パリサイ人たち>は、自分たちを過去の権力と結びつけたいという熱望(すなわち、彼らは殺人者たちを「私たちの父祖」と呼ぶこと)によって、躓(つまづ)いています。しかし現状では、彼らは神の民を虐殺した咎を払い清めることよりも、過去の権力と威信を主張することに関心があります。イエスの時代の宗教的権威が自分たちの主権者である主を殺すに至ったのも、彼らの霊的後継者たちを大迫害の虐殺に心から加担させるに至らしめたのも、まさにこの真の聖さよりも<宗教的権威者層の>特権を選ぼうとする姿勢なのです。

それだから(すなわち、あなたがたの本性を明らかにするために)、わたしは、預言者、知者、律法学者た

## II.大背教

ちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう。こうして[今まで]義人アベルの血から、聖所と祭壇との間であなたがたが殺したバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上に流された義人の血の報いが、ことごとくあなたがたに及ぶであろう。よく言っておく。これらのことの報いは、みな今の時代(すなわち、この種の不信仰者)に及ぶであろう。(マタイ23章34-36節)

ですから、艱難期の初めに確立された「キリスト教」の大部分には、美しい教会、美しい音楽、美しい表面的な感情を備えた、よく組織され、十分な資金を持つシステムが見られるかもしれませんが、白く塗られた表面の下には、真理も、信仰も、イエス・キリストへの愛もなく、ただ死人の骨だけがあるのです。そして、その時、かつての兄弟姉妹たちから巻き起こる敵意は、単なる仲間はずれや中傷で始まるかもしれませんが、獣の大義と奉仕のために、最も厳しい種類の公然たる迫害で終わるでしょう<sup>25</sup>。上記の「七つのわざわい」の例は、私たちを立ち止まらせる

---

<sup>25</sup> 組織化された「キリスト教」が反キリスト崇拝に融合していくことについては、本シリーズの第4部、セクション VI.1「反キリスト教とその世界的拡大」を参照。

## II.大背教

べきものです。(現代にたくさんあるような)死んだ偽りのキリスト教組織は、現在の状況では何の脅威にもならないように見えるかもしれませんが。しかし、状況が変わるとすぐに(そして艱難期には大きく変わるでしょう)、そのような団体は、大背教のプロセスを促進するためにも、大迫害を推し進めるためにも、用意周到で進んで協力する共犯者となるでしょう。このような集団の性質の理由は、偶然の問題ではありません。このような霊的に死んだ組織は、それを構成する個人の心の硬化を反映しているのです。

### b. ぬるま湯に浸かった信者の弱さ(自己満足の問題):

未信者や名ばかりのキリスト教組織の問題に加えて、大背教に大きく寄与する第二の主要な要因は、艱難期が始まると、大多数の本物のクリスチャンの間に蔓延する「ぬるま湯」の問題です。艱難期が始まる前の教会の最後の時代であるラオデキヤの時代は、「ぬるま湯」、つまりイエス・キリストや神の言葉、そして神の御計画の中で私たちがそれぞれ召されている役割に対して、無頓着な態度であることがすでに分かっています<sup>26</sup>。この時代の信者の大半の特徴(艱難期が近づくにつれ、その傾向は強まるでしょう)は、信仰を築き、神の言葉を通して成長し、イ

---

<sup>26</sup> 「来たる艱難期」第2A部「七つの教会」第7節「ラオデキヤ: 無気力」参照。

## II.大背教

エス・キリストに近づき、神が私たちに定められた賜物、任務、効果に備え、実践することに無関心であることです ([第一コリント 12 章 4-7 節](#); [エペソ 2 章 10 節](#)参照)<sup>27</sup>。

私たちを買い取ってくださった主イエスに対するこのような無関心の原因については、もっと長く述べることができますでしょうが、ここではこのひどい態度の本質が、主に**イエスよりも世を愛すること**から生じていることを指摘するだけで十分です。イエスのおかげで私たちの罪は赦され、イエスを拒んだ者を待ち受ける火のような死から私たちは解放されました ([ローマ 5 章 9-10 節](#))。イエスのおかげで、私たちは現在の肉体をもって耐えているすべての苦しみ、痛み、試練を、取るに足らないものにする栄光の体で復活することを待ち望んでいます ([ヒリピ 3 章 20-21 節](#); [第二コリント 4 章 17-18 節](#))。イエスのゆえに、私たちは義の住まう新しい地と新しい天を待ち望んでおり、そこでは現世の腐敗や悪が二度と思い起こされることはありません ([イザヤ 65 章 17 節](#))。イエスのゆえに、私たちはこの世の者ではありません。私たちは一時的にこの世にいるかもしれませんが、イエスは私たちの内におられ、私たちはイエスによって、イエスのために生きるのです ([ヨハネ 17 章 16-23 節](#))。イエスによって、私たちはこの世に対して十字架につけられ、この世は私たちに対して十字架につけられたのです ([ガラテヤ 6 章 4 節](#))。イエス

---

<sup>27</sup> 霊的成長については、ペテロの手紙シリーズ、特に#10 から#14 を参照。

## II.大背教

は私たちのいのちであり、私たちにとって生きることは、イエスなのです。とても明瞭なことです。死は、私たちが永遠に愛する方と顔を合わせられるということです。(第二コリント5章8節; [ピリピ1章21節](#))

これらのことはすべて真実です。私たちはこれらのことを信じています。では、なぜ私たちはそれを実践しないのでしょうか？ラオデキヤの時代、物質主義が王である時代、この世が多くの気晴らしを提供し、それらを享受する機会が多くあり、私たちが生存のためにも娯楽のためにも依存しているこれらすべての「素晴らしいもの」が私たちから奪われてしまわないかという多くの恐れがある時代、私たちの心をこの世から遠ざけることは簡単なことではありません。ですから、日を追うごとに主から遠ざかっていくラオデキヤのこの世的な態度は、ある面では理解できます。しかし、だからといって、残念でないことではありません。このような圧力が存在し、クリスチャンにとって「普通」のことが、自分の信仰に口先だけの奉仕をすることでしかない時代においては、イエスへの真の献身は、より一層注意深く守られなければなりません。神と、御子の賜物という神の恵みに対する自己満足は、クリスチャンにとって卑しいことであるだけでなく、非常に危険なことでもあります。主は独りよがりの弟子を**喜ばれません**。主は情熱的な弟子を**喜ばれます**。ですから、イエス・キリストに対する熱情か、イエス・キリストとの関係に対する無関心かの選択に迫られたとき、良いクリスチャンがどうあるべきかは聖句から明らかです。それは、私たちの主人を心から熱烈に愛



## II.大背教

し、この地上の生涯を通して主人と主の模範に忠実に従い、イエスと私たちとの関係を地上のあらゆる宝物や心遣いよりも尊び、主の喜びを最優先とする人となることです：

### 1) 良きクリスチャンは、キリストのために熱心であるべき：

すべてわたしの愛している者を、わたしはしかつたり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。(黙示録 3 章 19 節)

キリストとの関係において、生ぬるくはない：

わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。  
(黙示録 3章15-16節)

### 2) 良きクリスチャンは、神をひたすら愛する者であるべき：

「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、『「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。(マタイ 22 章 36-37 節)

## II.大背教

### この世を愛する者ではない:

世と世にあるものごとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父[へ]の[真の]愛は彼のうちでない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、[神と共に]永遠にながらえる。(第一ヨハネ2章15-17節)

### 3) 良きクリスチャンは、イエス・キリストの友人であるべき:

あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。(ヨハネ15章14-15節)

### この世の友ではない:

不貞のやから(つまり、この世との交わりによって神に対して不誠実な人々)よ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのであ

## II.大背教

る。(ヤコブ4章4節)

4) 良きクリスチャンは、聖霊に燃えているべき:

熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、(ローマ12章11節)

御霊が私たちの熱意を燃え立たせてくださるのに逆らうべきではない:

御霊を消してはいけない。(第一テサロニケ5章19節)

5) 良きクリスチャンは、キリストのためにあらゆる機会を最大限に生かすべき:

今の[すべての]時を[最大限に]生かして用い、(教会の)そとの人に対して賢く行動しなさい。(コロサイ4章5節)([エペソ5章16節](#)参照)。

この世と関わりすぎない:

世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。(第一コリント7章31節)

## II.大背教

### 6) 良きクリスチャンは神様に対して一心であるべき:

わたしは彼らに一つの心と一つの道を与えて常にわたしを恐れさせる。これは彼らが彼ら自身とその後の子孫の幸を得るためである。(エレミヤ 32 章 39 節) ([エゼキエル 11 章 19 節](#); [第一コリント 7 章 35 節](#) 参照)

神に対して二心でない(神とこの世との間で心が揺れ動かない):

あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。ただ、疑わないで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない。(ヤコブ 1 章 5-8 節) ([詩篇 12 篇 2 節](#), [119 篇 113 節](#); [ヤコブ 4 章 7 節](#))

### 7) 良きクリスチャンは、キリストとその教会のために情熱的であるべき:

## II.大背教

そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、一つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(ピリピ2章1-5節)

神と神の民に対して無関心でない:

「わざわざなるかな、安らかにシオンにいる者、また安心してサマリヤの山にいる者、諸国民のかしらのうちの著名な人々で、イスラエルの家がきて従う者よ。カルネに渡って見よ。そこから大ハマテに行き、またペリシテびとのガテに下って見よ。彼らはこれらの国にまさっているか。彼らの土地はあなたがたの土地よりも大きいか。あなたがたは災の日を遠ざけ、強暴の座を近づけている。わざわざなるかな、みずから象牙の寝台に伏し、長いすの上に身を伸ばし、群れのうちから小羊を取り、牛舎のうちから子牛を取って食べ、琴の音に合わせて歌い騒ぎ、ダビデのように楽器を造り出し、鉢をもって酒を飲

## II.大背教

み、いとも尊い油を身にぬり、ヨセフの破滅を悲しまない者たちよ。それゆえ今、彼らは捕われて、捕われ人のまっ先に立って行く。そしてかの身を伸ばした者どもの騒ぎはやむであろう」。(アモス6章1-7節)  
([申命記31章20節](#), [32章15節](#); [イザヤ32章9-14節](#); [ホセア13章6節](#); [ゼパニヤ1章12-13節](#)参照)。

8) 良きクリスチャンは、「二心ではない思い」で神様に従うはず:

主よ、あなたの道をわたしに教えてください。わたしはあなたの真理に歩みます。心をひとつにしてみ名を恐れさせてください。(詩篇86篇11節)

神とこの世の間で揺れ動かない:

エリヤは皆の前に進み出て言った。「おまえたちは、いつまで、どっちつかず[の意見の上に]に(すなわち、「バアル踊り」をして;[26節](#)参照)よろめいているのか。もし【主】が[まことの]神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え。」(新改訳IV列王記上18章21節前半)

9) 良きクリスチャンは、主が私たちのためにしてくださったことを、いつも覚えている人でなければならない:

## Ⅱ.大背教

わたしは、主から[直接]受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。(第一コリント11章23-25節)

栄える時に主を忘れるような者となっ**てはいけない**：

あなたは食べて飽き、あなたの神、主がその良い地を賜わったことを感謝するであろう。あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう。主はあなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出し、あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、あなたのために堅い岩から水を出し、先祖たちも知らなかったマナを[この]荒野であなたに食べさ

## II.大背教

せられた。それはあなたを苦しめ、あなたを試みて、ついにはあなたをさいわいにするためであった。あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない。[むしろ]あなたはあなたの神、主を覚えなければならない。主はあなたの先祖たちに誓われた契約を今日のように行うために、あなたに富を得る力を与えられるからである。(申命記8章10-18節) ([ホセア13章6節](#)参照)

### 10) 良きクリスチャンは神の言葉を喜ぶべき:

悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。(詩篇1篇1-2節)

神の言葉を学ぶことだけで満足している人ではない:

この[キリストの祭司であること]ことについては、言いたいことがたくさんあるが、あなたがたの耳が鈍くなっているので、それ[そのような高度なこと]を説き明かすことはむずかしい。あなたがたは、久しい以前からすでに[そのようなことを教える]教師となっているはずなのに、もう一度神の言の初歩を、人から手



## II.大背教

ほどきしてもらわねばならない始末である。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要としている[乳幼児となっている]。(ヘブル5章11-12節)

### 11) 良きクリスチャンは、神を心から崇拝する者であるべき:

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまこととをもって(すなわち:霊をもって:神の霊に応じる私たちの霊をもって;まことをもって:神の真理に応じる私たちの心をもって)父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」。(ヨハネ4章23-24節)

### 口先だけの奉仕をする者ではない:

主は言われた、「この民は口[だけ]をもってわたしに近づき、くちびる[だけ]をもってわたしを敬うけれども、その心はわたしから遠く離れ、彼らのわたしをかしこみ恐れるのは、そらで覚えた人の[伝統による]戒めによるのである。それゆえ、見よ、わたしはこの民に、再び驚くべきわざを行う、それは不思議な驚くべきわざである。彼らのうちの賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は[彼らから]隠される」。(イザヤ

## II.大背教

29 章 13-14 節)

12) 良きクリスチャンとは、イエス・キリストを心から愛している人であるべき:

変らない真実をもって、わたしたちの主イエス・キリストを愛するすべての人々に、恵みがあるように。  
(エペソ 6 章 24 節)

偽善者(=文字通りには「役者」の意、見せかけだけ神を愛するふりをする者)であってはならない:

だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラツパを吹きならすな。よく言うておくが、[こうすることによって]彼らはその報いを受けてしまっている。(マタイ6章2節)

13) 良きクリスチャンは、唯一の真の神にのみ献身すべき:

あなたはわたしのほかに、なにものをも神として  
はならない。(出エジプト 20 章 3 節)

神と他のものとの間を行き来する偶像崇拜者であってはならない:

## II.大背教

「わたしはユダとエルサレムのすべての住民との上に手を伸べる。わたしはこの所からバアルの残党と、偶像の祭司の名とを断つ。また屋上で天の万象を拝む者、主に誓いを立てて拝みながら、またミルコム(すなわち「モレク」)をさして誓う者、主にそむいて従わない者、主を求めず、主を尋ねない者を断つ」。(ゼパニヤ1章4-5節)

### 14) 良きクリスチャンは、神を最も高く評価する人であるべき:

それゆえイスラエルの神、主は仰せられる、『わたしはかつて、「あなたの家とあなたの父の家とは、永久にわたしの前に歩むであろう」と言った』。しかし今、主は仰せられる、『決してそうはしない。わたしを尊ぶ者を、わたしは尊び、わたしを卑しめる者は、軽んぜられるであろう。(サムエル記上 2 章 30 節)

神を認めようとしぬる者ではない:

「子はその父を敬い、しもべはその主人を敬う。それでわたしがもし父であるならば、あなたがたのわたしを敬う事実が、どこにあるか。わたしがもし主人であるならば、わたしを恐れる事実が、どこにあるか。わたしの名を侮る祭司たちよ、と万軍の主はあなたがたに言われる。(マラキ 1 章 6 節前半)

## II.大背教

15) 良きクリスチャンは、常に上におられるキリストに心の目をとめているべき:

このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。(コロサイ3章1-2節)

地上のものにとらわれてはならない:

わたしがそう言うのは、キリストの十字架に敵対して歩いている者が多いからである。わたしは、彼らのことをしばしばあなたがたに話したが、今また涙を流して語る。彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである。しかし、わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。(ピリピ 3 章 18-20 節)

16) 良きクリスチャンは、常にイエスを喜ばせるために努力する人であるべき:

## II.大背教

そういうわけだから、肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、(わたしたちクリスチャンの)心からの願いである。(第二コリント 5 章 9 節)

自分ばかりを喜ばせようとする者ではない:

わたしたち強い(能力のある)者は、強くない(能力のない)者たちの弱さをになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない。わたしたちひとりびとりは、隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである。キリストさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかった。むしろ「あなたをそしる者のそしりが、わたしに降りかかった」と書いてあるとおりであった(つまり、ご自分のことを気にされるのではなく、神を証するために世の非難を受け入れられました)。(ローマ 15 章 1-3 節)

このいくつかの箇所を通して(そして実際、聖書全体を通して)、神への情熱があからさまであろうと暗黙的であらうと大いに称賛される一方で、私たちの主に対する独りよがり(必然的で付随するこの世への愛とともに)特に厳しく非難されます。独りよがり、教会全体にとっても、特に個々のクリスチャンにとっても深刻な問題です。なぜなら、私たちが本当にイエス・キリストを何よりも愛しているか、あるいは、イエス・キリストよりも世を

## II.大背教

愛しているかのどちらかだからです。そして、もし私たちが主よりも世を愛しているならば、少なくとも私たちの信仰を非常にもろく脆弱なものにしてしまい、艱難期は言うに及ばず、深刻な試練や苦難に耐えられなくなってしまう危険性があります。(マタイ13章20-21節; マルコ4章16-17節; ルカ8章13節)。

ここで述べられている神への情熱は、主に感情的な問題ではないということを指摘しておきます。確かに、神に対する真の情熱には感情が伴い、本当にイエス・キリストを心と魂と思いと力を尽くして愛している人にとっては、確かにとてつもない肯定的な感情を経験することができます。しかし、この純粋な感情は、決意、献身、信仰、忠実さに**続く**ものです。このような本物の感動と情熱は、真の弟子としてイエス・キリストに断固として一貫して従うことの**結果**であって、世よりも神を愛するための**手段ではありません**。人は、感情を表に出すことによって、世よりも神を愛するようになるわけではありません。週に1時間や2時間、泣いたり、嘆いたり、熱唱したり、祈ったりすることを、神の御言葉を読み、学び、教えられ、それを大切に、熟考し、クリスチャンとしての歩みとミニストリーの生活の中で熱心に実践することに置き換えることはできません。聖書を通して主を知り、個人的な心のこもった祈りの中で主と交わり、主が私たちに生きさせたいと願っておられる生活を送ることによって主に従い、主が割り当てられた賜物と務めに従って、主のからだである私たちの仲間のクリスチャンに奉仕することによって主を敬うのです(ヨハネ21章15-17節)。真の熱心とは、見せかけの熱心ではなく

## II.大背教

([ローマ 10 章 2 節](#)参照)、人間の内側に働く真理の力([エペソ 3 章 16-19 節](#))にあり、信仰と希望と愛の行いに表れます([第一テサロニケ 1 章 3 節](#))。なぜなら、私たちの神は、これらの感情が本当に本物で、深く根ざしているのか、それとも単なる一過性のパフォーマンスに過ぎないのかを世に、天の軍勢に、そして私たちにも示すために、それが正真正銘のものであるかを試される方だからです([詩篇 7 篇 9 節](#); [エレミヤ 11 章 20 節](#); [17 章 10 節](#), [20 章 12 節](#); [ローマ 8 章 27 節](#); [第一テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 2 章 23 節](#))。イエスのたとえ話に出てくる兄のように、父の呼びかけに感動と熱意をもって応えながらも、父のみこころにかなった大変な仕事に手をつけないようでは意味がありません([マタイ 21 章 28-31 節](#))。この地上の人生であるシオンへの巡礼を毅然として進んでいるイエス・キリストの真の弟子たちにとって、本物の感動は、日々神により近づいていくことから自然に湧き出てくるものです([創世記 47 章 9 節](#); [詩篇 23 篇](#), [39 篇 12 節](#), [84 篇 5-7 節](#); [マタイ 7 章 14 節](#); [ヨハネ 14 章 6 節](#); [使徒行伝 19 章 9 節](#), [19 章 23 節](#); [ヘブル 11 章 13-16 節](#); [第一ペテロ 1 章 1 節](#))。

ユダの野にあったときによんだダビデの歌

神よ、あなたはわたしの神、わたしは切にあなたをたずね求め、わが魂はあなたをかわき望む。水なき、かわき衰えた地にあるように、わが肉体はあなたを慕いこがれる。それでわたしはあなたの力と栄えとを見ようと、聖所であって目をあなたに注いだ。

## II.大背教

あなたのいつくしみは、いのちにもまさるゆえ、わがくちびるはあなたをほめたたえる。わたしは生きながらえる間、あなたをほめ、手をあげて、み名を呼びまつる。わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髓とあぶらとをもってもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもってあなたをほめたたえる。あなたはわたしの助けとなられたゆえ、わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う。わたしの魂はあなたにすがりつき、あなたの右の手はわたしをささえられる。(詩篇 63 篇 1-8 節)

この言葉は、人生の重圧にもかかわらず、全身全霊で神を真に愛した人の言葉であり、また、同じことを純粹に志す私たちのための言葉でもあります。イエス・キリストに心から従い、この世が干乾び渴いた土地であることを知る私たちは、私たちの目が見ているこの過ぎ去る墮落ではなく、来たるべきいのちに望みを置いています。私達はユダの砂漠でダビデと共に、モーセ、カレブ、ヨシュアと共にシナイの荒野で、アブラハム、イサク、ヨセフと共にこの地を旅しながら、主を忍耐をもって待ち、忠実に仕えているのです。(第一コリント 1 章 7 節; [ピリピ 3 章 20 節](#); [第一テサロニケ 1 章 10 節](#); [第二テモテ 4 章 8 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [ヘブル 9 章 28 節](#); [ヤコブ 5 章 7-11 節](#); [ローマ 8 章 23-25 節](#); [ガラテヤ 5 章 5 節](#); [第一テモテ 6 章 14 節](#)参照)、主の栄光の再臨と栄光の勝利を待ち望みつつ、主を命以上に



## II.大背教

愛し([第二コリント 5 章 8 節](#); [ピリピ 1 章 21 節](#); [ヘブル 11 章 24-27 節](#)と[第一ペテロ 1 章 8 節](#)も参照)、この世に夢中にならないようにすることです([ヤコブ 1 章 27 節](#); [第二テモテ 2 章 2-4 節](#))。しかし、世に過度にとらわれ、感情を時折刺激されるだけの人のためには、イエスへの献身に対する妥協と独りよがり、愛と信仰を非常に気まぐれなものにしてしまうことは避けられません。クリスチャン生活の目標をすでに達成したと思っている人は、自分自身を欺いているにすぎず([第一コリント 4 章 8 節](#); [ピリピ 3 章 12-14 節](#)も参照)、愛と忠誠を表明しても、たいていは雲や霧のようなものにすぎないのです。

エフライムよ、わたしはあなたに何をしようか。ユダよ、わたしはあなたに何をしようか。あなたがたの愛はあしたの雲のごとく、また、たちまち消える露のようなものである。それゆえ、わたしは預言者たちによって彼らを切り倒し、わが口の言葉をもって彼らを殺した。わがさばきは現れ出る光のようだ。わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ。(ホセア6章4-6節)

選択はこれです:私たちは、この世のすべてのものより、私たちの主であるイエスを愛し、尊び、重んじるのか([詩篇 16 篇 2 節](#)参照)、それとも、この世を優先し、その思い煩いや心配事、喜びをすべて優先するのか。私たちが真理を認め、知れば知るほど、この世は愛おしくなくなります([ヤコブ 4 章 4 節](#); [第一ヨ](#)

## II.大背教

[ハネ2章15-17節](#); [マタイ10章37-39節](#), [16章24-26節](#); [ルカ14章25-33節](#)参照)。しかし、霊的な成長、歩み、ミニストリー、そしてそこから生まれる主との関係を深め続けることを怠れば怠るほど、私たちは自己満足に陥り、生ぬるくなります。実のところ、私たちを買い取ってくださり、永遠に共にいてくださり、どんなものよりも愛していると言ってくださっている主にではなく、このはかない世界に慰めや自己定義、安心を求めるのは愚かなことです。逆に、クリスチャンの自己満足は、私たちが関心を持つべき唯一のもの(すなわち、イエス・キリストとの関係)を当然視し、その代わりに、信仰によって気にならなくてよいこの世のものを心配します:

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。  
(ローマ8章28節)

それだから、あなたがたに言うておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるのではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養って下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐ

## Ⅱ.大背教

れた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。(マタイ6章25-34節)

情熱と自己満足のどちらを選ぶかは、この短い巡礼の旅路の中で、日々、選択をしている(あるいは、選択し損なっている)私たちの優先順位の問題に帰結します。主が私たちに呼びか

## II. 大背教

けておられるように、クリスチャン生活を前進させることなく、安穩としている人々には、靈的な危険があります。私たちは、多くのユダヤ人が艱難の始まりの日に神のもとに戻ることを見てきました。ラオデキヤ時代の私たちは、将来そのような圧力が始まる前に、彼らの勇気と熱意を見習うのが最善でしょう。主は私たちの戸口において、戸を叩いておられるのですから。今こそ立ち上がり、主を迎え入れる時なのです。

### 3. 大背教の原因

ラオデキヤ時代の後期の事態は、靈的な観点から見て悪いかもかもしれませんが、艱難期が始まると同時に、事態は一段と悪化することになります。かつてないほど多くの同胞が、イエス・キリストから離れていくことは事前に理解することはできても、実際に経験することになれば、感情的に完全に準備できるものではありません。このような予言が実際に成就したときには、どんなに詳しく知っていても大変なショックを受けることでしょう。しかし、だからこそ、弟子としてのコストを計算し、何があっても主イエス・キリストに忠実であろうと決意している私たちは、これらの出来事が起こる前に、聖書に関するあらゆる洞察を得て、あらゆる靈的準備をすることが絶対的に重要なのです。したがって、この比類なき集団的背教をもたらす要因については、十分な時間を費やすことが必要です。

## II.大背教

### a. 「不法の秘密」が解かれる:

異教徒の用法では、ギリシャ語のミステリオン(奥義) ( $\mu\upsilon\sigma\tau\eta\rho\iota\omicron\nu$ )は一般的にカルトや秘密結社の入門者にのみ知られている秘密の情報を意味します<sup>28</sup>。新約聖書でこの言葉が使われているほとんどの場合、「奥義」とは神の真理の啓示のことを言います(ローマ 11 章 25 節; [第一コリント 15 章 51 節](#); [黙示録 1 章 20 節](#))、つまり、過小評価されてはならない力と影響力を持つ神の言葉の一部です(例えば、[マタイ 13 章 11 節](#); [マルコ 4 章 11 節](#); [ルカ 8 章 10 節](#); [第一コリント 4 章 1 節](#); [エペソ 1 章 9 節](#), [6 章 19 節](#); [コロサイ 1 章 24-27 節](#); [第一テモテ 3 章 9 節](#))。例えば福音の場合、肉体のイエス・キリストが現されるまで完全に「啓示」されなかった「奥義」ですが([ローマ 16 章 25-26 節](#))、それが信じるすべての人類を救う神の「力」と言われています([ローマ 1 章 16 節](#))。従って、最終的に神の奥義はイエス・キリスト、主の受肉、主の二度の来臨、異邦人を含む全人類のための彼の死による救い、そして主と一つになることです([コロサイ 2 章 2 節](#))。主は歴史のための神の御計画の焦点であり、すべてのもの、すべての真理は、このように真理である主、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが中心のかなめとなっているのです。イエス・キリストの奥義は、イエス・キリストの生涯、死、復活、そして聖書の完成を通して、世

---

<sup>28</sup> 『悪魔の反逆』第 5 部「裁き、回復、置き換え」、II.8.b.ii「教会」、また iii「キリストの奥義」参照。

## II.大背教

に明らかにされましたが、その最後の書がイエス・キリストの「黙示」(現在の私たちの中心課題:[黙示録 1 章 1 節](#))です。

しかし、[第二テサロニケ 2 章 7 節](#)で使われている「不法の秘密<これも上記の聖句にある「ミステリオン＝奥義」という同じギリシヤ語が用いられています>」という言葉の「秘密」は、イエス・キリストの神聖な真理の中にある見えない力を指すのではなく、悪魔の嘘の影響(「不法」とは、その嘘を受け入れた結果生じるもの)を指しているのです。結局のところ、嘘はサタンの常套手段ですが([ヨハネ 8 章 44 節](#))、彼の教義の本質的な不真実さは、不信仰な世にはほとんどベールに包まれています([第二コリント 4 章 4 節](#)、[イザヤ 6 章 10 節](#)参照)。イエス・キリストにおいてのみ、このベールが取り除かれ、神の真理が溢れ出し、悪魔の偽りの正体が暴かれるのです([第二コリント 3 章 13-18 節](#))。

このように、「不法の秘密」という言葉は、サタンが自分の「この世の王国」([黙示録 11 章 15 節](#))を推進させながら、神の計画を阻止し、嘘で神の真理を蝕もうとする目に見えない努力の総体を要約しています<sup>29</sup>。サタンは、神の真理を自分の嘘に置き換えることによって、人類の歴史を通して、あらゆるレベル、あらゆる場所で、人間社会を守る神の抑制の目に見える形に実質

---

<sup>29</sup>「来たる艱難期」パート 2B:「艱難期への天の前奏曲」III.2「不法の秘密」。

## II.大背教

的な侵入をし続け、目に見えない形で法と秩序を攻撃し、ナショナリズムを弱め、偽りの宗教を推進し、あらゆる手段を使って人間の良心を鈍感にさせ、世界中で罪深く邪悪な行動を助長しようとしてきました。このことは、パウロがこの目に見えない強力な影響力を「すでに働いている」と表現することができる理由を説明しています。なぜなら、それ<不法の秘密>は本質的に、現在と将来において、悪魔の対抗戦略の別名であり、サタンの偽メシアである反キリストの支配においてその頂点に達するからです<sup>30</sup>。

そして、あなたがたが知っているとおりに、彼が自分に定められた時になってから[だけ]現れるように、いま彼[反キリストの到来]を阻止しているものがある。**不法の秘密の力が、すでに働いているのである。**ただそれは、いま[物事を抑制する]阻止している者が取り除かれる時までのことである。その時になると、**不法の者が現れる…**(第二テサロニケ 2 章 6-8 節前半)([ヨハネ 8 章 36 節](#)も参照)

今は聖霊の抑制の働きによって抑えられているこの目に見えない同じ勢力や力が、終わりの時代に解き放たれる運命にあります。この力を使徒ヨハネは「反キリストの霊」と表現しています。

---

<sup>30</sup> 『サタンの反乱』シリーズ、特に第 4 部「サタンの世界システム」と第 5 部「審判、回復、取り替え」を参照。

## II.大背教

イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、**反キリストの霊**である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている。(第一ヨハネ 4章3節)

この箇所で「霊」は、「不法の秘密」の「秘密」とまったく同じように、目に見えない影響を指しています。「不法」と「反キリスト」もまた、両節で述べられている悪魔の影響の結果として本質的に同じです。なぜなら、反キリストは「不法の者」であり、不法の原理を体現しているからです([第二テサロニケ 2章3節](#);キリストを否む者は誰でも「反キリスト」であるという[第二ヨハネ 1章7節](#); また[第一ヨハネ 2章18節](#)を参照)。さらに、この二つの箇所では、不法な行動や神の真理の拒絶につながる悪魔の影響がすでに働いていることがわかります。どちらにも艱難期が始まると危険性が大きくなることが示唆されています。御霊の抑制の働きが取り除かれ、艱難期が始まると、不法が解き放たれ、反キリストが登場します。これらの二つの出来事は実は同じこと、世界へのかつてなかったほどの悪魔的な影響の解き放ちの必然的結果なのです。この二つの節がアンチキリストと悪魔的影響の間の密接な関係を指摘するのは、地上における悪魔的影響の究極的な実行は、悪魔が艱難期に反キリストを自分の擬似メシヤとして世界を支配するように仕向けるときであり、現在の抑制は無く、今は目に見えない悪魔の影響が目に見える形で直接的に、個人的な形で現れる結果になるからです。



## II.大背教

第一ヨハネの手紙 4 章の同じ文脈では、この目に見えない極悪非道な圧力の第三の同義語、すなわち「迷いの霊」とあります。「迷い」とは、個人、組織、国家がこの悪魔の「霊」、「秘密」、あるいは影響力を受けやすくなると、神の真理から離れてき迷うことを指しています。

しかし、わたしたちは神から出たものである。神を知っている者は、わたしたちの言うことを聞き、神から出ない者は、わたしたちの言うことを聞かない。これによって、わたしたちは、真理の霊と**迷いの霊**〈新共同訳: 惑わす霊; 新改訳: 偽りの霊; NKJV: 誤りの霊〉との区別を知るのである。(第一ヨハネ4章6節)

これは、悪魔の嘘に反応し反キリストに従うすべての人々の場合、艱難期に神によって力を与えられる「惑わし」です。この予測は、まさに同じ文脈で、私たちがここで議論している「不法の秘密」に直接関連しています([第二テサロニケ 2 章 11 節](#)、下記参照)。

上記の三つの箇所にはいくつかの重要な類似点があります(すなわち、[第二テサロニケ 2 章 6-8 節](#); [第一ヨハネ 4 章 3 節](#), [4 章 6 節](#)): 1) 三つとも現在世界で働いている悪魔の影響力を描写して、2) 三つともその文脈と言い回しから、この影響力が

## II.大背教

神の真理に直接反対することを暗示していて、3) 三つともこの影響力の結果を神の真理からの離反という形で描写し、4) 三つともその文脈で暗黙または明示的に、現在は抑制されているが、この影響力がサタンの反キリストを通して世界を直接支配する形で艱難期に解放されると予告しています。

このように、これら三つの聖句はすべて、人間を墮落させる悪魔の成功が、主として、人間を誤りへと誘惑し、真理から遠ざけるために嘘を巧みに利用することによって達成されていることを明らかにしているのものであって<sup>31</sup>、神ご自身に関する真理(すなわち、神の本性、イエス・キリストによる真の救いの道)だけでなく、人間の良心、自然法、人間法、ナショナリズムに表される神の法則に関する真理からも遠ざけるものです<sup>32</sup>。「不法の秘密」の上昇傾向は、個人の道徳と社会的基準の退化、経済のグローバリズム、政治の国際主義、統一世界の宗教エキュメニカル主義が増加していることに見ることができます。この半世紀の人類の文明の歩みを観察してきたクリスチャンの中には、このような傾向があることや、終末に近づくにつれて、それが加速して

---

<sup>31</sup> 『サタンの反乱』第4部「サタンの世界システム」第4節「サタンの世界システム」：戦略的手法[3つの戦略的嘘]V.2「悪魔の影響力」を参照。

<sup>32</sup> 『サタンの反乱』第4部「サタンの世界システム」、第II.6節「サタンの影響を抑制するものとしての良心」第II.7節「サタンの影響を抑制するものとしての法とナショナリズム」参照。

## II.大背教

いることへの疑問を持つ人はほとんどいないはずで。

しかし、「不法の秘密」はすでに働いており、ますます大きな成果を収めています。しかし、艱難期が始まり、御霊の抑制が弱まるのを許されるまでは、反キリストの世界征服(偽メシヤの人物におけるサタンの計画の頂点)を導入するのに必要な熱狂をもたらすことはできません<sup>33</sup>。まさにこの聖霊の働きこそが、悪魔が反キリストを通して世界征服という艱難期の攻勢を開始するのを阻止し、同時に人類が現在よりもさらに不法状態に陥るのを阻止しているのです。聖霊の抑制の働きは、悪魔が現在(そして艱難期に)行おうとしているすべてのことを阻止するだけでなく、人類が現在(そして艱難期に)行おうとしている程に悪魔の嘘や影響力に応じることも阻止しているからです。

御霊の抑制の働きが一時的に取り除かれたとしても、これまで見てきたように、神はご自分の民を支えがないうちにされることはありません。144,000人は特別な御霊の証印を受け、その御霊の証印を受けたすべての信者に対する神の備えと保護が、途切れることなく続くと、私たちは確信しています([第二コリント 1章 21-22節](#); [エペソ 1章 13-14節](#), [4章 30節](#); [エゼキエル 9章 1-11節](#); [ヨハネ 6章 27節](#), [14章 16-17節](#); [第一ペテロ 1章 1-2節](#)を参照)。しかし、だからといって、信者を含む地上のす

---

<sup>33</sup> 「来たる艱難期」第2部B:「艱難期への天の前奏曲」III「聖霊の抑制の働き」参照。

## II.大背教

すべての住民にとって、生活が根本的に圧迫されるようになる事実は変わりません。(以前はかなり抑制されていた) 艱難期の極悪非道な活動が、人間の罪深さ(現在は聖霊の抑制下にある)と相まって、人類にとって前例のない方法で解き放たれ、「不法の秘密」が完全に明らかになるのです。この「不法の秘密」は、聖書が言うようにすでに働いており、現代に見られるような世界的な悪の傾向が加速していく主な原因となっています。しかし、艱難期には現在与えられている抑制がないため、その影響は桁違いに激しくなり、現在では想像もできないような大きな圧力を信者に与え、(私たちの研究課題である)大背教を大きく促すこととなります。

このようなことを考えるのは難しいかもしれませんが(そして、それに耐えるのはもっと難しいでしょう)、私たちの主の再臨に先立つ産みの苦しみである艱難期の神の目的の大部分は、サタンの支配下での抑制無しでの人類の状況の例を、イエス・キリストの千年間の完全な支配下での人類の状況と真っ向から対比させるためであることを覚えておく必要があります([マルコ 13章 8節](#); [マタイ 24章 8節](#))。エデンの園と(神が支配し、人類が従う)千年王国のエデンの間にある<sup>34</sup>、悪魔の支配に従う人類の惨状を、その間の世界の歴史を通してはっきりと見る事ができるのです。そして、サタンの支配の悪が、サタンが最も支配し、

---

<sup>34</sup>『サタンの反乱』第1部「サタンの反乱と墮落」第II.6「七つのエデン」参照。

## II.大背教

神の抑制が最も弱い時である艱難期ほど明白で恐ろしい時はありません(その後続く千年王国との対比がより鮮明となります)<sup>35</sup>。

また、艱難期を個人的に体験するのが非常に困難で、「腹には苦く」なる主な理由の一つは、そこで人類に及ぼされる異常な圧力がどっちつかずの中立の場を残さず、地上に住むすべての人を神か悪魔のどちらかに妥協を許さない忠誠を強いるからであることを、このシリーズの最初から指摘してきました。この集中的で比類のない二極化の道具となるのは、「不法の秘密」の重要な副次的現象、すなわち、神がその時に不信仰な世界に送る「惑わす力」です。この将来の「惑わす力」は、[第一ヨハネ4章6節](#)にある現在機能している(今見てきたように、「不法の秘密」の同義語である)「迷いの霊」を一步超えたものです。(聖霊の抑制の働きの停止によって)不法に対する抑制が取り除かれると同時に、この「惑わす力」は、人間の自己欺瞞を助長する独特のものであり、世界中の未信者を、悪魔の地上の手先である反キリストに仕えさせて、かつてないほど悪魔に積極的に忠誠を誓うように駆り立て、(キリストを通しての)神への信仰から離れ、(道徳、法律、ナショナリズムといった)神の制度から離れた人間の真の不法の本性が、まざまざと明らかになるの

---

<sup>35</sup> 「来たる艱難期」第1部「はじめに」第1節「艱難期の定義と概要」第2節「文脈における艱難期」「サタンの反逆と神の計画」参照。

## II.大背教

です。<sup>36</sup>

その時になると、不法の者(すなわち、反キリスト)が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、[栄光ある]来臨の輝きによって滅ぼすであろう。不法の者が来[て出現す]るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して[計画されたことを]行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。そこで神は、彼らが偽りを信じるように、**迷わす力を送り**(すなわち、それを促進し)、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人を、さばくのである。(第二テサロニケ2章8-12節)

この箇所は、反キリストがサタンの「力」によって歴史の表舞台に登場し、あらゆる欺瞞的な活動と関連付けられるのと同様に、その時代の不信仰な世界が、これらの欺瞞を信じ、反キリストに熱中するのを早める特別な「力」を受けることを示しています。このようなサタンによる反キリストの力と、彼の欺瞞に力を与える偽りのしるしと奇跡は、これまで見てきたように、御霊の

---

<sup>36</sup>『サタンの反乱』第4部「サタンの世界システム」のII.7節「サタンの影響を抑制するものとしての法とナショナリズム」を参照。

## II.大背教

抑制の働きが取り除かれることによってのみ可能となります。しかし、世界に完全な二極化をもたらすために、誰が神のために、誰が悪魔のためにいるかを疑う余地もなく明らかにするために、神ご自身も、不信者(神と神の真理をすでに拒絶しているすべての人々)に特別な「惑わす力」を送り、その結果、彼らは反キリストと彼が象徴するすべての悪魔的な嘘を受け入れるようになります(したがって、現在の広大な中間地帯にいる、イエス・キリストのためには何もしない、信仰を持たない善良な市民を中立的な立場から排除することになります。現在のところ、道徳的で法律を守っており、ほとんどの場合、悪魔の大義を支持することに過度に積極的ではありません)。

ここで「惑わす」と訳されているギリシャ語プラニ *pláne* ( $\pi \lambda \acute{\alpha} \nu \eta$ )は、[第一ヨハネ 4 章 6 節](#)にある「迷いの霊」というフレーズで使われているものと同じです(文字通りには「さ迷い」です; 天空を「さ迷う」「惑星」と比較)この文脈では、「惑わし」が悪魔の嘘の総体を表していることが分かりましたが、ここでも同じことが言えます。しかし、将来の出来事について述べているこの箇所と、現在の悪魔の影響について述べている他の箇所との違いを明らかにするために、これらの箇所からわかりやすい聖句を引用しておきます:

- ・「不法の秘密」([第二テサロニケ 2 章 7 節](#)) = 不法に導く現在の悪魔の影響(あらゆる形の神の真理に対する積極的な拒絶)。

## II.大背教

- ・「迷いの霊」([第一ヨハネ4章6節](#)) = 現在の悪魔の影響は、あらゆる形態の神の真理から「さ迷わせ」ます。
- ・「反キリストの霊」([第一ヨハネ4章3節](#)) = あらゆる方法で神の真理を拒否する反キリスト的な行動につながる現在のサタンの影響力です。
- ・「サタンが[反キリストに]力を与えること」([第二テサロニケ2章9節](#)) = 獣が将来サタンに力を与えられること。
- ・「惑わす力が送られる」([第二テサロニケ2章11節](#)) = 将来、艱難期において、不信者が上記三つの聖句にある悪魔の影響を受けやすくなるように、神が促進すること。

「惑わす力が送られる」は、被造物の自由意志を神が助長するものであるという重大な事実が、大きく広く誤解されてきました(それは主要な訳版のほとんどで誤訳されていることに表れています: 「強い妄想 strong delusion」KJV、「強力な妄想」NIV、「欺瞞的影響」NASB)。従来の「妄想」という概念に焦点を当てた翻訳では、1)これは不信仰者の(選択権を覆すものというより、むしろ)自由意志を促進するものである、2)これは悪魔を信じ、仕える力を与えるものであり、サタンからではなく神から来るものである、という二つの重要なポイントを見逃しています。しかし、艱難期の「惑わす力が送られる」ことは、まさにこの二つの重要な側面によって、現在の世界における悪魔の影響力を扱



## II.大背教

う他の三つの表現と区別されるのです。

第一に、ここで言う「惑わし」や「迷い」は、この力を受けた不信者の側の能動的な行動であって、受動的な経験ではありません。つまり、不信者の意志に反して侵害されるのではなく、むしろ、その時の世界がそうするほど、彼らがサタンを信じて仕えることができないように神が〈あらかじめ〉設けてある障壁を、突破する力が与えられるのです(エレミヤ 5 章 5 節; ホセア 4 章 2 節参照)。彼らは神の真理から悪魔と反キリストの腕の中に「さ迷い込む自由」を例外的に与えられますが、そうしたいと思うのは完全に彼ら自身、彼らの選択、彼らの自由意志から来るのです。第二に、この力は神から来るものですが、それは決して神の義に反するものではありません。神は出エジプトのパロになさったように(出エジプト 14 章 4 節)、艱難期の不信仰な世界にも一線を越えないように注意深くさせる現在の心理的障壁をも、突破させるような特別な能力を与えられるに過ぎないのです。これは現在、様々な形で世界で起こっている課題に過ぎません。もし誰かが突然、栄光のイエスや聖なる玉座の全能の神を見たなら、間違いなく崇拜と「信仰」をしてしまうことでしょう- かしいわゆる「自由な選択」からそうするものではありません(ヤコブ 2 章 19 節参照)。神の栄光、神の真理の圧倒的な現実が、必然的に世の目から隠されているのは、神に対する選択、キリストに対する選択が心からなされ、すべての人の正当な自由意志の真の反映となるためです。同じように、人間の良心と、法の力に対する人間の正常な恐れは、不信心な人類の大多数を抑

## II.大背教

制する強力な力です。法と秩序が崩壊するたびに略奪と無法状態が激化するよう、艱難期には、不信仰者が恐怖と不吉な予感に打ちのめされたり、法的・社会的圧力に妨げられたりせずに神の真理から迷うことができる心理的・物理的余裕が劇的に増え、その結果、イエス・キリストに対する信仰を持たない人々は、ほぼ全員一致で反キリストに忠実になるのです。

神が、事実上すべての不信仰者を包含するほど例外的に「**惑わす力を送られる**」<新改訳第二テサロニケ2章11節;口語訳では「**迷わす力**」と訳されています>のは艱難期だけですが、神は、神を故意に拒み、神の真理を故意に拒否する人々が、誤りと妄想にますます深く陥るのを許すという原則は、今日でさえも機能しています。

この原則は、使徒パウロがローマ書の第1章で、最も詳しく伝えていますが(エレミヤ2章も参照)。ここには、神と神の律法の真理を故意に拒否する者(すなわち、救いにつながる神の存在について神が提供する真理と、不信仰者でも平和で良識ある生活を送るために必要な基本的な法律と道徳について神が提供する真理の両方を拒否する者)に降りかかる結果が示されています。

[信仰によって現わされる(すなわち、与えられる)神の義(16-17節)とは対照的に]神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と

## II.大背教

不義とに対して、天から啓示される(すなわち、与えられる)。なぜなら、神について知りうる事からは、彼らには[日常の経験から]明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは[真実であって]、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。なぜなら、彼らは神を知っていながら、神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いは[この世によって]むなしくなり、その無知な心は暗くなったからである。彼らは自ら知者と称しながら、愚かになり、不朽の神の栄光を変えて、朽ちる人間や鳥や獣や這うものの像に似せたのである。[この]ゆえに、神は、彼らが心の欲情にかられ、自分のからだを互にはずかしめて、汚すままに任せられ(すなわち、自分の欲情を満たした)た。[そこで]彼らは神の真理を変えて[悪魔の]虚偽とし、創造者の代りに被造物[サタン]を拝み、これに仕えたのである。創造者こそ永遠にほむべきものである、アアメン。それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互にその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行<新共同訳:迷った行い-(プレーニ *pláne*)>の当然の報い

## II.大背教

を、身に受けたのである。そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。すなわち、彼らは、あらゆる不義と悪と貪欲と悪意とにあふれ、ねたみと殺意と争いと詐欺と悪念とに満ち、また、ざん言する者、そしる者、神を憎む者、不遜な者、高慢な者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者となり、無知、不誠実、無情、無慈悲な者となっている。彼らは、こうした事を行う者どもが死に価するという神の定めをよく知りながら、自らそれを行うばかりではなく、それを行う者どもを是認さえしている。(ローマ 1 章 18-32 節) (マルコ 7 章 20-23 節参照)

第二テサロニケ2章にあるように、人の意図的で意志的な過ちがこのようなプロセスを開始し、神がそのような個人を自分の欲望と策略の中に「置き去り」にし、さらに悪い状態に陥るようにされるのです。私たち自身の経験から、また世の中の観察からして、職業犯罪者、テロリスト、道徳的に墮落したタイプの人々の多くに、このパターンがはっきりと見て取れます。

しかし、幸いなことに、このような人々は、不信仰な世の人々の中ではまだ例外的です。というのも、世界の人々の大多数は、悲しいことに、救いにつながる神の知識(すなわち、イエス・キリストの福音へと導く神の造られた世界を観察することから、神の

## II.大背教

存在と本質的な性質を認識し受け入れること)を拒絶していますが、その不信者の圧倒的多数が、法を守る市民です(すなわち、神と神の御子を信じる選択の自由が保持されるように、ほとんどの時と場所で世界が比較的平和で平穩に機能し続けるための、神によって設定された道徳、法律、ナショナリズムを拒否していない人たちです)。

しかし、神は、不信仰な人々の中の故意に不品行な人々だけを悪魔の影響の猛威に「置き去りに」されるのではなく、艱難期の間、不信仰な人々全体が、悪魔の具現である反キリストという人物による欺瞞を心から選ぶことができるようにし、そうする力を与えられるのです。

艱難期の「不法の秘密」の解き放たれることと、その副次的な原理である「惑わす力」とが相まって、現時点では神から離れて眠りながら人生を歩んでいるとはいえ、大半の場合、それほど恐ろしく自発的に罪と悪に身を委ねているわけではなく、公然と積極的に悪魔の事業に身を投じているわけでもない不信者の中間層がほとんどなくなるのです。

艱難期には、サタンの活動に対抗する手段としての法律とナショナリズムが事実上排除され、聖霊の抑制の働きが取り除かれるため、中立の立場は完全に排除され、神は、ご自分とイエス・キリストに背く選択をする人々に、すべての抑制を捨てて代

## II.大背教

わりに自発的にサタンにくみする力を与えることによって、世界の選択のプロセスを早めるでしょう。

「わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにきたと思っているのか。あなたがたに言うておく。そうではない。むしろ分裂である。というのは、今から後は、一家の内で五人が相分れて、三人はふたりに、ふたりは三人に対立し、また父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに、対立するであろう」。 (ルカ 12 章 49-53 節)

このため、艱難期には中立的な立場の人がほとんどいなくなるので、信者のストレスは大きくなり、人生が生きづらいものとなり、そのような圧力に耐えられないなまぬるい信者にとっての、大背教のプロセスを加速させることになります。

しかし、このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者(すなわち、偽り教師たち; 2 章参照)、金

## II.大背教

を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快樂を愛する者、[外見は]信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう。こうした人々を避けなさい。彼らの中には、人の家にもぐり込み、そして、さまざまの欲に心を奪われて、多くの罪を積み重ねている[靈的に弱い]愚かな女ども<sup>37</sup>を、とりこにしている者がある。彼女たちは、常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない。ちょうど、[パロの宮廷の魔術師である]ヤンネとヤンブレとがモーセに逆らったように、こうした人々も真理に逆らうのである。彼らは知性の腐った、信仰の失格者である。しかし、彼らはそのまま進んでいけるはずがない。彼らの愚かさは、あのふたりの場合と同じように、多くの人に知れて来るであろう。(第二テモテ 3 章 1-9 節)

---

<sup>37</sup> 文字どおり「女性」がここで特別視されているのは、彼女たちが古代世界では伝統的な家庭の管理責任者であり(箴言 31 章 10-31 節)、家庭は団体行動だったからです(テトス 1 章 11 節; 使徒行伝 16 章 31 節参照)。しかし、ここで引用されている内容は、男性にも当てはまるものとして理解されることを意味しているのは確かです。

## II.大背教

ここには、[第二テサロニケ 2 章 8-12 節](#)で述べられたような「迷わす力」の原則の結果、艱難期に予想される行動パターンの恐ろしい光景が映し出されています。これらの節を先に引用した[ローマ 1 章 18-32 節](#)の節と比較すると、特に罪の傾向や特徴のリストがどこまでも同じであることがよく分かります。[ローマ 1 章 18-32 節](#)と先に引用した箇所との主な違いは、ローマ人への手紙 1 章では、これらの行動の傾向は、神が惑わされるのを許容されていることから生じています。

この原則は、現代において主に、真理のすべてのカテゴリーを故意に拒否する少数の不信心者(基本的道徳、法律、良い市民権を含む)に作用しています。しかし、上記の第二テモテの 3 章では、神が積極的に迷わす力を与えた結果、ほとんどすべての不信者に影響を与え、かつて無かったほど、名目上道徳的、法律を守る、愛国的な未信者という以前の大多数の中間層が消滅していくのを見ることができます。

今日でも、すべての不信心者は悪魔の支配下にありますが([エペソ 2 章 1-5 節](#); [第二テモテ 2 章 25-26 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#) 参照)、「迷わす力」が与えられる前は、(良心、道徳、法律によってそれが抑制されていたため)ほとんどの人はサタン  
の計画を故意にかつ積極的には実行しませんでした。このように、神が真理を拒否することによって生じる自己欺瞞を「許し、置き去りにする」から「助長し、力を与える」ようになった結果、艱難期は、一方では(世界の大部分の人たちである)悪魔を積



## II.大背教

極めつつ熱心に信奉する者たちと、他方イエス・キリストを熱心に信奉する者たち(苦難に満ちた、特に艱難期後半には迫害される少数派)によって占められ、グレーゾーンのほとんどない時代となるのです。

艱難期には、現在のように単に誤りを許すのではなく、実際に誤りを助長することによって、彼らが本当にしたかったけれども世界に対する神の憐れみのために、これまですることを制限されていたことをついに実行する力を与えることによって、神は、不信心な者たちの心の本心と意思を疑いなく明るみに出されるでしょう。

神は、艱難期には、現在のように惑わされるのを許されるのではなく、実際に惑わしを助長し、神の憐れみが世界全般に向けられていることを理由に、今まで本当はしたかったけれど、抑えられていたためにできなかったことをさせることによって、不信仰者の心の本音と意図を疑う余地なく明らかにするのです([黙示録 16 章 8-11 節](#)参照)。

これらの災害(すなわち、艱難期前半の警告の裁き)で殺されずに残った[すべての]人々は、自分の手で造ったものについて、**悔い改めようとせず**、また悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようとしなかった。また、彼らは、その犯した殺人や、まじないや、不品行や、盗みを悔い改めよう

## II.大背教

としなかった。(黙示録 9 章 20-21 節)

この箇所ですべて注目すべきは、「まじない」という言葉によって示されるさまざまな薬の使用を通して、魔術と妖術が果たす役割です。同じ語源を持つ他の単語(ファーマシーpharmacy やファーマキューティカル pharmaceutical の語源)とともに、ギリシヤ語のファーマコン pharmakon (φάρμακον)は、新約聖書では魔術や妖術以外では決して使われません([ガラテヤ 5 章 20 節](#); [黙示録 18 章 23 節](#), [21 章 8 節](#), [22 章 15 節](#)参照)。聖書的な見解からすれば、精神に作用する薬はすべて悪魔的なものだからです。例えば、エレウシノ **Eleusinian** の秘儀における幻覚剤の使用は、このようなカルトにおける「エクスタシー」(あるいは「惑わし」と言うべきもの)の生成において、しばしば見過ごされる重要な要素です。薬物使用と悪魔崇拝のこの明確な連携から、艱難期には、すべての反神的行為の真の悪魔的性質がはっきりと明らかになり、それに手を染める者たちに言い訳の余地がなくなることがわかります。

現状において、信者にとってのこの世との交渉は十分に困難なことであり、不信者とどのように関わるかという困難は、その問題の少なからぬ部分を占めています。艱難期には、反キリストの指導の下で、事実上すべての不信者が積極的に敵対するようになり、この問題の困難さは天文学的に増大するため、ここでは、現在の不信者の墮落の仕組みと影響を、艱難期が始まると予測される加速度と比較する必要があります。「惑わしの力が送られる」範囲、規模、状況は、今日行われている「惑わしの

## II.大背教

うちに放って置かれること」とはまったく異なりますが、その仕組みと影響は同じです。どちらの場合も、そのプロセスの始まりは、不信仰者が神の真理を拒絶することにあります。どちらの場合も、神が引き起こしているのではなく、不信仰者が自ら招いた霊的盲目に陥り、自らの心を硬くし、自らの良心を焼け焦がし、罪深く邪悪な行動をますます加速させているのです。どちらの場合も、神の真理と神のみこころを拒絶することは、必然的にその人に悪魔の嘘を信じさせ、自分の意志ではなく悪魔の意志を実行に移させることになるのです(神に仕えるかサタンに仕えるかの選択をするとき以外は、誰も本当の意味で自分の自由意志を持っているわけではありません：[第一コリント 12 章 1-3 節](#)参照)。

そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。彼らの知力は暗くなり、(すなわち、真理の拒絶から生じる)その内なる[意図的な]無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ、自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆる不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている。(エペソ4章17-19節)

しかし、現在も将来も、不信仰者が誤りへと堕ちていくこのプロセスの核心は、真理を拒絶すること(すなわち、神を信じないこと)であり、法と道德によって抑制されなければ、良心を鈍感

## II.大背教

にし、心を硬化させる方向に進みますが、現在、聖霊の抑制の務めによって課された限界があり、それは良心と目に見える神の制度と相まって、大半の個人に許される墮落の程度を制限し、また世界的に進む不法の範囲を制限しています。これらは、ほとんどの場合、少なくともある程度はその<墮落の>プロセスを阻止します。しかし、艱難期には、聖霊の<阻止する>働きが取り去られ、他のすべての制約が減少するので、神の<惑わす>力が送られ罪と悪に身を捧げようとする不信仰者の意志に、その良心と道德の壁は破られてしまうことでしょう。この「惑わす力が送られる」ことについて、聖書の中で最も適切な例は、パロとその軍隊が、神の明白で否定できない力を前にして、通常の下況下では人間ができることを超えて神に逆らうことを許されたケースです([出エジプト記 14章 4節](#), [14章 17節](#))。<sup>38</sup> これらの(取り除かれた神の抑制と<惑わす>力が与えられて硬化した良心による)二重の圧力は、かつてないほど世界の不信仰者を野蛮にし、結果として信者を大きなストレスにさらし、多くの人のもろい信仰を壊し、大背教に大きく寄与することでしょう。

イエス・キリストと一体となったクリスチャンである私たちは、もはやこの世の者ではありません([ヨハネ 17章 14-16節](#))。私たちは、この世の一部ではなく、暗闇の世界における神の光の証人として、ここに留まっています([第一ペテロ 2章 9節](#))。私たちの神への継続的な忠誠を通して、私たちを見るすべての人(人

---

<sup>38</sup> 出エジプト記 14章:「パロの心を堅くする」、ペテロ・シリーズ #21、#26、#27 を参照ください。

## II.大背教

と天使を問わず：[第一コリント4章9節](#)、[11章10節](#)；[ヘブル13章2節](#)；[第一ペテロ1章12節](#)；[第一テモテ3章16節](#)も参照）にこの厳しい状況で私達を保つ神の忠実さと私達の信仰の本物であることを示すことができます。<sup>39</sup> 私たちはこの闇の者ではなく（[使徒行伝26章18節](#)）、イエスが私たちの永遠の福利のため仕えるためにこの世に送られたように、私たちは、私たちの主イエス・キリストに仕えるためにこの世に留まっているのです（[ヨハネ17章18節](#)；[20章21節](#)；[第一コリント5章8節](#)；[ガラテヤ6章9-10節](#)；[ピリピ1章21節](#)；[ヤコブ2章14-26節](#)；[マタイ28章18-20節](#) 参照）。ですから、世が彼を憎んだように私達を憎むことも（[ヨハネ15章18-19節](#)、[17章14節](#)；[第一ヨハネ3章13節](#)）、この世で自分の命を憎み（[ヨハネ12章25節](#)；[ルカ14章25-34節](#)参照）、この世に対して愛を持たないように命じられることも全く不思議ではありません（[ヤコブ4章4節](#)；[第一ヨハネ2章15-17節](#)）。さらに、特に今回の議論に関連しますが、私たちはこの世で、キリストの教に基づかないものとの関係を持つことに注意するように言われています（[第一コリント7章39節](#)；[エペソ5章5-7節](#)参照）。

不信者と、つり合わないくびきを共にするな（つまり、親密な関係を持たないように）。義と不義となんの

---

<sup>39</sup> 『サタンの反乱』第一部：「サタンの反逆と墮落」1.3.d「天使はいくつかの重要な点で、人間と似ている」、ペテロの手紙シリーズ#22「天使は私たちを見ている」を参照。

## II.大背教

係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアル(=悪魔)となんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼ら(=不義の民)の間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。(第二コリント 6 章 14-18 節)

しかし、光の証人として、私たちは世界から完全に孤立してはならず([第一ペテロ 2 章 12 節](#)参照)、私たちの光を柀の下に置いてはならない([ルカ 11 章 33 節](#)参照)ことも明白です。

あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。また、あかりをつけて、それを柀の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天

## II.大背教

にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ5章14-16節)

恥ずべき行為をしている他のクリスチャンと縁を切ることは、確かに義務付けられています([第一コリント 5 章 11-13 節](#))。しかし、私たちは、不信者との接触を一切避けるために、自分自身をこの世から物理的に排除しようとすることはできませんし、そうすべきでもありません。

わたしは前の手紙で、不品行な者たちと交際してはいけなと書いたが、それは、この世の不品行な者、貪欲な者、略奪をする者、偶像礼拝をする者などと全然交際してはいけなと、言ったのではない。もしそうだとしたら、あなたがたはこの世から出て行かねばならないことになる。(第一コリント5章9-10節)

このように、不信心な世俗の世界と適切な関係を保つことは、イエス・キリストに真に従うことを誓ったクリスチャンにとって、ユニークな挑戦です。私たちは、この世の中に留まりながら、どのようにしてこの世から自らを清く保つことができるのでしょうか？([ヤコブ 1 章 27 節](#)参照；[ヨハネ 17 章 17 節](#), [17 章 19 節](#)；[ローマ 12 章 2 節](#)；[第二ペテロ 1 章 4 節](#), [2 章 20 節](#)も参照) しかし、私たちが、その中で生活し、必要な活動を続けると同時に、その活動の幾つかは、主に従って立派に行われれば、必要な

## II.大背教

ことであるだけではなく、不信者に対する証となるのです([使徒行伝 20 章 34-35 節](#); [エペソ 4 章 28 節](#); [コロサイ 3 章 23 節](#); [第二テサロニケ 3 章 6-12 節](#); [第一ペテロ 3 章 1-2 節](#)参照)。

そして、あなたがたに命じておいたように、つとめて落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位を保ち、まただれの世話にもならず、生活できるであろう。(第一テサロニケ 4 章 11-12 節)

国家や社会一般からの迫害がほとんどない、あるいは全くない時や場所であっても、クリスチャンが通る道は常に狭かったのです。しかし、艱難期には、人間の罪深さと悪の抑制が取り払われ、強化されるため、クリスチャンが世俗の世界と接するときに遭遇する困難のレベルは桁違いに高くなります。かつては、例外的な迫害の時を除いて、クリスチャンは、広く不信仰な世界との関係において、少なくともある程度の礼節を期待することができましたし、ナショナリズムの垣根があったために、真のキリスト教を実践するのに十分な法と秩序が存在する世界では、少なくともある程度の安全な避難所を期待することができました([第一テモテ 2 章 1-2 節](#)参照: [ローマ 13 章 1-7 節](#); [第一ペテロ 2 章 13-17 節](#)参照)。反キリストの世界的な政治はそのすべてを変え、聖霊の働きの停止による抑制の無くなった状況の中で、世界の悪を告発する者もなく([ヨハネ 8 章 36 節](#)参照)、出エジプトのパロが不法の新たな高みに達することが許されたのと



## II.大背教

同じ、自己欺瞞を助長する精神が不信仰な全人類に行きわたり、良心を焼き尽くし、心を硬くするプロセスは加速するでしょう。ほとんどの人類が前例のないほど無法で罪深い状態に陥る時点は、衝撃的な速さで到達し、クリスチャンは時代を嘆き、キリスト教の愛を保ちながら妥協することなくこの世に生きるというのは、飛躍的な挑戦となることでしょう。この猛烈な熱さの中で枯れることを拒む強い信仰を持つクリスチャンにとっても、ますます野蛮で敵対的な異教世界は、イエス・キリストのために生きるには、現在よりもはるかに困難な場所となるでしょう。

主よ、わたしが呼んでいるのに、いつまであなたは聞きいれて下さらないのか。わたしはあなたに「暴虐がある」と訴えたが、あなたは助けて下さらないのか。あなたは何ゆえ、わたしによこしまを見せ、何ゆえ、わたしに災を見せられるのか。略奪と暴虐がわたしの前にあり、また論争があり、鬭争も起っている。それゆえ、律法はゆるみ、公義は行われず、悪人は義人を囲み、公義は曲げて行われている。(ハバクク 1 章 2-4 節)<sup>40</sup>

まず次のことを知るべきである。終りの時にあざ

---

<sup>40</sup> ハバクク書の 1 章と 2 章は、バビロンとその王が艱難期のバビロンと反キリストを重ねており、「主の日パラダイム」の明らかな事例です。「来たる艱難期」第 1 部「はじめに」IV.1.a 節「『主の日』パラダイム」参照。

## II.大背教

ける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、「主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない」と言うであろう。(第二ペテロ 3 章 3-4 節)

愛する者たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの使徒たちが予告した言葉を思い出しなさい。彼らはあなたがたにこう言った、「終りの時に、あざける者たちがあらわれて、自分の不信心な欲のままに生活するであろう」。(ユダ1章17-18節)

あなたがたは隣り人を信じてはならない。友人をたのんではならない。あなたの心ところに寝る者にも、あなたの口の戸を守れ。むすこは父をいやしめ、娘はその母にそむき、嫁はそのしゅうとめにそむく。人の敵はその家の者である。(ミカ 7 章 5-6 節)([エレミヤ 9 章 4-6 節](#); [マタイ 10 章 34-35 節](#); [ルカ 12 章 51-53 節](#))

そのとき、**多くの人がつまずき**(すなわち、背教し)、また互に裏切り、憎み合うであろう。(マタイ24章10節)

このように、見える世界と見えない世界の両方で非常に多く

## II.大背教

の下劣な活動が解放されるため、特に信者にとっては、艱難期の生活が非常に耐え難いものになります。特に、この墮落した行動が、極悪非道な世界システムの上に積み重ねられ、(信者のために)地球に神の裁きの前例のない洪水をもたらすことになるのです。悪に対する抑制(それが法律であれ、良心であれ、神の代理人であれ)が取り除けられると、邪悪な行為が増長されるという原理は、直観的に理解できるし、歴史的、現代的な数多くの例からも十分に明らかです。さらに重要なことは、聖書にもしっかりと記されてあることです([エレミヤ5章1-5節](#)参照)。

1) 法律の迅速な執行という抑制を取り除くと、犯罪行為が加速される。

悪しきわざに対する判決がすみやかに行われな  
いために、人の子らの心はもっぱら悪を行うことに  
傾いている。(伝道の書8章11節)

2) 文化的・道徳的水準の低下は、邪悪な行動を助長する。

卑しい事が人の子のなかにあがめられている時、  
悪しき者はいたる所でほしいままに歩いています。  
(詩篇 12 章 8 節)

3) 邪悪な者への権力付与は、彼らの悪を加速させ、正しい行動を抑制する。

## II.大背教

正しい者が勝つときは、大いなる栄えがある、悪しき者が起るときは、民は身をかくす。(箴言 28章12節)

4) 神の基準の拒絶は不法を加速させる:

預言(字義的には[神からの]ビジョン)、がなければ民はわがままにふるまう、しかし律法を守る者はさいわいである。(箴言 29 章 18 節)

5) 神の言葉の拒絶と犯罪の増加は、自制心の崩壊を加速させる:

イスラエルの人々よ、主の言葉を聞け。主はこの地に住む者と争われる。この地には真実がなく、愛情がなく、また神を知ることもないからである。ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は[すべての抑制が無く]皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている。(ホセア4章1-2節)

6) 増加する無法状態は、正しい意見を押しさえつけるほどに抑制を弱める:

わたしは知る、あなたがたのとがは多く、あなたがたの罪は大きいからである。あなたがたは正しい

## II.大背教

者をしえたげ、まいないを取り、門で貧しい者を退ける。それゆえ、このような時には賢い者は沈黙する、これは悪い時だからである。(アモス書 5 章 12-13 節)

7) 真理を否定することは、自制心を弱め、正しい行動を危険なものにするほどに自制心を弱める:

そこには真実は失われ、悪から遠ざかっている者も略奪される。(新改訳IVイザヤ59章15節前半)

聖霊の抑制の働きが停止し、それに伴って「惑わす力が送られる」ときから、主が再臨されるまで、抑制がなくなるとそれに対応して邪悪さと不法が増大するという原則は、これらの結果とそれ以上のことをもたらします。ここで特に注意しなければならないのは、艱難期に人類の大部分が罪深く無法な行動を取るようになることで、義人の士気が下がり、主ご自身が語られたように、大背教を加速させる大きな要因になるということです:

(12)また[その時]不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう。(13)しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。(マタイ24章12-13節)

この引用の最後の 13 節にある、解放のために必要な並外れた忍耐についての主の言葉は、その前の 12 節の意味を正しく

## II.大背教

理解するために咀嚼(そしゃく)されなければなりません。つまり、法的にも倫理的にも無秩序なこの環境を信仰をもって生き抜くためには、並外れた忍耐が必要だということです。なぜなら、このような無法状態の増大とそれに伴う生活の質の低下は、未信者も信者も含め、ほとんどすべての人(この節では「多くの人」、ギリシャ語では「ホイ・ポロイ」: οἱ πολλοί)の態度を世界的に硬化させ、不機嫌にさせるからです。例えて言うなら、クリスチャンの愛と陽気さを反映させるのは、病気の時よりも元気で健康な時の方がずっと簡単ですし、同様に、何らかの困難なプレッシャーや試練にさらされている時よりも、物事が順調に進んでいる時の方がずっと簡単です。艱難期の比類なき不法状態は、反キリストの政治とその結果としての世界に対する神の裁きを背景に繰り広げられ、人生を非常に苦しいものとし、それはあたかも、各個人がすでに抱えている悩みに加えて、世界の全人口(「多くの人々」)の肩に慢性的な病気と重圧という大きな重荷がのしかかるようなものとなるでしょう(私たち信者は、私たちに敵対する人々に対する神の懲らしめを賛美すべきですが)。このような状況を考えると、人間の優しさ、礼節、寛容さ([マタイ 24章 12節](#)にあるアガペーの意味、ギリシャ語では ἀγάπη)は、有利な状況下では少なくともある程度は存在することが多いのですが、地球上のほぼすべての人の慈善的な傾向が、艱難期の出来事、特に無法の増加の圧力の下で「冷却」を体験するにつれて、世界から事実上消えていくことは、何ら驚くべきことではありません。

## II.大背教

イエスは 13 節で、この危険に対して警戒するようにと私たち弟子たちに警告しておられますが、この圧力は、多くの生ぬるい信仰者たち(残念ながら、このラオデキヤの最終教会時代の大多数のクリスチャンにとっては普通の現状です)が遭遇することになるでしょう。もし愛がすでにぬるま湯のようなものであるなら、愛が冷えたという状態はどんなものでしょう？クリスチャンの本質的な徳である愛は、信仰と切り離すことはできません([ガラテヤ 5 章 6 節](#); [第一コリント 13 章 13 節](#); [エペソ 1 章 15 節](#); [コロサイ 1 章 4-5 節](#); [第一テサロニケ 1 章 3 節](#); [第二テサロニケ 1 章 3 節](#)参照)。そして私たちは、信仰が本当に冷たいとき、それは実際には死んでいることを知っています(その例えは、命が肉体を離れることです:[列王記下 4 章 34 節](#); [ヤコブ 2 章 17-26 節](#); [ローマ 12 章 11 節](#)参照)。従って、冷たい愛は本質的に信仰がないことと同じです([第一コリント 13 章 2 節後半](#)参照)。クリスチャンの「からだ」から温かさという徳が感じられないのは、迫害の圧力の中で信仰、愛、希望を死なせてしまった(すなわち、背教が始まった)しるしです<sup>41</sup>。

石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、  
すぐに喜んで受ける人のことである。その[信仰の]

---

<sup>41</sup> これらのクリスチャンの基本的な徳については、ペテロの手紙シリーズ #16 と #17 の「美德思考」、#21 の「信仰による忍耐」、#24「信仰の力学」をご覧ください。また「悪魔の反乱」第 4 部「サタンの世界システム」、第 4 節「サタンの世界システム」：サタンの嘘に対抗する信仰、希望、愛の 3 つの徳については、「戦術的教理」も参照してください。

## II.大背教

中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のために**困難や迫害**が起ってくると、すぐつまずいてしまう(つまり、背教してしまうのです)。(マタイ13章20-21節)

同じように、[第二のタイプである]石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。御言を聞くと、すぐに喜んで受けるが、自分の中に[信仰の]根がないので、しばらく続くだけ[の信者]である。そののち、御言のために**困難や迫害**が起ってくると、すぐつまずいてしまう(つまり、背教してしまいます)。(マルコ4章16-17節)

岩の上に[信仰の種が]落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、[信仰に]根が無いので、しばらくは信じていても、**試練の時**が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。(ルカ 8 章 13 節)

不法状態によって、不信者が冷たく難しい態度になり、なまぬるい信者が背教者になるという傾向に加えて、[マタイ 24 章 12-13 節](#)の主の言葉は、以前は主に熱心だった信者の間でも愛が冷めていくことを意味していると受け止めなければなりません。これは、イエス・キリストの熱心な弟子たちにとっては悲痛な思いであり、これから起こる問題に備えて靈的に準備するために、目の前にある時間を最大限に活用するようという警告で



## II.大背教

す。いつものように、救いと霊性を確かなものにする唯一の方法は、霊的成長のために前進し続けることだからです。最後に、この箇所で見逃さないように気をつけなければならない非常に肯定的な点は、イエスが<「多くの」という>言葉を付け加えていることです：「**多くの人の愛が冷える**」<「人の愛が冷える」でもなく「すべての人の愛が冷える」でもない>。これは、一方では、イエス・キリストの熱心な弟子であるすべてのクリスチャンの歩みが、艱難期の圧力と、その恐ろしさにもかかわらず、悪影響に屈するわけではないということを意味しています（実際、艱難期に多数の殉教者が生まれることを考えると、このような殉教者の数は、世界やクリスチャンの人口に占める割合が大きなものではないにしても、かなりなものとなることでしょう：[黙示録 7 章 9-14 節](#)参照）。ですから、ラオデキヤのぬるま湯に浸かっている人々の少なくとも一部が、このような圧力の下で、「熱心になって悔い改めなさい」（[黙示録 3 章 19 節](#)）という主の命令に応じて、逆に積極的な方向に突き動かされることを期待する理由があります。これは、温（あたた）かい人にとっても、生ぬるい人にとっても、実に心強い知らせです。しかし、艱難期の「衝撃的な治療」を待つのではなく、今ここでイエス・キリストのために熱心であることをすでに心に誓っている私たちが、その試練の時を前にして、霊的な成長と準備をすることができることに感謝する理由が大いにあるわけです。というのも、この現世は霊的な観点から見ると、すでに非常に暗い場所（[ヨハネ 1 章 5 節](#)；[第二ペテロ 1 章 19 節](#)参照）であり、暗闇の力（[エペソ 6 章 12 節](#)）に支配された暗闇の王国（[コロサイ 1 章 13 節](#)）で、

## II.大背教

私たちはその暗闇から神の光の中へと呼び出された者たちですが([第一ペテロ 2 章 9 節](#); [エペソ 5 章 8 節](#); [第一ヨハネ 2 章 8-9 節](#)参照)、艱難期の霊的な暗闇は、それに比べると、今の時代が昼間のように思えるほど強烈なものとなるからです([イザヤ 21 章 11-12 節](#); [59 章 9-21 節](#); [60 章 1-2 節](#); [ヨエル 2 章 1-2 節](#); [アモス 5 章 18-20 節](#); [ゼパニヤ 1 章 14-15 節](#); [ヨハネ 9 章 4 節](#); [第一テサロニケ 5 章 1-8 節](#)参照)。ですから、そのような暗黒の時代が訪れたとしても、私たちの主であり救い主であるイエス・キリスト、栄光の日の星がついに昇り、その恐ろしい夜に終止符を打つまで、真理の光に忠実であり続けることを決意しましょう:

こうして、預言の言葉(=聖書)は、(同章16-18節の変貌よりも)わたしたちにいつそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照す(再臨の時)まで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。(第二ペテロ 1章19節)

b. 聖書の教えの欠乏: 大背教の第二の主な原因は、信者だけの問題です。不法が解き放たれ、その結果、不信者の行動が墮落することは、(信仰に対する外的圧力を強めることによって)間接的にしか信者に影響を与えませんが、艱難期に予想される本物の聖書の教えの欠如は、<信者の>背教の原因となる直接的な悪影響を及ぼします。上記の前者の場合と同様に、

## II.大背教

この場合も、来たる霊的食糧の飢饉によって悪影響を受けるのは、ほとんどキリストのからだのなまぬるいメンバーだけです。しっかりした霊的栄養を順境の時に摂取することに無関心な彼らは、苦難の時に真の聖書の教えに目を向けることは、特にそれが非常に見つけにくいものであることを考えると、困難な移行であることに気づくでしょう([第一サムエル 3 章 1 節](#), [28 章 6 節](#); [箴言 29 章 18 節](#); [ミカ 3 章 4-7 節](#)参照)。

主なる神は言われる、「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう。(アモス8章11,12節)

あなたは昼つまずき、預言者[たち]もまたあなたと共に夜つまずく。わたしはあなたの母を滅ぼす。わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てて、わたしの祭司としない。あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる。(ホセア 4 章 5-6 節)

上に引用した箇所や列挙した箇所において、神の言葉が欠乏していることに共通する要素は、神の民であるはずの人々が

## II.大背教

その言葉を拒絶していることです(アモス書8章とホセア書4章の文脈から明らかです)。ですから、私たちの神が、神を愛する人々から真理を遠ざけているのではなく、誤った教えを好み、あるいは全く教えられることを慢性的かつ故意に拒絶している人々には、良い教えを与え続けようとはされないのです。(イザヤ28章9-13節; エゼキエル20章3-4節, 20章30-31節; マタイ13章11-17節; マルコ4章12節; ルカ8章10節)。

…あなたがたが主と共にいる間は、主もあなたがたと共におられます。あなたがたが、もし彼を求めらば、彼に会うでしょう。しかし、彼を捨てるならば、彼もあなたがたを捨てられるでしょう。そもそも、イスラエルには長い間、まことの神がなく、教をなす祭司もなく、律法もなかった。しかし、悩みの時、彼らがイスラエルの神、主に立ち返り、彼を求めたので彼に会った。(歴代誌下15章2節後半-4節)

主は言われた、「あなたは行って、この民にこう言いなさい、『あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない。あなたがたはくりかえし見るがよい、しかしわかってはならない』と。あなたはこの民の心を鈍くし、その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。これは彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、悔い改めていやされることのないためである」。(イザヤ6章9-10節)

## II.大背教

このように神の言葉に対する需要がないことは、確かに私たちの時代、ぬるま湯につかっているラオデキヤ(本シリーズ第2A 回参照)の最後の教会時代の傾向と一致しています。私たちの時代には、神のみことばの実質的な教えよりも娯楽を求める需要主導型の消費者キリスト教が多く見られます。

人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにかかせて教師たちを[自分の都合のために]寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。(第二テモテ 4章3-4節)

最後に、艱難期に靈的な食物が不足する、無関心とは関係のないもう一つの原因があります。黙示録の 13 章だけを見ても、反キリストの世界的な宗教によって、真に神に従い、神を礼拝するクリスチャンが肉体的に生き残ることが非常に困難になることが分かります。ですから、獣とその偽預言者は、この物理的な迫害に加えて、靈的な迫害も行い、信者が集まったり、靈的な賜物の実りを互いに分かち合ったりすることを違法とし、不可能に近い状態にすると考えても間違いではありません。もちろん、神にとって不可能なことは何一つありませんから、私たちが靈的な幸福を得るために必要不可欠な靈的糧を欠くことはないと確信できます。しかし、だからといって、今と同じように靈的な糧を得ることができるというわけではありません。ですから、艱難期

## II.大背教

に聖書の教えが不足するのは、現在の教会全体の無関心の結果ではありませんが、(飢饉が始まった時に、栄養失調の人は元気な人よりも苦しむのと同じように)現在御言葉に無関心な個々の信者の場合、将来の教えの不足は、より一層耐え難いものとなるでしょう。

神は私たちの必要をすべて満たしてください。しかし、この問題に対処する時間と機会がまだあるうちに、神の備えの一部は、神の子らが前もって準備することを可能にする事前の警告であると考えるのがよいでしょう。神がヨセフのパロの夢の解釈を通して、七年間の飢饉が待ち受けているという言葉を送られたように(そして、これが艱難期の正確な期間であることは偶然ではありません)、私たちは、ヨセフがパロに忠告したように、飢饉に先立つ繁栄の数年間を可能な限り活用し、その先の暗い時を乗り切るための豊かな霊的資源、すなわち、神の御言葉の教えを聞き、学び、信じ、実践することに基づく霊的準備と霊的成熟を得るべきです([創世記 41 章 1-57 節](#))。飢饉が始まってからでは、到底間に合いません。

そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。(ヨハネ12章35,36節)

## II.大背教

c. 偽りの教えの台頭:不法がはびこることによる圧力と霊的な食物の不足による困難に加えて、艱難期の信者の大規模な背教の第三の主要原因は、説得力のある偽りの教えが蔓延することです。主は特に、惑わしの危険と、これからの困難な時期に警戒する必要性について教えておられ、幾度も警告しておられます(マタイ 24 章 5-6 節, 24 章 11 節, 24 章 24-27 節, 24 章 42 節, 25 章 13 節; マルコ 13 章 5-6 節, 13 章 9 節, 13 章 23 節, 13 章 33 節, 13 章 35 節, 13 章 37 節; ルカ 12 章 40 節, 17 章 23 節, 21 章 8 節, 21 章 36 節; 次の聖句も参照:第二テサロニケ 2 章 3-12 節; 第一テモテ 4 章 1-5 節; 第二テモテ 3 章 1-13 節)。そういうわけで、この脅威について、ここで時間をとって学ぶことにしましょう。

1) 人を虜にする艱難期の偽りの教えの説得力:横行する不法行為の圧力が信仰者を背教に向かわせ、霊的糧の飢饉が背教への抵抗力を弱める一方で、艱難期の偽りの教えは、真理に堅く根ざしていない信仰者に絶大な**影響力**を及ぼします。悪魔はいつも、自分の偽りの教理を魅力的にするために多大な労力を費やしており、それを信じ込む者は皆、悪魔の罠にかかると言われています(第二テモテ 2 章 25-26 節)。しかし、私たちが研究してきた艱難期に存在するであろう状況(無法状態、誤りの助長、聖書の教えの欠乏、前例のない性質の苦境全般など)は、間違いなく、神の真理に対するサタンの大攻勢を世界が受け入れる一因となり、私たちが研究してきた完全な霊的**二極化**を生み出すことにつながり(ルカ 12 章 49-53 節)、信者

## II.大背教

と悪魔の偽メシアに傾倒する者とははっきりと分けられるようになるのです。

一般的な原則から始めると、偽教師と彼らが伝える偽りの教えについて理解する上でおそらく最も重要なことは、偽りで嘘しか教えていないのに、真実であって真理を教えているかのように見せかけることに長けていることです。

- ・彼らは真理をひっくり返して、「苦いものを甘く、甘いものを苦くする」([イザヤ5章20節](#))。
- ・彼らは人間の作ったいましめを、神からのものであるかのように教える([マタイ15章9節](#))。
- ・彼らは自分の欲のために、へつらって欺く([ローマ16章17-18節](#))。
- ・信者を誘惑するために、異なる福音と異なるイエスを宣べ伝える([第二コリント11章3-4節](#))。
- ・彼らはサタンのしもべとして、キリストのしもべを装っているだけ([第二コリント11章13-15節](#))。
- ・彼らは改宗者のために熱意を示すが、それは悪い目的のため([ガラテヤ4章17節](#))。



## II.大背教

- ・彼らは聞く人を欺くために策略を用いることに、何のためにもない([エペソ 4 章 14 節](#))。
- ・彼らは間違った教えを癌のように広め、真理に反対する([第二テモテ 2 章 14 節-3 章 9 節](#))。
- ・彼らは神を知っていると言いながら、そのすべての行動で神を否定する([テトス 1 章 16 節](#))。
- ・彼らは貪欲で、聞き手をより良く利用するために作り話をする([第二ペテロ 2 章 1-3 節](#))。
- ・彼らは彼らの欲望と願望に訴えて、自分たちに従うように人々を誘惑する([第二ペテロ 2 章 17-22 節](#))。
- ・クリスチャンの交わりに入り込んだ後、彼らは、恵みによって罪を犯してもよいと教える([ユダ 1 章 3-4 節](#))。
- ・彼らは自分を高め、人にへつらうことによって信者を獲得する([ユダ 1 章 16 節](#))。
- ・彼らはキリストの教会で重要な人物であることを主張するが、実際は邪悪([黙示録 2 章 2 節](#))。

## II.大背教

自分を真実の教師として効果的に(そして不正に)描写することに加えて、これらの節に記述されている偽教師を結びつける他の共通点は、被害者に媚び、誘惑し、嘘をつくという手法で、被害者を犠牲にして自分自身の栄光と繁栄を促進し、自分たちの嘘を信じる人々を利用しながらも自分自身にしか関心がないことです。園でサタンがエバを欺いて以来、悪魔は常に魅力的な嘘と半分の真実を用いて欺き、誤解させることに長けています([ヨハネ 8 章 44 節](#); [エペソ 6 章 11 節](#))、そして、この方法が艱難期ほど明白になる時はありません([マタイ 24 章 5 節](#), [24 章 24 節](#); [マルコ 13 章 5-6 節](#), [13 章 22-23 節](#); [ルカ 21 章 8 節](#); [第二テサロニケ 2 章 3-12 節](#); [第一テモテ 4 章 1 節](#); [第二テモテ 3 章 1-9 節](#); [第二ペテロ 3 章 1-17 節](#); [第一ヨハネ 4 章 1-6 節](#))。人の隠された欲望の弱みにつけこみ、嘘をつき、欺き、誤りに導くことはすべて偽りの教えの本質的なやり口のの一つで、そのような欺きをすべて排除する神の言葉の真の教師たちの方法論とは全く対照的です([ヨハネ 7 章 18 節](#); [第二コリント 4 章 2 節](#); [第二コリント 1 章 12 節](#), [1 章 18-24 節](#), [12 章 16-17 節](#)も参照)<sup>42</sup>。

---

<sup>42</sup> このトピックは広範囲にわたるため、ここでは一部しか紹介できません。この重要なテーマについては、1) ペテロの手紙 #27「信仰を脅かす3つの偽教理」、2) あなたの聖書を読みなさい: カルトからの保護、3) 悪魔の反乱: 第4部「サタンの世界システム」、第4節「サタンの戦略的教理」、4) 来たる艱難期: 第2部 A:「七つの教会」(エペソ教会の考察の下)「偽り教師、偽り教理、偽りキリスト教」を参照下さい。

## II.大背教

概念的な言い方をすれば、悪魔の偽りの教えは段階的に進行します。まず、悪魔は神の権威を貶(おとし)め、犠牲者たちに、神は真実ではなく、助けることができない、あるいは助ける気がない、また一般的に「もっと重要な」問題の前では、神は不必要で無関係であると信じ込ませます(悪魔はエバに「あなたは死なない」と保証しました：[創世記 3 章 4 節](#)参照)。次に、サタンは、神のプログラムではなく、自分のプログラムに従いさえすれば、私たちは神のようなものであり、神のようになることができ、神のようになるというふうに進めを進めます(「あなたは神のようになる」とサタンはエバを誘惑しました：[創世記 3 章 5 節](#)を参照)。最後に、悪魔の最初の二つの嘘を信じてしまう人の場合、サタンは、彼らが自分の欲(と悪魔の意志)に従うことによって、「善悪の知識」を持つことによって実際に神を助けているのだと信じ込ませようとします(エバは独善的な満足感をもって進んでアダムを誘惑することをしました：[創世記 3 章 6 節](#)参照)。最初の嘘は、貪欲と恐れに突き動かされ、私たちの注意を(永遠の命の問題ではなく)今ここで一時的な安心を得ることに集中させ、その結果、私たちの死という重要な事実と神からの唯一の解決策を見出す必要性を無視させます。第二の嘘は、主観的なプライドに突き動かされ、私たちの注意を自分自身に集中させ、(赦しの必要性ではなく)自分自身の栄光を確立し、肯定しようとするため、私たちの本質的な罪深さと救い主の必要性の問題を無視させます。第三の嘘は、客観的な傲慢さに突き動かされ、(神のために私たちができることは何もないことに気づく代わりに)私たちの注意を自分の行いや業績に集中させ、

## II.大背教

神から離れて「善を行う」能力を示そうとします。悪魔は私たちに、大切なのはこの短い人生とこの世であって、イエス・キリストによって来たる世における永遠の命による死に対する勝利ではないと言います。悪魔は、私たちが罪深く、罪を洗い流して下さる方を必要としていることに気づく代わりに、自分自身を尊ぶように言います。悪魔は、私たちがしていることは良いことだと言いますが、実際には、神から離れて「世の中を良くしよう」とする私たちの努力は、サタンの大義に仕えているのです。この三重の欺きのシステムには多くの側面があり、ここでそのすべてを論じる時間はありませんが(前出の脚注を参照)、真の神に仕えるために(1)この世への愛を捨てること; (2)キリストの十字架による救いを受け入れ; (3)霊的成長、進歩、生産においてイエス・キリストに従う代わりに、サタンの聖職者たちは、狡猾に練り上げられた偽りの教えのすべてにおいて、必然的にこの同じ三つのテーマ、つまり霊的なことではなく物質的なことを説き、完全な墮落ではなく自己の価値を説き、自分たちが善とみなしていることを行うように説きます。

それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。(マタイ 16 章 24 節) (マルコ 8 章 34 節; ルカ 9 章 23 節 参照)

艱難期のサタンの偽宗教は、この進行をかつてないほど駆

## II.大背教

使してくると予想されます。反キリストの活動、彼の成功と偽りの奇跡は、彼と彼の世俗的なシステムがその時代の問題を抱えた世界にとっての希望であり、神の約束は真実ではなく、神の言っておられることは無意味だと多くの人を説得するでしょう（「あなたは死なない」：[第二ペテロ 3 章 1-18 節](#)を参照）。この偽宗教の約束は、獣が「復活」したように見えるように、死からの命と半神格を提供するものです（「あなたは神のようになる」；[第二テサロニケ 2 章 9-12 節](#)参照）。最後に、世界の怒り、不満、殺気を神の家族に向けることで、サタンは自分の従者たちに、自分たちは「善いことをしている」（独善的な満足感をもって他人の破壊に進んで参加する；[ヨハネ 16 章 2 節](#)を参照）ことを完全に確信させることでしょう。

さらに、悪魔の嘘のシステムの進行の三つの段階全てに共通する要素は、概念的にも、具体的にも、艱難期には悪魔は常に人々が実際に望んでいるもの（その望みが公けに知れ渡っているものであれ、世の中の目から十分に隠されたものであれ）を提供することに関心を払うのが見てとれるようになることでしょう。

a) その時々、政治的、経済的問題に対する具体的で目に見える解決策が個人的な形で各人に利益を約束するなら、それはすべての強者の全体主義運動に共通の側面ですが、その時代の問題や不快感がこれまで以上に深刻になる分だけ、艱難期はなおさらそうであると予想されるのです。神はご

## II.大背教

自分の民を永遠に世話し、彼らの必要なものを日々提供すると約束しますが、サタンは神を捨てて神に従う者にこの世の豊かさを約束します(もちろん、悪魔は嘘をつき、提供するという約束を守ることはありませんが、神は常に誠実で真実です。しかし神に従うには信仰が必要なのです)。

b) 不死や半神の地位の約束は、昔から、行いによる救いを基本とする多くの宗教の特徴です。特に、獣の宗教に入らなければ迫害を受けることになり、一方では、反キリストが死から蘇生して奇跡のしるしを行うように見えることから、死と恐怖がかつてないほど高まる艱難期には、この訴えがいつそう説得力が増すことが予想されます。神はその日を忍耐強く待つ民に御自分と御子との永遠の命を約束し、サタンは神を捨てて彼に従う者にこの世の力を約束します(もちろん悪魔は嘘をつき、昇進させるといった約束を守ることはできませんが、神は常に誠実で真実な方です。しかし神に従うには希望を要します)。

c) 破壊を善行とみなすスケープゴート(でっち上げられた標的)は、不信仰な世界にとって非常に魅力的であり、世界征服を求める政治的・宗教的運動に共通する要素です。艱難期は、かつてないほど統合された普遍的世界が形成され、その時代に起こる恐ろしい出来事の責任をなすりつけるべき恰好の犠牲者が必死に必要とされるようになることでしょう：神は私たちに敵をも愛するように命じ、悪魔は、自分に敵対する者を滅ぼすとき、自分たちは善を行っている」と主張します(もちろん、

## II.大背教

悪魔は嘘をついており、神を捨て、悪魔を助けることによって自滅する人々に対する真の関心はありませんが、神は私たちに真の生き方を示されます。(しかし神に従っていくには愛を要します。)

艱難期の困難、人類を欺くための前例のないレベルの悪魔の活動や偽りの教え、不信仰な心の中にある暗闇の抑制が取り除かれることなどを合わせて考えると、悪魔が将来の困難な時に人類を支配下に置くために前例のないほどの進歩を遂げることは、まったく驚くことではありません。艱難期に、サタンの方法論そのものが変わるわけではありません(サタンは、天使の三分の一を誘惑して以来、同じ欺く手を使っています)<sup>43</sup>むしろ、サタンは、反キリストの欺きを使って、今以上に驚くほどはるかにもくやりのけてしまうことでしょう。

またオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとにきて言った、「どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」。そこでイエスは答えて言われた、「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者が

---

<sup>43</sup>『サタンの反乱』第1部「サタンの反乱と墮落」IV.3.b項「サタンの反逆の策略」参照。

## Ⅱ.大背教

わたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう。(マタイ 24 章 3-5 節)

ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。というのは、もしある人がきて、わたしたちが宣べ伝えもしなかったような異なるイエスを宣べ伝え、あるいは、あなたがたが受けたことのない違った霊を受け、あるいは、受け入れたことのない違った福音を聞く場合に、あなたがたはよくもそれを忍んでいる。(第二コリント11章3-4節)

[霊的に成長しましょう…]こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、(エペソ 4 章 14 節)

悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。(エペソ 6 章 11 節)

あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それは



## II.大背教

キリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。(コロサイ 2 章 8 節)

しかし、御靈は明らかに告げて言う。後の時(すなわち、艱難期)になると、ある人々は、惑わす靈と悪靈の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。(第一テモテ 4 章 1 節)

悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。(第二テモテ 3 章 13 節)

きよい人には、すべてのものがきよい。しかし、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性も良心も汚れてしまっている。彼らは神を知っていると、口では言うが、行いではそれを否定している。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である。(テトス 1 章 15-16 節)

偽り者とは、だれであるか。イエスのキリストであることを否定する者ではないか。父と御子とを否定する者は、反キリストである。(第一ヨハネ 2章22節)

この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落

## II.大背教

され、その使たちも、もろともに投げ落された。(黙示録 12章9節)

さらに(獣の偽預言者は)、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし…(黙示録 13章14節前半)

しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。(黙示録 19章20節)

そして、[底知れぬ所の鍵を持つ天使がサタンを]底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。(黙示録 20章3節)

千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。(黙示録 20章7-8節)

## II.大背教

2) 艱難期の偽宗教の説得力: 獣の艱難期の宗教は、本シリーズの第4部の主題です(黙示録13章を学ぶ際に取り上げる予定です)。しかし、艱難期に流行ることになる偽りの教え、その説得力に勢いを与える第二の特徴としての惹きつける力の主要な側面のいくつかについて、この時点で簡単に論じる必要があります。その偽りの教えの中心として、また主要な柱としての反キリストの統一宗教は、大背教の原因に大きく貢献します。

多くの説得力のある方法で、真の聖書的キリスト教を模倣すると預言されているこの将来の宗教運動の現象には、いくつもの類似点があることにまず触れておかなければなりません。ほとんどすべての非キリスト教的宗教は、人間を真の神から遠ざけるために、サタンによって注意深く計画された類似性を示す共通の特徴を持っています。ほとんどすべての宗教が「神」または神々を呼び求め、ほとんどすべての宗教が「聖なる礼拝所」を持ち、聖典を持ち、聖職者(または教師、管理者など)を養成し、宗教儀式や祭具を取り揃え、ほとんどすべての宗教が神への道であると主張し、ほとんどすべての宗教が人間の死という究極的な問題に対する何らかの解決策や答えを約束しています。カルトも霊的に死んだ教派も同様ですが、真の聖書的な神への礼拝から派生したこのようなものは、神を求める過程にある新しい信者やまだ未熟な信者にとって特に危険です。多くの場合、そのようなグループが礼拝しているものが実は本当の神ではないことをはっきり見抜くには、知恵と識別力、聖句を熱心に読むこと、そしてしばしばそのようなグループの本当の信

## II.大背教

仰を深く掘り下げることが必要だからです(神の真の礼拝には、神の御子、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストに対する純粹で汚れのない信仰が必要だからです: [ヨハネ 14 章 6 節](#))。

今日もそうですが、艱難期の獣の宗教もそうであることが予想されます。この新しい宗教は突然生まれるのではなく、ほとんどの「キリスト教」教派が間違いなく加わることになる世界的なエキュメニカル運動<エキュメニカル運動:分裂したキリスト教の諸教派を一致させようとする運動を指す語である。また、キリスト教相互のみならず、より幅広くキリスト教を含む諸宗教間の対話と協力を目指す運動のことを指すこともある。--ウィキピディア>が先行するでしょう。その前段階の宗教運動と獣の宗教(艱難期中頃にこの運動を引き継ぐ)の両方が、非常に融合的であることが予想されます。つまり、事実上すべての宗教的実践や信仰を「聖なるもの」の一部として包含し、容認し、奨励するでしょう。許容されない見解は唯一性や教義主義(例えば、イエスだけが救いへの道であると、また聖書のみが唯一神の言葉であると主張したりすること)だけでしょう。このように、真理が導くところならどこにでも従うと決意している人たちは、社会の片隅に追いやられることになりませんが、その一方で、この包括的でエキサイティングな新展開の一部になるという魅力は、とてつもなく強力なものとなるでしょう。もちろん、私たちの時代にも同じような傾向がすでに働いています。しかし、艱難期にはこの傾向が加速し、エキュメニカル運動は、(特に聖霊の抑制が

## II.大背教

ない場合には)現在の私たちには想像も予測もできないほどの速さで展開することになるでしょう。艱難期の偽宗教の発展の第二段階、すなわち、反キリスト(とサタン)が礼拝の対象となる間、抵抗する人々に対する激しい迫害は、背教の最終段階を生み出し、殉教の可能性という試練に耐えられるほど信仰が強くない人々を、獣の腕の中に追いやることになります。この未来の宗教の顕著な特徴のいくつかの要約を読むだけで、その惹き付ける力の強さと、背教の過程におけるその影響力の大きさを示すのに十分でしょう:

a) キリスト教を模倣する: 艱難期の偽宗教の欺瞞的要素の非常に大きな部分は、それが「真のキリスト教」であるかのように見せかけるために、意図的にあらゆる手段を講じることです。もちろん、これは新しいことではありません。今日、キリストの唯一の真の教会であると主張する主要な教派や多くのカルトを幾つもの簡単に指摘することができます(キリストの真の教会は、組織的な所属とはまったく別に、キリストを信じ、キリストに忠実なすべての人々で構成されているにもかかわらず)。しかし、獣の艱難期の宗教は、二つの点で大きく異なることがわかります。まず、エキュメニカルな第一段階では、この偽宗教は、(少なくともその時点では)クリスチャンを含む多くのグループや宗派を取り込みます。艱難期中盤以降、反キリストがエルサレムに再建された神殿に着座し、彼の新宗教をその汚らわしい特殊性すべてにおいて披露するときになって初めて、このエキュメニカルな多宗教の寄せ集めの中で真のキリスト教を実践するこ

## II.大背教

とは完全に不可能になります。第二に、その第二段階において、反キリストは偽預言者(とサタン之力)の助けを借りて、自らをすべての世界宗教、特にキリスト教とユダヤ教の成就者として描くでしょう。彼は悪魔の「メシア」となり(それゆえ「反キリスト」と呼ばれ、この接頭辞<アンチ anti>は代替えという意味と敵対者という意味を含んでいます:[第一ヨハネ 2 章 18-23 節](#), [4 章 3 節](#); [第二ヨハネ 1 章 7 節](#)参照)、彼の新しい世界首都エルサレムにある神の神殿に座り([第二テサロニケ 2 章 4 節](#))、自らを「キリスト」と宣言します([マタイ 24 章 5 節](#), [24 章 23-24 節](#); [ルカ 21 章 8 節](#))。模倣はここで終わりませんが、サタン、反キリスト、偽預言者の偽三位一体が地上の住民に行う「詐欺」は、「選民」の信仰を圧迫するほど効果的であることは言うまでもありません([マタイ 24 章 24 節](#); [マルコ 13 章 22 節](#)参照)。このような手段によって、信仰が堅固でない人たち(現在のラオディキア時代では例外ではなく、むしろ一般的です)や、特に大艱難のさまざまな圧力と恐怖の中で、その組織と一緒に操られることを許してきたすべての人たちが、背教に引き込まれることが予想されます。

艱難期の偽宗教は、エキュメニカルな段階でも、それに続く本格的な獣崇拜の段階でも、表面的にはキリスト教を模倣しますが、その教えが神の真理からかけ離れたものであり、でっち上げられた儀式や規則で構成されていることは、その白く塗られた表面を引っ搔くだけでよくわかります([マタイ 15 章 9 節](#))。その教えの中身は、第一段階では、偶像礼拝の方向へやや微

## II.大背教

妙に向かいますが、第二段階では、獣とその像への公然とした偶像礼拝へと発展します([第二テサロニケ 2 章 4 節](#); [黙示録 13 章 11-15 節](#))。唯一のまことの神以外にまことの神々は存在しないのですから、異教的で非キリスト教的な「神」の背後には、神ではなく悪魔が潜んでいるのです([第一コリント 8 章 4-6 節](#), [10 章 20-21 節](#))。このような理由から、すべての偶像礼拝は、その根本において悪魔と墮落した天使の礼拝であり、これらは決して独立して活動しているわけではないので、すべての偶像礼拝はサタンの礼拝であり、偶像礼拝、天使礼拝、悪魔礼拝はすべて同じものであり、創造主を冒瀆し、その反逆的な被造物を支持するものなのです([コロサイ 2 章 16-23 節](#); [ヘブル 1 章-2 章](#); [第二ペテロ 2 章 10-12 節](#); [ユダ 8-10 節](#)参照)。艱難期の後半に獣の宗教が姿を現すときほど、このことが明らかになると同時に、曖昧になるときはないでしょう。疑似キリスト教はすでに偶像崇拜について矛盾した立場をとっており、偶像崇拜、死んだ人間や天使を拝む習慣は、これまでになく受け入れられやすくなっています。反キリストとその代理の偽預言者によって起こされる奇跡と不思議は、不信仰な世間と、悲しいことに、信仰の弱い多くの人々に、この新しい宗教とその新しい「メシア」が本物であると確信させるのに十分すぎるほどでしょう。しかし、獣の背後には、神ではなくサタンがおり([第二テサロニケ 2 章 9 節](#); [黙示録 16 章 13 節](#))、この偽りの三位一体の偽宗教には、異教の宗教活動の背後に最初からあったもの、すなわち、悪魔の優先事項の中で常に最優先されてきた目的である、サタンへの明白な崇拜の集大成があります([マタイ 4 章 9 節](#); [ルカ 4](#)

## II.大背教

[章 7 節](#); [イザヤ 14 章 13-14 節](#)と[エゼキエル 28 章 17 節](#)も参照)。純粋な心と健全な教義を持ち、どんな犠牲を払ってでも主に従うことを誓う者だけが、真の光とこの非常に欺瞞的な闇を見分けることができるのであり、私たちは艱難期の偽宗教が放つ説得力の強さに騙されてはなりません。反キリストは、サタンの子孫である半分天使の性質を持つ者であり、世界を驚かせる奇跡を行う力を邪悪な者から与えられるでしょう。彼の出世は流星のごとくで、これまでの人間のカリスマの模範をことごとく色あせたものにするほどの個人的な魔力を発揮することが予想されます。反キリストを代替えメシアとするこの偽の宗教は、肉体的な意味で、間違いなく、世界がまだ見たことのない最も「熱狂的」なものになることでしょう。ある人々にとっては、彼は神のように見えるでしょう。唯物論を信奉する人々にとっては、彼が地球外生命体として尊敬されることがこの上ない喜びとなるでしょう。また、キリスト教や偽物のキリスト教のグループから引き抜かれてきた、あるいは引き抜かれつつある人々にとっては、天使のルーツは、天使、悪魔、悪魔崇拜という、本当の意味での偶像崇拜を、恥ずかしげもなく、あからさまに宣伝することになるでしょう。<sup>44</sup> 艱難期の偽宗教が繰り出す前代未聞の誘惑に

---

<sup>44</sup> 反キリストが提唱するこの最後の「顔」は、現代の信者の多くにはいささか奇異に映るかもしれませんが、教会の初期の歴史において、天使崇拜が最も致命的な脅威の一つであったことを思い出すとよいでしょう。ヘブル人への手紙は、当時のユダヤ教がメシアを天使と見なしていたことから、この異端に対して少なからず向けられています(このことが、この書がイエスの天使に対する優越性を証明すると同時に、イエスの真の人間



## II.大背教

抵抗するには、信仰、すなわち、神の御言葉から真実であると知っていることを(たとえ目に何が見えようとも)ゆるぎなく信じる必要があります。

b) 人を惹き付けるために、あらゆる手段を講じる: この点はよく誤解されます。艱難期の偽宗教に関する従来 of 常識では、その様相は恐ろしく、その活動はゾッとするようなものです。特に<艱難期 of>最初の段階においては、これほど真実からかけ離れたことはありません。それどころか、獣へのあからさまな崇拜に姿を変えるエキューニカルな世界宗教は、接触するすべての人を歓迎し、積極的に関与し、その人たちを安心させようとします。親しみやすい顔をし、魅力的で、楽しく、健全な見栄えをするためには手段を選びません。サタンがエバを欺くために友好的な代理人(すなわち、彼女のペットの蛇)を利用したように<sup>45</sup>、サタンは常に、自分の嘘と欺瞞を、できるだけ魅力的に見えるもので包装してきました。艱難期の偽宗教の他のすべての側面と同様に、見せかけの善意、誠実さ、親しみやすさの投

---

性を示すことに重きを置いている理由を説明しています)。後のユダヤ教では、例えば[創世記 1 章 26 節](#)の「人を造ろう」は、神が天使と相談したのだと説明されています。エペソの信徒への手紙とコロサイの信徒への手紙も同様に、天使崇拜の一形態であるグノーシス主義の異端と戦うことを目的としています(このシリーズのパート 2A を参照)。

<sup>45</sup>『サタンの反乱』第 3 部「人間の目的、創造、墮落」、第 4 節「人間の墮落」、ペテロの手紙シリーズ#27「信仰を脅かす 3 つの偽教理」参照:

## II.大背教

影においても、サタンは極限の努力をすることでしょう。このような圧力を直接経験する私たちは、友人や親戚が積極的に「伝道」してくることも予想されます。そのような活動のために交わされた約束に関してだけでなく、またそのような活動に対する確約だけでなく、他の意欲づける要因はたくさんあるはずです。「<キリストから獣崇拜への>改宗」を拒む真のクリスチャンと密接な関わりを持つことは、(たとえそれが過去における接触だけであったとしても)間違いなく罰則があり、この傾向は、艱難期の後半の大迫害が始まると、血なまぐさいものに本格的に変わっていきます。

現在考えられているよりもはるかに魅力的で、脅威を感じさせない見かけになることで、今の予想を覆すことになるのは、その教えや装束、装身具のすべてにおいての宗教そのものだけではありません。この来たる宗教の聖職者は、同じようにカリスマ的で、同じように(少なくとも目には)無害です。ユダは、この新しい聖職者の役割をうまく例えることができます。外見上、ユダは最高の人物でした。彼は間違いなく、十二人の中で最も身なりが良く、責任感の強い人でした(彼は共通の財布を託され、そこから盗んだお金で十分な生活をしていました): [ヨハネ 12 章 6 節](#), [13 章 29 節](#))。そのため、ユダが主を裏切るために最後の晩餐を離れたとき、仲間の弟子たちはユダが裏切ったとは疑うこともなかったようです([ルカ 22 章 24 節](#)と[ヨハネ 13 章 21-30 節](#)を参照)。偽宗教の聖職者もそうでしょう。彼らは立派な話し手であり([ローマ 16 章 17-18 節](#); [コロサイ 2 章 4 節](#))、説得力の

## II.大背教

ある言葉を巧みに使い([第一コリント 2 章 1-5 節](#))、光の奉仕者を最も効果的に装っていると予想されます([第二コリント 11 章 13-15 節](#))。しかし、実際にはサタンの手先となり、神の言葉を偽って利用し([第一テモテ 6 章 5 節](#); [テトス 1 章 11 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-3 節](#))、バラムのように売り渡し([第二ペテロ 2 章 14-15 節](#))、ユダのように主を裏切り、カインのように([ユダ 1 章 11 節](#))、自分たちの目的を達成するためにはどんな手段も厭いません([エペソ 4 章 14 節](#); [第一テモテ 4 章 1-3 節](#))。彼らは、(不信仰な)すべての世に対して、あたかも自分たちが真の神のしもべであるかのように見せ、その多くは間違いなく自分たちを「クリスチャン」と呼ぶでしょう([ゼパニヤ 1 章 4-5 節](#); [黙示録 3 章 1 節](#)参照)が、自分たちの神を本当に知っている人々は、そのような羊の皮をかぶった狼にだまされることはありません([ダニエル 11 章 32 節](#)参照; [レビ記 10 章 1-3 節](#); [民数記 16 章 1-50 節](#); [エレミヤ 23 章 9-40 節](#); [エゼキエル 13 章 10-23 節](#); [ゼパニヤ 3 章 4 節](#)参照)。

にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。(マタイ 7 章 15 節)([ヨハネ 10 章 12 節](#)参照)

わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなた

## II.大背教

がた(長老たち)自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たち(信者たち)を自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。(使徒の働き 20:29-31 節)

あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音(それは[本当は]別の[福音ではまったくくない])に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである。わたしたちが前に言うておいたように、今わたしは重ねて言う。もしある人が、あなたがたの受けいれた福音に反することを宣べ伝えているなら、その人はのろわるべきである。(ガラテヤ書 1 章 6-9 節)

c) 昔ながらの悪魔的手法を利用する: 説得力を最大

## II.大背教

限に高めるために、艱難期の偽宗教は、悪魔が初めから利用してきたプロパガンダの手法をすべて用いるでしょう。これらの昔ながらの勧誘戦術は、(常にそうであったように)聴衆を集め、それから嘘で固めたものを承認させることに重点を置くでしょう。艱難期の宗教の偽の福音を「売り込む」方法は、人間を偽りに引き込むためにサタンとその配下が常に使ってきたおなじみの方法すべてを利用することになるでしょう:

- ＜偽りの＞「福音」のアピールは、真実の要素を含む: 中途半端な真実は、本当の真実を弱体化させる効果的な道具であることはよく知られており、獣の宗教では、このような欺瞞が大手を振って行われることが分かっています。最も顕著な二つの例を挙げると、世界王国は神によって設立されますが、それはキリストの王国です。(偽宗教は、獣の王国に対する神の好意を主張しますが)反キリストの政権ではありません。神により立てられる世界の支配者は現れます。しかしそれは主、イエス・キリストが再臨する時に成就するのであって、＜その前に現れる＞アンチキリストによってではありません。どちらの例にも、これらの嘘を裏付ける表面的な類似点(それぞれ、統一された世界支配と、一見奇跡的な力を持つ世界支配者)があり、私たちは、反キリストの艱難期の宗教によって、真のキリスト教の事実上あらゆる側面が表面的に模倣される中で、この中途半端な真実のパターンが繰り返されることを覚悟しなければなりません。

## II.大背教

- ＜偽りの＞「福音」のアピールは、多くのものを融合させたものとなる：この点は、上記の逆、あるいは「裏返し」です。艱難期の偽宗教の制度、実践、教義は、大きな嘘を覆い隠すための真実の要素を含むだけでなく、可能な限り、ほとんどすべての組織の得意としている考えや習慣を含め、完全に異なるやり方や信条を受け入れることとなります。「神に誓って……ミルコムにも誓って……」というのが、この融合的な信仰の特徴です([ゼパニヤ 1 章 5 節](#))。しかし、原理的に真理に妥協することは、真理のうわべで覆われた嘘を受け入れるのと同じように、信者にとって致命的です。
- ＜偽りの＞「福音」のアピールは、友好的な代理人によって伝えられる：この新宗教の聖職者、伝道者、スポークスマンは、世界で最も権力があり、影響力があり、人気のある人々です([イザヤ 23 章 8 節](#); [黙示録 18 章 3 節](#)参照)。有名人が、意志の弱い人、心の弱い人を、さまざまな奇妙な、カルト的な、反キリスト教的な活動に引きずり込む力を持つことは、新聞を読む人なら誰でも知っているはずです。現代の習慣と艱難期に起こることの違いは、質的にも量的にも異なります。というのも、獣の宗教の伝道に関わるのは、非主流派の有名人だけでなく、善良で確かな評判を持つ人々を含む、「名士録」にある人達ほぼ全員だからです。
- ＜偽りの＞「福音」アピールは、神への親近感を醸し出す：「神」、そして「イエス」という言葉は、艱難期の宗教の両段

## II.大背教

階に関わるすべての人の会話に、たっぷりと盛り込まれるでしょう。特にその正式な代表者である人々からは、神と神的なものすべてとの深い親密さと親しみを示唆する、非常に洗練された福音主義的なアピールが予想されます。真実は正反対ですが、「神に親しい」ように見せかけることは、悪魔の手先が意図した犠牲者の恐怖を和らげるための典型的な方法であり、自分たちを「義の奉仕者」([第二コリント 11 章 14-15 節](#))として描写します。

- <偽りの>「福音」のアピールは、秘密の欲望を正当化することを含む: 「正直な人をだますことはできない」という諺に多くの利点があるように、悪魔の欺きの場合、人間が悪魔の嘘に陥りやすいのは、そもそも真理に対する愛の欠如なのです。そして必然的に、人が真理に対して無関心であり、神に熱心に従うことに怠惰であるとき(あるいは、どちらにもまったく関心がないとき)、一般的に、ある肉体的な欲望か別の欲望が、その空白を埋めるために湧き上がってきます。さりげなくであれ、明らかにであれ、悪魔は餌なしで釣りをすることはありません。あらゆるカルト、あらゆる悪魔の嘘、そして間違いなく、これから起こる偽宗教の背後には、心に隠された罪深い欲望を満たし、正当化するための悪魔からの申し出があります。それが、奉仕や参加を通して、まだ手にしていないけれども欲しているものを提供するためであれ、あるいは、罪悪感を感じている現在の行動や過去の行いを正当化するためであれ、悪魔が承認するすべての組織、そ

## II.大背教

して間違いなく最も直接的に悪魔の支配下に置かれることになるこの未来の組織は、潜在的な参加者に値打ちあるものを提供します。これはもちろん、悪魔が実際にこれらの約束を「果たす」ことを示唆しているわけではありません。なぜなら、悪魔とその仲間は、被害者の正義や福利に真の関心など持っていないからです。

- ・ <偽りの>「福音」アピールは聖書外のもの:カルトや悪魔の影響を受けたグループを「煙に巻く」ための最も手っ取り早く最善の方法は、聖典に対する彼らの態度を調べることです。自分で聖書を読むことの重要性を軽視している「神のもの」と主張するグループは、少なくとも、必然的に、必ず間違った方向に向かっています。そして、単に個人的な議論を妨げるだけではなく、聖書の禁止や誹謗中傷にまで発展する場合、その集団に神は存在しないと断言することができます。艱難期の偽りの宗教は、それがそうであるように、おそらく聖書を低く評価し、他の「偉大な書物」に同等かそれ以上の重みを与え、自分たちの教義と新しい「聖なる書物」を重んじるでしょう。

d) 包括的であると同時に排他的: 偽宗教のこの二重の性質も、その説得力の一因となるでしょう。あらゆるものを傘下に入れる大「組織」であるという事実は、あらゆる階層からの個人の参加を促すでしょうし、エキューメンカルな段階が始まると、皆が流行りの運動に加わりたがるという心理が働くことによる効



## II.大背教

果を過小評価すべきではありません。あらゆる人がその軌道に引き込まれ、団体の力と、事実上他の誰もが参加している何かに属したいという願望は、ほとんどの人にとって抵抗できないほどのものであることが証明されるでしょう。しかし、世界の人口の大多数がその中に吸い込まれて行くにもかかわらず、神の御言葉に従うことを選んだ人々が含まれていないという事実は、この「唯一の真の教会」、この「唯一の真の宗教」を受け入れた人々だけで構成される排他的な新しい組織となります(後に大迫害の間にこの本当の信者に対して攻撃する一種の「十字軍」運動を生み出します)。このような圧力から逃れ続けることは容易なことではありません。艱難期の前半が終わる前に、ノアとその家族が直面したのと同じような状況になることは間違いありません。<sup>46</sup> そして、ニムロデのバベルの塔建設運動に参加するようというほぼ全員一致の同調圧力に抵抗することが非常に困難な問題であったように、この未来の時代においても、異論を唱えることは重い代償を払うことになるでしょう<sup>47</sup>。皆と反対の方向に進むことは決して容易なことではありません。かつてのクリスチャンや友人や親戚が、まだ踏みとどまっている数少ない者たちに信仰を捨てるように熱心に手招きする艱難期には、こ

---

<sup>46</sup> 『サタンの反乱』第5部:「審判、回復、交替」、第III.1節、「人間の血統(ネフィリム)の純潔に対するサタンの先祖返り攻撃」参照

<sup>47</sup> 『サタンの反乱』参照: 第5部「審判、回復、取り替え」、第III.2節「人間の自由に対するサタンの洪水後の攻撃(バベルの塔:創世記11:1-9)」。

## II.大背教

のことがどれほど当てはまることでしょうか。参加する人々にとっては、このほぼ普遍的な組織の中で「安全」であるという約束は本物のように見えることでしょう。その代わりに、イエス・キリストに忠誠を保ち忠実であり続けることを選んで、＜信仰を捨てることを＞拒否する少数の人々にとっては、仲間外れにされ、嘲笑され、やがて脅迫、強制、迫害に変わり、艱難期の後半、大艱難を特徴づける大迫害で頂点に達するでしょう。

e) 寛容であると同時に不寛容：艱難期の偽宗教は、その＜偽宗教内の＞メンバーの行動や付随的な信仰に対して、非常に寛容です。「多くの門」があり、その偽りの霊性を追求する「多くの方法」があります。これは、たとえば、正反対の実践の場合にも当てはまります：

- 快楽主義も禁欲主義も受け入れる：一方では、艱難期の偽りの宗教は、快楽とそれに耽溺することの「神性」を公言し、(キリストへの信仰や悔い改めとは別に) 普遍的な赦しを宣言し、あらゆる種類の行き過ぎに対する神の裁きを否定するでしょう([コロサイ 2 章 16 節](#), [2 章 20-23 節](#); [第一テモテ 4 章 3 節](#); [ヘブル 13 章 9 節](#)参照)。一方、厳格な自己否定と厳格な食事規定を説き、キリストや聖書の真の用法に何ら言及することなく、違反に対する裁きを脅かすでしょう([第二テモテ 3 章 1-5 節](#); [第二ペテロ 2 章 1-2 節](#), [2 章 13-14 節](#); [ユダ 1 章 18-19 節](#)参照)。これらの「方法」は、矛盾しているにもかかわらず、改宗者に受け入れられるものであり、両

## II.大背教

者に共通する唯一の特徴は、その本質において、どちらもイエス・キリストへの信仰と従順という恵みに基づく生活に敵対するものであり、どちらも聖書的な正当性を持たないということです([ローマ 14 章 17 節](#); [第一コリント 8 章 8 節](#), [10 章 30 節](#); [第一テモテ 4 章 4-5 節](#)参照)。

- 放縱も禁欲も許される：一般的に物質的なこと(食習慣は、上記の対立する二つの考え方のよい例です)について言うことは、性的な行動や飲酒や他の行動に影響を与える物質の使用に関しても真実でしょう。偶像崇拜は古来より、こうした点での放縱さで知られてきました。また、多くの偽りの宗教では、このようなことすべてにおいて独身を貫き、自己否定をするのが一般的です。艱難期の偽宗教は、獣に仕える有効な方法として、どちらの「方法」も許します。反キリスト自身は、これらの事柄に対するアプローチにおいて型にはまらず、非道徳的で、通常の人間の常識を「超えた」行動を示すでしょう(36-39 節の文脈の[ダニエル 11 章 37 節](#))。しかし、どちらのアプローチも神の目には有効ではありません。
- 感情論と合理主義の両方で表現される：荒々しい恍惚と冷静な頭腦的「礼拝」の両方が、この来たるべき偽宗教の信者を特徴づけるでしょう。冷徹で分析的なアプローチを好む人も、感情的な解放を切望する人も排除されることはありません。しかし、いずれの場合も、霊とまことによる父なる神

## II.大背教

とイエス・キリストへの真の礼拝は拒否されるでしょう。

こうして、この新しい宗教は誰にでも当てはまるものを持ち、両極端の行き過ぎた行動を合法化し、正当化し、「祝福」することになるのです。イエスが導くところならどこへでも従うという献身的でないすべての人々が、このようなすべてを包含し、すべてを許し、すべてを寛容にするシステムに簡単に興味をそそられ、誘惑されるのも不思議ではありません。

しかし、真のクリスチャンの信条や行動となると、来たる偽りの宗教は極めて不寛容です。なぜなら、私たちは真理を知っているからです。イエスは御父に至る唯一の門であり([ヨハネ 10 章 7 節](#))、唯一の真理、唯一の道、唯一のいのち([ヨハネ 14 章 6 節](#))なのです。私たちの信仰の絶対的な性質(そして、その排除が悪魔の主要な目的であり、この来たる偽宗教の背後にある主要な目的であるという事実)は、あらゆる宗教の中で最も「寛容」なこの宗教が、真のキリスト教に従うことも、真のクリスチャンの生存を受け入れることも望まないことは確実です。この極端な寛容と極端な不寛容の組み合わせもまた、非常に説得力のあるものになるでしょう。自分自身に対しては、どんな行動も完全な白紙委任<何でも自由にさせてくれること>を切望し、それが他の誰かであるときには、「異常な」行動に対する揺るぎない厳格さを賞賛するのが、人間としての私たちの本性だからです。

## II.大背教

3) 艱難期の偽りのしるしの説得力: 艱難期の偽りの教えのうち、背教を助長するものとして特筆すべきは、反キリストとその偽預言者が偽りのしるしを効果的に使うことです。聖書は、この二人が悪魔の力で行うしるしは、人類史上前例のないものであり、世界人口の大部分を獲得する上で少なからぬ役割を果たすことを明確にしているからです ([マルコ 13 章 22 節](#); [黙示録 13 章 3-4 節](#), [16 章 13-14 節](#), [17 章 8 節](#), [17 章 11 節](#), [19 章 20 節](#))<sup>48</sup>。

[艱難期に]にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。(マタイ24章24節)

不法の者[反キリスト]が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれなかった報いである。(第二テサロニケ 2 章 9-10 節)

---

<sup>48</sup> パロの宮廷魔術師ヤンネとヤンブレが行った「奇跡」は、これと類似しています ([出エジプト 7 章 11 節](#), [7 章 22 節](#); [第二テモテ 3 章 8-9 節](#))。しかし、過去も未来も、神の力は計り知れないほど優れており、圧倒的です。

## II.大背教

また、[獣の偽預言者は]大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。(黙示録 13 章 13-15 節)

しかし、そのようなしるしが未信者の目にいかに奇跡的に映ったとしても、私たちクリスチャンは、見えるものによらないで、信仰によって歩んでいます([第二コリント 5 章 7 節](#); [箴言 3 章 5 節](#))。ですから、生ける御言葉、私たちの主イエス・キリスト([ヨハネ 1 章 1-14 節](#))に忠実に従う者として、私たちは、目に見えるすべてのものよりも神の言葉に完全な信頼を置き、聖書から真実だと分かっていることと矛盾するような圧倒的な説得力を持つ「奇跡」に直面しても、主が聖書を通して語られたことに常に注意を払う必要があるのです:

わたしはあなたの聖なる宮にむかって伏し拝み、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、み名に感謝します。あなたは**そのみ名と、み言葉をすべてのものにまさって高くされた**からです。(詩篇 138 篇 2 節)

## Ⅱ.大背教

天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事[目的]を果す。(イザヤ書 55章10-11節)

主は仰せられる、わたしの言葉は火のようではないか。また岩を打ち砕く鎚のようではないか。(エレミヤ書 23章29節)

わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか。(ルカ6章46節)

初めに言[イエス・キリスト]があった。言は神[父]と共に互惠性(=同質性)があった。言は神であった。この言は初めに神と共に互惠関係を享受してあった。すべてのものは、これ[イエス・キリスト]によってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(英語直訳 ヨハネ 1 章 1-3 節)

あなたがたは、聖書の中に(その読み方によって)永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。(ヨハネ 5 章 39 節)

## Ⅱ.大背教

イエスは彼[弟子のトマス]に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。(ヨハネ20章29節)

「だれが主の思いを知って、彼を教えることができようか」。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている。(つまり、聖霊がキリストの考えそのものである聖句を照らし出しているのです) (第一コリント2章16節)

わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである。(第二コリント 4 章 18 節)

わたしたちは、見えるものによらないで、(生きた言葉と書かれた御言葉に)信仰によって歩いているのである。(第二コリント 5 章 7 節)

聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。(第二テモテ 3章16節)

御子[イエス]は[父なる]神の栄光の輝きであり、神



## II.大背教

の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。(ヘブル書 1章3節前半)

というのは、神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。(ヘブル 4章12節)

さて、[生ける言葉と書かれた御言葉への]信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。(ヘブル 11 章 1 節)

わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである(マタイ17章1-8節参照)。こうして、預言の言葉(すなわち、聖書の言葉)は、(私たちが目を見たもの以上に)わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたがたも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの

## II.大背教

心の中を照す(生ける御言葉であるイエス・キリストの再臨)まで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして([詩篇119篇105節](#)参照)、それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである。(第二ペテロ 1章16-21節)

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言[イエス・キリスト]について——(第一ヨハネ 1章1節)

パウロがテモテに与えた明確な指示によって、また、すべての牧会者にも適用できることですが、(たとえ正当で可能であったとしても、奇跡を行うことよりも)御言葉の真理を教えることに、同じように重点を置くこと、たとえそれとは反対の圧倒的な視覚的証拠を前にしても、私たちがみことばに信仰を置くようにという強力な励ましが与えられています:

わたしがそちらに行く時まで、聖書を朗読することと、勧めをすることと、教えることとに心を用いなさい。(第一テモテ 4章13節)

## II.大背教

よい指導をしている長老、特に宣教と教とのために  
に労している長老は、二倍の尊敬を受けるにふさわ  
しい者である。(第一テモテ 5章17節)

あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところ  
のない錬達した働き人になって、神に自分をささげる  
ように努めはげみなさい。(第二テモテ 2 章 15 節)

御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、  
それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、  
戒め、勧めなさい。(第二テモテ 4 章 2 節)

そう、聖書は明確です。私たちが注意を払うべきは神の言葉、  
私たちの主イエス・キリストの言葉であって、私たちの目が見たり  
耳が聞いたりするようなことではありません。私たちが見る「奇  
跡」や「しるし」がどんなに素晴らしく、前例がなく、説得力があ  
っても、それが神の言葉によって否定されるなら、私たちはそ  
れを無としなければなりません([エレミヤ 10 章 2 節](#); [ルカ 21 章  
25-26 節](#)を参照してください)。この原則は艱難期の私たちの  
行動に対して重要な意味を持ちますが、その恐ろしい時代の  
入り口にいるラオデキヤの教会時代の私たちにも、重要な教訓  
があるのです。私たちは、教会が聖書を誇りをもって教えること  
を優先するよりも、物質的な世界、神の言葉よりも人間の業、体  
験や感情の高ぶり、かつての奇跡、癒し、異言、聖書の真剣な  
研究よりも大騒ぎやファンファーレ、カーニバルにますます魅

## II.大背教

了されている時代に生きているのです。今、良き良心、良き価値観、そして聖書的な優先順位を築くことは、役に立つというだけでなく、来たる試練をうまく乗り切る上で極めて重要です。一方、艱難期に獣とその偽預言者によって効果的に使われるような光景に今過度に注意を払うと、信者は靈的に弱い立場に置かれるだけでなく、その恐ろしい時代の圧力によって、イエス・キリストから背教することになるかもしれません。

4) 共謀団体の影響力。この点も、艱難期の偽りの教えが背教の過程に与える影響として、別途取り上げるべきものです。艱難の特徴である悪魔に感化された「奇跡」による説得力は、選民の信仰にさえ深刻な圧力をかけるほど驚くほど強力であることは、すでに見てきました([マタイ 24 章 24 節](#); [マルコ 13 章 22 節](#))。このような圧力にもかかわらず、イエス・キリストを信じる熱心な信者は、これらのことがどんなに奇跡的に見えても、自分の目で見えることではなく、聖書に書いてあることに従い続けます。経験に頼らず、適切な聖句をすべて適用するのです。

あなたがたのうちに預言者または夢みる者が起って、しるしや奇跡を示し、あなたに告げるそのしるしや奇跡が実現して、あなたがこれまで知らなかった『ほかの神々に、われわれは従い仕えよう』と言っても、あなたはその預言者または夢みる者の言葉に聞き従ってはならない。あなたがたの神、主はあなたがたが心をつくし、精神(文字通りには「命」)を

## II.大背教

つくして、[本当に]あなたがたの神、主を愛するか、どうかを知ろうと、このようにあなたがたを試みられるからである。(申命記 13章1-3節)

イエス・キリストを信じる熱心な人々は、聖書と矛盾するいかなるしるしや不思議や奇跡にも優先して、聖書の語ることに耳を傾け続けるでしょう。彼らは、今日と同じように、すべての霊的指導者や牧師のために「キリスト・<リマス>テスト」を適用します<sup>49</sup>。

愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、(確かめるために)ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。あなたがたは、こうして[試して]神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊(すなわち、人や組織)は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今や[その霊は]すでに世にきている。(第一ヨハネ 4 章 1-3 節)

---

<sup>49</sup> 『聖書を読む』の「キリストテスト:クリスチャンの基本的権利と責任」参照。

## II.大背教

しかし、悲しいことに、信仰に弱い人の多くは、このような圧力に屈してしまうでしょう。そして、多くの場合、彼らはトップダウンで(指導者が先に)誘導されるのです。多くの背教の事例では、羊を飼うのが仕事である指導者や組織によって、子羊が屠殺に導かれるのです。実際、現在、ほんの少ししかキリスト教的でない宗派にいる人々、あるいは、その指導者や「教師」がイエス・キリストの代表としてひどい見本となっているところに属している人々は、すでにとんでもない程、危険にさらされています。上記の予言と類似の聖句によれば、これらの弱い指導者たち、あるいは罪深い指導者たちは、(私たちの時代にも、彼らは霊的無気力に引きずられ続けているのですが)反キリストの爆発的な世界教会化運動にすぐに屈服し、そのメンバーのほとんどを引きずっていくことでしょう。艱難期の後半になると、この偽りの酔いしらされる酒に反キリストの「不思議」が加わるので、なおさらそうでしょう。このような信じがたいしるしや奇跡を行うことによって、この来たる偽りの宗教には、とてつもない感情的権威が与えられるからです(これに抵抗できるには、目に見えるものよりも聖書を優先させるという確固たる決意を要するでしょう)。余談ですが、現在の世界は、過去に比べ、このような欺瞞に対してより脆弱になっていることに留意すべきです。歴史上かつてないほど洗練され、知識も豊富だと自負する世界にとって、この発言は間違いなく滑稽に映るでしょう。しかし、それは真実です。なぜなら、この世で起こるすべてのことを物質主義的に説明しようとする現在の私たちこそが、獣の奇跡、つまり、容易に否定したり説明したりすることができないほど圧倒されるしるしを

## II.大背教

前にして、いっそう脆弱になるからです。神を知る者にとっては、このような現象は、あまり強い影響を与えることはないでしょう。私たちクリスチャンは、物質に対する非物質の力を完全に確信しており、聖書を指針として、神のしるしや奇跡とそうでないものを見分けることができます。しかし、人類の大多数にとっては、否定できない非物質的な出来事の体験は、抵抗するにはあまりに強力であることでしょう。そして、霊的に弱っている、あるいは死んでさえいる、いわゆるクリスチャン・グループの指導者やメンバーにとって、これらの奇跡は、獣が「その者く来たるべきメシア」であり、彼の新しい宗教が唯一の「真の道」であることを「証明」するために必要なすべてとなることでしょう。

このことが現実的に意味するのは、そのような組織や教派がエキュメニカル運動に完全に売り渡され、その後(最後の三年半の間)獣の宗教に全面的に組み込まれるようになると、それまで、そして艱難期まで彼らと関わりを持ってきた信者たちは、彼らの支配から逃れることがますます難しくなるということです。自分にとって信仰と同じ意味になってしまっている組織から離れようとする事は、無意識のうちに砂地獄の中に沈んでくようなものです。これと同じ現象が、今日でも多くの教派で起こっているのを私たちは見ることができます。不信心なエリートたちが、自分たちの教団を神や聖書からますます遠ざけていく一方で、多くの教団員は、こうした動きに満足はしていないものの、(誤った忠誠心、伝統、惰性から)自分たちが引きずられるのを許しているのです。しかし、棄教の理由がどんなものとなるにせよ、

## Ⅱ.大背教

信者一人ひとりには主に忠実であり続ける責任があります。棄教したのは指導者のせいだという言い訳は通用しません：

しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。また、大ぜいの人が彼らの放縦を見習い、そのために、真理の道がそしりを受けるに至るのである。(第二ペテロ 2 章 1-2 節)

彼らはむなしい誇を語り、迷いの中に生きている人々(すなわち、偽教師)の間から、**かろうじてのがれてきた者たち**を、肉欲と色情とによって誘惑し、[これらの偽りの教師たちは]この人々に(規律ある生活からの)自由を与えると約束しながら、彼ら自身は滅亡の奴隷になっている。おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである。彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることにより、この世の汚れからのがれた後、またそれに巻き込まれて征服されるならば、彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒め(キリストへの信仰)にそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよい。ことわざに、「犬



## II.大背教

は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中に入っていく」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ 2章18-22節)

ですから、異教の宗教や、クリスチャンがほとんどいない死んだ教派が獣の宗教の軌道に引き込まれることは一つのことですが、少なくとも何人かの本物の信者で構成されているグループが共謀することは、背教の実践を手助けするもう一つの強力な要因となるでしょう。結局のところ、信者を所属する団体と共に背教に引きずり込む上で支配的な役割を果たすのが、団体一丸主義であろうと、問題の教派の継続的な権威であろうと、敬遠されたり、差別されたり、迫害されたりすることへの恐れであろうと、上に述べたような明白な欺瞞であろうと、ほとんど違いはないでしょう。霊的に有害な関係を続けることは、信仰を危うくし、脅かすことに他なりません：

まちがってはいけない。「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」。(第一コリント15章33節)

真理に無関心で、「耳障りの良い」娯楽的な代用品を求める今のラオデキヤ時代の流れは、艱難期には、サタンとその反キリストによってキリスト教グループの世界的な宗教への同化と共同化のプロセスを大いに促進させるものに置き換えられることになるでしょう。

## II.大背教

人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう。(第二テモテ 4 章 3-4 節)

しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう。(第一テモテ 4 章 1 節)

さらに、このプロセスは、上から下へ進むだけでなく、下から上へも進みます。なぜなら、指導者が会員を墮落させるだけでなく、その逆もあるからです。偽りの教えと偽りの教師がキリスト教団体と旧クリスチャン団体に深いところまで浸透し始めると、これらの団体の多くの階層(背教者であれ最初から未信者であれ)は、「草の根」から指導者に参加するように圧力をかけるでしょう。そのような圧力の下で、(反乱や追放に直面しても)、最も忠実な指導者だけが、あえて抵抗することができ、あるいはしようとし、彼らは仕事や評判を失い、さらに悪い事態に直面することになります。このような集団は、すでに精神的無関心に陥っているため、そのような抵抗は無意味であり、さらにそのような集団の指導者の多くは、大多数の有権者の意向に従うことが予想されます。このような現象を「金の子牛の妥協」と呼ぶこと

## II.大背教

ができるでしょう。アロンがモーセ不在の時に、(自分の行動が間違っていることを認識していたにもかかわらず:[出エジプト記 32章 1-4節](#)を参照)反抗的な群衆の要求にすぐに従ったように、最も熱心なクリスチャンを除く大多数の霊的指導者も同様に、艱難期の前半のエキュメニカル運動に妥協するという内圧に屈服することでしょう。そして、アロンが金の子牛の祝宴を「主の祝宴」と呼ぶことによって、この恐ろしい偶像崇拜を神の方向に導くことができると愚かにも考えたように([出エジプト記 32章 5節](#)と [32章 6節](#)を参照)、このような圧力にさらされた指導者の中には、善のために団体に繋がっているのだと自分自身を納得させる人もいるかもしれません。しかし、実際には、ついに最後の分離の機会が来たときに、分離しないなら、霊的な災いを意味することになります。さらに、指導者たちの場合、組織に留まって便宜を図ることは、真にクリスチャンである人々に偽りの慰めを与えるだけであり、いったん致命的な危険にさらされた組織と一緒にいることは、背教につながるだけだという事実を分からなくさせることになるのです。イスラエルの民は、キリストの予型としてよく知られているモーセ([出エジプト記 32章 1節](#); [使徒行伝 7章 40節](#):死者からの復活を参照)が長い間離れていた時、しかも彼が戻ってくる直前に、落ち着きがなくなり、このようにとんでもない背教に陥りやすくなったことに注目するのはよいことです。ですから、この場合も、キリストの再臨の直前、しかも最も長く不在だった時に、大背教が多くの同胞を襲い、(アロンのように)教会の最も著名な指導者たちが恐れから反乱に巻き込まれることになるのです。そして、当時の反抗的なイスラ

## II.大背教

エルの民が自分たちを「エジプトに連れて帰」らせてくれるモーセ以外の別の指導者を求めたように([ネヘミヤ 9 章 16-17 節](#)参照; [民数記 14 章 1-4 節](#)も参照)、これらの元キリスト者は背教において、世界中の不信仰者と共に新しい救い主、すなわち彼らに地上の天国を約束する反キリストを受け入れるのです。

いわゆる「キリスト教徒」のグループが(後になってターゲットにされるというのではなく)、反キリストのエキュメニカルな運動の最初の基盤にならないかどうか、少なくともそうした観点から考えてみる価値はあるでしょう。獣は政治から着手するので、エキュメニカル運動(これは後に普遍的で偶像崇拝的な宗教に発展することになりますが)は、その当初は本質的に政治的な形成物であったと考えられます。やがてわかるように(そして、四騎士の記事ですでに予告したように)、艱難期前半は、並外れた激動の時代となります。反キリストは間違いなく、その時点の恐ろしい世界状況に対する政治的解決を約束することによって、多くの政治的支持を得るでしょう。多くの宗教団体、さらにはキリスト教団体が「善のため」に政治的な活動に関与する傾向があることを考えれば、反キリストがこのような傾向を十分に利用することは、あり得ないことではありません。エキュメニカルな連携の最初の展開は、教義的なものよりもむしろ政治的なものであるため(信仰の領域での「協力」や強制は後になってから)、識別力の乏しい多くのクリスチャンが(実際には真理やキリストから遠ざかっているにもかかわらず)この運動を受け入れ、「キリスト教的」なことをしていると思ひ込む可能性があること

## II.大背教

は容易に想像できます。キリスト教や半キリスト教のグループを基盤にすることは、反キリストにとって非常に明確な利点があります。反キリストの偽宗教全体は、後に自分がメシアであると主張することに基づいています。

### 4. レムナントの精錬

<レムナント=残る者たち(信仰を最後まで保つ者として残る者たち)>

大背教の間、信じられないような数の棄教の理由の一つは、悪魔とその二人の地上の手先、反キリストとその偽預言者によって繰り広げられる前代未聞の欺きです。(ダニエル 11 章 32-35 節; マタイ 24 章 11 節, 24 章 24 節; マルコ 13 章 22 節; 第二テサロニケ 2 章 9-12 節; 第一テモテ 4 章 1-5 節; 第二テモテ 3 章 8-9 節と出エジプト 7 章 11 節と 7 章 22 節; 黙示録 13 章 13-14 節, 19 章 20 節)。この攻撃は、真に選ばれた者以外のすべての者を圧倒する、まさに虚偽の海を注ぐでしょう(マタイ 24 章 24 節; マルコ 13 章 22 節)。このひどい背教の雲に明るい兆しがあるとすれば、それは、真に神の民であるすべての人々の艱難の圧力によって生み出される信仰の練磨の中に見出すことができます。神の民の心が磨かれ、信仰が強められ、イエス・キリストへの献身が試されることは、どの時代にもあることです。

そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざま

## II.大背教

まな試錬で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは[来たるべき救いを待ち望んで]大いに喜んでい。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いこと(例えば、テストを通して本物と証明された信仰の永遠の報酬)が明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであろう。(第一ペテロ 1章6-7節)

しかし彼はわたしの歩む道を知っておられる。彼がわたしを試みられるとき(「金塊を鑑定するように、私の信仰の価値を鑑定された」とき)、わたしは金のように出て来るであろう。(ヨブ23章10節)

銀を試みるものはるつぼ、金を試みるものは炉、人の心を試みるものは主である。(箴言 17章3節)

見よ、わたしはあなたを練った。しかし銀のようにではなくて、苦しみの炉をもってあなたを試みた。(イザヤ48章10節)

しかし、このシリーズの最初から述べているように、神よりの艱難の目的の一つは、神を選んだ者とそうする意志のない者とを、はっきりと区別することです。

あなたの民と、あなたの聖なる町については、七

## II.大背教

十週が定められています。これは**とがを終らせ、罪に終りを告げ**(すなわち、背教を完了させ)、**不義をあがない、永遠の義をもたらし**(すなわち、キリストの救いの御業がもたらされ)、**幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐため**(すなわち、王国の到来がもたらされるため)です。(ダニエル 9 章 24 節)

艱難期には、中道は存在しません。イエス・キリストへの信仰が確かで堅固な者だけが、背教と偽りの宗教に引き込まれるのを避け、同時に、艱難期とそれが包含するすべてのものの精神的な打撃に耐えることができます。

忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。(黙示録 3章10節)

その時のあらゆる未曾有(みぞう)の困難に加え、私たちの信仰は、偽預言者や偽キリスト([申命記 13 章 1-4 節](#); [マタイ 24 章 5 節](#); [マタイ 24 章 10-13 節](#); [マルコ 13 章 6 節](#); [ルカ 21 章 8 節](#); [第一ヨハネ 2 章 18 節](#), [4 章 1-5 節](#); [第二ヨハネ 1-7 節](#))、私たちの交わりに入り込む偽クリスチャン([ダニエル 11 章 34 節](#); [ガラテヤ 2 章 4 節](#); [ユダ 4 節](#))、私たちが愛している人たちからの仲間はずれ([第一ヨハネ 2 章 19 節](#))、仲間内の不和([第一コリント 11 章 19 節](#))、私たちの信仰に対する態度を変態的な執

## II.大背教

着だと嘲る「クリスチャン」グループから感じる疎外感と迫害が増加することになるのです。この最後のポイントは、非常に重要なことです。というのは、艱難期に真のクリスチャンのレムナント（残りの者たち）が精錬されるのは、クリスチャンが分離されるよりも、むしろ自分自身を分離することの方がはるかに重要だからです。信徒の数が増えている教会は人々に好まれていても艱難期の前半のエキュメニカル運動では、妥協する「教会」がかつてないほど数多くなるでしょう。教会内には、興奮、騒動、娯楽があり、キリスト以外のすべてがあります。しかし、教会は、キリストのためにあるのです（[ヘブル 10 章 33-34 節](#); [13 章 11-13 節](#); [第二コリント 1 章 3-11 節](#)を参照）。清くない者は、この恐ろしい時に背教へと墮落しますが、清い者はさらに清められ、主が来られる時（[黙示録 22 章 11 節](#)）、主は準備の整った民のもとに来られ（[ルカ 1 章 17 節](#)参照）、彼らを救い、復讐するために来られるのです：

その日、人は言う、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しもう」と。（イザヤ25章9節）

あなたがたは弱った手を強くし、よろめくひざを健やかにせよ。心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をも



## II.大背教

って臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と。(イザヤ35章3-4節)

真の教会への迫害と再臨の主の報復は、神の観点からすれば大艱難の両輪のようなものなので、主の帰還を迎える花嫁があらゆる点で聖く純粹であるように、艱難期が麦ともみ殻のふるい分けの過程であることも不思議ではありません。(詩篇 45 篇; [エペソ 5 章 25-27 節](#); [黙示録 19 章 7-8 節](#))。

そこでヨハネはみんなの者にむかって言った、「わたしは水でおまえたちにバプテスマを授けるが、わたしよりも力のあるかたが、おいでになる。わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。また、箕を手にとって、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。(ルカ 3 章 16-17 節)

したがって、信者にとって、艱難期は無意味な苦しみの時ではなく、純粹に最後までイエス・キリストに忠実に従うことを約束したすべての人々が、目的を持って粛清され、精錬され、清められる時なのです([エレミヤ 9 章 7 節](#); [ヨハネ 15 章 2 節](#)参照)。

また賢い者のうちのある者は、終りの時まで、自分を練り、清め、白くするために倒れるでしょう。終

## II.大背教

りはなお定まった時の来るまでこないからです。(ダニエル 11 章 35 節)

[その終わりの時に]多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう。(ダニエル 12 章 10 節)

このような精錬の期間について、過去の聖書の類似例が何らかの指針となるのであれば、このようにして精錬された残党は、(少なくとも、現在クリスチャンであると自認している世界中の数十億人に比べれば)実に少数であることが予想されます。ソドムから逃れたのはわずか三人([創世記 18 章 16 節-19 章 29 節](#))、大洪水から逃れたのはわずか八人([創世記 7 章 7 節](#); [第一ペテロ 3 章 20 節](#))、ユダの砂漠でダビデが試練にさらされたとき、あえてダビデに身を任せたのはわずか六百人([サムエル記上 22 章 1-2 節](#), [23 章 13 節](#), [27 章 2 節](#), [30 章 9 節](#); [歴代誌上 12 章 1-22 節](#))、イゼベルの下の背教中に「バアルにひぎをかがめる」ことを拒んだのはわずか七千人でした([列王記上 19 章 18 節](#); [ローマ 11 章 1-6 節](#))。人類の歴史を通して、選民の数は常に全人口のごく一部であり、見かけ上の信者の共同体の中にも、ぬるま湯に浸かった人々や、全く信者でない人々が多く存在することは避けられませんでした。「すべてのイスラエルがイスラエルであるわけではない」([ローマ 9 章 6-33 節](#); [エゼキエル 5 章 2-4 節](#), [5 章 12 節](#), [20 章 35-38 節](#); [ゼカリヤ 13 章 8-9 節](#)参

## II.大背教

照)ように、キリストの教会の一員であると主張するすべての人が本当にそうであるとは限らないのは驚くべきことではありません。しかし、今の時代と艱難期の大きな違いは、これから起こる艱難の只中で、イエスに何よりも献身していない人は、すべて淘汰され、屑のように背教の中に注ぎ出されるということです。

あなたの民イスラエルは海の砂のようであっても、そのうちの残りの者だけが帰って来る。滅びはすでに定まり、義であふれている。主、万軍の主は定められた滅びを全地に行われる。(イザヤ10章22-23節)

新しいエキュメニカル・ムーブメントや、それが生み出す偽りの宗教に参加しようと躍起になるとき、救いのためにキリストを信じた私たちは、多数の群衆の存在が神の存在を保証するものではないことを忘れてはなりません。たとえ私たちが世から見れば落伍者、のけ者であっても([詩篇 84 篇 5-7 節](#); [へブル 11 章 13-16 節](#)参照:[歴代誌上 29 章 15 節](#); [詩篇 39 篇 12 節](#), [63 篇 1 節](#), [119 篇 19 節](#); [歴代誌上 7 章 29-31 節](#); [へブル 11 章 37-38 節](#), [13 章 13-14 節](#); [第一ペテロ 1 章 1 節](#), [2 章 11 節](#); [第一ヨハネ 5 章 19 節](#))、神は「人を敬う」ことはなく、この世のように見かけに左右されることもなく([ローマ 2 章 11 節](#); [エペソ 6 章 9 節](#))、単なる数に感動されることもありません。神が感動されるのは、私たちの心の態度です([サムエル記上 16 章 7 節](#); [詩篇 51 篇 17 節](#), [147 篇 10-11 節](#), [イザヤ 29 章 13 節](#); [エレミヤ](#)

## II.大背教

[12章2節](#); [マタイ10章26節](#); [ルカ8章17節](#))。主は、私たちが信仰に忠実であり、最後まで忠実でありさえすれば、私たちの本当の姿、つまり主の子どもであることを認めてくださるのです:

わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼[私たちの主イエス・キリスト]が現れる[復活の]時、わたしたちは、自分たちが彼に[全く]似るものとなることを知っている。(すなわち、復活の時、私たちは主と全く同じ新しい体を持ち、彼によって知られているように彼を知るのです:第一コリント13章12節を参照) そのまことの御姿を見るからである。(第一ヨハネ 3章1-2節)

兄弟たちよ。それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば(すなわち、徳、成長、信仰から生じるクリスチャンの生産に専念することによって)、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである。(第二ペ

## II.大背教

テロ 1 章 10-11 節)

わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたもあなたがいつも従順であったように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いつそう(真理に)従順でいて、恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。(ピリピ2章12節)

歴史的な類似性という点では、テサロニケの信者の状況と経験は、本物のクリスチャンが艱難期に直面しなければならないことと非常によく似ています。彼らも偽教師に攻撃され(第一テサロニケ 4 章 13-18 節; 第二テサロニケ 2 章 1-3 節参照)、最も厳しい試練にさらされ(第一テサロニケ 1 章 6 節, 2 章 14 節, 3 章 3-4 節; 第二テサロニケ 1 章 4-7 節)、その状況が重なったので、使徒パウロは彼らの精神状態を非常に心配しました(第一テサロニケ 3 章 1-5 節)。しかし、そのような状況にもかかわらず、彼らは神の言葉に進んで頼ることによって、信仰に対するすべての脅威に打ち勝ち(第一テサロニケ 1 章 6 節, 2 章 13 節, 3 章 6 節; 第二テサロニケ 2 章 13 節; 第一テサロニケ 1 章 3 節を参照)、信者が大小の苦難にどう振る舞うべきかという同時代人と私たちへの模範となっています(第一テサロニケ 1 章 7 節; 第二テサロニケ 1 章 4 節)。主のたとえ話(マタイ 25 章 1-13 節)の賢いおとめたちのように、私たちもまた、来たるべき暗い夜に信仰の灯が消えないように、まだ日のあるうちに真理の油を蓄えておかなければなりません。私たちはこの地上では

## II.大背教

巡礼者に過ぎず、シオンに向かうために毎日、一日ずつ安息日の旅をし、先人の模範に倣っていることを忘れてはなりません。

これらの人はみな、信仰をいだいて[歩みながら]死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら[全世界に]言いあらわした。そう(信仰を)言いあらわすことによって、彼らが(今通っている世界以外の)ふるさとを求めていることを示している。もしその出てきた所(国)のことを考えていたなら、帰る機会があったであろう。しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都を用意されていたのである。(ヘブル11章13-16節)

時代の終わりが訪れようとしている者として([第一コリント 10章 11節](#))、何があろうとも主イエス・キリストに忠実であり続けようと決心した私たちは、この先に待ち受けている課題の難しさにも、救いへの道程で通過しなければならない試練の巧妙さにも、幻想を持ってはいけません<sup>50</sup>。

---

<sup>50</sup> こうした困難の概要については、「来たる艱難期」第1部「はじめに」III

## II.大背教

もろもろの民よ、われらの神をほめよ。神をほめたたえる声を聞えさせよ。神はわれらを生きながらえさせ、われらの足のすべるのをゆるされない。神よ、あなたはわれらを試み、しろがねを練るように、われらを練られた。あなたはわれらを網[牢]にひきいれ、われらの腰に重き荷を置き、人々にわれらの頭の上を乗り越えさせられた。われらは火の中、水の中を通った。しかしあなたはわれらを広い所[救いの場]に導き出された。(詩篇 66篇8-12節)<sup>51</sup>

あらしが通りすぎる時、悪しき者は、もはや、いなくなり、正しい者は永久に堅く立てられる。(箴言 10章 25 節)

悪しき者はその悪しき行いによって滅ぼされ、正しい者はその正しきによって、のがれ場を得る。(箴言 14 章 32 節)

また、ある者たち(=出エジプト世代)がしたよう

---

「艱難期の一般的性質」参照

<sup>51</sup> 詩篇 66 篇は全体として、メシヤの再臨のための勝利の詩篇として預言的に適用されています(ここで引用されている箇所は、忠実な信徒たちが解放された苦難に焦点を当てています)。

## II.大背教

に、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいる(=艱難の入り口にある)わたしたちに対する(同じような背教に陥らないようにとの)訓戒のためである。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。(第一コリント10章9-12節)

最後に、麦と雑草のたとえは、主の千年王国支配の終わりに真の成就を迎えますが([マタイ 13 章 24-30 節](#); [13 章 36-43 節](#))、雑草が麦と一緒に育つのを放っておくという原則は、確かにここにも直接当てはまります。良い穀物に混じっている毒麦や雑草は、サタンが狡猾な方法で教会に紛れ込ませた未信者を表しています。これは、今日、私たちの教会の時代であるラオデキヤの状況を反映しています。この瞬間まで、神は教会全体を「根こそぎ」裁くことがないように、ほとんどの部分において、麦の傍らに雑種が生えるに任せておられました。しかし、艱難期の圧力の下で、誰が「麦」で誰が「もみ殻」であるかは、主が悪人と義人の区別を徐々に明らかにします(繰り返し見てきたように、艱難期の顕著な特徴の一つです)。この広い視野(教会にいる信者も未信者も一望できる)から見れば、大背教によって始まった選民の精練、選別、分離、ふるい分けの収穫の過程も、



## II.大背教

まさにこの分離によって、現在私たちの地上の目からほとんど隠されている不品行なもみ殻の正体を明らかにすることになります。

([ルカ 3 章 16-17 節](#); 良いのと悪いのを集める網のたとえも参照: [マタイ 13 章 47-50 節](#); また、婚宴のたとえでは、ふさわしくない者も登場します: [マタイ 22 章 1-14 節](#); [ルカ 14 章 16-24 節](#))。

畑は世界である。良い種と言うのは御国の子たちで、毒麦は悪い者の子たちである。(マタイ13章38節)

### Ⅲ. 裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

#### 1. 七つの裁きのラッパの目的

七つのラッパの裁きは、聖書的には文字通りの「災い」です(黙示録 9 章 20 節参照。8 章 12 節「災い」と 9 章 18 節の「この三つの災い」を参照)。つまり、肉体的な病気に留まらない、神によって地上にもたらされる災難です(出エジプト記 8 章にある蛙、ブヨ、蠅の災いを参照：これらはすべて出エジプト記 6 章 6 節で「さばき」とも呼ばれています。ヘブル語ではシュパティーム שפטיםと呼ばれています)。約三千五百年前に主がエジプトに与えた十の災い(出エジプト 7 章 14 節-12 章 30 節)のように、また、ここで研究している迫り来る七つの鉢の審判(黙示録 16 章 1-21 節)のように、七つの裁きのラッパは明らかに、並外れた悪に対する神の罰です(イザヤ 26 章 20-21 節参照；レビ記 26 章 14-39 節；申命記 28 章 15-68 節；列王記上 16 章 29 - 17 章 1 節も参照)。これらの裁きは、一方では前例のない霊的退廃(すなわち大背教)、他方では前例のない無法と世俗的な領域における増大する悪魔の支配(黙示録 6 章 1-8 節で最初の四つの封印に描かれている反キリストの王国のとる政策の顕著な現れ)に応じて、艱難が既に進行した後(年代は下記参照)起こるものです。しかし、これらの災いの目的の大部分は、この時代に蔓延る桁外れた背教、退廃、無法、悪に対する神の怒りを表すものですが、その根本的な目的は警告であることを指摘

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

しないわけにはいかないでしょう。聖書では、ラッパを吹くことの第一の意味は、危機の前に警報を鳴らすことであることは、多くの聖書の類似点から明らかです(例えば、[民数記 10 章 1-9 節](#); [ヨシュア記 6 章 1-5 節](#), [6 章 20 節](#); [エレミヤ 4 章 19-21 節](#), [6 章 1 節](#); [ホセア 5 章 8-9 節](#); [アモス 3 章 6 節](#); [ゼパニヤ 1 章 15-17 節](#); [第一コリント 14 章 8 節](#))。特に差し迫った神の裁きを警告することがあります(特に[エゼキエル 33 章 1-20 節](#) と [ヨエル 2 章 1 節](#) を参照)。そして、前に見たように、黙示録の七つの裁きのラッパは、ラッパの祭を象徴しています。この祭日は(ちょうど贖罪の日が大艱難期の開始を象徴的に示しているように)、警告と準備の必要性を意味し、ユダヤ人の儀式暦の中で、大艱難期の前半の開始を示す時期に行われます<sup>52</sup>。大艱難期は、これまで見てきたように、人類が経験したことのないような激しい恐怖、苦しみ、試練の時となります。未信者にとって(そして背教の恐れがある信者にとって)、その試練は、この先の苦しみよりもさらに大きなものとなります。艱難期の後半になると、反キリストは人類に、自分の主人であるサタンに忠誠を誓うか、さもなければ逆らった結果を受けるかの選択(すなわち、「獣の印」を受けること:[黙示録 13 章 16-17 節](#))を迫ります。聖書は、この刻印を自発的に受けることによって、将来悔い改める可能性が一切なくなり、その結果、自らに裁きを下すに等しいと明言しています([黙示録 14 章 9-11 節](#), [16 章 2 節](#), [19 章](#)

---

<sup>52</sup>『悪魔の反乱』第 5 部「裁き、回復、置き換え」II.8.c.3.5 節「ラッパ(ロシュ・ハシヤナ)」参照。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[20 節](#), [20 章 4 節](#)参照)。地球上のすべての住民の永遠の未来が、このように劇的な形で天秤にかけられようとしている今、強烈で紛れもない警告を与えることは適切であるだけでなく、手遅れになる前に真理を見極めて受け入れる最後のチャンスを、最も固くなった心にさえ与える、愛に満ちた神の恵み深い行為なのです。

## 2. 七つのラッパの時系列

黙示録の 6 章から 8 章までの 7 つの封印を扱ったとき、封印に伴う動向は、挙げられた順にしたがって始まりますが、一時的なものではないことを見てきました。つまり、一度封印が解かれ、その封印が示す傾向が始まると、キリストの再臨まで中断はないでしょう。(例えば、最初の四つの封印が示す反キリストの支配の及ぼす影響は継続して、再臨までなくなることはありません)。これとは対照的に、七つのラッパの裁きは、封印と同じように順番に起こりますが、次々と起こります。出エジプト前のエジプトの災いのように、それぞれのラッパの裁きは特定の時間続き、それが終わると次の裁きが始まります。これらの災いはまさに神からの裁きであり、パロとエジプト(それぞれ反キリストとその王国の明確な予型)への裁きと明らかに類似しているので、(出エジプト前の場合と同様に)その一撃一撃が不信心な世界に個々に捉えられ、神から出たという事実が簡単にごまかされ、片づけられるような不明瞭な形になっていないことは、確かに適切なことなのです。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

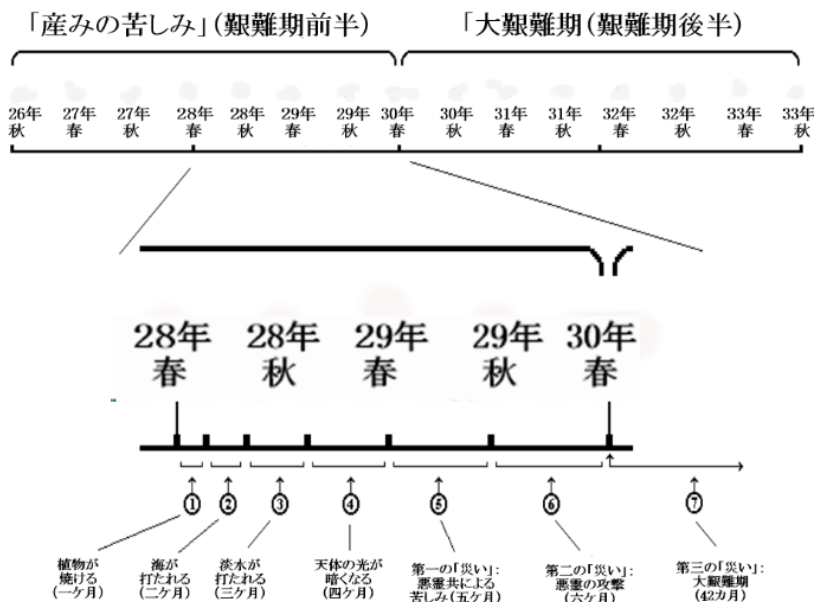
この七つのラッパの裁きの具体的な年代については、神によって非常に正確に調整されていることに注意する必要があります。第六のラッパの裁きに関しては、[黙示録 9 章 15 節](#)に、それを管理する四人の天使が「時、日、月、年」のために正確に準備されたと書かれていますし、第五のラッパの裁きの場合は、[黙示録 9 章 10 節](#)に、サソリのような痛みの災いが 5 カ月間続くと書かれています（一般に考えられている苦痛が続く期間ではなく、災いの長さを指しています）。このことは、七つのラッパの裁きの期間と強度が増加するという原理（最後のラッパは、歴史上最も激しい審判である大艱難で、七年の期間の後半の 42 カ月間続く）があるので、その長さを予測することができるでしょう。第五の裁きが 5 カ月続くということは、同様に、最初の六つのトランペットにそれぞれの数に対応する月数を割り当てて考えることができます（第七のトランペットは、このシリーズの第四部で詳しく述べますが、大艱難期の後半期全体を表しています）。この月数を足すと（つまり、第一のラッパが 1 ヶ月、第二のラッパが 2 ヶ月、第三のラッパが 3 ヶ月、第四のラッパが 4 ヶ月、第五のラッパが 5 ヶ月、第六のラッパが 6 ヶ月）、合計 21 ヶ月となり、艱難期の前半期間の合計 42 ヶ月のちょうど半分となります。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

#### 警告の七つの裁きのラッパ

(黙示録8章6節-11章19節)

— 艱難期 —



上の図から分かるように、これら六つの裁きは、大艱難期の開始の直前に順番に位置しています(艱難期の最初からではなく、また最初の42ヶ月の間に何らかの形で分散しているのでもありません)。上の図に示されているように、これらの裁きが大艱難期に先行し、さらに直接大艱難期に突入する事は、ほとんど反論の余地がないほど理にかなっています:

1) 増幅の原理は、物事のこのような理解を促します。出エジブ

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

トの十の災いがどんどんエスカレートしてひどくなったように(下記参照)、これらの裁きが進むにつれて、事態がどんどん悪くなると予想されるからです。上の図に示されているように、災いの期間が延びることは、裁きの重みを増し、警告に力を与えることになります(世界中の世俗的な法制度だけでなく、不敬虔な行為に対する神の思いの表現方法にも適う、不品行の再発に対する厳罰化の原則に従っています：[レビ記 26 章 14-39 節](#)；[申命記 28 章 15-68 節](#)を参照)。

2) 黙示録をざっと読んだらわかるように、七つの裁きのラッパと黙示録 16 章の七つの鉢の裁きの間には明らかな類似性があります。ここで重要なのは、七つの鉢の裁きはハルマゲドンと再臨の直前にあり、大艱難期の 42 ヶ月の後半にあるという事実です(本シリーズの第 5 章参照)。したがって、意図的に並列されたラッパの裁きが著しく異なった時期に起こるとすれば、それは極めて異例なことです。

3) ラッパの役割は、裁きを通して警告を与えることです(つまり、大艱難期の恐怖が始まる前に、また獣の印を受け入れることによって悔い改めの可能性が失われる前に、世界の住民を霊的硬直状態から揺さぶり起こすための、情け深い最後の試み)。ですから、この七つのラッパの裁きは、警告の対象となる出来事(大艱難期)の直前に行われるのは、理にかなっています。七つのラッパの裁きが艱難期の初めに集中するなら、大艱難期が始まるまでの 21 ヶ月間という不可解な猶予を与えることに

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

なり、意味を持たなくなります。同じことが、最初の六つのラッパの裁きが艱難期の前半の 42 ヶ月間に分散して起こる場合にも言えます。人は、どんなに恐ろしい出来事を体験しても、時間の経過と共に、忘れ無視するという悪名高い性質を持っているので、これらの裁きに代わって猶予が与えられても、逆効果になって警告の目的は果たせない傾向があることは想像できます。実際、黙示録に記されているように、これらの裁きと第七のラッパの間には明確なギャップはなく、出エジプト記の場合と同様に、警告と罰の間に継ぎ目のない連続性があることが推測されるのです。

4) 七つのラッパの裁きの流れは、実際、大艱難期に直接つながり、明確なギャップや隙間はありません(例えば、[黙示録 10 章 6-7 節](#); [11 章 1-14 節](#); また、大艱難期にのみ関係する出来事が含まれている [12-13 章](#)と [11 章 15-19 節](#)を参照してみてください)。聖書によると、(特に、第七のラッパは大艱難期のことであるため)ラッパの裁きの終わりを直接大艱難期に「繋げて」理解するしかありません。

### 3. 七つのラッパの裁きの厳しさの増幅

ラッパのさばきは、その期間(それぞれ 1、2、3、4、5、6、42 ヶ月)が順次拡大するだけでなく、そのもたらす苦痛の影響も段階的に強まります:



### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

・第一のラッパ：**植生の荒廃**： 大地の 3 分の 1 が焦土と化し、草木の 3 分の 1 が焼き尽くされるが、人間の死者については言及されていない。

・第二のラッパ：**海の災害**： 海の生き物の 3 分の 1 が殺され、船の 3 分の 1 が破壊される。

・第三のラッパ：**淡水の被害**： 世界の淡水の 3 分の 1 が汚染され、結果として多くの人間が死亡。

・第四のラッパ：**天体の光が打たれる**： この天体の光の 3 分の 1 の減少に関連する死者は言及されていませんが、これはすべての人類と世界のすべての部分が悪影響を受ける最初の裁きです。この光の減少によって引き起こされる苦しみを過小評価すべきではありません([黙示録 16 章 10-11 節](#)参照)。これらの最初の四つのラッパの裁きの管理者は、[黙示録 7 章 1-3 節](#)の四人の天使であり、「地と海に害を与えることが与えられています」<sup>53</sup>。なぜなら上記の四つの裁きはすべて、「地」(すなわち、陸地)か「海」(すなわち、地上の水)、あるいは、第四の裁きの場合その両方(すなわち、光の剥奪がすべての生き物に

---

<sup>53</sup> この 4 人の天使は「権威」(ギリシャ語: exousiai)である可能性が高く、選ばれた天使の中では大天使(これらの下位の天使を働かせるラッパの音を鳴らす)に次ぐ位階です。「サタンの反乱」第 4 部「サタンの世界システム」Ⅲ.3.b.4 節「権威」を参照。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

影響を与える)を直接の対象としているからです。この点で、最後の三つのラッパの裁きとは異なっています。そこでは、地や海ではなく、人間が裁きの対象として直接の標的とされ、人間の苦しみと死が、単なる付随的な結果ではなく、主要な結果となっています。さらに重要なことは、最後の三つのラッパの裁きが、神によって定められたものでありながら、悪魔の力によって行われるという事実です<sup>54</sup>。これは裁きが激しいものになっていく明らかなしるしです。実際、これらの最後のラッパのさばきは、前の四つのさばきよりも性質が非常に厳しいので、「三つの災い」という名前がつけられています(黙示録 8 章 13 節と黙示録 9 章 12 節, 11 章 14 節, 12 章 12 節を参照)。

・第五のラッパ： **第一の災い：悪霊の襲撃**：地上のすべての不信仰な人々が影響を受ける。

・第六のラッパ： **第二の災い：悪霊による滅び**：世界人口の 3 分の 1 が殺される。

・第七のラッパ： **第三の災い：大艱難期**：「第三の災い」は、上述したように、大艱難期と同じ意味です(黙示録 12 章 12 節)。正確な数字は記されていませんが、この 3 年半の期間には、こ

---

<sup>54</sup>『悪魔の反逆』第 4 部：「サタンの世界システム」、第 III.5 節「神が悪霊を用いる」参照。

### Ⅲ.裁きのラッパ：黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

れまでに起こったことのないような甚大な人命の損失がもたらされます([イザヤ 13 章 12 節](#))。ハルマゲドンで行われる殺戮だけでも気が遠くなりますし([黙示録 14 章 17-20 節](#); [エゼキエル 39 章 4-6 節](#), [39 章 11-20 節](#)参照)、ハルマゲドンに先立って起こる黙示録 16 章の鉢のさばきは、(合わせて世界人口の 3 分の 1 以上の命を奪う)ラッパのさばきよりも明らかに悲惨です。最後に、大艱難期が 42 ヶ月間続くという事実も、その前の第六のラッパの裁きのちょうど 7 倍の長さであり、この最後の裁きが比較にならないほど恐ろしいものであることを示しています([マタイ 18 章 22 節](#)参照)。艱難期の前半がいかにも恐ろしいものであっても、第七のラッパによって解き放たれる大艱難期に比べれば、それは「災いの始まり」に過ぎないからです([マタイ 24 章 3-13 節](#))。

#### 4. 七つの裁きのラッパが信者に及ぼす影響

主イエス・キリストを信じる者として、私たちは聖なる関心を持って、来たる艱難期の出来事を慎重に見ることは正しいことです。私たちは恐れず、主がすべての脅威から私たちを解放してくださいという信仰を堅く持っていますが、それでも、来たる艱難期に関する警告を心に留めることは完全に正当なことです。聖書がこれらの将来の出来事について非常に詳しく説明しているのは、娯楽としてではなく、艱難期が来たときに霊的に備えられているようにするためです。たとえ、私たちが艱難期を耐

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

え忍ぶことを免れることが神のみこころであったとしても、これは正当な行動です(「キリストの苦しみを共有」する者として、私たちも必ず個人的に艱難を経験することになります)。私たちが確信できることの一つは、この七つの裁きのラッパ(と黙示録 16 章の鉢の裁き)に関することです。これらの裁きは、まさに不信仰者の世界に対する神よりの罰であり、特に反キリストとその政権を積極的に支持する人々に対するものだということです。ですから、これらの七つの災いは、神の民を害するためのものでも、そのために意図されたものでもありません。艱難期は、信者が耐え忍ぶべき歴史上最も困難な時期ですが、ここで検討されている二組の懲罰的な裁きのどちらも原因となるわけではありません。ちょうど、144,000 人が神による印を受けて [黙示録 7 章 1-3 節](#)にある四人の天使によってもたらされる災いを免れるように、これらの裁きは神の民のためのものではないだけでなく、私たちもその最悪の結果を免れることができると確信してよいのです。

[黙示録 9 章 4 節](#)では、額に神の印がない者だけが、アバドン-アポリオンの悪魔の軍勢のサソリのような刺し傷を受けます。このことから、信者はこの災いに遭わないことがわかります。前回の 144,000 人(本シリーズ第 2 部 B)で見たように、「額にある」神の印は、厳密に言えば、そのエリート集団に与えられた特別な権威の印のことを指しています。しかし、その際に指摘しましたが、すべての信者は神の聖霊の証印を受けています。また、聖書に神の敵が裁かれても、神の民が保護されるという類似し

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

た状況での神の保護が記されています([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節](#), [4 章 30 節](#))。1) 来たるべき殺戮から守るためエルサレムの正しい人々の額につけられた印([エゼキエル 9 章 1-6 節](#))、2) エジプト人の初子をすべて殺す破壊者から守るため信者の戸口につけられた過越の印([出エジプト 12 章 7-13 節](#))、などが最も印象的で当てはまる例です。

一つ目のエゼキエル書の例に関して言えば、印をつけられていない者はすべて滅ぼされますが、印をつけられている者はすべて助命されるということです。このように神は、その時代の背信を「嘆き悲しむ」者と、背信に甘んじて加担する者とを峻別されます。神の友と神の敵との間のこの鋭い区別は、明らかに[黙示録 9 章 4 節](#)の要点であり、二つのカテゴリーだけを考えれば、すべての信者は神を拒む者のカテゴリーではなく、正しい 144,000 人と関連するカテゴリーに入ることは同様に明らかです。

二つ目の例の、出エジプト記の箇所については、戸につけられた印の目的が「わたしがエジプトを打つとき、あなたがたに破壊的な災いが及ばないようにするため」([出エジプト 12 章 13 節](#))であることが最も興味深いです。また、同じような印がなかったとしても、イスラエルの民はその前に起こった九つの災いの悪影響を免れました([出エジプト 8 章 22 節](#), [9 章 4-6 節](#), [9 章 26 節](#), [10 章 23 節](#)参照)。パロと抵抗するエジプト人に対する裁きにおいて、神は意図的かつ明瞭にエジプト人と神の民を「区別」しています([出エジプト 8 章 23 節](#), [9 章 11 節](#), [10 章 6 節](#), [11](#)

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[章 7 節](#)参照)。特に、出エジプトが艱難期の預言的な「予型」であることを考えると(一方ではパロとその王国、他方では反キリストとその王国が類似していることを考慮してください)、[黙示録 9 章 4 節](#)の「額に神の印を押された者たち」という言及は、(この特別な印が彼らだけに適用されるとしても)144,000 人だけに限定されるのではなく、すべての信者に一般的に当てはまると考えるべきです。

同様に、[黙示録 9 章 20-21 節](#)では、六つの災いによって殺されなかった人々は、依然として神を恐れぬ行いを悔い改めません。ここでは、144,000 人は言及もされていませんが、そのために彼らが冒瀆的な行いを続ける「残った人々」のカテゴリーに入らないことは明らかです。このように、[黙示録 9 章 20-21 節](#)では、世界が中間のない二つの陣営に峻別されています(繰り返し指摘してきたように、これは艱難期の主要テーマであり主要目的です)。ですから、[黙示録 9 章 4 節](#)は、出エジプトの災い、エルサレム陥落のように、本当に神に属する者は、たとえその時代が例外的に困難であっても、神の裁きを受けずに済むという安心感を与えるためのものなのです。私たちは火と水の中を通らなければならないかもしれませんが([詩篇 66 篇 12 節](#))、神の恵みと神の憐れみによって、神の敵を焼き尽くす正しい裁きを免れることを確信していることができます。

あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上に

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

あふれることがない。あなたが火の中を行くとき、  
焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことが  
ない。(イザヤ43章2節)

さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたの  
うしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで(艱難期が  
終わるまで)、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおら  
れる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地  
はその上に流された血をあらわして、殺された者  
を、もはやおおうことがない。(イザヤ26章20-21節)

しかし、主に注意深く従っているすべての信者に当てはまる  
ことが、背教に陥っている人々に保証されるとは限りません。艱  
難期は、神の民と悪魔の従者との間に激しい分裂と区別がある  
時代であり、中間の領域はほとんどないでしょう。上記のイザヤ  
書からの引用の背景には、広範な背教の結果として大規模な  
軍事的敗北があることを思い起こすべきです(歴代誌下 28 章  
参照)。七つのラッパの裁きも同様に、邪悪で不従順で背教的  
な世界に下りますが、その影響から守られるのは、真の忠実な、  
主に従う者たちだけです。前者に陥らず、後者に属すると心に  
決めている私たちは、これらの出来事に対する世の反応にも備  
える必要があります。この国の最近の出来事で、攻撃や災害が  
神の裁きと関係があるかもしれないというすべての示唆が盲目的  
な(そして神を恐れぬ)憤怒で迎えられたように、世界がこの  
七つのラッパの裁きに対してまったく無反応で、自らの悪と背

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

教について何らの落ち度も見い出そうとしないことが予想されます。実際、[黙示録 9 章 20-21 節](#)には、まさにそのように書かれています。しかし、私たちイエス・キリストに忠実な信者は、これらのことから守られます。また、同様に重要なこととして、私たちは、この世界に降りかかろうとしている困難な時代は、私たちのせいではないという完全な確信を持つことができます。それどころか、これらの裁きも、艱難期のすべての神の裁きも、実は信者の**益となる**ものであり(鉢の裁きについては、真の教会を迫害した不信仰な世に対する具体的な神の懲罰。黙示録 16 章を参照)、それゆえ、私たちはそれらを前にして喜ぶべきなのです([詩篇 97 篇 8 節](#); [黙示録 16 章 5-6 節](#); [詩篇 48 篇 11 節](#); [黙示録 8 章 3-5 節](#), [18 章 6-7 節](#)を参照)。ですから、私たち信者は、これらの出来事が主の再臨と私たちの究極的な解放が近づいているしるしであることを覚え、その栄光の日まで信仰を堅く強く持ち続けるよう励まし合う必要があります。

また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み、海と大波とのとどろきにおじ惑い、人々は世界に起ろうとする事を思い、恐怖と不安で気絶するであろう。もろもろの天体が[強力に]揺り動かされるからである。そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう。これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」。それから一つの譬



### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

を話された、「いちじくの木を、またすべての木を見なさい。はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。(ルカ 21 章 25-31 節)

あなたがたは弱った手を強くし、よろめくひざを健やかにせよ。心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と。(イザヤ35章3-4節)

#### 1. 植生の荒廃 (黙示録 8 章 6-7 節)

(6)そこで、七つのラッパを持っている七人の御使が、それ[ラッパ]を吹く用意をした。(7)第一の御使が、[自分の]ラッパを吹き鳴らした。すると、血のまじった[隕石の]雹と火とがあらわれて、地上に降ってきた。そして、地の三分の一が焼け、木の三分の一が焼け、また、すべての青草も焼けてしまった。

図 1 で説明したように、第一のラッパの裁きは、艱難期の前半のちょうど半分の時期に始まり、一ヶ月間続きます。艱難期

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

の始まりの時、第七の封印が解かれた後、不可解な雷鳴、いまだかつて無かったような稲妻、世界的な地震という形で、世界は紛れもない神の警告を受けていました(黙示録 8 章 1-5 節)。しかし、警告を受け止めるどころか、約二年経っていたとしても、この最初の裁きの時には、世界はく与えられた警告についての >すべての疑いが払拭される一連の出来事を目撃することになります。なぜなら、艱難期の前半の半ばには、以下のような状況になっているからです。

- ・反キリストは、自国「バビロン」で権力を得ただけでなく、自分の王国、すなわち「復活したローマ」建国に向けて順調に進んでいることでしょう。
- ・大背教が進行中です。
- ・反キリストの偽宗教は、彼の世界政治運動と連動して、世界中で勢力を拡大していくでしょう。
- ・144,000 人の働きは、本格化するでしょう。
- ・二人の証人、モーセとエリヤの働きが本格化します。
- ・神殿が(何らかの形で)再建されます。
- ・前代未聞の世界的な不法の傾向が痛感されるでしょう。

### Ⅲ.裁きのラッパ：黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

・四つの封印の動向は、獣の王国の中で始まっているでしょう(その影響と波紋は遙か遠くまで及びます)。

これらの出来事はすべて適切な時に取り上げられることとなりますが、ここでの目的には、これらの進展はどれも不信仰な世界を目覚めさせることはなかったと記しておくだけで十分でしょう。聖書の示唆することは、この時期までにほとんどの硬い心が更に硬くなり、あまりにも多くの優しい心も硬くなり、警告の裁きが始まるべき時が来たということです。

この第一のラッパの裁きを含む人類史の全体計画は神のものであり、(封印を小羊が解いたことに見られるように：[ヨハネ 5 章 22-30 節](#)参照)それを執行する権威が与えられているのは小羊です。しかし、私たちは、その管理者が 7 章に登場する四人の天使の一人で、この七つのラッパを鳴らす大天使の直下の階級の「権威」と特定しました。これまで見てきたように、これらの高位の天使には多数の部下がいることは間違いなく([マタイ 26 章 53 節](#)の選民天使の軍団の存在を参照してください；[列王記下 6 章 17 節](#)も参照)、世界の風を抑制する能力が暗示するように([黙示録 7 章 1 節](#))、(この最初の四つの裁きのラッパの領域の)天変地異を操る特別な力を神から授かっています<sup>55</sup>。父なる神と子羊の究極の権限から働くこの直接的で目

---

<sup>55</sup> 「聖書の基本」パート 2A:天使論、セクション II.9.3.4、「権威」を参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

に見えない天使の代理人に加えて、これらの裁きは、中間的な人間の代理人も関与し、二人の証人であるモーセとエリヤの言葉によって世界に宣言され、目に見える形で「解き放たれる」ことをここで言及しなければなりません。これは、出エジプトの災いがモーセによって下され(出エジプト記 7-11 章)、その時代の裁きがエリヤによって下されたのと似ています(特に三年半の干ばつ:[列王記上 17 章 1 節](#); [ヤコブ 5 章 17 節](#))。これに関連して、[黙示録 11 章 6 節](#)で、干ばつと水が血に変わることが「あらゆる種類の災い」と共に具体的に言及されていることは重要です。この二つの災いは、神の裁きを下すこの二人の歴史的働きを最もよく特徴づけるからです([黙示録 11 章 6 節](#))。水を血に変えることは、モーセの権威を証明するために主がモーセに与えた重要な第三の「しるし」であり([出エジプト 4 章 9 節](#)と[黙示録 11 章 5-6 節](#))、エリヤは、北王国を苦しめた三年半の干ばつで最も有名です([ヤコブ 5 章 17 節](#)と[黙示録 11 章 5-6 節](#)参照)<sup>56</sup>。

ギリシャ語の「ひょう」(ハラザ chalaza, χάλαζα)は、空から降ってくるもの(流星群も含む)に使われます<sup>57</sup>。ここで、ソドムとゴモラに降った「燃える硫黄[岩石]」(植物も枯れた:[創世記 19](#)

---

<sup>56</sup> 下記セクション V. 参照。

<sup>57</sup> この岩石の雹とは対照的に、大艱難の始まりである第七のラツパに続く地震に伴う雹([黙示録 11 章 19 節](#))も、第七の鉢の裁きの一部である大地震に伴う雹([黙示録 16 章 21 節](#))も、明らかに氷で構成されます。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[章 23-25 節](#))と、ハルマゲドンで獣の軍勢に降る「燃えるひょうの石」(血も含まれる：[エゼキエル 38 章 22 節](#))との密接な類似性を考えると、この雹を同じように、つまり劇的で壮観な方法で地球に降り注ぐ「隕石」([詩篇 11 篇 6 節](#)参照)として理解するのが正しいでしょう<sup>58</sup>。

しかし、この裁きは第一に、人類の経験の記憶の中でまったく前例のない規模の、とてつもなく悲惨な影響をもたらすという点で、独特なものとなるでしょう。地球の 3 分の 1 が、これらの焼夷弾が生み出す火によって荒廃し、それによって世界の樹木の 3 分の 1 が破壊され、緑豊かな草原がすべて燃え上がるでしょう。「地球の 3 分の 1」という言葉には、このような世界的な火災があらゆる人工構造物に必然的にもたらす甚大な付随的損害が暗示されており、地球の陸地の 3 分の 1 全体がそのような影響を受けるほど(特定の地域ではなく世界中に分布する)、地球上のあらゆる場所で引き起こされる大規模な一連の火災によって、かなりの人命損失が生じることを理解しなければなりません。とはいえ、出エジプトの世代やエリヤの時代の信仰者が神の裁きの直接的な影響を免れたように(ただし、これらの裁

---

<sup>58</sup> ギリシャ語の「ハラザ カイ ピュール」(雹と火)は、「二詞一意 (hendiadys)」として知られている表現法が使われていて、二つの言葉をもってそれぞれの主要な特徴を重ね合わせている単体を表現します(つまり燃える隕石のことです)。ソドムとゴモラに降った「火と硫黄」の場合と同じで、火と硫黄の破片が別々ではなく、硫黄が燃えていたと解すべきです。

### Ⅲ.裁きのラッパ：黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

きがもたらした付随的な苦難のすべてを免れたわけではありません)、私たちは、モーセが下した出エジプトの裁きの間、神が神の民イスラエルを守られた例([出エジプト 8 章 22 節](#), [9 章 4-6 節](#), [9 章 26 節](#), [10 章 23 節](#))、またエリヤが下したイスラエルへの裁きの間、バアルにひざを屈しなかった人々の命を守られた例([列王記上 19 章 18 節](#)参照。 [列王記上 18 章 1-4 節](#); [ローマ 11 章 2-4 節](#)も参照)にあるように、真に御自分のものである者は、この裁きや他のラッパの裁きがもたらす困難や広範な破壊にもかかわらず、同様に、ある程度の保護を享受すると考えることができます(例えば、[出エジプト記 9 章 11 節](#)でモーセとアロンは腫れ物に悩まされませんでした)。

この裁きの第二の特徴は、隕石に意図的に血が含まれていることで、これは単なる自然現象ではなく、独特なものであることを示しています。黙示録の他の「血の裁き」([黙示録 8 章 8 節](#), [11 章 6 節](#), [14 章 20 節](#), [16 章 3-6 節](#))と出エジプト記の裁き([出エジプト 7 章 17-21 節](#)参照; [詩篇 105 篇 29 節](#))と同様、ここで「燃えるひょう」に混じった血というのは文字通り血であるということが重要な点です([エゼキエル 38 章 22 節](#)参照)。(空洞のある燃える球体の中にあり、衝突時に飛び散る)血が含まれることで、これは単なる偶発的な、しかし恐ろしい気象現象ではなく、むしろ神の警告と裁きの紛れもない行為であるという、地球の住民に対する明確なメッセージとなります。超自然的に起こるこの種の血は、神の怒りと不快を意図的に象徴するものとしてよく知られているからです([ヨエル 2 章 31 節](#); [黙示録 6 章 10 節](#), [6](#)

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[章 12 節](#); [創世記 9 章 4-6 節](#); [レビ記 17 章 1-16 節](#); [イザヤ 26 章 21 節](#); [第二ペテロ 3 章 10 節](#)参照)。これは罪のない血を流すことに対する警告であり(反キリストとその従者たちはこれを無視するでしょう)、その警告を軽んじる者すべてに神ご自身が血の裁きを下すという警告です(この裁きはハルマゲドンで完遂されるでしょう)。

この災いの間、信者は大きな神の保護を受けるでしょうが、だからといって、その結果すべてを免れるわけではありません([エレミヤ 45 章 1-5 節](#)参照)。この第一のラッパの裁きで発生する大規模な火災は、多くの個人の住居を破壊するので、私たちの家が影響を受けないとは言い切れません。私たちが確実に言えることは、この裁きの恐ろしい性質にもかかわらず、神は私たちのあらゆる必要を満たしてくださいということです([詩篇 37 篇 25 節](#); [ピリピ 4 章 19 節](#); [へブル 13 章 5-6 節](#))そして、この裁きを通して、神は必ずすべてを働かせて、私たちのために益とさせていただきます([創世記 50 章 20 節](#); [ローマ 8 章 28 節](#))。

#### 2. 海の災害： (黙示録 8 章 8-9 節)

- (8) 第二の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えさかっている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして、海の三分の一は血となり、
- (9) 海の中の造られた生き物(すなわち魚類や他の生

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

き物)の三分の一は死に、舟の三分の一がこわされてしまった。

この第二のラッパの裁きにおいても、第一のラッパの裁きと同様の機構が働きます。裁きは神によって定められたものであり、イエス・キリストの顕現の一部であり、大天使によって宣言され、四つの「力」(すなわち、[黙示録 7 章 1-3 節](#)の風の天使たち)の一つによって管理され、二人の証人によって施されます。最初のラッパの裁きは劇的なものでしたが、このような巨大な前兆が天上に現れ、それが地上に降下して恐ろしい結果をもたらしたことは、この第二の裁きが最初の裁きよりも重要であることを明確に示しています。(第一のラッパで陸地に行われたように)この山のような大きさのこの燃える隕石が、第二のラッパで地球の海を襲い、前代未聞の荒廃を引き起こします。第一のラッパの裁きの多くの隕石が地上のあらゆる場所に落下し、その結果、地上の植生の三分の一が破壊されたのに対して、この大きな燃える隕石の衝撃は集中的で、ある特定の地域に落下し、その壊滅的な影響は放射状に広がっていきます。そのような最初の影響は、世界の海の三分の一全体が血に変わることで(これも衝突地点から放射状に広がります)。ナイル川が血に染まった時([出エジプト 7 章 14-24 節](#))と同じように、この濃縮された汚染は、やがて自然のプロセスによって希釈され、消滅しますが、その有害な影響のために、海に住む生き物の全体の 3 分の 1 が死ぬこととなります(同様のことがナイル川の魚にも起こりました：[出エジプト 7 章 18 節](#), [7 章 21 節](#); [詩篇 105 篇 29 節](#))。



### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

この巨大隕石衝突の二つ目の壊滅的な影響は、世界の船舶の三分の一が破壊されることであり、これは間違いなく、衝突地点から外側に向かう津波と、その周辺にあるすべてのものを飲み込む激しい渦に起因するものです。海で失われるこの多数の船で発生する多大な人命損失に加え、このような出来事から生じるに違いない驚異的な波によって、多くの島々や海岸線に多大な犠牲者が出ることは疑いなく([ルカ 21 章 25-31 節](#)参照)、この裁きは最初の裁きよりも致命的であることはほぼ確実です。また、上に述べた時間軸に詳述されているように、この裁きの効果は最初の裁きの効果の二倍(この裁きの効果は二ヶ月間続く)であることにも注意が必要です。最後に、この裁きに伴う血は、上で見たように警告のしるしであるだけでなく、実際にこの第二の裁きの一部を行う手段となります。

この災いの間、信者は神の大きな保護を受けますが、だからといって、私たちがそのすべての結果を免れるわけではありません([エレミヤ 45 章 1-5 節](#)参照)。この第二のラッパの裁きによって引き起こされる荒廃は、(世界の海運の三分の一が失われ、世界の漁業の三分の一が失われることによって食糧供給が途絶え、世界の沿岸地域の多くが荒廃することによって引き起こされる)大規模な経済的悪影響をもたらすでしょう。私たちの生活や経済状況が影響を受けないとは言えません。確実に言えることは、この裁きの痛ましい性質にもかかわらず、神は私たちのあらゆる必要を満たしてくださるということです([詩篇 37 篇 25 節](#); [ピリピ 4 章 19 節](#); [ヘブル 13 章 5-6 節](#)参照)。神は私たち

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

のあらゆる必要を知っておられ、どのような歴史的状況であろうとも供給し続けてくださるという確信をもって([マタイ 6 章 25-34 節](#))、神が私たちを顧みてくださいという絶対的な信仰の確信のもとに、すべての思い煩いを神に委ねなければなりません([第一ペテロ 5 章 7 節](#); [詩篇 55 篇 22 節](#)参照)。

#### 3. 淡水の被害 (黙示録 8 章 10-11 節)

(10)第三の御使が、(その)ラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星(文字通りに「大きな星」)が、空から落ちてきた。そしてそれは、川の三分の一とその水源との上に落ちた。  
(11)この星の名は「苦よもぎ(アブサン)」と言い、水の三分の一が「苦よもぎ」のように苦くなった。水が苦くなったので、そのために多くの人(地上の人々)が死んだ。

第一の裁きのラッパの「ひょう」(隕石の破片)から、第二のラッパの裁きの「山」(とても大きな隕石)、そして今度は「星」(小さな小惑星)へと、裁きのたびに落下する物体が大きくなっていきます。ギリシャ語の「大きな星」は、黙示録が書かれた時代の観点から理解されなければなりません。今日、私たちがこの言葉を使う意味での大きさの「星」が地球に衝突すれば、地球全体が完全かつ即座に蒸発することは明らかです。しかし、ギリシャ

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

語のアスター(ἀσ τ ῆ ρ)は、あらゆる発光天体(流星、小惑星、惑星、あるいは恒星)を指します。「星」の「大きさ」も同様に、絶対的な観点からではなく、他の光り輝く天体の目に見える大きさと比較して理解されるべきです:この小惑星が大気圏に突入するとき、それは空に見える他のものと比較して最も印象的でしょう。それは、第二の裁きのラツパの山のような隕石と比べても同じで、この小惑星はより大きいだけでなく、より明るいからです。火で赤く輝くだけでなく、「たいまつ」のように非常に明るく、白熱した光を放つのです。

この小惑星が世界の川や泉の三分の一に当たるということは、いくつかのことを暗示しています。この小惑星が世界の川と泉の三分の一に落下するという事実が暗示するいくつかのことの第一に、最初の二つのラツパの裁きの隕石の落下が真っ向からぶつかってくるものであったのに対し、この小惑星は地球の大気圏に斜角で入り、緩やかに降下するため、世界的な視認性が高まり、前の二つの裁きの場合よりもさらに劇的な視覚効果をもたらすと考えられます。第二に、世界の河川と泉の三分の一を汚染するという結果をもたらすには、この小惑星は地球の大気圏の中を長距離通過して徐々に崩壊し(おそらく最終的には爆発で終わる)、その結果、小惑星の物質が有害な放射性降下物の形で大気中に拡散する可能性があります。こうして生成された放射性降下物は、世界の淡水供給の三分の一を汚染するのに十分な量となり、この悲惨な事態が「地上の多くの人」を死に至らしめます。ここでは、(この箇所からしばしば誤

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

って解釈されるように)世界人口の三分の一が滅ぼされるとは明記されていませんが、それでも、この第三のラッパの裁きでは、第二の裁きよりも多くの死者が出ることになります。死者の数の増加、裁きの長さ(上記の予測によれば、3 ヶ月間続く)、そして、この裁きが他の二つの裁きよりもさらに劇的な出来事(すなわち、広範囲で見える明るい小惑星の降下)で始まることを考えると、激しくなっていく裁きが続行中であることがはっきりとわかります。

(時々間違われていますが)「苦よもぎ」は天使のことではなく、この小惑星がもたらす影響から付けられた名前に過ぎません。この小惑星がすべて「苦よもぎ」で構成されていると理解する必要はありませんが、(ちょうど、第一のラッパの裁きで隕石の破片に文字通りの血が含まれていたり、また第二のラッパの裁きで大きな隕石が文字通り血を誘発したように)小川や泉に「苦ヨモギ」の影響が生じるのは、文字通りの意味であると考えべきでしょう。「苦よもぎ」または「アブサン」は、アルテミシア属の苦い植物で、聖書では、その特別な苦味の性質を理由に、しばしば比喩的な意味で用いられます(参照：[申命記 29 章 18 節](#)；[箴言 5 章 4 節](#)；[エレミヤ 8 章 14 節](#)，[9 章 15 節](#)，[23 章 15 節](#)；[哀歌 3 章 15 節](#)，[3 章 19 節](#)；[アモス 5 章 7 節](#)，[6 章 12 節](#))。この小惑星がもたらす放射性降下物の影響は、いずれにせよ、世界の淡水の三分の一を飲めないほど苦くすることは事実です。しかし、最初の二つのラッパの裁きにおける文字通りの血のように、文字通りの「苦よもぎ」の存在は、この裁きが神の御

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

手からもたらされたものであり、それ以外の方法では起こり得ないものであることを、地上のすべての住民に示す紛れもない印となります。苦よもぎの象徴的な性質も重要です。血は、加害者の血を必要とする非道な行為に対する来たるべき神の報復のしるしであるように、「苦よもぎ」は、偶像礼拝の毒と苦味を思い起こさせ、あからさまに、故意に、計画的に、神に背を向けてサタンに向かうことであり、これまで見てきたように、艱難期の悪魔の偽宗教の重要な特徴なのです。

それゆえ、あなたがたのうちに、きょう、その心にわれわれの神、主を離れてそれらの国民の神々に行って仕える男や女、氏族や部族があってはならない。またあなたがたのうちに、毒草や、にがよもぎ（すなわち、偶像礼拝によって引き起こされる苦い思い：[ヘブル12章15節](#)参照）を生ずる根があってはならない。（申命記 29章18節）

この裁きの影響については、[黙示録 8 章 11 節](#)に、「水が苦くなったために」多くの人が死ぬとはっきりと書かれています。苦よもぎ自体に毒はないので、ここで指摘されている死は、広範囲に及ぶ汚染の結果、その影響を受けた水が本質的に飲めなくなった結果だと考えなければなりません（血の災いによってナイル川の水がエジプト人にとって飲めなくなったのと同じように：[出エジプト 7 章 18 節](#)、[7 章 21 節](#)；[詩篇 105 篇 29 節](#)）。したがって、この三ヶ月の長期にわたる水不足そのものと、それに伴う

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

全身の健康状態の悪化が、ここで予言されている死の主な原因なのです。出エジプト記のマラでも、苦かったためイスラエルの民は水を飲めませんでした([出エジプト 15 章 22-26 節](#))。その時、神は民が一時的な苦難の中で神を信頼するかどうか、民の心を試されたのです。私たちは、この真水の乏しい状況の中で、彼らよりももっとうまくやって、主に不平を言わないようにしたいものです。結局のところ、信仰者として私たちがこの災いを生き延びることができるのは、私たち自身の水源が影響を受けないからか(すなわち、出エジプトの災いの間、ゴシェンの地が一貫して免れたように「<裁きを受ける> 三分の一の部分」はわたしたちの居住地とはなりません;[出エジプト 7 章 14-24 節](#)参照)、あるいは、私たちが生きていくために必要な水が何等かの形で供給されたり浄化されることでしょうか(モーセとエリシャの苦い水のいやしを参照:[出エジプト 15 章 25 節](#); [列王記下 2 章 19-22 節](#); エリヤの場合における神のご計画:[列王記上 17 章 1-10 節](#), [19 章 6 節](#))。神が私たちに永遠の命の水を惜しみなく与えてくださったように([黙示録 21 章 6 節](#); [イザヤ 55 章 1 節](#); [ヨハネ 7 章 37-39 節](#); [黙示録 22 章 17 節](#)参照)、世界がかつて見たことのないような大干ばつの中にあっても、私たちの肉体の生命を維持するために必要な水を差し控えることはないという絶対的な確信を、私たちは神に持つことができます。

彼らは人なき荒野にさまよい、住むべき町にいたる道を見いださなかった。彼らは飢え、またかわき、その魂は彼らのうちに衰えた。彼らはその悩み

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

のうちに主に呼ばわったので、主は彼らをその悩みから助け出し、住むべき町に行き着くまで、まっすぐな道に導かれた。どうか、彼らが主のいつくしみと、人の子らになされたくすしきみわざとのために、主に感謝するように。主はかわいた魂を満ち足らせ、飢えた魂を良き物で満たされるからである。

(詩篇107篇4-9節)

主は野を池に変らせ、かわいた地を泉に変らせ、  
(詩篇 107 篇 35 節)

#### 4. 天体の光が撃たれる：(黙示録 8 章 12 節)

第四の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれて、これらのものの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は明るくなくなり、夜も同じようになった。(黙示録 8章12節)

前の三つの裁きと同様に、第四のラッパの裁きは天(風の四天使の領域:[黙示録 7 章 1 節](#))で始まり、地(144,000 人の封印の前に害を与えないように指示されていた)に影響を及ぼします。[黙示録 7 章 2-3 節](#))。前の三つの裁きとは対照的に、(隕石の破片、流星、小惑星のような)媒介となる原因は与えられ

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

ず、(雹に混じる血、水が血に変わること、水が苦よもぎに変わるといような)特定の神のしるしも地上に降り注がれていません。しかし、この天の光の顕著な減衰の原因が何もないという事実は、この世界的な現象が神によるものでしかないことを、世界の住民に再び知らせることになります(この劇的で前例のない出来事には、科学的に適切に説明ができないからです)。出エジプトの超自然的な暗闇や([出エジプト 10 章 21-29 節](#); [ヨシユア記 24 章 7 節](#); [詩篇 105 篇 28 節](#); [出エジプト 14 章 19-20 節](#) 参照)、キリストが私たちのために十字架で裁きを受けた超自然的な暗闇([マタイ 27 章 45 節](#); [マルコ 15 章 33 節](#); [ルカ 23 章 44-45 節](#); [出エジプト 12 章 6 節](#), [29 章 39-41 節](#) 参照)、再臨に先立って起こるであろう超自然的暗闇([イザヤ 5 章 30 節](#), [13 章 10 節](#), [60 章 2 節](#); [エゼキエル 32 章 7-8 節](#); [ヨエル 2 章 2 節](#), [2 章 10 節](#), [2 章 31 節](#), [3 章 15 節](#); [アモス 8 章 9 節](#); [ゼパニヤ 1 章 15 節](#); [ゼカリヤ 14 章 6-7 節](#); [マタイ 24 章 29 節](#); [マルコ 13 章 24-25 節](#); [ルカ 21 章 25 節](#); [黙示録 6 章 12 節](#), [16 章 10-11 節](#))などは、人間の理屈を超えており、悔い改める機会がまだ残されているうちに、世界に対する警告を効果的に伝えることとなります([黙示録 9 章 20-21 節](#)を参照)。

この裁きの期間がさらに長くなっていること(予想では四ヶ月)、世界的に広範な地域(この災いの影響を受けない場所は地球上にない)、世界的にもたらされる痛み(誰もがこの光の減少の影響を受ける)、これらはすべてこの災いが前の三つの災いより悪いということを示しています。ここでは、具体的な死者



### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

の数は分かりませんが、この時点まで死亡率が増加していたこと、次の二つの災いでも死者の数が徐々に増えることを考えると、この四ヶ月の間にも、前のラッパの審判の時よりも多くの人が死ぬと推測されます。この死者の一部は、間違いなく事故、寒さによる悪影響(北半球では、冬の最悪の時期に起こる)、生産性の低下、うつ病、一般的な健康被害によるものとなることでしょう<sup>59</sup>。私たちはこのようなことを事が起こる前に自分の家にながらにして読むことは簡単なことですが、光の激減がもたらす激しい精神的、肉体的被害を決して過小評価してはいけません。黙示録 16 章 10-11 節では、同様の暗闇の裁きが最も深刻な痛みをもたらすと明確に言われています(出エジプト記 10 章 21 節の「さわれるほどの」暗闇を参照)。この裁きは確かに不信仰な世界の注目を集めるでしょう。そして、この暗闇が天よりの裁きのしるしと前触れであることを忘れてはいけません(彼らの心の硬さによって、ほとんど忘れ去られるでしょうが)(創世記 1 章 2 節; エゼキエル 32 章 3-10 節; 使徒行伝 13 章 11 節参照)。そしてこれは火の池の恐怖を予見させるものであり、それは悪を悔い改めないすべての人が最終的に入る、燃える、超自然的に暗い裁きの場所です(マタイ 8 章 12 節, 22 章 13 節,

---

<sup>59</sup> 広範囲に及ぶ現象は、たとえ比較的穏やかなものであっても、局地的な劇的な現象よりも致命的であることがよくあります。よく知られた例を挙げれば、第一次世界大戦後に流行したインフルエンザは、世界全体で、戦争で戦闘員として死亡した人よりもかなり多くの人を死亡させました。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[25 章 30 節](#)<sup>60</sup>。

この裁きは不信仰な世界にとって恐ろしいものですが、神は御子に忠実な者たちのために備えてくださると信じています。エジプト人が超自然的な暗闇に見舞われたとき、イスラエル人は家に明かりがあったように([出エジプト 10 章 23 節後半](#))、私たちも必要なすべての物理的な明かりは得られると完全に確信しています。それだけでなく、私たちの心に豊かな光、つまり、世の光である私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを常に見つめていることから来る喜びを得ることができると完全に確信しています([ヨハネ 1 章 4-5 節](#); [第一ヨハネ 1 章 5 節](#))。ですから、このような暗黒の時代に地上に降りかかるあらゆる災いの中で、これらの前兆は、私たちの主は近いことを思い起こし、私たちは敬神的な忍耐と辛抱をしなければなりません([イザヤ 26 章 20-21 節](#))。

光は正しい者のために暗黒の中にもあらわれる。  
主は恵み深く、あわれみに満ち、正しくいらせられる。  
(詩篇 112 篇 4 節)

---

<sup>60</sup>『悪魔の反逆』第 2 部「創世記のギャップ」II.2.d、「神の裁きがもたらす闇」参照。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

#### [4b. 三つの災い(黙示録 8 章 13 節)]

また、わたしが見ていると、一羽のわしが中空を飛び、大きな声でこう言うのを聞いた、「ああ、わざわざいだ、わざわざいだ、地に住む人々は、わざわざいだ。なお[残りの]三人の御使が[それぞれの]ラッパを吹き鳴らそうとしている」。(黙示録 8 章 13 節)

ここで述べられた厳粛な警告は、それが予告している悲惨な結果とともに、次の三つの裁きを、それ以前の四つの裁きと区別し、強調する役割を果たしています。鷲は猛禽類であると同時に腐肉を食べる鳥でもあるので、差し迫った攻撃と敗北による致命的な結果を示す自然なシンボルです。ですから、上空から大声で呼びかける鷲は、まず神の怒りと裁きの一般的な前触れであることが、ホセアの次の箇所からはっきりわかります(参照：[エレミヤ 48 章 40 節](#)；[エゼキエル 17 章 1-24 節](#)；[ハバクク 1 章 8 節](#))。

(警告の印として) **角笛**を[吹くために]口に当てよ。鷲のように敵は(迫り来る裁きのしるしとして)【主】の宮を襲う。彼らがわたしの契約を破り、わたしのおしえにそむいたからだ。彼らは、わたしに向かって、「私の神よ。私たちイスラエルは、あなたを知っている」と叫ぶが、イスラエルは善を拒んだ。敵は、彼らに追い迫っている。(新改訳Ⅲ ホセア書 8 章 1-3 節)

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

第二に、鷲の顔をしたケルブ(黙示録 4 章 7 節; エゼキエル 1 章 10 節, 10 章 14 節)の研究で見たように、鷲はまた、間もなく来られるメシアの具体的な象徴で、メシアがすべての敵に裁きを下し、再臨の時に御国を得るために来られるとき、同様に中天に現れ、誰の目にも見えるようになります。(黙示録 1 章 7 節; 詩篇 110 篇参照; マタイ 24 章 28 節; ルカ 17 章 37 節)。莊嚴で畏怖の念を抱かせるようなイメージであり(申命記 28 章 49 節; エレミヤ 48 章 40 節, 49 章 22 節; エゼキエル 17 章 3 節, 17 章 7 節; ダニエル 7 章 4 節; ホセア 8 章 1 節; ハバクク 1 章 8 節)、鷲は、キリストの壮大で畏敬の念を抱かせる二重の勝利の象徴です。最初は十字架で(それに伴う復活、昇天、父の右の座に着かれ)、そして最終的にはここで言及されている再臨(マタイ 24 章 28 節; ルカ 17 章 37 節)です。

「災い」という言葉の繰り返しによる複数の災いの知らせの告知は、聖書の中で前例がありません(上記の II.2.a 節でマタイ 23 章 13-39 節のイエスの七つの災いを扱った時に見たように; イザヤ 5 章 8-30 節, 10 章 1-19 節; ゼカリヤ 11 章 17 節も参照してください)。これらの聖句に共通しているのは、「災い」という言葉が、(信者の場合)神を捨てたり、(不信者の場合)神に逆らったりすることによって起こる神罰を予見しているということです。つまり、聖書における「災い」の霊感的使用は、一般的に神の怒りの対象への差し迫った裁きの宣言のために取っておかれています(そしてそれは、「災い」が繰り返される場合、

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

常にそうです)。ですから、これらの恐ろしい裁きについて信者が最初に心に留めておかなければならないことは、これらの悲惨な結果は、イエスに忠実であり続けている人ではなく、不信仰者と背教者に向けられたものであるということです。最後の三つのラツパのさばきの影響は、これまでの四つのさばきよりもさらに悲惨なものとなりますが、私たちの神の明白な助言と予知がなければ、イエス・キリストを信じる者の頭の毛一本も地に落ちることはありません(ルカ 21 章 18 節)。特に、第五と第六のラツパの裁きは悪魔によって行われ、未信者にしか影響を及ぼしません。大艱難と同義である第七のラツパの裁きの間にも(黙示録 12 章 12 節参照)、信者は神の世界に対する裁きから完全に保護され続けます(最も顕著なのは、キリストの勝利の帰還を含む七つの鉢の裁きです)。

これは彼らの言葉と行いとが主にそむき、その栄光の目をおかしたので、エルサレムはつまずき、ユダは倒れたからである。彼らの不公平は彼らにむかって不利なあかしをし、ソドムのようにその罪をあらわして隠さない。**わざわざいなるかな、彼らはみずから悪の報いをうけた。正しい人に言え、彼らはさいわいであると。彼らはその行いの実を食べるからである。悪しき者はわざわざいだ、彼は災をうける。その手のなした事が彼に報いられるからである。**(イザヤ書 3 章 8-11 節)

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

これは、すでに強調したように、このような理由で、信者が艱難期の間、楽な時を過ごすことができると言っているのではありません--そうではありません。艱難期には、人間の生活や社会があらゆる面で大きく変化するため、神に選ばれた民には大きなプレッシャーがかかります。本シリーズの第一部で見てきたように、「艱難期」という名の背景には、実にこのような意味があるのです。さらに、大艱難期の間、イエス・キリストの真の教会に対する世界的な迫害は、世界の歴史の中で一度も起こったことがなく、その後も起こることはないでしょう。しかし、たとえ私たちが疎外、軽蔑、迫害、投獄、さらには殉教に遭うとしても(その時に生きている多くの人は間違いなくそうなるでしょう)、これらのことはどれも**神から** 私たちに敵対するものではないという事実を慰めとするために、前もって自分自身を訓練しなければなりません。むしろ、神の栄光の**ために** 私たちを用い、神の名によって召された者たち、すなわち、たとえ命を失うことになっても、神のために証しをするために自分の命を小羊に捧げる者たちの信仰と誠実さを、人や天使たちなど世のすべての者に示すよう、神のために用いるのです。

ここに、[しかし、獣の刻印を受けて拝む者たちとは対照的に]神の戒めを守り、(刻印を受けたり獣を拝んだりすることを拒否して)イエスを信じる信仰を(たとえ、命をかけても)持ちつづける聖徒の忍耐がある」。(黙示録14章12節)

5. 第一の災い：悪霊の襲撃（黙示録 9 章 1-12 節）

第五の御使が、ラッパを吹き鳴らした。するとわたしは、一つの星（すなわち、天使）が天から地に落ちて来るのを見た。この星に、底知れぬ所の穴を開くかぎが与えられた。(2)そして、この底知れぬ所の穴が開かれた。すると、その穴から[出た]煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、その穴の煙で、太陽も空気も暗くなった。(3)その煙の中から、いなごが地上に出てきたが、地のさそりが持っているような[人を害する]力が、彼らに与えられた。(4)彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。(5)彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。彼ら[いなご]の与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった。(6)その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのである。(7)これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬[のミニチュア]によく似ており、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり、(8)また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯はししの歯のようであった。(9)また、鉄の胸当のような胸

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

当をつけており、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのものであった。(10)その上、さそりのような尾と針とを持っている。その尾には、[この]五か月のあいだ人間をそこなう力がある。(11)彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドン(=「破壊」)と言い、ギリシャ語ではアポルオン(=「破壊者」)と言う。(12)第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。(黙示録 9 章 1-12 節)

これまでのすべてのラッパの裁きで見られた激化の傾向は、この第五の裁きでも見られます。たしかに、このいなごは実際に致命傷を与えることはできませんが、(信者を除く)全世界を苦しめ、刺されるたびに死を望むほどの苦痛を五ヶ月にわたって与えます。この災いは、神を認めない全世界の住民に、長期にわたる恐怖の波をもたらすでしょう。私たちはまた、このイナゴの出現がもたらすパニックと苦痛、すなわち、イナゴがやってくる威圧的な雲、獐猛な姿、そして、悲惨な結果に至る刺されることに対する絶え間ない恐怖による心理的衰弱を過小評価すべきではありません。

ここで最初に理解しておかなければならないのは、この災いも、それに続く災いと同様に、悪魔(すなわち、墮落した天使)の働きによって行われるということです。神はしばしば、ご自身の神聖な目的のために、人間の邪悪な代理人を用いられます



### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

(例えば、アッシリアとバビロンによるイスラエルの懲らしめや、[黙示録 17 章 17 節](#)の反キリストによる新バビロンの滅亡)。このことは、ここでのように、悪魔とその手下たちを利用される場合にも当てはまります([第一コリント 5 章 5 節](#); [第一テモテ 1 章 20 節](#)における、パウロによる違反した信者のサタンへの引き渡し参照)<sup>61</sup>。サタンとその従者たちが、そのような場合に神が提供する「機会」が自分たちの利益にとってまったく逆効果であることを理解せず、神の命令を達成するためにいとも簡単に、そして完全に方向転換してしまうことは、神の近づきがたい知恵と、悪が常に引き起こす盲目的な愚かさについて多くのことを物語っています。しかし、そのようなことはよくあることで、私たちの神は、すべてのことを働かせて益としてくださるのであり、この人類の歴史の短いスパンで起こること(あるいは、起こったこと、これから起こるであろうこと)で、神が知らないこと、あるいは、神が計画されていないことは何一つないのです。神は、悪がそれ自体に矛盾をもたらし、反論し、非難するように、その限りなく賢明な計画を構築しておられ、その一方で、神と御子を受け入れようとするすべての被造物には、そのための恵み深い機会を与えておられるのです。

主が追い出した悪魔の軍団がガダラで豚の群れを支配したのと同じように、ここでのイナゴは悪魔に支配されています([マタイ 8 章 28-34 節](#); [マルコ 5 章 1-17 節](#); [ルカ 8 章 26-37 節](#))。

---

<sup>61</sup> 「聖書の基本」：第二部 A:天使論、II.9.7「神による悪霊の使用」を参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

このイナゴの群れに対して与えられた支配力は、明らかにその時よりも明らかに完全であり、不信仰な世界に対する神の裁きを実行することができるようになりました。しかし、それでも不信仰な人々に限定するようという神の指示に従わなければなりません。獣によるバビロンの破壊の場合、反キリストは自分の目的に役立つと思いながらも、実際には神の御心を達成することになります。この場合も、神が主権的に決定した正しい裁きのための災害(すなわち、第5と第6のラツパの裁き)を、サタンが自分の王国を確立するための好ましい手順としてみなしている可能性を排除すべきではありません。この墮天使の大群が、同様に神を拒否することを選んだ人間を苦しめるのは、サタンとその従者たちが体現し支持する悪がしばしばヒューマニズム、文明、「善」の仮面を被っているにもかかわらず、人類一般に対する思いやりは全くないことを明白に示しています。

この災いが悪魔に取り憑かれたイナゴによるものであるとする上記の解釈の真偽を示す要素は数多くあります。ギリシャ語のイナゴ(akris, ἀκρίδες)は女性名詞ですが、4 節の「彼ら」は男性名詞であり、イナゴに取り憑いている悪魔を指しています(5 節と 7 節に見られる形も同様です)。第二に、ガダラの豚の群れの事件([マタイ 8 章 28-34 節](#); [マルコ 5 章 1-17 節](#); [ルカ 8 章 26-37 節](#))において、聖句は、肉体的な生き物の体に入り込み、指示するために、悪魔の大集団に与えられた神の許可という確かな一致点を示しています(ただし、上で指摘したように、[黙示録 9 章 1-12 節](#)では、神の特別な目的を達成するために、

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

支配はより徹底的なものになってきます)。最後に、次のラッパの裁きと同様に、この裁きは独特な方法で行われます。第五と第六のラッパの裁きでは、災いは上空から(ここでは「星」によって、次の裁きでは香の金の祭壇からの命令によって)開始されますが、しかし、これらの両方の場合において、裁きの効果の原因となる現象は、(最初の四つのラッパの裁きの天の現象の場合のように)上空の天からではなく、地面の下から、正確に言えば底知れぬ所から、すなわち、現在解放されていないある悪霊が収容されている場所として専ら知られている、黄泉の一つの領域である底知れぬ所から起こります。(第一ペテロ 3 章 19-20 節; 第二ペテロ 2 章 4-10 節; ユダ 1 章 5-7 節; 黙示録 13 章 1 節, 20 章 1-3 節参照)<sup>62</sup>。

底知れぬ所の穴を開く鍵を持って地上に降りてきた「星」は、選ばれた天使であり、神の使い、神のしもべであり、(最初の四つの災いを管理する四人の天使の場合のように)「エクソーシア(権威)」である可能性が高いです<sup>63</sup>。(黙示録 20 章 1-3 節の天使が底知れぬ所全体にアクセスする鍵を持っているのに対して)この天使の鍵は底知れぬ所の入り口を開けるだけのものです。この区別は重要で、その本質的な意味は、20 章の天使が悪魔底知れぬ所に閉じ込める「鎖」を持っていることから

---

<sup>62</sup> 「サタン」の反乱」第 2 部「創世記の空白」、II.b「神の裁きのしるしとしての海」「来たる艱難期」パート 2B:「天の前奏曲」I の「海」も参照。

<sup>63</sup> 星としての天使については、[イザヤ 40 章 26 節](#)と[ルカ 2 章 13 節](#)を参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

わかります。このように、底知れぬ所への第二の鍵は、地下牢（の入り口だけ）を開閉する力ではなく、地下牢にあるすべての拘束具を施錠したり解錠したりする力も含んでいます。これに対して、<黙示録 9 章の天使が>底知れぬ穴の入り口を開けると、閉じ込められている悪霊のうち、**鎖につながれていないもの**だけがでてきて、この災いに加担することができるようになります。ヨハネの黙示録 20 章には悪魔が将来鎖で縛られることが記されており、聖書の他の箇所には、他の特定の悪霊どもが底知れぬ所（別名タルタロス）に収監されているだけでなく、そこで拘束されていることも分かっています（[ユダ 1 章 6 節](#)）<sup>64</sup>。これらは、ネピリムを媒介として人類を致命的に汚染しようとしたサタンの試みに関与した墮天使たちです。（[創世記 6 章 1-2 節](#)）。さらに、第六のラツパの裁きを行うために「解放」または「解き放たれる」（すなわち、鎖を解かれる）より嚴重に監禁されていた悪霊たちもいます。一方、ここで第五のラツパの審判に関与している悪霊どもは、別の理由で、別の時に投獄された（しかし、拘束はされていない）墮天使です。主がゲラサで追い出した悪霊の軍団は、主に対して底知れぬ所に閉じ込めないでほしいと懇願していた（[ルカ 8 章 31 節](#)）ことから考えると、神が課していた制限に違反した墮天使は、実際にこの地下の牢獄に閉じ込められると結論づけることができます。この災いで悪霊どもに

---

<sup>64</sup>『サタンの反乱』：第 5 部：「裁き、回復、置き換え」、Ⅲ.1「人間の遺伝子の純潔に対するノアの洪水以前におけるサタンの攻撃（ネピリム）」参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

憑依されたイナゴの莫大な数(全世界を苦しめるのに十分な数)と、その憑依した悪霊の軍勢も大きかったことから判断すると、このような違反は人類の歴史を通じて比較的頻繁に行われていたに違いありません(この事自体が、サタンの軍勢と神の選民の天使たちが、私たちの周りで繰り広げている目には見えない闘争の規模と深刻さを実感させるものです)。

ここに描かれているイナゴは、(主がイスラエルの民の前に敵を一掃するために遣わされた「オオスズメバチ」のように：[出エジプト 23 章 28 節](#)；[申命記 7 章 20 節](#)；[ヨシヤ 24 章 12 節](#)) 目に見えない神の働きの単なる象徴ではありません<sup>65</sup>。それは、地球の住民に完全に見える実在するものとなるでしょう(そのため、もたらされる恐怖も大きなものとなります)。イナゴそのものが底知れぬ所の穴から出てくるのではなく、底知れぬ所の穴から出た煙の中から出てくるのです<sup>66</sup>。まだこの地上に存在しないようなものが、目に見える、物質的な、地上の生き物となるのです。

---

<sup>65</sup> この「スズメバチ」は完全に比喩的な表現で、神が人間に太刀打ちできない災いとして捉えることができるようにスズメバチを引き合いに出しています。このことは、[出エジプト記 23 章 23 節](#)で、主の天使がこの役割を実際に担っていることから明らかです。<出エジプト記 23 章 23 節と、23 章 28 節を参照のこと>

<sup>66</sup> 黄泉の国(未信者にとっては黄泉の悶え苦しむ所、墮天使にとってはタルタロス=底知れぬ所、信者にとってはアブラハムの懐=パラダイス)に、(亡くなった人間や幽閉されている悪魔以外の)他の種類の生き物がいるという考えは誤りであり、非聖書的です。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

ここで説明されていることは、神がすでに現存する昆虫を神の目的のために用いる他の例(例えば、[出エジプト 8 章 20-32 節](#)と[10 章 1-20 節](#)のアブとイナゴ、または[イザヤ 7 章 18 節](#)のハエとハチ)とは異なります。これらのイナゴは、主がエジプトの塵からブヨの大群を出現させ([出エジプト 8 章 16-19 節](#))、パロの宮廷魔術師たちは再現することができず、「神の指」が働いたと証言した([出エジプト 8 章 19 節](#))ようなものです。最初の三つのラツパの裁きには、自然界の物質(最初の二つの裁きでは血、第三の裁きでは苦よもぎ)が超自然的に生成されることをすでに見ました。ですから、ここに書かれているイナゴは、見た目も刺す力も独特ですが、この第五の災いを引き起こすために神によって瞬時に創造された文字通りの本物のイナゴなのです。主がエジプトの塵からブヨを出させたように、ここでは底知れぬ所から出る煙からイナゴを出させます([黙示録 9 章 3 節](#)では、これらのイナゴは「煙から出てきた」と明確に述べています)<sup>67</sup>。底知れぬ所の穴から噴き出す煙は、底知れぬ所の口が開くことと、煙のように上にあがってくることを明確に告げています。したがって、悪霊どももまた煙と共に出てきて、超自然的なイナゴが生じたその瞬間から取りつく結論づけることができます。

---

<sup>67</sup> ブヨが出てきた塵の雲とイナゴが出てくる煙の雲を類似したものとして捉えることは、英語の読者にはあまりよく理解できないかもしれませんが、水蒸気であれ、煙であれ、塵であれ、雲は聖書でも古代世界でも一般的に同じような現象として扱われてきました。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

サソリは刺されると痛いので、このイナゴの大群が全地上に広がる時の苦しみは計り知れないものがあります。しかし、この刺された痛みは五ヶ月間も続かないことを指摘しておかなければなりません。五ヶ月というのは、この裁きの全期間の長さです。その期間中、世界の人々はこの大群に苦しめられ、多くの人が何度も刺されることが予想できます。その度、死を選んで楽になるのを望む程苦しめられるのです(しかし、明らかに自分の命を絶つことはできません。)

[黙示録 9 章 4 節](#)は、「額に神の印」を持つ者だけがイナゴの攻撃から免れると述べています。しかし、[20 節](#)を見ると、最初の六つのラッパの裁きの後にまだ生きている**すべての**人を不信仰者の範疇に入れているように見えますが、この時、地上にはまだ多くの信者(ユダヤ人と異邦人、ある人は大迫害で倒れ、ある人は主の再臨の瞬間に生きて復活を経験する人達)が生きていることが事実として分かっています。また、すべての信者が聖霊によって受ける印も神の保護の印であることを見てきました([第二コリント 1 章 21-22 節](#); [エペソ 1 章 13-14 節](#), [4 章 30 節](#); [エゼキエル 9 章 1-11 節](#); [ヨハネ 6 章 27 節](#); [第一ペテロ 1 章 1 節](#)を参照)ので、この言葉が示しているように、144,000 人と同じようにすべての信者がいなごの針を免れることは確実なことです。その名が示すように、「艱難期」と呼ばれているように、特に背教を促す悪魔の圧力や大迫害など、信者だけが抱えるような十分多くの問題を私たちは抱えることになります。ですから、これらのラッパの裁きの主な目的は、神に抵抗し続けた場

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

合の悲惨な結末を不信者の世界に警告することですから、すべての信者は、最初の三年半の間に神のメッセージを最もよく伝える 14 万 4 千人に与えられた神の保護に与ることになるのは当然なことなのです。

イナゴの話に戻りますが、イナゴは植物に害を与えないようにとも指示されています。このことは、イナゴの行動として、すべての植物を裸にしてしまうことが普通であることを考えると、このイナゴが超自然的なものであることをより一層明らかにするものです。しかし、イナゴがこの恐ろしい刺し傷の害を与える者として選ばれたのは、決して偶然ではありません。イナゴはサソリと違って空を飛ぶので、避け難く、より一層恐ろしいものとなります。イナゴは聖書の多くの災い([出エジプト記 10 章 1-20 節](#); [申命記 28 章 38 節](#); [歴代誌下 7 章 13 節](#); [ヨエル 1 章 4-7 節](#), [2 章 1-10 節](#), [2 章 25 節](#); [アモス 4 章 9 節](#), [7 章 1-3 節](#))でよく登場するので、明らかに裁きの象徴であると言えるでしょう。最後に、イナゴの行動は軍隊のように群れをなして前進し、行く手を阻むことをさせず、すべてを覆ってしまうので、組織的な軍隊を連想させます(参照：[士師記 6 章 5 節](#), [7 章 12 節](#); [ヨエル 1 章 4-7 節](#), [2 章 25 節](#); [ナホム 3 章 15-16 節](#))これはハルマゲドンの最後の戦いの前触れと言えるものでしょう。

**あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い。これ**



### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

は暗く、薄暗い日、雲の群がるまっくらな日である。多くの強い民が[やって来て]暗やみのようにもろもろの山をおおう。このようなことは昔からあったことがなく、後の代々の年にも再び起ることがないであろう。火は彼らの前を焼き、炎は彼らの後に燃える。彼らのこない前には、地はエデンの園のようであるが、その去った後は荒れ果てた野のようになる。これをのがれうるものは一つもない。そのかたちは**馬のかたち**のようであり、その走ることは**軍馬**のようである。山の頂でとびおどる音は、**戦車**のとどろくようである。また刈り株を焼く火の炎の音のようであり、戦いの備えをした強い軍隊のようである。その前にもろもろの民はなやみ、すべての顔は色を失う。彼らは勇士のように走り、兵士のように城壁によじ登る。彼らはおのこの自分の道を進んで行って、その道を踏みはずさない。彼らは互におしあわず、おのこのその道を進み行く。彼らは武器の中にとびこんでも、身をそこなわない。彼らは町にとび入り、城壁の上を走り、家々によじ登り、盗びとのように窓からはいる。地は彼らの前におのこのき、天はふるい、日も月も暗くなり、星はその光を失う。(ヨエル書 2 章 1-10 節)

この箇所ではヨエルは、文字通りのイナゴの災いによるその時代の神の裁きを描写しています(特に[ヨエル 1 章 4 節](#)参照)。し

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

かし、この箇所は、近い将来の預言的な意味にも、遠い将来の預言的な意味にも解釈されます。イナゴは、近い将来の神の裁きであるアッシリアの侵略と遠い将来の神の裁きである再臨の直前に、エルサレムで主に向かって集まって来る軍隊のたとえとして描かれています(次の節、[ヨエル 2 章 11 節](#)参照、上記の聖句の 1 節の「主の日」、そして[ヨエル 3 章 9-16 節](#)も参照)<sup>68</sup>。さらに、この箇所と[黙示録 9 章 1-12 節](#)の悪魔に取り憑かれたイナゴの描写との類似性は、無視しがたいものがあります。どちらの場合も、イナゴは警告であり、馬や軍隊の隊列に似ています。ヨエルの時代のイナゴが、近い将来のアッシリアの侵略と遠い将来の主の日を暗示させるように、ヨハネの見たイナゴは、ハルマゲドンの獣の軍隊の到来を暗示させるものであると結論づけなければなりません。このことは、黙示録の 9 章にあるイナゴの描写が、その恐ろしい外見と威嚇的な行動に関して、広範囲に及んでいることを説明するのに大いに役立ちます。実際、イナゴの様相(戦いに備えた馬のよう)、人間のような顔、頭の上の金の冠のようなもの(畏敬の念を起こさせるしるしに類似)、牙のような歯(獐猛さを示す、参照:「イナゴの牙(きば)」[ヨエル 1 章 6 節](#)参照)、長い髪(野性的で野蛮)、鉄の胸当て(軍用防具)、彼らが出す(戦車の軍隊のような)音などはすべて、艱難期の終わりに反キリストによって招集される軍隊についての非常に近い具体的な予告を指示しています。

---

<sup>68</sup> 「来たる艱難期」第 1 部「はじめに」IV.1.b 項『主の日』のパラダイム」参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地(すなわち、獣の本国バビロン)のゴグ(すなわち、反キリスト)に、あなたの顔を向け、これに対して預言して、言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。わたしはあなたを(再びここ、ハルマゲドンに)引きもどし、あなたのおごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての**軍勢と、馬と、騎兵**とを引き出す(馬と騎兵と:[黙示録 9 章 7 節](#)参照:イナゴは「戦闘準備のできた馬」のように見える)。彼らはみな武具をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつぎをとる者で大軍である。……北の果のあなたの所から来る。多くの民はあなたと共におり、**みな馬に乗り**、その軍隊は大きく、その兵士は強い。あなたはわが民イスラエルに攻めのぼり、雲のように地をおおう。ゴグよ、終りの日に(艱難期の最後の日々:[イザヤ 2 章 2 節](#))わたしはあなたを、わが国に攻めきたらせ、あなたを(滅ぼすことを)とおして、わたしの聖なることを諸国民の目の前にあらわして、彼らにわたし(が誰であるか)を知らせる。(エゼキエル書 38 章 2-4, 15-16 節)

この裁きが獣のハルマゲドン攻略を予告するものであることをさらに示すのは、悪魔に取り付かれ、超自然的に作り出されたイナゴの軍隊を指揮する王子がゴグ = 反キリストと類似して

### Ⅲ.裁きのラツパ：黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

いるということです。<sup>69</sup> このことは、上に述べた類似性だけでなく、彼のギリシャ語名、「破壊者」を意味するアポリオンからも明らかです。この称号は、反キリストの経歴を表すだけでなく、獣の顕著な特徴の一つである破壊という概念と語彙に預言的に関連しています([イザヤ 14 章 20 節](#); [ダニエル 8 章 25 節](#), [9 章 26 節](#)参照; [エレミヤ 51 章 25 節](#); [第二テサロニケ 2 章 10 節](#)も参照)<sup>70</sup>。

#### 6. 第二の災い：悪霊による滅び：(黙示録 9 章 13-19 節)

(13) 第六の御使が、ラツパを吹き鳴らした。すると、一つの声が、神のみまえにある金の祭壇の四つ

---

<sup>69</sup> アバドン＝アポリオンがここで「王」と呼ばれているのは事実ですが、墮落した天使の階層における彼の地位は「王子」であり、大天使に相当する悪魔の地位であると考えられます。この位階を表すヘブライ語「サル」は、セプトゥアギンタ(七十人訳)では少なくとも一度、「王」またはバシレウス(ここで文脈にあるギリシャ語)と訳されています。重要なのは、この司令官が「底知れぬ所の天使」とも呼ばれていることです。しかし、私たちは文脈と他の聖句(例えば、[ユダ 6 節](#)と第二ペテロ 2 章 4 節)から、底知れぬ所には多くの天使がいることを知っています。「天使」が一般的な天使以上の意味を持つ聖句は、[第一ペテロ 3 章 22 節](#)だけです。「聖書の基本」：第二部 A: 天使論、セクション II.9.6.3、「王子たち」を参照。

<sup>70</sup> 悪魔の司令官のヘブル語名であるアバドンは、ギリシア語のタイトルと意味が似ていますが、この単語は厳密には滅びの場所(すなわち、[ヨブ記 26 章 6 節](#); [詩篇 88 篇 11 節](#); [箴言 15 章 11 節](#), [27 章 20 節](#); [ヨブ記 28 章 22 節](#), [31 章 12 節](#)参照)を指します。

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

の角から出て、(14) ラッパを持っている第六の御使にこう呼びかけるのを、わたしは聞いた。「大ユウフラテ川のほとりにつながれている四人の御使を、解いてやれ」。<引用されている英文の直訳：[底知れぬ所に]つながれている四人の天使を大ユウフラテス川のほとりで解き放て>(15) すると、その時、その日、その月、その年に備えておかれた四人の御使が、人間の三分の一を殺すために、解き放たれた。(16) 騎兵隊の数は二億であった。わたしはその数を聞いた。(17) そして、まぼろしの中で、それらの馬とそれに乗っている者たちとを見ると、乗っている者たちは、火の色と青玉色と硫黄の色の胸当をつけていた。そして、それらの馬の頭はししの頭のようにあって、その[馬の]口から火と煙と硫黄とが、出ていた。(18) この三つの災害、すなわち、彼らの口から出て来る火と煙と硫黄とによって、人間の三分の一は殺されてしまった。(19) 馬の力はその口と尾とにある。その尾はへびに似ていて、それに頭があり、その頭で人に害を加えるのである。(黙示録 9章13-19節)

このシリーズの最後の回で見たように(そして、上記の I.3 節で)、黄金の祭壇(そこから悪魔の大軍の解放を命じる声が出る)は、栄光と復活の状態にあるイエス・キリストを表しています。私たちはすでに主が殺された子羊として描かれているのを見ま

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

したが、今また象徴的に描かれているのは、栄光の復活した人の子であり、そのもとに艱難期の殉教者が集まっているのです（[黙示録 6 章 9 節](#)）。金の香炉は、主の地上でのすべての働きの証明と効力、そして初降臨の完全な勝利を語っています。したがって、悪魔の軍勢を解き放つ命令がこの祭壇から発せられるのは、最も適切なことなのです。なぜなら、この悪魔の大群は、（上記の第五のラッパの裁きで見たのと非常に似た方法で）第二の降臨の主の勝利が得られるハルマゲドンの戦闘を予告しているからです。騎兵隊に似たイナゴがハルマゲドンの反キリストの軍隊を暗示していたとすれば、これらの悪霊どもの乗り手とその騎兵隊はなおさらです（[エゼキエル 38 章 2-14 節](#)参照）。このことは、キリストの再臨とハルマゲドンでの勝利の前の歴史の最終段階である大艱難期（第七のラッパの裁きと同義）の開始前に起こる最後の神の裁きであるという事実から、特にわかるのです。しかし、この裁きの象徴は第五のラッパと似ていますが、最初に注意すべき重大な違いは、この大艱難期前の最後の裁きを行う手段は目に見えないということです。前の裁きの目に見えるイナゴとは異なり、この悪魔の軍勢は人間の目には見えないので、悪魔がもたらす悲惨な影響だけが見えるのです。

この災いはその＜大艱難期の＞開始の時のために備えられ、最初の六つのラッパの裁きの中で最も長い期間（すなわち六ヶ月）続き、大艱難期で終わるのです。このように、ラッパのさばき全体を通して指摘した激化の傾向は、ここでも続いており、地

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

上の住民を苦しめる者たちの膨大な数にも現れています：2 億という数字は、数え切れないほどの大軍を表す聖書の表現に過ぎないと言われることがあります。ヨハネが「その数を聞いた」と主張していることは、私たちがこの数を文字通りに受け取らなければならないことを明確に示しています。犠牲者の数が圧倒的であること(この時点では、まだ生きている人の三分之一)、またこの災いの性質も、この激しさを強調するものです。この聖句では、火、煙、硫黄がどこからともなく爆発して、不幸な対象者の人生を恐ろしい方法で破壊することが明確に描写されており、地上の人々はヨハネのようにその原因を見ることができないという事実が、彼らの絶望と恐怖を増大させることになるのです。

硫黄の炎と煙のような目に見える効果はありませんが、聖書には、目に見えない破壊者が引き起こす災いと類似したものが数多くあります。1) 出エジプトの滅ぼす者([出エジプト 12 章 23 節](#))、2) イスラエルの民に発生した災い([民数記 16 章 46 節](#))、3) アラウナの脱穀場にとどまった滅ぼす天使([サムエル記下 24 章 15-17 節](#))、4) ヨブの家族を殺した破壊の天使たち([ヨブ 1 章 12-19 節](#)参照; [詩編 78 篇 49 節](#)も参照)等です。また、この第六のラッパの裁きを含めて、上記のどの例でも、神が選ばれた者のために滅ぼすことに制限が設けられていることがはっきりわかります。1) 過越の祭りの滅ぼす者はイスラエルの民の入り口に塗られた血によって阻止されました(その血は私たちが死から贖ったキリストの犠牲を象徴する十字架の形をとっています：

### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[出エジプト 12 章 22-23 節](#))。2) 民数記 16 章で発生した災いはアロンの香炉の香によって止められました(甘い香りはキリストの私たちのための身代わりの贖罪を受け入れることを象徴しています：[民数記 16 章 46-48 節](#))。3) ダビデが民を数えたことによって起こった災いを施行する滅ぼす天使は、アラウナの脱穀場に留められていました(将来、私たちのために十字架上でキリストがなされたことを表す祭壇の場所：[サムエル下 24 章 18-25 節](#))。4) ヨブとその妻は守られ、最後には計り知れないほど祝福されました([ヨブ 42 章 7-17 節](#))。第六のラッパの裁きの場合、災いの範囲は身の毛がよだつほどのものですが、非常に正確です。これは長さ(大艱難期の前の 6 カ月間)に関しても、またその規模(人類の三分の一に対するものであって、それ以上のものではない)においても言えることです。そして、出エジプト記の初子の災いのように、この裁きはイエス・キリストに属する人々には下らないことを忘れてはいけません。

聖書はまた、同様に目には見えても、超自然的な火の例を記しています。1) エリヤがアハジヤの兵士に下した神の火([列王記下 1 章 10-12 節](#);[ルカ 9 章 51-56 節](#)参照)、2) 二人の証人モーセとエリヤが彼らの敵に下す火([黙示録 11 章 5 節](#))、3) ヨブの群れと家畜に下った「神の火」([ヨブ 1 章 16 節](#))、4) 獣の偽預言者が降らしたサタンの方による火([黙示録 13 章 13 節](#))です。特に最後の二つの例は、第六のラッパの裁きの間に起こるものに非常に近く、悪魔の力がこのような奇跡的な効果をもたらすことが許されているのです。しかし、このような奇跡はす



### Ⅲ.裁きのラッパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

べて、神の御計画を推進するためにのみ行われます。

しかし、わたしがあなたをながらえさせたのは、あなたにわたしの力を見させるため、そして、わたしの名が全地に宣べ伝えられるためにほかならない。

(出エジプト記 9章16節) ([ローマ9章17節](#)参照)

先の話の詳細に戻ると、ここに出てくる四人の指揮官とその悪魔の軍団は、現在「大河ユーフラテスに拘束されている」とする誤解が、ほぼ全世界的に広がっています。しかし、上記の訳文<[黙示録 9 章 14 節-英文直訳](#)>にあるように、この前置詞句「大河ユーフラテスで」は監禁されている場所ではなく、解放される場所を示しています(つまり、つながれているという語句ではなく、解き放せという命令句にかかっているととらえるべきでしょう)。この文脈と、現在解き放されていない墮天使の状態について私たちが知っていることを合わせると、「大ユウフラテ川のほとりで解き放て」という訳が圧倒的に好ましいと言えます。聖書の他の箇所では、悪魔の監禁場所は、常に底知れぬ所(タルタロス)です([イザヤ 14 章 9-20 節](#), [24 章 21-23 節](#); [ルカ 8 章 31 節](#); [第一ペテロ 3 章 19-20 節](#); [第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 6 節](#); [黙示録 9 章 1-2 節](#), [9 章 11 節](#), [20 章 1-3 節](#), [20 章 13-14 節](#))。前のラッパの裁きの時に、ある悪霊どもは底知れぬ所から出ることができましたが、その悪霊どもは穴の入り口の柵を開けるだけで解放されました。[使徒行伝 16 章 24 節](#)

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

にピリピで投獄されたパウロとシラス、[使徒行伝 12 章 6 節](#)で投獄されたペテロを見てみると、使徒たちは獄の中でも拘束されていました(すべての囚人がそうだったわけではありません：[使徒行伝 16 章 27 節](#)を参照)。ここで問題になっている墮落した天使とその首謀者どもは、ユダの手紙によって語られている者たちであり、創世記 6 章で、私たちが現在置かれている状況にある争いのための神の基本規則の違反に関与した、特別に気性の荒い悪霊どもであり、底知れぬ所に監禁されていることに加えて、さらにしっかりと縛られています([第一ペテロ 3 章 19-20 節](#)；[第二ペテロ 2 章 4-10 節](#)を参照)。

主は、自分たちの地位を守ろうとはせず、そのおるべき所を捨て去った御使たち(すなわち、創世記第 6 章の悪霊ども)を、大いなる日のさばきのために、永久に**しばりつけたまま**、暗やみの中(すなわち、底知れぬ所)に閉じ込めておかれた。(ユダ書 1 章 6 節)

底知れぬ所には入り口があり([黙示録 9 章 1 節](#)の<底知れぬ所に>通じる穴)、この時錠が開けられ([黙示録 9 章 1-2 節](#)参照；[黙示録 20 章 1 節](#)も参照)、主の再臨まで再施錠されることはないと言われています([黙示録 20 章 3 節](#))。牢獄の扉が開かれ、まだ鎖につながれているこれらの悪霊どもとその將軍たちが出てきて破壊的な目的を果たすことができるようになったら、あとはこれらの「しばりつけ」られていた墮天使どもがそれぞれ

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

の束縛から解かれるだけです<sup>71</sup>。

その解放の場所である「大ユウフラテ」は重要です。というのは、イスラエルが聖書の視点から見て地理的に地球の中心であるように([エゼキエル 5 章 5 節](#))、バビロン王国の中心を流れるユーフラテス川は、常に悪魔の反対勢力の地理的な中心であったからです。この事実は、バベルの塔で全人類を悪魔崇拜の奴隷にしようとしたニムロデの陰謀において最も顕著であり<sup>72</sup>、反キリストの艱難期の中心王国を「バビロン」と象徴的に呼んでいるのは、将来の「世界的」王国も悪の目的のために全人類を強制的に統合しようとする同様の試みを行うからです([黙示録 14 章 8 節](#), [17 章 18 節](#), [18 章 24 節](#); [ダニエル 2 章 42-43 節](#)を参照のこと)<sup>73</sup>。ですから4人のサリムとその軍隊がこの地点から、全世界を悩ますために分散するのは象徴的にふさ

---

<sup>71</sup> ギリシア語の動詞デオ(縛る)は、新約聖書では悪魔の力を抑制する、あるいは悪魔の力によって抑制されることを表すのによく使われます([マタイ 12 章 29 節](#); [マルコ 3 章 27 節](#), [5 章 3-4 節](#); [ルカ 13 章 16 節](#); [黙示録 20 章 2 節](#)参照)。

<sup>72</sup> 『サタンの反乱』第 5 部「裁き、回復、置き換え」Ⅲ.2 節「人間の自由に対するサタンによるノアの洪水後の攻撃(バベルの塔:創世記 11 章 1-9 節)」参照。

<sup>73</sup> 彼らは「4 人の天使」と表現されていますが、これは「大天使」または悪魔に相当する「サル」または「王子」の略称です。「聖書の基本」パート 2A: 天使論の II.9.6.3、「王子」を参照。

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

わしいと言えます。同時に、反キリストのバビロンとこれらの悪霊どもの大群との関連は、その来たるべき滅亡を予感させるものであり、数年後には、悪魔の住む荒涼とした場所に過ぎなくなるからです(黙示録 18 章 2 節)。この場所に関して、もう一つ言及しておかなければならないことがあります。世界の地理的な中心であるイスラエルの地は、天使たちが地上と第三の天との間を行き来する地点でもあります(創世記 28 章 12 節)。この文脈では、底知れぬ所に通じる穴の正確な位置は言及されていませんが、タルタロスへの見えない入り口がまさにこの位置、すなわち大河ユーフラテスの近くにあつて、天上に通じる坑道の比較的近くにある可能性があります(すべての被造物の行く方向の選択を象徴的により明確にしています)。

乗り手とその馬については、すでに指摘したように、その時代の世の人の目には見えません(しかし、この預言の中で、ヨハネがそれを見て、私たちのために描写しています)。列王記下 6 章 11-17 節には、超自然的な大軍が実在しながらも、人間の目には見えないという類似点があります。この場合、エリシャのしもべは、最初は彼らを見ることはできませんでしたが、エリシャの祈りに応えて目が開かれたとき、「見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりにあつた」(17 節; [ゼカリヤ 1 章 8 節](#)参照)ことが語られています。この二つのケースにおける超自然的な騎兵隊は目に見えないですが、実在しています。私たちは過去に、天使がしばしば人間の目には見えなくとも、実在する装具を持っていることを見てきました(例えば、私たち

### Ⅲ.裁きのラッパ：黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

の扱っている課題ではラッパがそれにあたります)。また、天使のような存在は、人知を超えたさまざまな方法で姿を現すことができます。例えば、神の車座につく四人のケルビムは、天使の中でも特異な四つの顔を持ちますが、元々はそうではなく、サタンが最初のケルブで([エゼキエル 28 章 14-16 節](#))、墮落した後、四人組のケルブに置き換えられた可能性が高いです。さらに、天使は一般的に栄光に満ちた姿をしていると描写されており、[黙示録 22 章 8-9 節](#)では、ヨハネが自分と話している天使を拝そうとしたほどです([ルカ 2 章 9 節](#)参照)。しかし、天使は普通の人間に近い地上の姿で現れることもあります([創世記 19 章 1-3 節](#); [ヘブル 13 章 2 節](#)参照)。また、主の再臨に同行する天の軍勢(私たちもその一部となる)は、白い馬に乗ると描写されています([黙示録 19 章 14 節](#))。

これらの情報を総合すると、第六のラッパの裁きの悪霊どもの軍隊に関する記述で、他の聖書の記述と一致しないものは何もありません。悪霊どもが独特の外見(例えば、鎧の色が三色)をしていることも、恐ろしい超自然的な馬に乗ることは、前例があり、聖書的に合致するもので、枠から外れてはいません。聖書は天使の自己改造の限界と可能性、あるいは超自然的なアイテム(この文脈では馬など)を調達する能力についての詳細は教えてくれませんが、ただ言えることは、悪魔とその超自然的な従者が実在することは人の目に隠されていますが、煙と硫黄の激しい爆発がどこからともなく出て生きている者の三分之一を殺すことは、地上の住民によく見えるということです。赤は

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

炎、青は煙、黄色は硫黄を表し、悪霊どもの乗り手が身につける三色の鎧は、この破壊的な災いの三重の現れを象徴しているのでしょう。

#### 7. 悔い改めない者の頑なさ (黙示録 9 章 20-21 節)

これらの災害(すなわち、艱難期前半の警告の裁き)で殺されずに残った人々は、自分の手で造ったものについて、悔い改めようとせず、また悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようともしなかった。(黙示録 9 章 20 節, 21 節)

私たちはすでにこの箇所を上記の II.3.a 節(「不法の秘密の力」の解き放ち)で考察し、神がパロに人間の常識を超えた心の硬化を許されたように、その将来の艱難期において不信仰な世界が地上でまだ見たこともない偶像崇拝の行いにふけるようになると指摘しました。現代において、偶像崇拝がますます広がっていることを過小評価してはいけません。明らかに異教的な行為に加えて、1) 私たちの父である真の神とその御子である真の主イエス・キリスト以外に対するいかなる崇拝も偶像崇拝であり、2) 心の中でイエスより優先するものは(それが自己であれ、金銭であれ、あるいは多くの欲望や誤った優先順位であれ)偶像崇拝であることを忘れてはいけません([エペソ 5 章 5 節](#);

### Ⅲ.裁きのラツパ： 黙示録 8 章 6 節-9 章 21 節

[コロサイ 3 章 5 節](#)を参照のこと)。

この二つの節は、この六つの裁きに耐え、悔い改めに向かわない心の硬い世界の不信仰な人々の本質的な拒絶を示す、強力で冷ややかな要約文です。神の恵みにもかかわらず、苦しみにもかかわらず、彼らは悪から神に立ち返るための警告を受けず、その後も受けようとはしないでしょう。この聖句は、不信者や人間の自由意志に対して、信者が理解すべき重要な点を示しています。多くの人が神とその警告を無視し続けると固く決めてしまっていることで、この世で神に逆らう選択をする人は皆、自分の自由意志によってよく考えた末の決断であることを疑う余地もなく示しているのです。イエス・キリストの福音を伝える使者としての私たちの姿勢は、福音を伝えることに熱心であるべきですが、その決断は真理を受け取る人の心の中にあることを決して忘れてはいけません。

## IV. 天使と小さな巻物（黙示録 10 章 1-11 節）

黙示録 10 章 1-11 節：

(1)わたしは、もうひとりの強い御使が、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭に、にじをいただき、その顔は太陽のようで、その足は火の柱のようであった。(2)彼は、開かれた小さな巻物を手に持っていた。そして、右足を海の上に、左足を地の上に踏みおろして、(3)ししがほえるように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷がおのおのその声を発した。(4)七つの雷が声を発した時、わたしはそれを書きとめようとした。すると、天から声があって、「七つの雷の語ったことを封印せよ。それを書きとめるな」と言うのを聞いた。(5)それから、海と地の上に立っているのをわたしが見たあの御使は、天にむけて右手を上げ、(6)天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを造り、世々限りなく生きておられるかたをさして誓った、「もう時がない。(7)第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおりに「福音」が伝えられたと同じように-英文>、神の奥義は成就される」。(8)すると、前に天から聞えてきた声が、またわたしに語って言った、「さあ行っ



#### IV. 天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

て、海と地との上に立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい」。(9)そこで、わたしはその御使のもとに行って、「その小さな巻物を下さい」と言った。すると、彼は言った、「取って、それを食べてしまいなさい。あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」。(10)わたしは御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった。(11)その時、「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、(すなわち、再臨に先立つ大艱難期において人類に起こる出来事の経過について)預言せねばならない」と言う声がした。

これらの出来事の正確な**タイミング**は、その象徴の特別な意味を理解する上で極めて重要です。「強い天使」の地上への降下と宣言は、艱難期前半の最後の出来事である第二の災いの終結時に行われ、([黙示録 11 章 15-19 節](#)の第七のラッパによって始められる)大艱難期と同じことである第三の災いの始まりに先立ちます。この御使いの誓い(神の奥義がすべて完結するまでは「これ以上遅れることはない<「もはや時が延ばされることはない」-新改訳Ⅲ>」という誓い)は、歴史の流れの中の大艱難期の瀬戸際を超え、私たちの主が完全な勝利のうちに再臨される地点へと時間的に前に進ませます。ですから、10章の全体的なメッセージは、すべての信仰者にとって大きな希

#### IV. 天使と小さな巻物： 黙示録 10 章 1-11 節

望であり、格別な励ましです。大艱難期が始まろうとしているときでさえ、イエス・キリストにある神の勝利と、イエス・キリストにある私たちの勝利は、その前代未聞の大いなる災いの向こう側で絶対的に確かなものであることを、私たちはまぎれもなく理解させられるからです。このことを念頭に置けば、10 章の象徴が明らかになります。

1. 力強い天使は、キリストの予型です： 黙示録第 14 章で、地を収穫する二人の天使の場合と同様に、この力強い天使はイエス・キリストを表しています<sup>74</sup>。ここでは、天使が天から地上に降臨する主の再臨を見込んでおり、ヨハネが見たすべての事柄は、その栄光の帰還を示唆し象徴しています。

・雲：この天使が「雲に包まれて」いるように、主は天の軍隊の「雲」と共に戻ってこられます(私たちもその一部となるのです。[マタイ 24 章 30 節](#), [26 章 64 節](#); [マルコ 13 章 26 節](#), [14 章 62 節](#); [ルカ 21 章 27 節](#); [第一テサロニケ 4 章 17 節](#); [黙示録 1 章 7 節](#); [第一コリント 15 章 51-52 節](#); [黙示録 19 章 14 節](#) 参照)私たちの主も天の軍隊の雲を伴って帰ってきます。

---

<sup>74</sup> ヨハネがこの天使を「強い」あるいは「力ある」(ギリシア語では *dynatos* ではなく *iscyros*)と呼んでいるのは、この天使が高い地位にあると理解すべきことを意味しています。この記述は、通常、大天使に適用されるものとは異なるので、私たちは、この天使がその次に高い分類、すなわち「権威」に属すると仮定してもよいでしょう。「聖書の基本：パート 2A: 天使論」II.9.3.4、「権威」を参照。

#### IV.天使と小さな巻物： 黙示録 10 章 1-11 節

・その髪と顔:この描写は、1 章でのヨハネへの主の出現を連想させます。その時([黙示録 1 章 14 節](#))、主の頭と髪はその明るい白さで際立っていましたが、ここでは「太陽のように」輝き、主の神聖な栄光がはっきりと表われています。救い主の栄光の再臨を予告する変貌の際にも、救い主の顔は「太陽のように輝き」([マタイ 17 章 2 節](#))ました。

・脚:天使の足の燃えるような外観は、1 章でヨハネに現れたイエスの足の「光り輝くしんちゅう」の外観を連想させます([黙示録 1 章 15 節](#); [黙示録 2 章 18 節](#)も参照)。

・彼の姿勢:地表(人間の領域:[創世記 1 章 26-28 節](#); [詩篇 115 篇 16 節](#)参照)と海面(悪魔の領域:[黙示録 13 章 1 節](#)参照)に同時に立つことは、主が来たるべき地球全体を支配することを明確に示しています。つまり、天使の姿勢は、キリストが再臨の時に全世界を征服することを象徴しています([黙示録 11 章 15 節](#)参照)。

・獅子のほえたける声:「ユダの獅子」として、この比喩は明らかに私たちの主を象徴しています([黙示録 5 章 5 節](#); [創世記 49 章 9-12 節](#); [イザヤ 31 章 4 節](#)を参照)。

・巻物:この巻物は 体験するのは苦いが、読み解くのは甘い(このシリーズの[第 1 部](#)、[第 1 節](#)での考察を参照) 黙示録で

#### IV.天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

す(黙示録 10 章 9-10 節; [エゼキエル 3 章 1-3 節](#))。黙示録はイエス・キリストを世に明らかにするものですから、天使の手に黙示録の巻物があることは、彼がキリストの予型であることの明確なしるしです([黙示録 5 章 6-7 節](#))<sup>75</sup>。

・奥義の完成：神の言葉として、イエス・キリストは自ら奥義ですから、彼の体である教会の完成が、「神の奥義」の完成なのです<sup>76</sup>。従ってこの表現は、主の再臨の時点で行われる復活を指し、この出来事は、イエスだけが(十字架での彼の勝利に基づいて)実現する権限を持つということです([ルカ 10 章 18 節](#); [ヨハネ 16 章 33 節](#), [19 章 30 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 5 章 5 節](#))。

2. 誓いは、勝利の保証です：ヘブル人への手紙によると、神は嘘をつくことはできないので、誓いを立てるときは神の言葉の正当性と現実性を強調することになります([ヘブル 6 章 13-18 節](#))。イエスの勝利の揺るぎない確実性を、ここで神は保証しているのです。そして、この保証のタイミングは非常に重要です。ここには、世界がこれまで見たこともないような大きな艱難期の

---

<sup>75</sup> [「来たる艱難期」第 1 部：「はじめに」I.2.c.参照。](#)

<sup>76</sup> [『悪魔の反乱』：第五部「裁き、回復、置き換え」II.8.b 項「教会」と「キリストの神秘」を参照。](#)

#### IV. 天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

向こう側に、悪の力のすべての支配に対する完全な勝利があると、神が大艱難期が始まる前に保証されているのです。これはイエス・キリストの「良い知らせ」または福音の一部で、イエスの世界征服と共に私たちがイエスと共に集められ([第一テサロニケ 4 章 13-17 節](#))、復活し([第一コリント 15 章 23 節](#))、報われる([黙示録 11 章 18 節](#), [22 章 12 節](#))ことが含まれているからです。私たちは本当に福音の力によって救われ([ローマ 1 章 16-17 節](#))、私たちは、私たちが愛してやまないお方との輝かしい永遠の未来の**ために**救われるのです。実際、天使が天から下ってくることは、まさにその偉大な日に主が天から戻ってくることを想起させることであり、その足が陸と海に触れることは、主イエス・キリストが千年王国の支配の間中、全地球を完全に支配するようになることのしるしなのです。天使が手を上げているのは、この宣言を行うために与えられた神の権威と、この言葉の成就の揺るぎない確実性をさらに示すものです。( [申命記 32 章 40 節](#)を参照)。

3. 奥義は救出の約束です： 教会を完成させる奥義(すなわち、上に説明した私たちの復活)が非常に短い時間で確実に成就するという保証は、本当に大きな励ましです。私たちの復活とイエスとの永遠の再会は福音の大部分を占めるので、これは事実「良い知らせ」です(文脈上 7 節参照。神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される)。私たちは大艱難期を通らなければならないかもしれませんが、この言葉は私たちの慰めとなります。なぜなら、神の目から見て、

#### IV. 天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

その試練の期間は本当に短いものであることを明示しているからです。この約束は、歴史上最も暗い期間から生まれる祝福された結果に私たちの注意を向けさせてくれます。そして、そのような試練に直面するすべての信者にとって、この視点を心に留めておくことは非常に重要なことです。時間は短いのです。少しの間我慢すれば、向こう側には想像を絶する喜びが待っているのです。

「もうしばらく[待つことを]すれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。(ヘブル 10 章 37-38 節) ([ハバクク 2 章 3-4 節](#)参照)

さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで(つまり、艱難期が終わるまで)、しばらく隠れよ。(イザヤ 26 章 20 節)

4. 巻物は、成就のしるしです：巻物または「小さな本」とは、先に述べたように、黙示録のことです。古代の世界では、「本」と言えばパピルスの巻物でした。その技術の限界から、黙示録のような長い書簡は、巻物の使用可能な筆記面に収まり切れないうほどになりました(それゆえ、黙示録の「本」があるのです)。イエス・キリストにおける神の御計画の最終的な成就と世に啓示

#### IV.天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

されたことを表す言葉が、神の言葉の最高書物として永遠に書き留められるだけでなく、この幻の中でもそのように描かれており、地上に戻ってきたイエスを象徴する天使が、まさにこの言葉、まさにこの巻物を手にしているのです。そしてそれは「開かれた」、つまり封印が解かれ、広げられた状態で、その完全な成就が間近に迫っていることを意味しています。ヨハネはまた、その巻物を食べることを許されますが、これは、そこに書かれていることが変わることなく成就することを明確に示すものであり、私たちは、その完全な成就の甘い祝福をすべて経験することになるのです(たとえ、実際に大艱難期を経験すると消化不良を起こすとしても)。

5. 雷鳴は裁きの予告です：天使のライオンのようなほえたける声に呼応して七つの雷が鳴り、天使はキリストの再臨を描写しているように見えるので、ヨハネが報告しないように言われた言葉は、主の勝利の帰還に関連した宣言である可能性が高いです。雷はしばしば神の威厳を表し、神の裁きを予感させます([出エジプト 9 章 23-34 節](#), [19 章 16-25 節](#); [サムエル記上 2 章 10 節](#), [7 章 10 節](#), [12 章 17-18 節](#); [ヨブ 40 章 9 節](#); [詩篇 29 篇 3-9 節](#), [77 篇 18 節](#); [黙示録 4 章 5 節](#), [8 章 5 節](#), [11 章 19 節](#), [16 章 18 節](#), [19 章 6 節](#); [マルコ 3 章 17 節](#) と [ルカ 9 章 54-55 節](#) を参照)。この天使の象徴を考えると、雷鳴は主の再臨に関連する具体的な裁きを表している可能性が高いのです。

すなわち万軍の主は雷、地震、大いなる叫び、つ

#### IV. 天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

むじ風、暴風および焼きつくす火の炎をもって臨まれる(ハルマゲドンの裁き)。そしてアリエル(=「エルサレム」)を攻めて戦う国々の群れ、すなわちアリエルとその城を攻めて戦い、これを悩ます者はみな夢のように、夜の幻のようになる。(イザヤ 29 章 6-7 節)

このように、大艱難期の直前でありながら、その恐ろしい時期に敵対者が行うすべてのことを神が制圧し、元に戻すことを見越して、七つの雷は、サタンとその反キリストの醜態に対する神の応答(畏怖すべき裁きの形)についての詳細を述べているように思われます。ヨハネは、雷鳴が実際に語ったことは聞き取ることができたのです。天の声によって、その内容を正確に書き留めることを禁じられただけです(4 節)。この状況は、[第二コリント 12 章 4 節](#)と類似しており、パウロは天で聞いたことで、今は知ることができないことに言及しています<sup>77</sup>。とはいえ、具体的なことはすべて語られていないにせよ、私たちは黙示録などから天の光景について多くを知っています。この時点で雷鳴の声が「封印」されているもう一つの理由は、この文脈の 11 節で明らかにされています：ヨハネは、神が大艱難期の終わりに下される裁きを私たちが見る前に、大艱難期の出来事についてまだ預言しておかなければなりません。他の聖句から推測すると、七つの雷の裁きとは、まさに主の再臨の間際で起こる七つの裁きであると思われまます：(私たちもヨハネと同じように、適切な時

---

<sup>77</sup> Swete の『[聖ヨハネの黙示録](#)』(Swete's [The Apocalypse of St.](#))



#### IV.天使と小さな巻物：黙示録 10 章 1-11 節

に詳細を取り上げます)：。

1. バビロンが破壊される([黙示録 18 章](#))。
2. ハルマゲドンの軍勢が破壊される([黙示録 19 章 1-21 節](#))。
3. 獣と偽預言者は、火の池に送られる([黙示録 19 章 20 節](#))。
4. サタンと悪魔の投獄([黙示録 20 章 1-3 節](#))。
5. マゴグと海岸地帯を襲う火([エゼキエル 39 章 6 節](#); [黙示録 20 章 9 節](#)参照)。
6. イスラエルの再集結と浄化([エゼキエル 20 章 34-38 節](#); [黙示録 21-22 章](#)も参照)。
7. 教会への裁き([ローマ 2 章 16 節](#); [第二コリント 5 章 10 節](#); [黙示録 2 章 26-27 節](#), [3 章 21 節](#), [20 章 4-6 節](#) 参照)。

[\[来たる艱難期第六部の「七つの雷」の詳細な説明へのリンク\]](#)

## V. 二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

二人の証人とその働きに関する記述は、10 章の力強い天使の幻のすぐ後、11 章後半の第七のラッパが鳴る直前に置かれていることが分かります。ここに挿入されているのには理由があります。二人の証人の働きは、艱難期の前半全体に及びますが、大艱難期の前夜に反キリストによって断ち切られます。二人の証人の働きの終了が含まれているので、この記述は、艱難期の前半の終わりを想定しない限り、それ以前に置かれることはあり得ません。この記述は、大艱難期の終わりにおける勝利に関する力強い天使の預言と、最後の三年半を開始する第七のラッパの間に位置し、二人の証人とその働きに関する記述は、神の視点から艱難期の前半を総括し、これから起こる大いなる災いのための舞台を整える役割を果たしています。この時点の二人の働きを検証することによって、地上で何が起こっていたかを、神の裁きと密接に関連して(裁きの中にも恵みと憐れみがあるという)神の真理の証しという観点から見ることができます。

### 黙示録 11 章 1～2 節

- (1)それから、わたしはつえのような測りざおを与えられて、こう命じられた、「さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々とを、測りなさい。
- (2)しかし[内庭]は除いて測らないようにしなさい。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは、四十二か月の間(つまり、11 章の出来事の後には始まる大艱難期の間)この聖なる都を踏みにじるであろう。(黙示録 11 章 1-2 節-英文直訳<脚注 78 参照>)

これは、ヨハネが艱難期の出来事を間近に預言するという黙示録 10 章 11 節の命令の成就を始めるものです。内庭(青銅の祭壇のある、いわゆる「祭司の中庭」)を除いて<sup>78</sup>、神殿と祭壇の大きさを(礼拝者の数とともに)測ること、エルサレムの異邦人支配の 42 ヶ月間の預言(ここでは、異邦人が神殿に流入していることが明確に示されています)は、艱難期の「地上の」出来事の短い、有効な概要を与えています。ここでは、(計測可能な)再建された神殿、(祭壇があることからして明らかな)復活したユダヤ教の儀式、(数えるのが大変なほど多くの真の神の崇拝者たちがいるほどの)ユダヤ人の真の信仰が著しく復活した証拠を見ることができます。しかし、その一方で、この神殿は比較的短期間のうちに不信心者に占拠され、エルサレム自体も三年半の間、敵対する勢力の支配下に置かれる(少なく

---

<sup>78</sup> この連載の前回で指摘したように、シナイ写本はここ(ギリシア語 エクソテン: Ἔσωθεν)を正しく「内側」と読んでいます。ナオス(神殿)には祭壇のある一番奥の祭司の中庭が含まれますが、この祭壇は町を踏み荒らす「異邦人に与えられている」、つまり、異邦人はこの神聖な場所にいるべきではないのです。エクソテン(外側)という読みは正しくなく、ここにはヘロデ王の「異邦人の中庭」への言及はありません。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

ともある程度は)ことが告げられています。この章では、<黙示録 11 章>2 節(異邦人の支配が 42 ヶ月続くという予言)だけが、大艱難期の間にかかる出来事を(伏線として)述べていることに注意することが重要です。この章の他の部分は、すべて大艱難期の前半にかかる出来事です。この章の後半に(二人の証人が反キリストに対抗して殺されるという)、2 節の成就の始まりが見られますが、実際にエルサレムを支配し、反キリストが神殿とその敷地を汚すのは、第七のラッパが鳴って大艱難期が始まった後です(これらはすべて、[このシリーズの第 4 部](#)で扱われます)。

**四十二ヶ月間：** 異邦人がエルサレムを「踏みつける」この期間は、上で説明したように、大艱難期(11 章に述べた二人の証人の働きが終わった直後の第七のラッパから始まる)を指しています。主は、[ルカ 21 章 24 節](#)で異邦人によってエルサレムが踏みにじられることを同様に言及し、この異邦人の侵入と征服の状況は「異邦人の時代が成就するまで」、つまり、反キリストによるイスラエルとエルサレムの暴力的支配が、主が再臨において力づくで即座に終結させるまで続くと教えています。この時点で、大艱難期の対象となる 42 ヶ月の期間について、聖書の記述を要約しておくで便利でしょう。

[ダニエル 7 章 25 節](#)では、至高の聖徒(すなわち信者)は、「ひと時とふた時と半時」の間、小さい角の権力(すなわち反キリストと大迫害)に引き渡されると言われていますが、これ

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

は大艱難期の三年半を表す聖書的な言い方です<sup>79</sup>。

[ダニエル 9 章 27 節](#)では、「きたるべき君の民<ダニエル 9 章 26 節>」(すなわち、復活したローマの支配者としての反キリスト)は、最後の「7<一週>」の間に条約を結び、「7<一週>」の真ん中、すなわち 7 年間の真ん中である大艱難期の始まりにそれを破棄することになる、とあります。

[ダニエル 12 章 7 節](#)では、ダニエルと話す天使が、迫害が止まり、すべてが終わるまでに「ひと時とふた時と半時」があると宣言しています(つまり、大艱難期は 3 年半続くのです)。

[黙示録 11 章 2 節](#)には、異邦人(反キリストの軍勢)は 42 ヶ月間、つまり大艱難期の三年半の間ずっとエルサレムを苦しめます(状況はさまざまですが)。

[黙示録 12 章 6 節](#)では、女イスラエルは 1260 日、つまり大艱難期の 42 ヶ月の間、守られると言われています(標準的な 30 日の月で表されています)。

---

<sup>79</sup> より短い時間単位(時間、日、週、回など)を用いて、預言的にはるかに長い区分を表現する聖書の慣行については、『悪魔の反乱』第 5 部:「審判、回復、置き換え」、第 II.8 節、「『再創造の七日間』の証拠」、および「来たる艱難期」: 第 1 部:「序論」、第 IV.1.b.項、「『主の日』のパラダイム」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

[黙示録 12 章 14 節](#)では、女イスラエルは、ひと時とふた時と半時の間、つまり大艱難の三年半の間、保護されると言われています。

[黙示録 13 章 5 節](#)では、反キリストの野放図な支配は 42 ヶ月間、つまり大艱難期の間続くと言われています。

艱難期後半に言及する上記の表現の唯一の例外は(しばしば誤解されるのですが)、この文脈のすぐ後にある[黙示録 11 章 3 節](#)です。この箇所では、1,260 日の期間は 2 節の最後の 42 ヶ月と同じ長さですが、[黙示録 11 章 3 節](#)で説明されているのは、二人の証人の宣教の期間であり、艱難期前半(すなわち、大艱難期または 7 年間の艱難期後半の前)に起こる出来事です。

**艱難期の神殿：** 2 節の「四十二ヶ月」は大艱難期を指していますが、11 章の残りの部分(15 節の第七のラッパまで)は、艱難期の前半に起こる出来事の記述です。黙示録の中で初めて、地上の不信仰な人々が一連の恐ろしい裁きを受けている間、イスラエルでは重要な信仰復興が起こっていることが分かります。このリバイバルの一環として、神殿が再建され、ヨハネはそのすべての寸法を正確に測定するように招かれています。また、モーセのおきてに合った祭壇があることから、神殿の儀式も復活していることがわかります。そして、かなりの数の本物の礼拝者が神に敬意を表しています。これは、この時点で、144,000 人の証人の働きに関連したリバイバルが、大きな実を結んでい

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

ることを明確に示しています。

ヨハネに与えられた物差しの描写は、意図的にエゼキエル書 40 章以降の場面を思い起こさせるものです。その箇所では、エゼキエルが千年後のエルサレムに連れてこられ、「青銅のような姿の人」(すなわち、キリストの受肉前の姿)を見えています。主はそこで同じような棒を手に持って、千年王国時代の神殿群を測っておられます。[黙示録 11 章 1 節](#)が「言う」という分詞だけで、話し手が特定されていないのは、後の 3 節で分かるように、話し手は神であり、二人の証人がしもべとして仕えている主イエス・キリストご自身(すなわち、彼らは「私のしもべ」：[マタイ 16 章 28 節-17 章 13 節](#)参照)なのです。この一連の事実から、艱難期の神殿の再建は神の命令と監督によるものであり、それは神の測定の仕様と一致している(そして、それが真実であることを自分で見るために、主がヨハネに与えている)ことが推測されます。<sup>80</sup> 従って、神殿儀式の復興も神の要請によるものでなければならず(エズラ 3 章以降に記録されている復興のパターンを参照)、礼拝者も神の正当な信者、すなわち、14 万 4 千人の証

---

<sup>80</sup> このような測りざおや測りなわを用いた測定の方法や概念には、しばしば神の基準を用いるという考え方が含まれ、その基準に違反した場合には裁きが下されます([ヨブ記 38 章 5 節](#); [イザヤ 28 章 17 節](#), [34 章 11 節](#); [エレミヤ 31 章 39 節](#); [哀歌 2 章 8 節](#); [エゼキエル 40 章 3 節](#), [47 章 3 節](#); [アモス 7 章 7-9 節](#); [ゼカリヤ 1 章 16 節](#), [2 章 1 節](#), [4 章 10 節](#); [サムエル記下 8 章 2 節](#))。 [エゼキエル 43 章](#)には、最初の儀式的な清めの手順が書かれています。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

人の働きによってイエス・キリストに立ち返るイスラエルの人々であるのです。これらの真の、正当な、神によって定められたもの(すなわち、神殿、その儀式、大勢の礼拝者)を、反神の「異邦人」(すなわち、反キリストとその追隨者)が間もなく神殿を汚し、その儀式は中断し、礼拝者を散らし、直接敵対することは、回復した神殿とそこへの神の礼拝が本当に神の、神のための、神によるものだという証拠なのです。

艱難期はイスラエルと教会が共に歩む回復の時代であり、イスラエルが再び指導的役割を果たすのですから、ここに再建された神殿で神殿儀式を復活させることが書かれているのは当然でしょう。<sup>81</sup> 長い中断の後、神から送られた二人の使者の直接の結果として、新たに行われる犠牲の意味について混乱はないでしょう: 来たるべきものの影ではなく、これらがキリストのすでに成し遂げられた業への記念であることが明確に理解されます(すなわち、キリストの業を記念するものです。これらの儀式は、千年王国時代の犠牲がそうであるように、モーセの時代の犠牲とは目的が異なるのです([エゼキエル 45 章 13-25 節](#)参照)。この「イスラエルの回復」(つまり、彼らの心が神に立ち返り、適切な礼拝が復活することです;カルメル山でのエリヤの言葉を参照:<→[列王記上 18 章 32-33 節](#)>)の原則は、すでに 14

---

<sup>81</sup> 「来たる艱難期」第二部 B:「艱難期への天の前奏曲」、セクション V、「144,000 人の封印」、および「悪魔の反逆」の第五部: 艱難期の背景「裁き、回復、置き換え」の [II.8.b.i「イスラエルの独自性」](#)参照。



## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

万 4 千人の働きのケースで見たように、二人の証人とその働きに非常に密接に関連しているのです。

あなたがたは、わがしもべ**モーセ**の律法、すなわちわたしがホレブ(すなわちシナイ)で、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者**エリヤ**をあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせ[神に対して](回復させ)る。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。(マラキ書 4 章 4-6 節)

すると、見よ、**モーセ**と**エリヤ**が彼らに現れて、イエスと語り合っていた。... 弟子たちはイエスにお尋ねして言った、「いったい、律法学者たちは、なぜ、エリヤが(御国の前に)先に来るはずだと言っているのですか」。答えて言われた、「確かに、エリヤがきて、**万事を元どおりに改める**であろう。(マタイ 17 章 3 節, 17 章 10-11 節) ([マルコ 9 章 4 節](#), [9 章 11-12 節](#) 参照)

だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。それは、主のみ前から**慰めの時**がきて、あなたがたのためにあら

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

はじめ定めてあったキリスト(メシア)なるイエスを、神がつかわして下さるためである。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた**万物更新**の時まで、天にとどめておかれねばならなかった(文字通りには、「天が迎えなければならぬ」)。モーセは言った、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。その預言者があなたがたに語ることには、ことごとく聞きしたがいなさい。(使徒行伝 3 章 19-22 節前半)

これらの箇所は、将来のイスラエルの霊的復興と二人の証人およびその働きと密接に結びついています。黙示録 11 章の文脈では、二人の証人は再建された神殿、復活した儀式、復活した礼拝と密接に関連していることから、神殿の再建とそれに関連する神々しい礼拝の回復は、まさにこの二人の王国の先駆者によって指示されていると結論づけることができます。

旧約聖書の中で、霊的復興と正統な主への礼拝の回復にこれほど適した人物は他にいないでしょう。モーセは、主から遠く離れた民に遣わされ、神ご自身によって書かれた契約を彼らに仲介しました([ガラテヤ 3 章 19 節](#))。エリヤは、長い間異教徒の偶像崇拜に支配されていた民に遣わされ、カルメル山で偉大で劇的な霊的勝利を収めました([列王記上 18 章 16-46 節](#))。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

エリヤがカルメル山で主の祭壇を再建したことは、艱難期の神殿再建の主導的役割を予見させ ([列王記上 18 章 30-32 節](#))、モーセはもちろん最初の幕屋の建設とその家具、それに仕えるために神が定めた儀式を監督しています (その回復を監督するのにこれ以上の人はいないでしょう：[出エジプト記 25 章 40 節](#))。ここで、(比較的小さい) 神殿の再建に必要な時間が、ひどく長いわけではないことも指摘しておかなければなりません。ヘロデが設計した巨大な建造物 (建設に時間がかかった：[ヨハネ 2 章 20 節](#)) は、実は神殿というよりも、第二神殿をさらに再現拡大したものでした。エゼキエル書 40-43 章は、エゼキエルが千年王国時代の巨大な神殿群について描いたものですが、この解釈とも一致します。神殿の建物自体 ([エゼキエル 40 章 48-49 節](#)) は比較的控えめなもので、ヘロデの巨大な神殿群の中に置かれた第二神殿の場合と同様に、全体のデザインのごく一部を構成しているに過ぎないのです。したがって、モーセとエリヤが神殿を再建し、(エゼキエル書や他の箇所で説明されている) その神殿<の装飾や神殿に付随した建物群>の完成は、次の箇所が示しているように、主の千年王国時代まで待つことになることは、このテーマを扱っている聖書箇所と完全に一致しています<sup>82</sup>。

---

<sup>82</sup> [エゼキエル書 43 章 10 節から 11 節](#)は、神殿建設に関する指針を示すというよりも、1)建設前に将来の神殿を深く観想すること、2)建設後に神殿とその複合体を保存することを促すことを意味しています。

V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

ケダルの羊の群れはみなあなたに集まって来、ネバヨテの雄羊はあなたに仕え、わが祭壇の上にのぼって受けいられる。こうして、わたしはわが栄光の家(すなわち神殿)を**輝かす**。(イザヤ書 60 章 7 節)

レバノンの栄えはあなたに来、いとすぎ、すずかけ、まつは皆共に来て、わが聖所(すなわち、神殿)をかざる。またわたしはわが足をおく所を**尊くする**。(イザヤ 60 章 13 節)

(12)彼に言いなさい、『万軍の主は、こう仰せられる、見よ、その名を枝という人(すなわち、メシア)がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。(13)すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び[高め]、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの[職の]間に平和の一致がある』。(ゼカリヤ 6 章 12-13 節)<sup>83</sup>

「見よ、わたしはわが使者をつかわす。彼はわたしの前に道を**備える**。またあなたがたが求める所の主

---

<sup>83</sup> これは第二神殿がすでに建設された後に書かれたものです(ゼカリヤ 1 章 7 節と ハガイ 1 章 15 節を比較)。また、ゼカリヤと同時代人であり、同僚であったハガイから、上部構造のない神殿の土台さえも神殿と呼ぶことができたことがわかります(ハガイ 2 章 3 節、「この家」；エズラ 3 章 12 節参照)。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

は、たちまち**その宮に来る**。見よ、あなたがたの喜ぶ契約の使者が来ると、万軍の主が言われる(つまり、その偉大な日のために、すでに「準備」して建てられている)。(マラキ書 3 章 1 節)

モーセとエリヤは、この第三の、かつ最後の神殿を、神が定めたとおりに、正しく、敬神的に、聖なる方法で完成させるために必要なすべての神的権威を持つことになります。この二人の、神によって任命され、神によって靈感を受け、神によって力を与えられた、来たるべき主イエス・キリストの王国の先触れの指導者によって、時間、配置、政治、物流に関するすべての問題は、解消されることになるでしょう。

### 黙示録 11 章 3-4 節

(3)そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ(すなわち、前述の四十二ヶ月間<大艱難期>に先立つ三年半の間)預言することを許そう。(4)彼らは、全地の主のみまえに立っている二本のオリーブの木、また、二つの燭台である。

私たちが以前の研究で主張し、上記で示唆したように、二人の証人とは、この特別な働きのために生き返ったモーセとエリヤにほかなりません(復活というよりは蘇生させられたのです

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

が)。ここでは名前は挙げられていませんが、彼らが主から「わたしのふたりの証人」と呼ばれている事実は重要です。

1. 二つのオリーブの木と二つの燭台：この二人の証人が、再建された第三神殿と関連して登場していることから、第二神殿の再建と預言的に関連しているゼカリヤ 4 章の「油注がれた二人」の詳細な記述と結びつけることができます。ゼカリヤは、4 章を通してこの二人を描写していますが、これはオリーブの木と燭台の象徴の意味を理解する上で、非常に重要です。ゼカリヤが見た、七つのともしび皿がついた一本の純金の燭台の幻では、燭台の左側と右側に二本のオリーブの木が立っています（[ゼカリヤ 4 章 3 節](#)）。ゼカリヤはこの幻の意味を尋ねると、まず「**権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである**」と言われます（[ゼカリヤ 4 章 6 節](#)）。この答えの部分は、幻の象徴の詳細ではなく、神殿再建の力を与えるのは神の霊であるという全体的な原則を説明しています。第二神殿が神の助けなしに再建されたわけではなく、二人の証人が将来の再建に関連した預言である（すなわち、第二神殿の再建では二人の証人についてそれ以上言及されていない）ことを考えると、黙示録 11 章に見られる第三神殿の再建も神の霊によって成し遂げられ、その再建はゼカリヤ書 4 章の二人の証人（黙示録 11 章では建設後にその場に居合わせていることがわかります）によって監督されると結論づけることができます。これが、ゼカリヤの幻に聖霊が「油注がれた二人」を登場させた主な理由であることは明らかです。つまり、この幻は、近い将来と遠い将来の両

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

方に適用されるのです。というのは、将来においても再建が起こることを暗示して当時の励ましとし、それによって「油を注がれた二人」の預言とその将来の再建への関与（「主の日」の場合によく使われる類推）をもって私たちに励ましを与えるものです。

ゼカリヤ書の中でこの二人に与えられた名前は、一般的に「油を注がれた者」と訳されていますが、実は「油の子」なのです。確かに、これはヘブル語の慣用句なのですが（「～の子」はある部類に属することを表します）、通常の訳では、受動態で表現されてしまっていますが、能動態の表現を使うべきなのです。「油注ぐ者」が正しい解釈です。なぜなら、黙示録で使われている「証人」という言葉のように、神の力と光を受けているだけでなく、それを伝える者であることを意味するからです。[ゼカリヤ 4 章 12 節](#)で、二本のオリーブの木が油を燭台の金の鉢に注いでいるのは、このような象徴的な意味を持っています。燭台には七つのともしび皿があり、それは「主の七つの目」であり、全地上に及んでいます。この「目」は純粹に監視目的であると誤解されがちですが、人間の目が光を反射して輝くように、ヘブル語の「アイーン(אֵין)」は時に光を反射する物の外観を指します([レビ記 13 章 5 節](#), [13 章 37 節](#), [13 章 55 節](#); [民数記 11 章 7 節](#), [22 章 5 節](#), [22 章 11 節](#); [サムエル記上 16 章 7 節](#); [エゼキエル 1 章 4 節](#), [1 章 7 節](#), [1 章 16 節](#), [1 章 22 節](#), [1 章 27 節](#), [8 章 2 節](#), [10 章 9 節](#); [ダニエル 10 章 6 節](#); [箴言 23 章 31 節](#)も参照<「～の目には」「のように見えた」「のようであった」などと訳されている箇所へのヘブル語は「アイーン」>)。同様に、この二

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

人の証人は、艱難期の暗闇の中で、神の真理の光を反射する主役になります。

ゼカリヤの七つのともしびは七つの目でもあり、黙示録の 4 章(燭台=霊)と 5 章(目=霊)の七つの霊と象徴的に同じです。これらすべての場合において、私たちは聖霊の完全な七重のあかしと関係しており、神の光を放ってこの世の闇を照らし、人を用いながらも、常に真の光である私たちの主であり救い主であるイエス・キリスト(「能力によらず、わたしの霊による」：[ゼカリヤ 4 章 6 節](#))の光を放つのです。

また、七つのともし火が、御座の前で燃えていた。  
これらは、神の七つの霊である。(黙示録 4 章 5 節)  
([黙示録 1 章 4 節](#), [3 章 1 節](#)も参照)

わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。  
これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(黙示録 5 章 6 節)([黙示録 1 章 4 節](#), [3 章 1 節](#)参照)

ゼカリヤ書 4 章の文脈では、燭台とそのあかりは明らかに、来たるべき暗黒の時代に、世界における神の光の証しを語っ



## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

ています(ちょうど、七つの時代の教会が、神の光の証しを世界に与える一連の燭台として表されるのを見たのと同じです：[黙示録 1 章 20 節](#))<sup>84</sup>。この艱難期の光の証人に力を与えるのは、「油を注ぐ二人」、つまり二人の証人であるモーセとエリヤです。現代においては教会が証を提供しているように、艱難期の暗黒の時代には、この二人と彼らによって指揮される 144,000 人の働きが、世界における神の光の主要な証人となります。この証についてですが、イスラエルであろうと、教会全般であろうと(もちろん、真のイスラエルとは切り離せないものですが；[ローマ 11 章 11-24 節](#)参照)、この二人のユニークな神の人と彼らが指導する働きであろうと、世の光はイエスであり、私たちは皆、その唯一の真の光の反射体にすぎず、私たちはすべて神から、神の霊から究極の力を受けているということをもう一度繰り返して強調することは重要でしょう<sup>85</sup>。

---

<sup>84</sup> これは、ラオデキヤの最終的な教会の時代が、艱難期の始まりとともに終わりを告げたことを示すもう一つの明確なしるしです。証人の務めの「燭台」は、二つの燭台、すなわち、二人の油注ぎの証人モーセとエリヤの務めに取って代わられたのです。来たる艱難期参照：第 2A 部「七つの教会」第 7 節「ラオデキヤ」参照。

<sup>85</sup> [ゼカリヤ 4 章 12 節](#)では、二人は再びオリーブの木と呼ばれる代わりに、突然、オリーブの「枝」と呼ばれ、私たち皆の救い主である「枝」([イザヤ 4 章 2 節](#), [11 章 1 節](#), [53 章 2 節](#); [ゼカリヤ 3 章 8 節](#))に倣います。しかし、そこで使われているヘブル語(שבֹּלֶת、文字通りには「穀物の穂」)は、この二人が枝に従属することを強調するために選ばれています([ゼ](#)

「能力によらず、わたしの霊によって」と万軍の主は言われる。(ゼカリヤ 4 章 6 節)

2. 二本の柱: 最初の神殿の玄関ポーチに、ソロモンは北側と南側に、二本の巨大な青銅の柱を据えました。これらの柱は、神殿の敷居を囲む二本の巨大な守護者のようで、ゼカリヤのオリーブの木と燭台の幻の預言を聞いた人は間違いなく、特に破壊される前の最初の神殿を見たことがある人であれば、それが心に刻まれていたことでしょう([エズラ 3 章 12 節](#); [ハガイ 2 章 3 節](#); [ゼカリヤ 4 章 10 節](#)を参照)。いずれにしても、柱はもともと建築的に木を表現したもので、燭台も同じでした(すなわち、「花のような杯、つぼみ、花、枝」; [出エジプト記 25 章 31-32 節](#)を参照)。さらに、聖なる場所にあった燭台がこの二つの柱から遠く離れていなかったこと(そして、燭台も木を象徴するように設計されていたこと: [出エジプト記 25 章 31-40 節](#), [37 章 17-24 節](#))を考えると、一方では柱と、他方ではゼカリヤの幻における燭台とその二本のオリーブの木との関連性は、無視できないものであることがわかります。[ゼカリヤ 4 章 14 節](#)と[黙示録 11 章 4 節](#)で使われている「地の主の前に立っている者」というユニークで比類のない言葉の言い回しは、まさに柱のように恒久的で安定した位置を示唆していることを、この図式に加えてもよいでしょう。

---

[カリヤ 6 章 12-13 節](#)参照)。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

神殿の他のすべてのものは象徴的で預言的な意味を持ち (2B「天の神殿の予型としての地上の幕屋と神殿」参照)、燭台そのものは、私たちが見たように、主イエス・キリストの予型です<sup>86</sup>。したがって、ソロモンがこの二つの柱を名付けたことは、預言的であると十分に考えられます。さらに、[黙示録 3 章 12 節](#)は、神殿の柱を個々の信者に結びつけるための密接な類似性を提供しています。「**勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない**」。私たち信者は、この二本の柱が永遠に「主の前に立つ」ように、復活の時には、キリストのからだに不可欠な、取り外すことのできない部分となるのです。このような預言的、象徴的な目的がなければ、ソロモンがこの二つの無生物の青銅の柱に名前を付けたことは、少なくとも不可解なことであったでしょう。この二本の柱を、先に述べた他の二組の柱と結びつければ、(これらの柱はすべて同じ二人の個人を指していることはすでに指摘しました)、ソロモンの神殿の入り口にある柱の名前も重要であることがわかります。

ヘブル語で柱を意味する「アムド」(עמוד、すなわち「立っているもの」)は、[ゼカリヤ 4 章 14 節](#)で「主のそばに立っている」油を

---

<sup>86</sup> 「来たる艱難期」第 2 部 B:「苦難への天の前奏曲」、第 I.2.b「金の燭台」、および「サタン」第 1 部「サタンの反逆と墮落」II.5.b「幕屋の図解」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

注ぐオリーブの木に使われている動詞とほとんど区別がつかないので、これらの柱と二人の証人のつながりはより確かなものになります。二人の証人、油注ぎの者、二つの燭台、二本のオリーブの木が、すべて「地の主のそばに／前に(柱のようにしっかりと)立つ」ように、この二つの柱は、第一神殿の(燭台があった)入り口の両側にしっかりと立っていました。北側にあるものはボアズと名付けられ、南側にあるものはヤキンと名付けられました(列王記上 7 章 21 節)。ヤキンとは「彼(=主)が確立する」と訳され、ボアズとは「彼における強さ」を意味します。この二つの名前は、二人の証人モーセとエリヤの経歴をそれぞれ要約したものです。ヤキンが先に、ボアズが後に建てられ(ちょうどモーセの最初の地上での働きがエリヤのそれに先行したように)、ヤキンは南(すなわち、神殿が東を向き、箱や戦車の玉座がその方向を向いていたので「右手」)に第一位の名誉を受け、ボアズは北に、第二位の名誉に立つのです。同様に、エリヤの働きはあらゆる点で優れていましたが、モーセの働きはより優れていました(パウロはモーセの働きをヘブル 3 章における私たちの主の働きのそれと最もよく似たものとして用いています)。この二人の働きは、結局のところ、やや異なる目的をもっていました。モーセは律法の仲介を通して、イスラエルの霊的基盤を効果的に「確立」するための主の道具であり(「確立する」)、一方エリヤは霊的復興(「彼における新たな力」)のための主からの重要な備えを司りました<sup>87</sup>。神の視点から見れば、歴史は常

---

<sup>87</sup> [ゼカリヤ 4 章 14 節](#) で使われているヘブル語の前置詞'al(וַעַל)は、「全

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

に、真理の最初の確立と真理への回復というこれらの二つの柱によって支えられ、両柱は常に真実である方、「全世界の主」となった我々の主、救い主イエスキリストを見ているのです。この二人の証人は、主の右手と左手に、青銅の柱のように堅固に立っているのです。主の側で直接仕えることは、明らかに卓越した名誉です。ヤコブとヨハネの母親が、息子たちのためにこの特権を求めたとき、主はこう答えられました。「これらの場所は、備えられた者のものである」([マルコ 10 章 40 節](#); [ルカ 14 章 8-11 節](#)を参照)。なぜなら、私たちの主の十二使徒は確かにユニークな地位を占めますが(「イスラエルの十二部族をさばく」、すなわち、神の家族の十二部族の長になること: [マタイ 19 章 28 節](#)、[ルカ 22 章 30 節](#))、私たちの主の十二使徒は、そのような地位にはありません。この最も名誉ある栄誉は、モーセとエリヤに与えられます。親愛なる主の近くに永遠にいられることは、実に特別で崇高な報酬であり、この二人の場合は、一度だけでなく二度にわたって地上での優れた奉仕によって獲得されるのです。

しかし、わたしは神の家にある緑のオリブの木のようだ。わたしは世々かぎりなく神のいつくしみを頼む。(詩篇 52 篇 8 節)

---

地の主のために立つ者」、つまり、キリストの代理者、証人、先駆者、前触れとして表現することもできます。つまり、モーセとエリヤはそれぞれ、キリストの王権([ミカ 6 章 4 節](#)参照)と大祭司職([ヤコブ 5 章 17-18 節](#))を象徴的に表していると理解することができます。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

3. 回復のミニストリー：艱難期には、モーセとエリヤと 144,000 人の宣教が効果的に行われるために、二つの主要な回復の分野に取り組む必要があります：1) 神殿とその儀式が、ユダヤ人の新しい礼拝の焦点として回復される必要があります。2) 多くの同胞の心を、彼らの主であり私たちの主である唯一のメシア、イエス・キリストに取り戻す必要があります。その原初の幕屋とそのおきてと儀式を創設し、建設し、制定するための神の道具として、モーセほど権威のある人物はいないでしょう。また、イスラエルの歴史上、最も劇的な霊的復興、それも（反キリストとその偽預言者を連想させる）悪魔崇拜と国家統治を結びつけた異教政府からの最も厳しい反対にもかかわらず用いられた神の道具として、エリヤほど優れた人物はいないでしょう。さらに、この二人の偉大な神の使徒が将来、艱難期の前半にイスラエルの残りの者たちを回復し増やすために働くことは、聖書にしっかりと記されています。

あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのような**ひとりの預言者**（すなわち、モーセを予型とする主イエス・キリスト）をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。これはあなたが集会の日  
にホレブ（＝シナイ）であなたの神、主に求めたことである。すなわちあなたは『わたしが死ぬことのないようにわたしの神、主の声を二度とわたしに聞かせないでください。またこの大いなる火を二度と見さ

せないでください』と言った。主はわたしに言われた、『彼らが言ったことは正しい。わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのような**ひとりの預言者**を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう。彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰するであろう(すなわち、その従わない人はその責任を負わせられる)。(申命記 18 章 15-19 節)

旧約聖書の預言では、私たちの主の対型が予型よりも(すなわち、モーセよりもメシアが)強調されるため、エリヤの将来の帰還はより一般的に受け入れられ理解されていますが、しかし主の先駆者の場合、対型よりも予型の方が(すなわち、バプテスマのヨハネよりもエリヤが)預言の前面に出てきます<sup>88</sup>。従って、上記の箇所は、神の真の預言者全員に対する一般的な適用

---

<sup>88</sup>簡単に言えば、「予型論」とは、本体や模範(「対型」)を表したり、説明したり、象徴したりするために、類似の代用品(「予型」)を用いることであり、例えば、真鍮の祭壇は十字架の予型(十字架を予表し、その意味を説明している)です。[「来たる艱難期」第 1 部「序論」、IV.1.d 節「旧約聖書の預言における予型論と連続性\(シーケンス\)」](#)参照。←「予型論と連続性」に関しては、pg96 を参照下さい。改訂された訳文が掲載されています。「来たる艱難期 黙示録の歴史」第一部を本でお持ちの方は同じく pg.96 の「類型論」→「予型論」、「順序」→「連続性」に訂正してください。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

を持ちますが(続く 20-22 節参照)、一人の預言者を強調していることから明らかなように、ここでは、モーセの働きだけが比較に値するほど卓越した方法で、御言葉を宣べ伝える一人の人物の将来の到来に関係しています([ルカ 9 章 8 節](#); [ヨハネ 1 章 21 節](#), [1 章 25 節](#), [1 章 45 節](#), [6 章 14 節](#), [7 章 19 節](#); [ヘブル 3 章 1-6 節](#)を参照)。ですから、これらの聖句の至高の成就是、私たちの救い主の初臨にあります([使徒行伝 3 章 22-26 節](#); [7 章 37 節](#)参照)。しかし、この事実はこの節がモーセの帰還に最終的に適用されることを排除するものではありません。なぜなら、イスラエルの救いは主の初降臨によって達成されましたが、現況と預言的背景からすると、真の神への礼拝を復活させるために、そのような卓越した預言者を依然として必要としているからです。そして、艱難期の終結を待つて再臨しなければならない私たちの主以外には、モーセ自身以上に「モーセのような」人はいません。[ヨハネ 1 章 25 節](#)では、メシアの先駆者でありエリヤの予型であるバプテスマのヨハネに対して、パリサイ人の弟子たちが「あなたがキリストでもエリヤでもまたあの預言者でもないのなら、なぜバプテスマを授けるのですか」と問いかけて、二組の予型と対型が結び付けていることがわかります。一般的にこの二つの予型のどちらかがイエスの再臨に先行する(すなわちエリヤ)と考えられています。聖書の中でこの二人が一貫して関連性があることを考えると、モーセほどもう一人の証人にふさわしい候補者はいないでしょう。



V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた**定めとおきて**[の二つ]とを覚えよ。見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。そうすれば、**父は子らとともに**[**神に対して**]**心を入れかえ**、子らは父とともに心を入れかえられるからである。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」。([英文直訳](#) [口語訳マラキ 4 章 4-6 節](#))

上記の箇所ですら注目すべきは、通常、解釈の上で見落とされがちな事実ですが、この預言にはモーセもしっかりと登場していることです。モーセが「定めとおきて」をすべて「覚えておく」ことに関連して具体的に言及されていることは、再建された神殿で神殿儀式が復活することを予見しています。実際、「律法を思い出す」ことが先にあって、その後にエリヤが仲介すると言われている心の回復が続くのです。これは、神殿の再建と犠牲の復活が、霊的復興(エリヤの専門分野)と 144,000 人の宣教に不可欠であり、基本であることを示しています。ところで、上に引用した二つの箇所では、シナイ半島は「ホレブ」という別称で呼ばれていますが、これはヘブル語で「荒廃」を意味します。この呼び名は、二人の証人が宣教を開始するときに得られるイスラエルの荒涼とした霊性を思い起こさせ、それに伴って、

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

霊的反応だけでなく、律法の主な具体的特徴(モーセの専門分野である神殿再建とその儀式の再構築;出エジプト 32-34 章も参照)を完全に回復する必要があることを意味しています。

だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に[神に]立ちかえりなさい。それは、主のみ前から**復興<リバイバル>の時**がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリスト(メシア)なるイエスを、神がつかわして下さるためである。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた**万物更新の時**まで、天にとどめておかれねばならなかった。**モーセ**は言った、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、**ひとりの預言者**をお立てになるであろう。(英文直訳 [口語使徒行伝3章19-22節](#))

上記の文脈で、ペテロが来たるべき預言者に言及したのは、イエスがモーセの預言を最も直接的に成就したその預言者であることを同時代の人々に説明するためであったと考えられます。しかし、このように主の再臨に先立つ将来のリバイバル(つまり、「リバイバルの時が来るように」、「回復の時まで天に留まるべきイエス」)の文脈において、つまりイスラエルの将来のリバイバルと回復の問題が出てくるたびに、再び私たちの主の対型と切り離せない予型として、モーセが言及されていることは重要

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

です。また上記の箇所には、二人の証人の働きとして、リバイバル(エリヤに代表される霊的側面)と回復(モーセに代表される目に見える側面)という二重の焦点があることも示されています。イエスの再臨の準備の両側面がこのように言及されることは驚くべきことではありません。なぜなら、神がご自分の民をイエスの再臨のために準備されるのは、この二人の証人の両方を通してだからです。

すべての預言者と律法とが預言したのは、[バプテスマの]ヨハネの時までである。そして、もしあなたがたが[これを]受け入れることを望めば、この人こそ(すなわち、ヨハネ)は、[将来]きたるべきエリヤ[の予型]なのである。(マタイ 11 章 13-14 節)

答えて言われた、「確かに、エリヤが[将来]きて、[そのとき]万事を元どおりに改めるであろう。しかし、あなたがたに言うておく。エリヤは[また]すでに[真の予型として]きたのだ。しかし人々は彼を認めず、自分かってに彼を[ひどく]あしらった。人の子もまた、そのように彼らから苦しみを受けることになろう」。(マタイ 17 章 11-12 節) ([マルコ 9 章 12-13 節](#)参照)

上記の二つの節で、主は同時代の人々に、実際のエリヤの到来がまだ先であることを確証しています。しかし、モーセの真

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

の対型(すなわち、モーセが語った預言者である主ご自身)が、彼らの間に立っていたように、真の予型(すなわち、洗礼者ヨハネ)はすでに来ていました。ヨハネの予型であるエリヤの帰還は、キリストの予型であるモーセの帰還と伴うことになります。

この点を説明するために、この二重の予型と対型の間のいくつかの類似点について、ここで少し述べておきましょう。<sup>89</sup>

・二人の証人は、ヨハネと私たちの主イエス・キリストのように、三年半にわたって宣教する([黙示録 11 章 3 節](#))<sup>90</sup>。

・ヨハネは「エリヤの霊と力で」([ルカ 1 章 17 節](#))奉仕し、キリストはモーセのご自分についての証しについて語り([ヨハネ 5 章 45-46 節](#); [ルカ 24 章 44 節](#)参照)、ご自分へのくモーセのしたことへの予型性を語りました([ヨハネ 3 章 14 節](#))。

・エリヤの荒野での広範囲な流浪([列王記上 17 章 1-9 節](#))はヨハネの荒野での働き([イザヤ 40 章 3-5 節](#))の予型であり、モーセのシナイ山での 40 日間([出エジプト 24 章 15-18 節](#))はイ

---

<sup>89</sup> この点に関する詳細は、「来たる艱難期」をご覧ください：第二部 B: 「艱難期への天の前奏曲」V「144,000 人の宣教の経過」の「144,000 人の封印」。

<sup>90</sup> 「悪魔の反乱」第 5 部「裁き、回復、置き換え」、II.9.a.2「キリストの十字架刑」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

エスの荒野での 40 日間の試練と神との交わりの予型([マタイ 4 章 1-11 節](#))です。

・エリヤのイゼベルとアハブによる迫害([列王記上 19 章](#))は、ヨハネのヘロデによる迫害とヘロデヤの求めによる処刑([マタイ 14 章 1-12 節](#))の予型であり、モーセの反抗的な信徒に対する消息不明と再出現([出エジプト 32 章 1 節](#))は、疑う弟子たちに対するキリストの死と復活の出現([ヨハネ 20 章 9 節](#), [20 章 25 節](#))の予型です。

・ヨハネもイエスも、二人の証人のように、殉教しました(この表現は、世の罪のために御自身を犠牲にされた私たちの主の特別な犠牲を表現するのにふさわしくありません)。

・イエスとモーセは、それぞれ新約と旧約の仲介者であり、人は神を、神は人を表します([ガラテヤ 3 章 19-20 節](#); [第一テモテ 2 章 5 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#), [9 章 15 節](#), [12 章 24 節](#))。ヨハネとエリヤは、同胞に悔い改めてこれらの契約を守るように呼びかけました([列王記上 18 章 21 節](#); [マタイ 3 章 1-2 節](#))。

・モーセだけが主と顔と顔を合わせて話し([出エジプト 33 章 11 節](#))、キリストだけが父を見ました([ヨハネ 1 章 18 節](#))が、ヨハネもエリヤも信仰に迷った時に主ご自身から特別なお言葉を受けました([列王記上 19 章 9-18 節](#); [ルカ 7 章 18-28 節](#))。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

4.奇跡：二人の証人の働きが、モーセやエリヤの働きと明らかに類似しているもう一つの点は、どちらも例外的な奇跡を行ったことです(黙示録 11 章 6 節参照、「血」と「干ばつ」は、モーセとエリヤの手でそれぞれ実際に行われた最も注目すべき二つの災いの一つです)。ラッパの裁きとモーセの仲介で主がエジプトに命じられた十の災いとは、すでに類似性を確認してきました。後述するように、エジプトの十の災いも、後に黙示録 11 章で二人の証人が個人的に行う災いと強い類似性を持っています。実際、出エジプト記の災いで、艱難期に登場しないものはほとんどありません。艱難期は、信者が安全な向こう側に到達するために(反キリストとパロ、エジプトとバビロンなど)通過しなければならない一種の「海」を表しています。<sup>91</sup> モーセの他に、旧約聖書の信者で、エリヤほど多くの印象的な奇跡を起こした者はいませんでした(例えば、油と小麦粉が尽きなかった壺、やもめの息子の蘇生、祭壇の犠牲を焼き尽くす天からの火など)<sup>92</sup>。重要なことに超自然的な血は、モーセの権威を証明するために主がモーセに与えた決定的な第三の「しるし」でした(出エジプト 4 章 9 節と黙示録 11 章 5-6 節)。まさに、最初の二つのラッパの裁きと同じ超自然的な確かなしるしです。そし

---

<sup>91</sup> この類推は、意図的かつ聖書に沿ったものであり、このシリーズのパート 7 で詳しく取り上げます。

<sup>92</sup> エリシャだけがそれに近い存在で、彼の奇跡はエリヤの特別な霊の注ぎを二倍受けることによって行われました。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

て、エリヤの言葉によって、また彼の祈りによって、三年半の間、雨が降りませんでした。それはまさに、二人の証人の宣教の期間、すなわち、艱難期の前半と同じ長さです。(ルカ 4 章 25 節; ヤコブ 5 章 16-18 節; 黙示録 11 章 5-6 節も参照)

<sup>93</sup>  
。

5. 変貌：二人の証人がモーセとエリヤであることの最も明確な証拠の一つは、主の変貌の際に二人が主と共に現れたことです(マタイ 16 章 28 節-17 章 13 節; マルコ 9 章 1-13 節; ルカ 9 章 27-36 節)。この出来事は、主の再臨と御国の到来(すなわち、主のパルーシア(来臨): 第二ペテロ 1 章 16 節; マタイ 16 章 28 節; マルコ 9 章 1 節; ルカ 9 章 27 節 参照)を預言的に明示しています。キリストの再臨を予告するモーセとエリヤの二人が、変貌についての聖書箇所で言及されていることを考えると、その再臨を予告する黙示録 11 章の二人の証人と結びつけるのは必須で自然なことでしょう。イエスの弟子たちはこの出来事の後、エリヤのことだけを尋ね、イエスはそれに答えています。しかし、エリヤは「先に」(つまり、見たばかりの変貌が予示していた再臨の前に)来ると答えた主は、山で対話していたあの二人が現れる<つまり、エリヤだけではなくモーセも一緒に>という考えを排除する理由を彼らに(そして私たちにも)与えていま

---

<sup>93</sup> 列王記上 18 章 1 節で言及されている「三年目」は、干ばつが始まった時からではなく、エリヤがザレファテに滞在した時からです。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

せん。モーセがエリヤと共に山にいたことは、主の死と復活（それぞれ [ルカ 9 章 31 節](#) とイエスの栄光と復活に満ちた姿を参照）の後、二人が主の再臨に先立ち（再臨の前のしるしの二人の証人として）現れることを示すものです。

6. モーセとエリヤの体：モーセとエリヤは何千年もの間、肉体的に死んでいました。ですから、彼らが実際に目に見える形で、物理的な形で帰ってくるには、何らかの説明が必要です。まずクリスチャンとして、私たちは死者をよみがえらせる神の力を認め、来たるべき復活のときにこの祝福を受けることを期待します。それが私たちクリスチャンの望みです（[第一コリント 15 章 12-19 節](#)参照）。しかし、モーセとエリヤが戻ってくることは復活ではなく、蘇生です。後者は聖書で使われていない言葉ですが、聖書は、一方ではこの地上の生活に戻される人（そして、私たちと同じように再び肉体の死にさらされる）と、他方では、一度真の復活を遂げれば、もはや死にさらされない人（[第一コリント 15 章 54 節](#)）の、この区別をはっきりと示しているのです。<sup>94</sup> 会堂司の娘、やもめの息子、ラザロは、すべてイエスによってよみがえりました（[マタイ 9 章 18-26 節](#)；[ルカ 7 章 11-17 節](#)；[ヨハネ 11 章 1-44 節](#)）、ペテロが生き返らせたタビタ（[使徒行伝 9 章 36-42 節](#)）、パウロが生き返らせた少年（[使徒行伝 20 章 7-12 節](#)）、エ

---

<sup>94</sup> これらのテーマについては、ペテロ・シリーズ：#20「復活」をご覧ください。



## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

リヤとエリシャがそれぞれ生き返らせた少年 ([列王記上 17 章 17-24 節](#); [列王記下 4 章 8-37 節](#))、十字架刑の後に生き返った死者 ([マタイ 27 章 52-53 節](#))、そして、聖書に記録されているかどうかにかかわらず、この奇跡の他のすべての例は、例外なく、私たちがここで「復活」というより「蘇生」と呼んでいる例であり、これらのすべての場合において、その人達は後で肉体的に再び死んでいます。神のご計画がなされた中で、唯一の例外は、私たちの主イエス・キリストの人間としての本当の実際の復活です。復活の次の段階は、主がこの地上に戻って、ご自分のものであるすべてのもの、すなわち「キリストの来臨に際して主のものである人々」(すなわち、キリストの花嫁：[第一コリント 15 章 23 節](#))を迎えるまで行われないうのです。その時になって初めて、私たちは死がもはや何の力も持たない永遠の体を受け取るのです ([黙示録 20 章 6 節](#))。モーセとエリヤは再臨の前に肉体的に再登場し、その働きの最後になって反キリストに殺されるので、ここにあるのは復活というより、むしろ蘇生のケースであると断言できます。

モーセとエリヤの場合、一度目の出エジプトは非常に特別なものでした(次の出エジプトもそうなります：[黙示録 11 章 11-12 節](#))。エリヤの天の車での旅立ちについては、詳しく説明する必要はないでしょう([列王記下 2 章 1-18 節](#))。エリシャは、預言者たちの要請で事後に徹底的にエリヤを探させましたが、彼の肉体の痕跡は全く残っていないことが分かります。モーセの場合、ベテ・ペオルの対岸の谷に「葬られた」と言われています

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

([申命記 34 章 5-6 節](#))。しかし、同じ節で、「今日まで誰も彼の墓がどこにあるのか知らない」とも言われています。もし、モーセの墓がどこにあるのかが分かれば、後世の人々にとって、モーセの墓は大きな関心事であつたろうと思われます。[申命記 34 章 6 節](#)では、埋葬は神ご自身によるものとされていますが、ユダは「埋葬」は一時的なもので、その場所を知ることができなかった理由を明らかにしています。[ユダ 1 章 9 節](#)は、エリヤの肉体と同様に、モーセの肉体も天使の手によって天国に運ばれたことを説明しています。その作業は大天使ミカエルによって行われ、悪魔によって争われたのです。このように、私たちの主の、この二人の驚異的なしもべの肉体は、驚異的な方法で地上を去り、その結果、肉体が衰えないようにされ、まさに後に、同様に驚くべき、前例のない方法で長い年月を経て蘇生して戻ってくるようにされたのです。

7. 未完成の仕事: もう一つ、この二人の偉大な信仰者に共通する重要な要素は、彼らの働きが途中で終了してしまったことです。モーセは約束の地に入らず、イスラエルの民をカナンに定住させるのはヨシュアに委ねられました。エリヤはリバイバル(信仰復興)と奇跡的な証しの働きを完了せず、エリシャがその働きを引き継ぎました。両者とも、特別に奉仕した聴衆から大きな霊的反応を得られず、主への壮大な奉仕における一瞬の過ちによって、事実上、神によって「交代」させられました(その行動の動機の多くは、この人々の無反応な態度に対するものでし

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

た)<sup>95</sup>。モーセは頑固な部下から浴びせられた侮辱に怒り、カデシ(すなわちメリバ)で神の指示に背いてしまいました(民数記 20 章 1-13 節; 詩篇 95 篇 8 節)。エリヤはカルメル山での奇跡の後、民衆が覆すことをしなかった異教の政府から命を狙われて恐れ、一時的に任務を放棄し、砂漠に退きました(列王記上 19 章 1-4 節)。どちらの場合も、一時的に自分の性格に反する行動をとっています(普段は最も謙虚なモーセ(民数記 12 章 3 節参照)が傲慢な怒りで反応し、普段は勇気のあるエリヤ(列王記上 18 章 8-19 節参照)が自己憐憫と恐れで反応したのです)。しかし、彼らの失敗の結果としてこれらの偉大なミニストリーが中断されたことは、聖書の重要な原則を示しています:多く与えられた者からは、多くを期待されるのです(ルカ 12 章 48 節)。おそらく、世界の歴史の中で、この二人のような靈性に到達した信者はほんの一握りで、彼らが享受したような大きな働きを任された者はさらに少ないでしょう。このような大きな特権には、大きな責任が伴います。聖書は、二人の使命が早々に中断されてしまったことを明確に記しています(民数記 20 章 12 節; 申

---

<sup>95</sup> ちなみに、二人ともキリストのような人物に「継がれる」ことになります。(ちょうどメシアが再臨する時にそうするように)モーセを引き継ぐヨシュアがイスラエルの民をその地に導き、エリヤは、彼以上の奇跡を行うことになるエリシャによって引き継がれます(私たちの主が初降臨の時に成し遂げられた奇跡を思い出させます)。さらに、ヨシュアとエリシャという名前は非常に近く、それぞれ「主は救われる」、「わが神は救いである」という意味で、ヘブル語の「ヨシュア」という名前はギリシャ語の「イエス」に相当します。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

[命記 1 章 37 節](#), [3 章 23-26 節](#), [32 章 48-52 節](#); [列王記上 19 章 15-18 節](#); [列王記下 2 章 9-10 節](#); [詩篇 106 篇 32-33 節](#)。

イエス・キリストのために献身している人であっても、予期せぬ事態に不適切に反応すると、抑えきれない恐れや怒りが生じます(その結果、クリスチャンらしくない、自己破壊的な行動や言動が引き起こされます)。恐れと怒りのどちらから罪に陥ったとしても、両方の感情が抑制されない場合、神のなさることに対する信仰の欠如を示唆しています。恐怖にかられると、私たちが突然の危険に陥ったとき、神は守ってくださらないと(誤って)思い込ませられ(エリヤの場合、彼は普段から並外れた熱意ある人でした:[列王記上 19 章 10 節](#))、怒りに駆られると、私たちが並外れた罵倒を受けても神は擁護して下さらないと(誤って)思い込ませられます(モーセの場合、彼は普段は並外れて謙遜な人でした:[民数記 12 章 3 節](#))。

モーセとエリヤの帰還において、私たちは再び神の素晴らしい恵みが働いているのを見ることができます。この二人には、いわば「セカンド・チャンス」が与えられているのです(ただし、この新しいチャンスがなくても、彼らがすでに得ている報酬は、比べるまでもなく、ほとんど誰も上回ることはないでしょう)。こう見ると、二人の証人の<立っている>姿勢の意味がわかってきます([列王記上 18 章 15 節](#)<欽定訳では、「立って」という言葉が入っています>; [ルカ 23 章 33 節](#); [ヨハネ 19 章 18 節](#); [出エジプト 33 章 21 節](#); [列王記上 19 章 11 節](#) を参照)。オリーブの木、燭台、柱と同様に、座しているのではなく、立っているのです。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

ちょうど、小羊が父の手から巻物を受け取るために立ち上がり、栄光の帰還で終わる艱難期を始める時のように([黙示録 5 章 6 節](#); [詩篇 110 篇 1 節](#)参照)、上記の引用と例えにおけるモーセとエリヤの立っている姿勢は、彼らの仕事がまだ終わっていないことを示しています<sup>96</sup>。彼らはもう一度地上に戻って、主に仕えた信者の歴史上最も華々しい二つの業績に、冠石を据えることとなります。

モーセとエリヤの四十二ヶ月の宣教の間の主な任務は、主に上記に要約され、このシリーズの前回で取り上げられています。彼らは、以下のことをします。

- 1) 神殿の再建を実現する(上記参照)。
- 2) 神殿の礼拝を復興する(上記参照)。
- 3) 144,000 人の働きを指導する(本シリーズの第二部 B を参照)。
- 4) ラッパの裁きの災い、および他の多くの限定された範囲の災害の地上での指揮に携わる(下記参照)。

---

<sup>96</sup> 「来たる艱難期」第二部 B:「艱難期への天の前奏曲」II「小羊と巻物」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

144,000 人の指導に関して、モーセとエリヤがその名声によって、その務めが容易になることをここで述べておく必要があります。モーセとエリヤは、その時に神が地上にもたらされる災いに対する世界の怒りの「避雷針＜受け皿的存在＞」となることによって、その激怒した世界の注意を 72,000 組の証人からそらします<sup>97</sup>。この二人が標的となるので(黙示録 11 章 7-10 節)、モーセとエリヤが最後に天に呼び戻されるまで(黙示録 14 章 1-5 節)、世界の怒りは 144,000 人に迫ることがないのです。彼らの奉仕の期間、彼らもまた世の光である神に代わってイスラエルの光を再点灯させ、暗くなり続ける世界、特に自分たちの同胞に対して光の道しるべになります(イザヤ 42 章 6 節, 49 章 6 節とヨハネ 8 章 12 節, 9 章 5 節, 11 章 9 節を参照)。

ここで強調すべきモーセとエリヤの最初の働きの最後の類似点は、彼ら自身の主への並外れた献身と、それぞれの働きの例外的な性質にもかかわらず、両者とも奉仕した人々から良い応答を受けることがなかったという、上記の指摘です。モーセの場合は、イスラエルの全会衆の中でヨシュアとカレブだけが信仰を証明し(民数記 26 章 65 節参照)、エリヤの場合も、リバイバルはせいぜい限定的で、民衆全体に浸透した形跡はありません(カルメル山での出来事の後にもアハブとイゼベルの政権

---

<sup>97</sup> 洗礼者ヨハネがヘロデによって処刑されるまで、主の宣教のために及ぼした同様の効果と比較してください：「サタンの反乱」第 5 部：「裁き、回復、置き換え」、II.9.3「キリストの十字架刑」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

が終焉しなかった事実を参照：[列王記上 19 章 1-3 節](#)）。さらに、二人の失敗は、この人々が彼らに応じることをしなかったことの直接の結果でした（[民数記 20 章 10-11 節](#)；[列王記上 19 章 10 節](#)を参照）。ですから、この二人の偉大な信仰者が、彼らの働きと彼らの仲間である 144,000 人の働きによって、イスラエルの大部分がイエス・キリストに立ち返り、ついに彼らの宣教の努力に対する大きな肯定的反応を経験することが許されるのは、主の憐みと恵みと誠実さの証しなのです。

### 黙示録 11 章 5-6 節

もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない。預言をしている期間、彼ら[二人]は、天を閉じて雨を降らせないようにする力を持っている。さらにまた、水を血に変え、何度でも思うままに、あらゆる災害で地を打つ力を持っている。（黙示録 11 章 5-6 節）

二人の証人に与えられた、この明らかに奇跡的で明らかな神よりの保護は、世界がまだ目撃したことのないものです。モーセとエリヤの以前の地上での働きを考えてもそうです。彼らは神から奇跡的な保護を受けましたが、それは他のどの信者も経験したことがないようなものでした。例えば、モーセの敵は地に

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

飲み込まれ(民数記 16 章 28-33 節)、一瞬にして癩病にさせられました(民数記 12 章 1-15 節)。エリヤの敵は少なくとも一度は天の火で焼き尽くされました(列王記下 1 章 9-14 節)。しかし、ここでは、二人の証人の口からまさに火が出て、神の仲介なしに(つまり、祈りの結果でもなく、天からでもなく、自分の意志で直接)敵を滅ぼしているのがわかります。これは前例のないことです。聖書のどこにも、不完全な人間が、たとえ信者としていかに偉大であろうとも、同様の力を与えられていません。これらの事実から、1)ここで問題になっている二人の霊性は、聖書の偉大な信者の多くが生み出すことができたものをはるかに超えており、このような力を乱用しないためには、計り知れない謙遜さ、抑制、霊的成熟、神の意志とのほぼ完全な調和を必要とします。2)この特別な力を必要とさせる、悪魔とその勢力からの目に見える反対、見えない反対は同様に前例のないものになるでしょう。この比類なき力と並外れた敵対勢力の組み合わせゆえに、神がこの特別な働きのために選ばれた二人が、並外れた信仰者である必要があるのです。モーセとエリヤのような二人の偉大な神の人だけが、この任務のどちらの側面(すなわち、モーセの特徴である力の中での謙遜さと、エリヤの重要な特徴である反対勢力に直面した時の勇氣)にも匹敵し得るのです。

ここで注目すべき第二の点は、二人の証人とラッパの裁きとの関係です。確かに、文脈の中で述べられている「天を閉じる」、「水を血に変える」、「災害」などは、それ自体、ラッパの裁きに



## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

含まれるものではありません。しかし、明確には書かれていませんが、二人の証人に与えられたこれらの追加的な力についての言及は、これから起こる恐ろしい日々を経験する誰もが見逃すことができない関連性を描いています。つまり、仮にモーセとエリヤがラッパのさばきそのものに明確な役割を与えられていなかったとしても、全く同じ時期に非常によく似た裁きをもたらす彼らの力によって、ほとんど誰もがその関連性を認めざるを得ません。というのは、神は、旧約聖書の多くの預言者のように、この世に対する明白な裁きの仲介役を人間に与えるのが通例だからです。モーセがエジプトに十の災いをもたらしたわけではありませんし、エリヤが自分の権威でイスラエルに三年半の干ばつをもたらしたわけでもありません（[ヤコブ 5 章 17-18 節](#)参照）。しかし、神はこの二つの出来事を、それぞれの預言者が神の裁きの「立役者」であることを明らかにするような方法で手配されました。パロとアハブ王は確かに彼らをそのように見ていました（[出エジプト記 8 章 8 節](#), [9 章 27-28 節](#), [12 章 31-32 節](#); [列王記上 18 章 17 節](#); [ヤコブ 5 章 17-18 節](#)参照）。このような場合、神は裁かれる者の真の姿勢を示し、証明するために、地上の争点の場を神の裁きのために用いられることがほとんどです。モーセがエジプトへの十の災いに関与していなければ、パロは自分の憤りをぶつける地上の対象がなかったことでしょう。しかし、そのような対象（モーセ）を持つことによって、不信仰の本性が露わになり、パロの神への反発がモーセへの反発として現れる過程で、パロの意に反して、神が栄光を受けるのです（[出エジプト 10 章 1-2 節](#)）。また、三年半の干ばつがエリヤの手によ

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

らなかったら、妻イゼベルの影響によるアハブの反抗の詳細を知ることはなかったでしょう(列王記上 17 章 1 節; 列王記上 18 章 4 節も参照)。前者では、人が並外れた方法で神に逆らうのを見ます(出エジプト 9 章 16 節)。後者では、人が自分の命令であらゆる手段を用いて、神の代理人を破壊しようとするのを見ます(列王記上 18 章 9-14 節参照)。どちらの場合も、人間の最も強力で激しい反対にも打ち勝つ神の力が輝いており、この二つの事例における反対は、パロの傲慢さとアハブの冷酷さを兼ね備えた反キリストの、神と神の二人の証人に対する敵意を予告しているものです。反キリストは、その企ての愚かさにもかかわらず、モーセとエリヤを積極的に滅ぼそうとし、最終的には成功するでしょう(ただし、神が定めた彼らの天国への帰還の時まで成功しません)。

この二人の証人は神の証人であり、主のメッセージを伝え、神から特別な権限を与えられるので、世界は彼らが神御自身の代理人であることを疑う余地はありません。したがって、この代理任務はラッパの裁きの目に見える執行にも及ぶと理解すべきなのです。したがって、反キリストが彼らに直接対抗することで、一方では神の意志を拒否する人間の本質が、他方では神の意志を完全に受け入れることの本質が、はっきりと浮き彫りにされることとなります。二人の証人を悪の反抗の目に見える焦点にすることによって、神は、モーセとエリヤのような目に見える地上の標的を提供しなければわかり得ない悪の根深さ、激しさ、無慈悲さを露わにされるのです。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

世界的な影響と反応をもたらすラッパの裁きとの関連に加えて、二人の証人は、ここでは他の同様の裁き、すなわち、影響はより小さく、より局地的ではあっても、同等の性質を持つ災いを下すと言われています。これらの災いは「彼らが望むたびに」下されると言われています。このギリシヤ語の言い回しは、奇跡的な力を使うという前の条件、「もしも彼らに害を加えようと(英訳:願う)する者があれば」と非常に似ています。「願う」あるいは「望む」ことのどちらの場合も、気まぐれにすることを意味していません。モーセとエリヤが、自分たちに直接危害を加えようとする者(つまり、神への奉仕を妨げたり、早々に終わらせようとする者)に対してのみ、致命的な力を行使するのと同じように、局所的な災いの使用もまた、明確な目的を果たすものであることは確かでしょう。具体的には、彼らの口から出る火が本質的に防衛的なものであるように、ここで言及されている限定的な裁きもまた防衛的なものであり、具体的には、彼らの仲間である 144,000 人の働きを守るものであると結論づけるべきです。この 72,000 組の特別な証人に関してすでに述べた個人的な保護に加えて、さまざまな地域、政府、国民が彼らの働きに反対する場面が何度もあるようです。モーセとエリヤの任務は、他にもありますが、144,000 人の特別なミニストリーの完成を邪魔するすべてのグループに対して、神の裁きを下すことです。

また、ここで言及されている二つの局所的な災いの例、すなわち「血」と「干ばつ」からも、重要な象徴的意味を読み取ることができます。この二つの奇跡的な裁きは、これまで見てきたよう

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

に、二人のそれぞれの働きの特徴であり、また、文字通り肉体の生命に必要な物質である水と、霊的生命に絶対不可欠な神の言葉の象徴とが結びついています([イザヤ 55 章 1 節](#); [エレミヤ 2 章 13 節](#), [17 章 13 節](#); [ヨハネ 3 章 5 節](#), [4 章 10-13 節](#); [エペソ 5 章 26 節](#); [黙示録 22 章 17 節](#); cf. [詩篇 36 篇 8-9 節](#); [イザヤ 8 章 6-8 節](#); [第一コリント 10 章 4 節](#); [テトス 3 章 5 節](#); [第一ペテロ 3 章 21 節](#))。干ばつの裁きは、真理を求めない者から真理を取り上げること象徴し、血の裁きは、祝福のための真理が故意に拒否され、裁きによって呪いの手段に変えられたことを象徴しています。アハブの態度が、神の「真理の水」に対する国民の拒絶を表し、その後、文字通りの水の差し止めによって罰せられたように、またパロの態度が、神の「真理の水」に対する異邦の世界の人々による蔑みを表し、その後、文字通りの水が飲めない血に変わることによって罰せられたように、この二人の証人の時代には、世界の人々は神の真理を軽視し拒絶し続けて、その結果、真理を象徴する水を通して罰せられることになるのです([黙示録 16 章 5-6 節](#)参照)。

## 黙示録 11 章 7-14 節

そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼ら

V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

の主も、この都で十字架につけられたのである。いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体[の横たわっているの]をながめるが、その死体を墓に納めることは許さない。地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう(すなわち、不信心な世界はこのように反応するのです)。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた。その時、天から大きな声がして、「ここに上ってきなさい」と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。この時、大地震が起って、都の十分の一は倒れ、その地震で七千人が死に、生き残った人々は驚き恐れて、天の神に栄光を帰した。第二のわざわいは、過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。(黙示録 11 章 7-14 節)

モーセとエリヤの二人の証人は、その使命を完全に終了するまで、危害を受けることは許されません。三年半の間、彼らの敵は、イスラエルに伝道し、イエス・キリストにおける神の真の礼拝を回復しようとする彼らの努力を、(目に見えるもの、見えないものを問わず)、彼らの敵は妨害することができませんでした。彼らの仕事が終わった今、神は彼らに最後の栄誉を、それも二

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

重の榮譽をお与えになります。彼らはイエス・キリストのために殉教者として死ぬだけでなく、前例のない二度目の生き返りを遂げ、奇跡的な方法で再び天に召されるのです。

**底知れぬ所からの獣：**ここで言及されている獣は、まさに反キリストに他なりません<sup>98</sup>。獣という名前は、彼の行いの非道な獣性、および彼に対する以前の預言的言及（例えば、[ダニエル 7 章 3-27 節](#)；[黙示録 13 章 1-3 節](#)，[17 章 1-14 節](#)参照）の両方を連想させます。死者の場所として、ここでの「底知れぬ所」への言及には二つの意味があります<sup>99</sup>。第一に、それはローマ帝国が新しい形で復活すること（それは本質的に獣の王国がそうなるからです；[ダニエル 7 章 7 節](#)，[9 章 26 節](#)；[黙示録 17 章 8-11 節](#)）、第二にその王国の支配者である反キリストの起源を指しています（海はしばしば、彼が象徴する悪と、彼が産み落としした悪を象徴しているからです）<sup>100</sup>。

**モーセとエリヤに敵対する戦い：**ここでのギリシャ語の表現、特に「戦争」(polemos)と「征服」(nikao)という言葉の使用は、獣によるモーセとエリヤの排除が、簡単でも即座でもないことを

---

<sup>98</sup> 反キリストは、このシリーズの[第 3 部 B](#)の主要なテーマです。従って、この主題の詳細な扱いは次の回に譲ります。

<sup>99</sup> 「悪魔の反乱」第 2 部「創世記のギャップ」II.3「海」を参照。

<sup>100</sup> 「悪魔の反乱」第 2 部「創世記のギャップ」II.3.e「反キリストの起源としての海」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

強く示唆しています。それは、文脈が示すように、真の戦いとなります。神から与えられた二人の証人の口から火を放つ能力は、三年半の宣教期間中に効果的な抑止力となります。この二人の預言者に対抗するために、反キリストが用いた正確な手段は教えられていませんが、反キリストのアプローチの一つは、彼と彼の重要な副官である偽預言者（彼は同様に空から火を降らせる能力を持っています）に与えられた悪魔の力を最大限に利用して、「火には火を」の対抗をすることも知れません（[黙示録 13 章 13 節](#)）。しかし、モーセとエリヤの働きをこのような劇的な形で終わらせることが神の御心でなかったら、反キリストが利用できるいかなる手段もこの場面から取り除くことはできない、と私たちは断言できます。

たとえ争いを起す者があってもわたしによるのではない。すべてあなたと争う者は、あなたのゆえに倒れる。見よ、炭火を吹きおこして、その目的にかなう武器を造り出す鍛冶は、わたしが創造した者、また荒し滅ぼす者も、わたしが創造した者である。すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる。これが主のしもべらの受ける嗣業であり、また彼らがわたしから受ける義である」と主は言われる。（イザヤ 54 章 15-17 節）

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

主が十字架につけられたエルサレムを「ソドム」「エジプト」と名付けたのは、モーセやエリヤに対して反キリストが戦いを挑む、当時のイスラエルの大多数の人々の悲しい霊的状态を示しています。ソドムは、霊的な優先事項よりも地上の官能を優先させることで有名な都市で、二人の証人と 144,000 人の人々による、神の前例のない恵みの働きに応じようとしなない人々の大部分を意味します([イザヤ 1 章 9-10 節](#), [3 章 9 節](#); [エレミヤ 23 章 14 節](#); [第二ペテロ 2 章 6-8 節](#); [ユダ 1 章 7 節](#)を参照)。ソドムが神の解決に無関心であることを表しているのに対して、エジプトの言及は、人々が代わりに人間的な解決を選ぼうとしていることを解説しているのです。イスラエルはエジプトから呼び出されましたが([ホセア 11 章 1 節](#))、古代を通じて、イスラエルの南北両王国は北からの攻撃に脅かされた時、神に頼るよりもエジプトに助けや支援を求める傾向がありました([イザヤ 30 章 1-7 節](#), [31 章 1 節](#); [エゼキエル 29 章 6-7 節](#))。二人の証人が、同胞の大多数が明らかに満足するように出発する時、この二重に非難される呼称くすなわち、「ソドム」と「エジプト」>は、多くの人がイエス・キリストを通して神のもとに戻るといふ呼びかけに応答したにもかかわらず、イスラエルのほとんどの人はこの一連の前例のない奇跡的な出来事(モーセとエリヤの二重蘇生を含む)を目撃しても、頑ななままだということを私たちに教えています。

アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと(例えばエリヤのような)預言者にとに耳を傾けないなら、死



## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』。(ルカ 16 章 31 節)

**三日半：** 私達が見てきたように、日は聖書の象徴ではより長い期間を表しています。ここで、モーセとエリヤの死体がエルサレムの中心部に生きたまま横たわる三日半は、これから始まる三年半の霊的荒廃と迫害(すなわち、大艱難期)を表しています<sup>101</sup>。二人の証人は、事実上、世界中の信者に襲いかかる大迫害の殉教者の先駆者となります(144,000 人はその最初の犠牲者となります)。二人の証人の死は、比類なき艱難と迫害の嵐が来ることを、イエス・キリストに忠実な人々に警告する役割を果たすのです。

木が生きているときに(「二本のオリーブの木」を参照)彼らが[そのような]ことをするなら、木が死んだらどうなるのでしょうか。(英文直訳 [ルカ 23 章 31 節](#))

一方、モーセとエリヤの復活は、神の民すべてに、死をも克服する神の完全な力を思い起こさせ、大きな励みとなるでしょう。なぜなら、三日半の終わりに彼らが蘇生することは、この時点

---

<sup>101</sup> 「サタンの反乱」第 5 部「審判、回復、置き換え」II.8『『再創造の 7 日間』の証拠」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

から三年半後の大艱難期の終わりに、すべての信者が復活することを象徴しているからです<sup>102</sup>。

ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の**来臨に際して**キリストに属する者たち [が復活します]、(1 コリント 15 章 23 節)

すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で**主に会い**、こうして、いつも主と共にいるであろう。(第一テサロニケ 4 章 16-17 節)

モーセとエリヤの死は、地上の大多数の人々にとって大きな喜びとなるでしょう。神の恵み深い警告に感謝し、神に立ち返るのではなく、不信仰な世界は、この二人の偉大な神の人物が滅ぼされるのを見て、大喜びするのです。ここで、このシリーズで長々と述べてきた心の硬化と二極化の過程の結果を見ることができます。二人の証人に対する「戦い」で反キリストを支持し、主のしもべたちに対する勝利を喜ぶことを選択することによって、世界は公然かつ無条件に獣を選ぶことになるのです。しかし、

---

<sup>102</sup> ペテロ・シリーズ # 20「復活」参照。

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

それはまた、反キリスト自身の代替宗教を確立し、その確立によって地球全体に大規模な宗教的支配を押し付ける究極の機会を彼に手渡すこととなります(この展開は、彼に敵対する最後の連合軍の敗北によって、彼が艱難期の中盤に得る政治、経済、社会の支配を強固にすることとなります：第 3 部 B 参照)。このように、二人の証人とその代理人である 144,000 人の働きには、二重の効果があります。この働きは、世界中のユダヤ人の中で前例のないリバイバルをもたらすだけではないからです。不信仰な世界は、モーセとエリヤがこれらの恵み深い警告をしたことを実際に**非難する**でしょうし(黙示録 11 章 10 節)、二人の証人がこれらの激しさを増す災いと同一視されることは、地球の他の人々に中立な立場を捨てさせ、自分がどちらの側であるかをきっぱり選ばせる原因となってしまふからです。ほとんどの人は、神に立ち返るのではなく、その怒りと憤りを神の二人の証人に向け、心を硬くし、その後続く残りの神の民に対する同様の臆面のない迫害のための土台を準備することになるでしょう。

そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民(すなわち、未信者)に憎まれるであろう。(マタイ 24 章 9 節)

人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分

私たちは神に仕えているのだと思う時が来るであろう。  
(ヨハネ 16 章 2 節)

**モーセとエリヤの生き返りと昇天：**（一時的な）蘇生と（永続的な）復活の違いについてはすでに述べましたが、通常の肉体の死とは別に天に昇ることになる二度目の生き返りも、聖書には類例がないことを指摘しておきます<sup>103</sup>。二人の証人の死んだ肉体に、その霊が再び入れられることによって、神によって「生き返らせ」られることは、喜び騒いでいた世界に大きな衝撃を与えることでしょう<sup>104</sup>。二人の証人を根絶やしにしようとする反キリストとその勢力の多大な努力の後の、この劇的で、即座の、一見不可能に見える生への復帰（とそれに続く昇天）は、神に逆らうことの無益さを世界に明らかに示すものとなるでしょう。

彼女たち[のような者たち]は、常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない。ちょうど、ヤンネとヤンブレ（すなわち、獣とその偽預言者の予型）とがモーセに逆らったように、こうした

---

<sup>103</sup> これは厳密にはエリヤにのみ当てはまることですが、私たちが見たように、モーセの遺体も後に同様の扱いを受けました（ユダ 1 章 9 節）。もちろん、私たちの主イエス・キリストだけが、肉体をもって本当に天に「昇った」のです。二人の証人がこの地上から天上へと移行する方法が独特なのであって、神の御前に到着した後の状態ではないのです。

<sup>104</sup> 「サタン」の反乱」第 3 部：人間の目的、創造と墮落、II.3「人間の霊」。

V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

人々も真理に逆らうのである。彼らは知性の腐った、信仰の失格者である。しかし、彼らはそのまま進んでいけるはずがない。彼らの愚かさは、あのふたりの場合と同じように、多くの人に知れて来るであろう。(第二テモテ 3 章 7-9 節)

その一方で、主が声に出して命じられたときに、彼らが天に昇っていく驚かされる光景は、彼らの働きが天から好意を受けていたこと、また神に望みを置くすべての人を救い出し、贖う私たちの神の力、また最後に、神の究極的な勝利の絶対的な確信について、疑いの余地を残すことはないでしょう。私たちの主イエス・キリストが去られたように、またモーセとエリヤが「雲に乗って」去ったように([使徒行伝 1 章 9 節](#); [列王記下 2 章 11 節](#) 参照)、これらの光景を見、これらの言葉を読む主の聖徒は皆、私たちもまた、主の再臨の祝福された日に、それがどんなに荒れ狂い、暴力的なものであっても、その嵐の向こう側で、主と共に「雲に乗って」集まることができるという完全な確信を持つことができます([ダニエル 7 章 13 節](#); [マタイ 24 章 30 節](#), [26 章 64 節](#); [マルコ 13 章 26 節](#), [14 章 62 節](#); [ルカ 21 章 27 節](#); [第一テサロニケ 4 章 13-18 節](#); [第一コリント 15 章 51-52 節](#); [黙示録 19 章 7-8 節](#), [19 章 14 節](#) 参照)。

見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を

打って嘆くであろう。しかし、アアメン。(黙示録 1 章 7 節)

**大地震：** 13 節で二人の証人が去った後に起こった局地的な地震では、七千人が死亡し、エルサレムの町の十分の一が破壊されたもので、世界中で起こることになる 19 節の激震とは区別されなければなりません。全世界的な地震は(稲妻、雷鳴、雹の嵐とともに)、大艱難期が始まったこととしるしとなります(最初の三年半の期間の始まりに先立つ警告に似ています：[黙示録 8 章 5 節](#))。この局地的な地震は、警告というよりも、神の恵みである復興とリバイバルの働きが終わりを告げたという、神よりの区切りのしるしとしての役割を果たします。そして、モーセとエリヤに対する彼らの恥知らずな反対と殺害が、私たちの主に対する同じような拒絶と十字架刑を想起させるのは偶然ではありません。主の死の際にも地震があり([マタイ 27 章 45-54 節](#); [マルコ 15 章 33-39 節](#); [ルカ 23 章 44-47 節](#))、どんなしるしや象徴よりも、主の復活は、私たちの神の力と死に対する勝利の現実を永遠に証明しています。どんな被造物も、生ける神に逆らうことはできません。神に逆らうことができるのは、神がそれを許すことを選ばれたからにほかなりません。しかし、神はまた、ご自身の意志が真に何であるかということを常に明らかにされます。私たち皆のために主が十字架上で死なれた後に起こった奇跡が、まぎれもない神の承認の印(そして主を非難した人々にとっては不承認の印)であるように、モーセとエリヤの奇跡的な旅立ちも、彼らの宣教の正当性を示す神の印であり、そ

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

の後に起こった地震は、彼らに反対するすべての人々に対する神の怒りの表れであり、神の敵に起こる恐るべき事態のしるしなのです。

**第三の災い：** モーセとエリヤと 144,000 人の共同宣教の終了は、第二の災いの終結を意味します。なぜなら、この時点で、最初の六つのラッパの裁きと、144,000 人を支持して二人の証人が行ったすべての局地的な災いが終わったからです。第三の災いは、ここで「間もなく来る」と言われていますが、第七の天使がラッパを鳴らすとき([黙示録 11 章 15 節](#))、その直後から始まります。第三の災い、第七のラッパの裁き、大艱難期はすべて同じ期間を指しています。その期間は災いの期間となります。なぜなら、地球はかつてなく、それ以降も見ることのないほどの暗黒の日を迎えることとなります([ダニエル 12 章 1 節](#)、[ヨエル 2 章 2 節](#)；[マタイ 24 章 21 節](#)；[マルコ 13 章 19 節](#))。その恐ろしい性質は、間もなく来たる裁きの日を警告しているからです([マタイ 3 章 10-12 節](#)；[第二ペテロ 3 章 10-13 節](#))。その期間には、サタンとその墮落した天使たちが地上に投げ落とされ([黙示録 12 章 7-9 節](#))、その手先である反キリストを通してキリストのからだに怒りを爆発させることになる、イエス・キリスト教会史上最大の迫害が起こるからです(第 4 部参照)。

この大迫害は、最後の三年半の他の出来事と共に、艱難期の時系列で次に来るものです。しかし、大艱難期そのものに目を向ける前に、まず、それらの出来事を推し進め、指示し、操

## V.二人の証人と 144,000 人の働き：黙示録 11 章 1-14 節

作するためにサタンが用いる中心人物、すなわち反キリストについて論じなければなりません。

[\[来たる艱難期第三部 B:反キリストとその王国\]](#)に続く